
日常 / 非日常 ~ daily chain fragment ~

刻城 黒徒

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

日常／非日常～daily chain fragment～

【Nコード】

N7771J

【作者名】

刻城 黒徒

【あらすじ】

S県にある日向市。そこでは日々様々な人間で入り乱れていた。高校生、中学生、後輩、先輩、喫茶店のマスター、元殺し屋など様々な人間の様々な日常。果ては死神や吸血鬼まで日向市を訪れ……。これは色々入り混じった物語。

「11A文芸部」、最新。

プロローグと物語のミカタ（味方ではない）（前書き）

はじめまして！

プロローグと物語のミカタ（味方ではない）

S県にある日向市は変わった地形をしている。^{ヒュウガ}

真ん中に日向高校が有るから、それを軸として説明しよう。

まず北には緑の山や森などが広がり、自然に富んでおり、学校と接している部分には川が流れている。

東には商店が広がり、商店街が出来ている。その路地裏はまるで迷路のよう。

西には色とりどりに家が並んでおり、居住区を形成している。上空から俯瞰する^{ふかん}とまるで、ドミノを並べたような感じ。

南の街は日向市に隣接する町、音是市^{オトセ}が雪崩れ込んだようなふうであり、日向市の空気とは独立したような場所になっている。日向中学校と日向小学校はそこにある。

様々な空気を混ぜ合わせた町。それが、日向市である。

そして、これはそんな町に住む人々の、正常であり、異常な、正しく歪んだ日常。

この物語の味方^{あじわいかた}「これは仲間ですか？」「いいえ、造語です」

A 日常

B 非日常

C 日常と非日常の混合。

主人公、もしくは中心人物、または被害者視点。

取り巻く人々視点。

○ 三人称視点

過去の話。もしくは何らかの説明。

？ 敵視点

登場人物紹介

性別

職業

備考

プロローグと物語のミカタ（味方ではない）（後書き）

実在の日向市とは何の関係も有りません。

1 A 日常の放課後（前書き）

よろしければみてください。

1 A 日常の放課後

○
「だーかーらー！ 良いじゃん別に！」

放課後の教室。外を橙色の光が包む時刻。

その橙の光に照らされ学校内で破壊者と恐れられている少女は言う。その言葉に反論を返す声が一つ。

「良くねえ！ 絶対の絶対に却下だ！」

反論の声を上げたのは彼女の奇行を抑制しているため、たいはいしやさ対破壊者最終防衛壁などと呼ばれている、少年である。

「なーんーでーよー！」

「……よし、今からシミュレーションして見よう。お前聴かれる人、オレ聴く人。OK？」

「OK！」

「よし。じゃ、行くぞ……。あなたは恋人が居ますか？ もしくは恋人が居た事がありましたか？」

「居ません！ 幼なじみ何だしそれぐらい解ってるでしょ？」

「……ああ解ってたさ！ こういうコトになるのはな！」

「じゃあ何でやったの？」

「もしかしたら違う答えを言ってくれるかなあ、って思ったんだよ。淡い思いだったけどな！ ……後幼なじみなんかじゃねえ。ただの腐れ縁、つー呪いだ」

吐き捨てるように言い放つ少年に対し、少女は言う。

「……で、聞いてきていい？」

「無論駄目だ」

「だからなんでよー！」

「駄目な物は駄目だ。駄目駄目で駄目駄目でもう何回駄目って言ったんだろうつてくらい駄目」

「ぷー。……あ、そうだ、これで決めようよ」

「何でだ？ ジャンケンとかか？」

「何故かワタシとアンタがやると必ず引き分けになるのよねー。そうじゃなくてあれ、社会主義的な決め方」

少女の言葉に少年は首を傾げる。

「社会主義的な決め方……もしかして多数決か」

「そう！ それそれ、多数決！」

びしりと少女が人差し指を少年に突きつける。

「人に指向けちゃいけないって母さんがに教わっただろ。……まあ、お前にしちゃあ良いアイデアだな。ただし、俺が勝ったら諦めろよ？」

「良いわよ。その代わり、ワタシが勝ったら、止めないでよ？」

「ああ」

少年が言葉と共に頷く。

「じゃ、いつせーのーで、聞くとしよう」

「……いつせーのーで、」

「アンタはどう思う？」

「お前はこれについてなんか意見は？」

——……同時に振り返って私に尋ねた。

その問いに私は溜め息と共に答えた。

「どうもこうも思わない」

「なんでよー」

「なんでだよ」

途端に起こるブーイング。

……全く。こういう時にだけ仲良くシンクロする。……それに。彼らは傍観すると云う私の在り方を知っている筈だ。なのに何かあるとことごとく私に意見を求める。

…… 本当、困る。

再度溜め息を吐き、私はこのブーイングを止める事にした。

「そんな事より、良いのか。もう、こんな時間だぞ？」

壁に掛けられた時計を指差す。彼らはそこに示された時刻を見て騒ぎ出した。

「……！ やっつべ！ もうこんな時間じゃねえか！」

「あー！ お母さんに買い物頼まれてたんだっけ！」

大慌てで支度をする彼らを尻目に、私は鞆を持って立ち上がった。歩き出すと、彼らも支度し終えたようで慌て立ち上がり、私を追い越して廊下に出て行く。…… 必然的に鍵をかけるのが私になってしまった。まあ、何時もの事なので気にしないが。

黒板の横にある鍵を取ってから、廊下に出る。

ドアを閉め、鍵をかける。

廊下は窓からの橙色で幻想的に照らされていた。

廊下の先で彼らが私に向かって、手を振っている。

私は口元を緩め、彼らへと歩き出した。

1 A 日常の放課後（後書き）

登場人物紹介

彼女。

何でも知りたがるため、学校内では破壊者と呼ばれている。
多分B型。

彼。

何でも知りたがる、彼女を常に抑制しているため『対破壊者最終防衛壁』と呼ばれている。
多分A型。

私。

傍観者。

性別不詳。

多分A B型。

1 B 非日常の路地裏（前書き）

鬼ごっこ。

1 B 非日常の路地裏

○

「ハア、ハア」

薄暗い路地裏で彼は息を整えていた。

「ハア、ハア……。クソツ、どうなってやがる……！」

彼は壁に凭れさせていた背中を離し、騒がしい方——商店の並ぶ通りに歩き始める。

「大丈夫だ……。流石に人通りが多い所なら……！」

そう呟きながら、歩く彼の目の前に、突如として上から鉄骨が振り、コンクリートに“突き刺さった”。まるでダーツのように直立してそびえる鉄骨。

「ッ……！」

彼の顎から汗が落ちる。それは決して暑いからでは無いだろう。

慌てて、後ろを見る。

彼が先程休憩した場所よりも遠い所に人影が有った。問うまでも無く、それが鉄骨を投げたのは明確で。問題なのは普通の人間の筋力は鉄骨を投げれないのに、鉄骨を投げた事、そして手加減が無いという事だろう。

「……ッ！」

彼は慌てて近くの民家の窓を蹴破り、そこに入った。数瞬遅れて彼が立っていた場所に鉄骨が刺さる。

彼はそれを見ず、その民家の玄関に向かった。

「ハア、ハア……！……クソツクソツクソツクソツクソツ！……
いたいどうなってるんだよ！……いつから、この世界はこんなに狂いや
がった！？」

絶叫する、彼。

それに答えるのは、投げられて来る鉄骨の音のみ。

非現実的ではあるが、コンクリートの碎ける音を聞いてるとそうも行かない。

——立ち止まれば、死ぬ。

その考えが彼をひたすら走らせていた。

始まりはどうってことの無い事だった。

いつものように、学校をサボリ、見知らぬ路地裏を歩き、時折、すれ違った相手にいちやもんをつける。無論、相手は選ぶ。屈強な男には手を出さず、狙う相手は女か、子供か、力が弱そうな男ばかり。

今回、いちやもんをつけたのは凜々しい顔立ちのややぼっそりとした男。

いつものようにいちやもんをつけて、相手が謝るのを見て悦に入る、筈だった。

「謝れよ。おっさん」

催促すると、男はいきなり、……そこら辺の壁を伝うパイプを引きちぎった。

驚愕する彼を余所に、男はそれをぶん投げた。

パイプが彼の頬をすれすれで通る。それで彼は我に返り、

「うあああああ！」

悲鳴を上げて、逃げ出した。

○

そして、今に至る。

「ハア、ハア、」

先程から走っているのに男を撒けない。走っている様子は見られない。なのに一向に撒けない。

「っクソッ……！」

彼の脳裏に非現実な予想が走る。

それは、

——アイツはバケモノなのか？
と、言う予想。

普段の彼ならその予想を笑い飛ばすだろう。

だが、今の彼にはそれが真実のように思えた。

ザクン、と目の前にまた鉄骨が突き刺さる。多分、先程と同じ鉄骨だろう。近くに窓が無いので、先程通り過ぎた左の通路へ向かう。妙だ、と彼は思った。

先程から進路を強制されているような気がするのだ。商店街に行く道は無論、商店街とは逆方向の道も、今のうちに、鉄骨で塞がれる。その上、十字路にも着かない。まるで、

——誘導されているような感じがした。
そして、その予感は的中した。

数分後、彼は硬直していた。

彼の目の前にあるのは——壁。窓も無く、ドアも無い。

——やっぱりか。

予想はしていた。だが、それに対抗する手段が無かった。

だから、みすみす、罠にかかる。

足音が後ろから響く。もう逃げるのは諦めた。だけど、このまま殺されたくも無い。

——殺されるんならせめて片目に指でも突っ込んでやる。

そう覚悟し、後ろを振り向く。

右手に鉄骨を持った男が居た。黙って睨みつけていると、男が初めて喋った

「さあ、選択しろ。非常識的に殺されるか、常識的に殺されるか」

「……どっちもヤダね」

両手を構える。男が鉄骨を振りかぶったら、飛びかかるつもりだった。

しばらくして男が鉄骨を振りかぶる。

——……今だ！

「うおおおおおおおおお！！」

手を、指を、男の顔に突き出す。

指先に感触は——しなかった。

「……良い度胸だ。最近の若者には勿体無いくらい良い度胸だ。それに免じて——気絶程度で許してやる」

俺の手を左手で掴み、鉄骨を振りかぶりながら、そんな事を言う。振り下ろされる鉄骨。

暗転する視界。

ドサツという音と共に、少年は倒れた。

オレは鉄骨を下げ、反省する。

——いくらおっさんと呼ばれたからってこれはやりすぎたか。まあ人間の体は割と丈夫だからな。死にはしないだろう。……しかし。なんでみんなオレを見るとおっさんとか野郎とか言うのだろう。オレは、

——女なのに。

……やっぱり、この顔と馬鹿力が悪いのかね。

そう思いながら、オレは当初の目的地へと向かった。

1 B 非日常の路地裏（後書き）

登場人物紹介

彼。

被害者。

これを期に更正するとかしないとか。

ハナアオイ ミスズ
華葵美鈴

男……と見せかけて彼女というトリック。というか最初はそんな設定無かった。

次の非日常には妹が登場する予定。

自分の小説って結構グダグダなんじゃ……？そう思う今日の頃。

2 A d a i l y d e s t r o y e r j u n i o r V S s e n i o r (前 輩)

主人公VS後輩||戀愛攻防戰

朝。

おれは用心深く辺りを見回しながら登校していた。おれと同じ生徒は苦笑か若しくは微笑みながらおれを見ていて、通り過ぎる人達は、おれを変な目で見つめていた。

何故、おれが用心深く登校してるかって？その理由は――。もうすぐ来るだろうな。

「せーんぐぱーいー」

ほら来た。おれはその声の方向に手を突き出し、
「おはようござぶぎゅる!？」

そこに奴は勢い良く突っ込んで来て、見事鼻を打ち付けた。
そいつは涙目になりながら、鼻を押さえ、言う。

「な、何するんですか」。先輩」
ハナオイカレン
華葵架恋。

おれの日常を崩す敵であり、後輩であり、そしておれに片想いしてると言って憚らない女である。

華葵にひつつかれながら、おれは教室に入った。

「ひゅー」 あっつあつだね御兩人」
バカ

入って来たおれ等を見て、冷やかす奴が一人。
ミムラミタマ
光村三珠。剣道部部长で自称、二年のマドンナであり、一人称が
「ボク」の性悪女。そしておれとは悪友であり、好敵手である。
因みに一年のマドンナはおれの腰に引っ付いている奴。
はなあおい

「誰が熱々だ。この性悪女」

からかうような口調の奴に冷静におれは言い返し、華葵は照れながら言った。

「聞きました？ 聞きました？ 先輩！ 私達熱々のカップルなん

だそうですよ！ これはもう結婚するしか有りませんね！」

無視。席に着こうとする。

が、華葵が邪魔で座れない。

「離れる」

「いやーですー！。私は先輩との愛を再確認する重要な作業をしてるんです！ だからーなーれーまーせーんー！」

「いいから離れる。三珠。コイツを引き剥がしてクラスに送ってくれ」

「解ったよ。その代わり、後で何か奢ってよね？」

「ああ。奢ってやるから連れてけ」

そう言つと、三珠は満面の笑みを浮かべて、奴を引っ剥がした。

流石剣道部。

連れ去られる奴を見ながら、おれは背もたれに寄り掛かり、一息吐いた。

そんなおれに話しかけてくる女が居た。

「大丈夫ですか？」

「……三浦か」

三浦くるみ。クラスメイトであり、三珠の友人。

心配そうな三浦の顔を見ていると、もう一人、話しかけてきた。

「なんや。痴話喧嘩かいな？」

「……菱谷。何度言ったら解る。あれは痴話喧嘩じゃ無い」

菱谷絵理。怪しげな似非関西弁を喋る女であり、三浦と三珠の友人。

因みに、三珠と三浦と菱谷を合わせて、二年生ガールズトリオと呼ばれている。

ふざけてると思ったのはおれだけではあるまい。この学校にはそんなふざけたあだ名を持つ奴が沢山いるのだ。

破壊者とか防衛壁とか狂科学者とかそんな変なあだ名が。

「ほな、痴話喧嘩じゃ無いんならなんやねん」

菱谷が言う。

「……何でも無い」

「そうかいな。んじゃあまだチャンスは有るわな」

「何のチャンスだ」

「別に何も有らへんわ」

「そうか。なら良い。まあ、有ったとしても聞かないがな」

「そうしてくれると助かるわ」

昼休みまで華葵の襲撃は無かった。ホツとしながら弁当を食している。

ガガツと黒板の上にあるスピーカーから音が鳴り、声がした。

「あー、テストステス只今マイクのテスト中、です！ 隣の柿はよく客喰う柿だ！」

怖いな、オイ。

そう内心で突っ込みながら、おれは耳をそばだてる。

「えー、二年B組の……って、あ、ちょっと、マイク取らないで！ 何か騒いでるようだ。」

そう思いながら茶を啜って

「せ・ん・ぱ・い・！ 早く私に愛と愛の言葉、もしくは婚姻届リリース！」

……吹き出した。

走る走る走る走る走る走る走る走る走る走る走る走る。

一刻も早く目的地に着くために。

一刻も頭上を流れている声の主の息の根を止めるために。

——放送室と書かれたドアを蹴破るように開けた。

最初に見えた光景はマイクを取り合っている、女と奴^{バカ}だった。

「あ、先輩！ 何でここに来たんですか？ ……はっ、まさか私に愛の告白を！？ キャー！ やっと積年の想いが実を結んだんですね！ ならば、早くプロポーズして下さいっ！ すぐ式場と日程を考えまぶきよ！？」

ず、突貫してきやがったからな。

そう思いながら、ハロルドの問いに答えを返す。

「そうかもな。いや、もしかしたら、前世のおれは金持ちだったのかもしれない」

「つまり、前世で今世の運を使い果たしたト？」

「まあ、そうだな」

「ふム。それなら不運も納得出来ル」

冗談なんだから納得するなよ。

「まア、この話しは今度にしテ。実は先程、小耳に挟んだ噂があるんだガ」

「どんな噂だ？」

「華葵 架恋のファンクラブが近い内に君を襲撃するらしい。忠告ダ。気を付けて置ケ」

ファンクラブ。

漫画みたいな話しだがこの学校は色色と変わってるので、突っ込まない。

「……穏やかじゃないな。まあ、忠告ありがとう。気を付けるよ」

「あア。そうすると良イ」
ハロルドがそう言った時、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響いた。

放課後になった。華葵に見つからないように、そそくさと昇降口に直行。

靴箱の中から、靴を取り出す。

履きながら思う。

——華葵はいつたい、おれのどこに惚れたのだろう。

あいつに優しくした記憶は無い。むしろ普通に接していた。求愛されてからは尚更だ。

靴を履き終わり、歩き出す。

——あいつと会って、2ヶ月未満。

求愛されて、1ヶ月近く。

普通、1ヶ月近くも冷たくされれば恋も冷めるはずなのに。
諦めるはずなのに。

なのに彼女は諦めない。

おれはどうすれば良い。

そんな事を考えながら、校門を通り過ぎる。

校門前の車道を渡った所で後ろから声がした。

「せ、ん、ぱ、いゝ！」

……華葵だ。

「先輩先輩先輩先輩先輩先輩先輩先輩先輩！」

「連呼しすぎだ!？」

突っ込んだせいで、車道を渡り、突っ込んできた華葵の抱き付き
攻撃というか、タツクルを躲し損ね、激突。歩道に寝転がるように
折り重なって倒れる。

咳き込みながら言う。

「抱き付く時は周りを見る……」

「はひ? 解りました」

「じゃあ退^どけ」

華葵が退き、おれも起き上がり、立つ。

華葵を見る。

何時もと変わらない様子。

言うのは今しか無い。

「華葵」

「はい?」

おれは華葵を見つめ、言った。

「話がある」

夕日が沈む河原にて。

手頃な石におれ達は並んで座っていた。

「で？先輩、お話して何ですか？」

「ああ。単刀直入に言おう。……お前は何でおれの事が好きなんだ？」

そう言つと、華葵は目をぱくりした。

「やつだなあ、先輩！好きだからに決まってるじゃ無いですか！」

「……じゃあ、質問する。もし、おれが優しい性格だったら、お前はおれに惚れるのか？」

「解つて無いですねー、先輩。私は先輩のそのドライな所が好きなんですよ」

「……ドライ？」

「若しくはツンツンした所が」

「……」

おれは沈黙した。沈黙する以外にどうしろと？

だが沈黙したままでは何も進まないの、おれは言葉を紡いだ。

「おれはお前の事は唯の後輩だと思っている」

「はい」

「それでお前はおれを好きだと言う」

「はい」

「……おれはどうすれば良いんだ？お前の求愛に答えるべきなのか。それとも嫌いだと答えるべきなのか」

「……どつちでも良いですよ」

「……？」

「どつちでも良いんです。私は先輩の事が好き。先輩は私の事が嫌い。それでも良いんです。どうすれば良いかは自分で考えて下さい。……まあ、そうやって考え抜いて出た結論が私の決別だとしても私は幻滅なんかしません。」

むしろ今より愛してみせます」

華葵がそう言うのをおれは馬鹿みたいに眺め、そして、笑い出した。

——なんだ。こんな簡単な事だったのか

おれは自分の想いを即座に言葉に変える。

「……おれはお前を愛さない。」

「……はい」

「……けれど。……後輩としてなら可愛がってやっても良い。それがおれの結論だ」

「……はい！ 結構ですよ先輩！」

満面の笑みを浮かべる彼女から目を逸らし、おれは夕焼け空を眺める。

華葵に何か買ってやろうと思いつながら。

……彼らに見えないようにこっそりその様子を見ながら、ボクは隣のハロルドに話しかける。

「上手くいったみたいだね」

「ああ、そのようだナ。……しかし」

そう言いながら、ハロルドは足下に自然を向ける。

「人の恋路を邪魔する奴らハ、馬に蹴られて死んでしまえと言う諺があるガ……。」

ハロルドの足下にいるのはゴミといっても差し支えの無い程、ロボロになった、人間だった。

何もハロルドの足下に限らない。この辺りの土手は人が文字通り死屍累々と倒れている。華葵 架恋ファンクラブの皆様方である。大半はボクが木刀で叩きのめし、残りは奴が、スタンガンで気絶させました。がっしょ。

「これハ、やりすぎなんじゃないカ？」

「んゝ。そうかも。でも恋路を邪魔しようとしたんだし、むしろこの程度ですんだ方に感謝して？」

「まア、剣道部部长である、お前の技を食らってこの程度で済んだ

のは確かに奇跡だが……。それでもやりすぎだ」

「んゝまあどちらにしたってやつちやったモンはしょうがないじゃん？」

そう言つてボクは伸びをする。

「……あゝ、お腹空いたゝ。ねえどつかのレストランに入らない？」

「まア、賛成だナ。但し今僕は金欠だから、お前が奢レ」

「せ、せめてワリカンにしてくれない？」

「断ル」

「ええゝ。なんでだよ」

そう言い争いながらボク達は土手を去った。

恒例の登場人物紹介。

ヒイラギ
柊木 信

男

日向高校二年生

やや、ツンデレ？

よくよく見てみると名前を呼ばれてない可哀想な主人公。

ハナアオイ
華葵 架恋

女

日向高校一年生

日向高校一年生1のマドンナ。信にデレデレのラブラブである。実はラブラブな理由は過去にあるそうなのだが、めんどくさいので略姉である華葵 美鈴が苦手。

ミツムラ
光村 三珠

女

日向高校二年生

剣道部部长であり強い。二年生ガールズトリオのリーダー格。結構暗躍した。ハロルドとは良いコンビである。信と華葵の関係を応援している。

初期の名前は環^{タマキ}だった。

ミウラ
三浦くるみ

女

日向高校二年生

大人しい性格で、二年生ガールズトリオのブレーキ役。

最初にしか登場しなかった。おとなしい性格。

ヒシタニ エリ
菱谷 絵理

女

日向高校二年生

似非関西弁を喋る。二年生ガールズトリオの火付け役。

ハロルド・ディスクレイス

男

日向高校二年生

語尾が必ずカタカナになる、マッドサイエンティスト狂科学者。武器はスタンガンであり、常に2つ持っている。
信と華葵を応援している。

書き直しました。

2 B black killer VStwin killer (前書き)

感想、批評プリーズ。

2 B black killer V St win killer

薄暗い路地。

先日、とある少年ととある怪力女が追いかけてっこをしたところ。
そこに彼と彼女は佇んでいた。

「ねえマオ」

「ねーミオ」

「ヒマだよね」

「そうだねー」

「何か面白い事ないかなあ？」

「そうだねー何かないかな？」

白い髪の少年と、黒い髪の少女。

外見は瓜二つ。服も同じだぶだぶなズボンと袖がぶかぶかな上着。
髪の色と長ささえ無ければどっちがどっちだか見分けもつかない
だろう。

「この前、ここで」

「何かへんな事が」

「有ったって」

「聞いたのに」

「もう、何も」

「無いね痕跡」

「まあいいや」

「まあいいや」

少年と少女はそっくりな顔を見合わせ——^{ワラ}嗤う。

「とりあえずまずは」

「依頼を優先しよう」

その言葉を皮切りに、2人は手を繋いで歩き出した。

先日、怪力女が少年を追いつめ、気絶させた場所。

そこに青年は居た。

「フム……。矢張り傷跡が無い。つまりここで終わっていると云う事か」

フードを目深にかぶった男。

「この所業、破壊者と云ったところか。ならばこの辺りが壊滅的に崩壊していてもおかしくは無い筈なのだが」

男は僅かに考えるような仕草をする。やがて自虐気味に口元を歪める。

「……まあ、どちらにした所で裏の世界を抜けた俺には関係無いか」
そう言つて男はその場から歩き去つた。

夕刻の商店街。人がざわめきながら溢れている。

その中をわたし、楠風樹は歩いてた。
クスノキフジュ

「はあ……。まったく。帰ってきたら直ぐ買い物に行けって言われるし、ハロルドは何か用事が有って居ないし、お姉ちゃんは今合コンに行っちゃったし……。今日はついてないなあ」

彼女は知らない。その頃ハロルドがファンクラブをスタンガンで気絶させている事を。

愚痴りながら歩いていると、

「失礼。道を聞きたいんだが」

「……え？ わたしにですか？」

目の前にフードを目深にかぶった人が現れた。「ああ、そうだと男は言い、

「日向高校はどこにある？」

「日向高校ですか？ ならあつちに見える建物がそうです」

「そうか、あそこか。ありがとう、助かった」

そう言って男は学校に向かって歩き出した。

「なんなのかしら？ あれ」

男が去った方向を見ていると、

「おねーさん」

「お姉ちゃん」

今度は二重に声をかけられた。

「……はい？」

振り向くとそこにいたのは2人の子供だった。双子だろう、顔立ちがそっくりだ。

「おねーさん、失礼ですが」

「聞きたい事が、在ります」

「学校の場所」

「知ってる？」

「……学校って？」

「日向高校」

「案内して」

「……あー」

またかと思いつつも場所を言う。双子は納得したように言う。

「なるほど」

「あそこね」

「「どうも」」

「ありがとう」

「ございます」

双子は二重に礼を言い、走り出した。

「ホント何なのよ……」

そう言って、わたしはため息を吐いた。

楠風樹は知らない。

彼ら三人は非日常の人間であり、その夜に殺し合った事を。

深夜零時。

幽かに風が吹く、広い校庭で。

月光に照らされ、俺は、そっくりな顔立ちの双子は相對していた。

「……答える。否、言え。お前らは何者だ？」

「殺し屋ですよ」

「貴方と同じね」

「そうか」

俺は服の袖から真つ黒なナイフを取り出す。月明かりに照らされ、煌めく刃。

少年の方が前へ、小さなナイフを構える。少女の方は後ろに行き、銃を構えた。

「……元殺し屋、名は玄狼。ゲンロウ 参る」

「同じく」

「殺し屋」

「ミオ・パイルレット」

「マオ・パイルレット」

「行き、」

「ます！」

少年が目にも止まらぬ速度で俺に肉薄する。

「……チッ」

思わず舌打ちし左に跳ぶ。

少年はそのまま止まらず、俺が居た所を通過する。

（ふむ。なかなか早い）

心の中でそう感嘆しながら、ナイフを右手に構え、振り向く

目の端に少年が再度襲い掛かるのを捉え、左に逃げる。

通り過ぎた瞬間にナイフを振るう。少年の服をナイフが掠める。

（——目測を誤ったか。年は取りたく無い物だ）

そう思いながら、再度振り向く。
その瞬間、

パンッ

と云う、軽い音が響いた。

見ると少女がこちらに銃口を向けている。

（近距離と遠距離……か。少々面倒だ）

そう思いながら構える。

再度襲い掛かる、少年。それを避けると続いて、少女の銃撃。ナイフで弾き、凌ぐ

横に転がりつつ、少女の銃を観察する。火薬の匂いと硝煙が無い事からして発射されたのは銃弾では無いようだ。暴徒鎮圧用のゴム弾か何かと当たりをつける。

（少年は——早さを除けば問題ない。問題なのは——やはり少女だな）

そう思いながら後ろを向く。そこにはナイフを持った少年。それから目を離し——玄狼は行動を開始した。

目の前の少女に向かって姿勢を低くして走り出す。

「……………」

少女が気づいた頃には遅かった。

玄狼はもう目の前まで来ている。

銃を構えようとする少女。それよりも早く、玄狼は少女の後ろに回り、ナイフを持ってない左手で少女の首筋に手刀を叩きつけた。がくん、と電源が切れたロボットのようになり崩れ落ちる少女。

「——アアアアアアアア！」

背後から断末魔のような叫び。そちらを見ると少年がナイフを右手にこっちに向かって走っていた。

玄狼はそれを躲さず、振りかぶった少年の右手を蹴り上げた。

「——ッ！」

宙を飛ぶ少年のナイフ。玄狼が少年の右手ごと蹴り上げたのだ。ナイフの行方を見る少年の首筋にも手刀を放つ。崩れ落ちる少年。

玄狼は静かにため息を吐いた。大方この子供は自分を殺す依頼を受けていたのだろう。だが失敗した。多分、戻っても殺されるだけだろう。

さて、どうするかを考える。殺しはしない。自分はもう殺し屋でもなんでも無いから。

数分後、玄狼は考えを纏める。それは殺し屋としても人としても異常な考えだろう。

空を見上げ、玄狼は呟く。

「やれやれ、面倒くさい事になったな」
月は彼を嘲笑うように輝いていた。

2 B b l a c k k i l l e r V S t w i n k i l l e r (後書き)

恒例の

「登場人物紹介」

ミオ・パイルレット

マオ・パイルレット

兄妹。白髪が兄。黒髪が妹。一人称は両方「ボク」。殺し屋で孤児。
ミオはナイフを、マオはゴム弾を使う。

ゲンロウ
玄狼

男

元殺し屋

ナイフを使う。

クスノキ フウジュ
楠 風樹

女

日向高校三年生兼楠商店の次女。

ハロルドが居候している楠商店の二女。

大幅に書き直しました(8/27)

3 A 同音異字のアイツ

昼休み。あたしはもぐもぐと焼きそばパンを咀嚼していた。

「ねえ姫。知ってるかしら？」

そんなあたしに話しかける友人が一人。

あたしは焼きそばパンを飲み込んでから、答える。

「言う前から知ってる？ って言われても知る訳ないでしょうが」

「それもそうね」

彼女はくすりと笑いながら相槌を打つ。

それを横目にあたしはパックの牛乳を飲む。

飲み干し、言う。

「で、何？」

「につしーが先輩に喧嘩を売ったそうなんだけど」

やつの名を聞いた途端、あたしは立ち上がった。

「あら。いつもはツンツンでクールな姫も彼氏の話しになると無反応じゃられないのかな？」

「彼氏じゃ無いって、言ってるでしょうがッ！」

にやにやと笑う彼女にそう怒鳴りつけ、あたしは教室を飛び出した。

彼女が去った教室で。

「……彼氏じゃ無いって言われてもなあ。まあ、姫は昔から自分のココロに鈍感だからね」

彼女の友人、石堂聖コクドウヒジリは一人呟いた。

「……あ。姫、につしーが居る場所解るかな？」

勇み勇んで飛び出たはいいものの、結局やつを見つけたのは昼休み終了五分前だった。

ガラガラとドアを開き、焼きそばパンを銜えているやつを目に捉え、助走をつけてフライ。

そのままやつの顔面に跳び蹴りを喰らわそうとしたが、避けられる。

勢い余ってやつが腰掛けていた椅子や机をぶっ飛ばし、しゃがみこむように着地。

立ち上がり、振り向くとやつは焼きそばパンを咀嚼しながら言った。

「やれやれ、ハニーあぶないじゃないか。僕の反応がもう少し遅ければこのイケメンな顔、ミンチになってたぜ？ 後はしたないからスカートで跳び蹴りとかも止めてくれよ？ ああそれは結婚したらこの僕が矯正ならぬちようきよぶべら！」

最後によからぬ事を言おうとしやがったのでその顔面をぶん殴った。

やつは顔を押さえながらもなお、言う。

「うう、痛いじゃないか、ハニー。ハッ、これが今流行りのドメスティック・バイオレンス！？ そんな、まだ僕の愛が足りないと言うのかいハニいぐふおお！」

今度はキモいことを言い出しやがったので鳩尾をぶん殴り、背を丸めてしゃがみこんだ所を何度も踏みつけた。

「ちよっ、ハニー！？ それは、やめ、ちよ、話し、聞いてく、げぶふおお！？」

止めにかかと落としを喰らわせて、話しを聞く事にする。

「きよ、今日のパンツはピ」

「んなつ！ どこ見てんのよ、ヘンタイ！」

あたしはスカートを抑えながら顔を赤らめつつ、本当の止めとして頭にローキックを喰らわせた。

「がふっ！」

あたしには忘れられない記憶がある。

あれは、去年の入学式の話。

入学式が終わり、クラスも決まり、先生に名前を呼ばれた時の事。

「あー、深之村^{ミノムラ}」

「はい」

「あー、ミハタ」

あたしは言った。

「「はい」」

え？

「……あー。ミハタは二人居るのか。じゃあ、フルネームで呼ぶぞ。
ミハタ ニシキ」

今度こそ！

「「はい」」

……え？

「あー。どうやら名前まで同じらしいな。漢字は違うようだが。ん
じゃあ、ヒメの方」

今度こそ、あたしだ。

「……はい」

「……あー。お前がヒメの方な。んじゃあ、金偏の方」
「はい」

あたしは声が出た方を見る。そこには一人の少年が居た。

じっと見つめていると視線に気付いたようで、あっちもこっちを
みた。

一瞬きょとんとしたような顔になったが、すぐ、にっこりと笑っ
た。

あたしはそれを見て何だかむかついてきて、ぷいと顔ごとそらし
た。

放課後。くじ引きで日直になってしまった。

机に座り、日直簿に今日の出来事を書き記しているあたしに話しかけるやつが一人。

「君が僕と同じ名前の人？」

唐突に声をかけられ、あたしはそつちを見た。

「そうだけど……なに？」

話しかけてきたのは一人の少年だった。

少しして顔と台詞から自分の名前と同じ読みの奴だと云うことを思い出す。

「うん、実はね」

そんな人が私に何のようなのかと思っていると、やつはあたしをじつと見てこう言った。

「一目惚れした。結婚してくれ」

そして今に至る。

アイツはずっとあたしに求愛し続け、あたしはずっとそれを拒み続けている。

時間は流れ、放課後。教室にて。

「と、言う訳で第十四回調停会議。出席者は深旗錦君と美端西姫。」

そしてワタクシこと永遠の美少女、石堂聖ちゃんの三人です。どんどんぱふぱふ」

よく解らないテンションで言う聖。とりあえず突っ込む。

「永遠の美少女ってなによ」

「突っ込む所そこ？」

「そこしか無いわね」

「うーん。まあ、いいや。じゃあまずは状況を整理しよう」

テンションを元に戻して言う、聖。

「まず、今日の件は至って単純。お金を巻き上げようとした先輩方をにつしーがぶん殴った。以上」

「ホントに単純ね……。それについて錦、何か言うことは？」

「何もないな。むしろ何を言えばいい？」

先程、あたしと話していた時より遥かに大真面目な表情でやつは言う。

「……ホント、常にこの顔ならばあたしは文句も何も言わないのに。んー、動機とか？」

「動機か。強いて言うならば義憤に駆られて、かな」

それを聞いて聖はふにやりと笑う。

「義憤に駆られてか」。『純正善行』ジュンセイゼンコウのにつしーらしいね」

日向高校に存在すると言われるあだ名を真似た通り名。

その保持者の一人がこいつである。

と言うかあたしも持つてるし、聖も持つてる。

あたしは『怒涛烈虎』ドウトウレツコと、聖は『教会之白悪魔』キョウカイノシロアクマと呼ばれている。

聖は解る。住んでいる所が教会で私服は白い物で結構腹黒いから聞いた話によると、昔聖にどうでも良い事を相談した人は泣き寝入りしたらしい。

錦も解る。アイツは変態だけどどこまでも真っ直ぐでどこまでも優しいから。

だがあたしは解らない。ただ格闘技を少しかじっているだけのあたしに何故、こんな通り名がついたのだろうか？

あたしの葛藤を余所に聖は結論を促した。

「で、どうする？ このままじゃあの腐って蛆の湧いた脳の先輩方に何かされるよ？」

「確かに。されなくても何かしらの影響を及ぼし兼ねない」

「……なら、手段は一つしか無いわね？」

あたしがそう言うと、やつと聖はこくりと頷いた。

あたしとやつの言葉が重なる。

「「全力でぶつ潰す」」

……数時間後。商店街の路地裏の奥深くにある廃工場に三人の男が倒れる事になる。

帰り道。あたしと聖とやつは並んで歩いていた。

「ん」。結構呆気なかったね」

「そうだな。もう少し強いと思ったんだが」

「ま、弱い奴にしか威張れない奴にはあの位が妥当でしょ」

あたしがそう言つと、やつは表情を崩し、

「なんてドライな意見なんだハニー！ そのドライな意見に惚れ直したよ！ 将来は幸せな家庭を築こう！ 子供は……そうだなあ、バスケが出来る位の数を儲けてほしいあべらっ！」

……あたしは何もしてない。ただ前方から物凄い勢いで男が走ってきて、やつをぶつ飛ばしただけなのだ

男はそのままの勢いで走り去り、やつはアスファルトに寝転がった。とりあえず、蹴ってたたき起こす。

「邪魔くさいから起きろ」

「う、うう、つれない言葉だがそこに萌えぐふあ」

とりあえず、踏んづけた。

「いいから起きろ」

「うう、やはり間違い無い。今日のハニーはピンクのパン」

「ど・こ・見・て・ん・の・よオオオオオ！！」

あたしはやつを思いっ切り蹴飛ばした。

蹴飛ばされるにつしーを見ながらわたしは思う。

（やれやれ、姫もツンデレだなあ。ま、見てて飽きないけど）

そう思いながらわたしはにへらと笑い、蒼天を仰ぐ。

もこもこと膨れた入道雲と、響き渡る蝉の鳴き声。そして何処ま

でも蒼い空。

——日向市に夏が来ようとしていた。

3 A 同音異字のアイツ（後書き）

恒例の

「登場人物紹介」

ミハタニシキ
美端西姫

女

日向中学二年生

ツンデレ（聖いわく）。格闘技を習っており、そこらへんの人間より遙かに強い。

彼女の通り名『怒涛烈虎』ドトウレツコの由来はどんな人間にも平等に怒り、叩きのめす所から来ている。

ミハタニシキ
深旗錦

男

日向中学二年生

変態。通り名の理由は本文にて。華葵 架恋の男&劣化版。何故劣化版かって？ 放送室に行くような行動力はないから。因みに喧嘩はそれなりに出来る。

コクドウヒシリ
石堂聖

女

日向中学二年生

腹黒い。居住区の教会に住んでいる。通り名の理由は同じく本文にて。

不良さん方。

三人。名前はタケ、菊池、シンジ。

少々グダグダになりました。因みに不良とのバトルシーンは書こう
としましたが、書いたらよりグダグダになりそうなので。と言うか、
自分はバトルシーンを書くのが苦手の様です。

3 B 死神のメリー（前書き）

次回もこんなペースかも……？

3 B 死神のメリー

ジリリリリリ、と目覚まし時計が鳴り響く。

パシリ、と叩いてそれを止め、ぼくは起き上がった。

欠伸をしながら、階段を下り、洗面所に向かう。

水音を立て顔を洗う。水の冷たさが意識を完全に覚まさせる。

タオルで顔を拭き、リビングに向かう。

「おはよう」

リビングに居るのはぼくを含め、三人。

兄さんは新聞を読みながら、ニュースを見ていた。縁はキッチン^{ヨスガ}でご飯を作ってるのだろう。

席に着いてぼんやりしていると縁がご飯を持ってきた。

今日のご飯はマーガリンの付いた食パンと目玉焼きとウィンナーとブロッコリー。それとプリン。

縁の騒がしい声を聞きながらいただきます、と手を合わせて食べ始める。

いってきますと言って、家を出る。

少し遅くなったので、小走りに学校を急ぐ事にした。

「おっはよー！ こっきー！」

学校の校門前で^{シキミキホオズキ}密木鬼灯が居た。ぼくに気付いて手を振ってくる。
「……おはよう」

正直、密木は苦手だ。

性格の問題では無い。むしろ性格は親切で助かる。問題なのは、オカルトマニアと云う事だ。よく、心靈写真だとか伝説の文献だとかUFOの資料だとかそんなモノを見せてくる。

「実は昨日、面白い写真見つけてさ。見てみる？」

断つても無駄だと知っているぼくは最後の抵抗に言う。

「……見るから教室に行こう」

「ん」。まあ、確かに私が原因で遅刻しちゃったら悪いもんね」
納得したようで柊木は歩き出した。ぼくもそれを追う。

教室に着いて、バックを下ろすぼくの傍で柊木はポケットから裏返しに写真を取り出した。

「さて、クイズです！ 鎌を持っている妖怪はな〜んだ？」

「……カマイタチ？」

「ちっが〜う！ 確かにカマだけど！ 他にいるでしょ!？」

「オカマ？」

「それも違う！ カマ違いだし！ て言うか妖怪でも無いし！ だから……ほら、死を司る神様！」

……あえて避けていたのに。

ぼくは仕方無く言う。

「……死神？」

「せいか〜い！ 焦らすなんてこっきは酷いなあ」

「それは謝る。……で、死神が何？」

ぼくがそう言うのと柊木は声を潜めて、

「実はね、つい最近噂になってるの。……死神から電話が来るって言う都市伝説が」

「死神からの電話？」

「ええ。具体的には解らないけど体験した人はそう言ってたんだそうよ」

「ふーん。で？ その人はどうなった？ 死神から電話が来たんだ。

只で済むワケがなさそうだ」

「……正解。ホントこっきは鋭いなあ」

そう言うて柊木は写真をひっくり返した。

そこには銀色に光る大鎌とそれを持って振りかぶった黒いフードが写っていた。

「その人が死ぬ前に撮った写真よ」

「……おかしくないか？ 何点か疑問に思ったので問う。

「なんで撮ったって解る？」

「撮った直後に死んだからよ」

「コスプレじゃないのか」

「その人はそんな姿じゃなかったらしいし、そんな服も持ってたなかったそうよ」

「じゃあ、他人のコスプレ」

「それも無いわ。隣人がそう証言してるし、鍵もすっかりかかってたらしいし」

「なんで死神はカメラを壊さなかったんだ？」

「なんなのか解らなかつたからじゃない？ 人間じゃないし」

「にべもなく返される。……いや、まだだ。まだ疑問に思う事はある。

「なんで死神が電話したって解る」

「携帯の着信履歴に残ってたそうよ」

「死神って？」

「ううん、知らない電話の番号」

「じゃあ、悪戯じゃないか」

「いえ、掛かった電話の番号が全て違うのよ」

「は？ つまり」

「電話を変えながらって事でしょね」

「じゃあ、複数の」

「それも違うわ。一つは民家の電話だったらしいし」

「どこで知ったんだ？」

「半分はニュース。後はパソコン」

「……電話の内容は？」

「メリーさん」

「……メリーさん？」

「ええ。最初は「遠くの本屋前の公衆電話に居る」と言つて、最後は「貴方の後ろに居る」で終わつてたらしいわよ」

「本当にメリーさんだな……。じゃああれか？ メリーさんの正体は西洋人形じゃなくて死神つて事か？」

「さあね。この写真から見る限り、小さいけど、普通の子供ぐらいね」

「ふうん」

「で？どう思う？ どう思う？」

「……先生が入ってきたから、後で」

「ちよつ、もー！ いつもそう言つて逃げる！」

聞こえない聞こえない密木の声なんて聞こえない。ぼくは席に着いた。

昼。

一年のマドンナと呼ばれる華葵某（ハナアオイ……なんだっけ？）が一人のクラスメイトに突貫するのを横目に見ながら弁当を持って教室を出る。

教室を出た直後に密木の声が聞こえた。危なかつたと思いながら、空き教室で弁当を食する。

素早く食べ終え、密木が居ないかどうかを確認してから空き教室を出て、屋上に向かう。

屋上には誰もいなかった。だが昼寝をするには床が少々暑すぎる。なので、風景を見る事にした

密木に見つかったのはチャイムが鳴る少し前だった。怒りながら首を絞めようとしてくる、密木から逃げながらチャイムが鳴るのを待つ。

捕まつた直後にチャイムが鳴り響いた。

結構時間に厳しい密木は諦めたようで、教室へと戻つていった。自分は逃げるのに体力を使ったため、しばらく動けなかった。

授業は遅刻する事にして、どこまでも青く澄んだ蒼い空を見てい

ると臉が徐々に下がっていき——気が付けば授業の終わりを告げるチャイムが鳴り響いていた。

溜め息混じりに立ち上がり、ぼくは屋上を後にする。

放課後。ぼくは帰宅部なので部活は無く、密木はテニス部に入っているため居ず、晴れてぼくは明日まで自由の身になれた。

「でも明日までなんだよなあ」

呟き、更に落ち込む。

毎度の事ながらなんでこうなんだろう。

いつも今日の繰り返し。密木がオカルトなモノを持ってきてぼくに見せる。そしてぼくに感想を言わせる。ぼくはそれから逃げる。逃げようとして見つかり、捕まった事もある。その時にもぼくは感想を言わなかった。その繰り返し。それが中学校の時から続いている。

中学校の時は良かった。携帯なんて便利なモノは持っていなかったし、密木が聞きに来たのも二日に一回程度の割合だったから。

高校に入ってからだ。密木が積極的になったのは。

まるで、感想を言わせるような感じで、ぼくに迫ってくる密木を思い出し、溜め息を吐く。

気分転換に周囲を見回して見る。ぼくの住む家は西南に在る。そのため、左にはビル、右には住宅街が見える。

学校からの帰り道なのか、ランドセルを背負った少女が左側の歩道を歩いている。

それを眺め——唐突に嫌な予感がした。

何故、そんな予感がしたのか解らず、首を傾げる。少女はそのまま車道を渡ってこちら方へ。その少女を見、少女に気付かないのか、少女より後ろから凄く速さで走ってきたトラックを見、鞆を捨て、走り出した。

少女もトラックに気付いたのか左を見た。そして、そのまま石像のように硬直した。

それもそうだろう。鉄の塊が迫ってきて、冷静に避けれる人間などあまり居ないだろう。ましてや小学生に、冷静な判断が出来るワケがない。

トラックが少女に迫るまで、後数秒。幾ら何でもギリギリだ。トラックもようやく少女に気付き、ブレーキを踏んだようだが間に合わないだろう。

ぼくは覚悟を決め、より強く、より速く、走る。

手を伸ばせば少女に触れられると云う所で、ぼくは限界まで体の前に傾け、少女を　突き飛ばした。

テックイ
迫る鉄塊。

響くブレーキ音。

突き飛ばされながらも体を捻り、ぼくを見る少女の力才。

ドサリとぼくはアスファルトに倒れた。

「……？」

覚悟していた衝撃は来ず、ぼくは訝しく思い、トラックの方を見て、絶句した。

トラックは真つ二つに裂けていて、ぼくの左右に在ったのだ。運転手を見てみるとがつくりとしていた。どうやら退いてしまったと思っているようだ。ぼくが呼びかけても返事をしない。

呆然としながら同じく呆然としている少女に向かう。

傍に近寄り、ぼくは少女を見た。

突き飛ばされた時に擦りむいたの擦り傷だらけだがそれ以外に目立った外傷は無さそうだ。

「大丈夫？」

ぼくがそう言つと、

「はい」

彼女は恥ずかしそうに俯きながら、言った。

そう、とぼくは呟き、帰路へと進路を戻す。運転手にクレームは出さない。これは本当に必然の事故なのだし、それに運転手は後で

トラックの修理に悩まされるだろう。なにせ真つ二つになっているのだ。どうやって説明すれば良いのかも解らないだろうし、修理も大変だろうから。もしかしたら買い換えるかも知れない。

そんな他愛も無い事を思いつつ、道を歩く。

兄の蒼空^{ソラ}と妹の縁によるとぼくはお人好しでその癖、自分に関しては腕を折られようと階段から突き落とされても何も処置を取らない変態だそうだ。

非道い云われようだと思ったが、腕を折られても気にしなかったのは事実だし、階段から突き落とされたのに誰にも言わなかったのも事実。なので言い返せない。……まあ、言い返そうとも思わないのだが。

そう回想しながら、牛乳を飲む。兄は飲み会らしいし、妹は部活だ。帰ってくるのは早くても六時くらいだろう。取り敢えず、何を作るか考える事にした。

冷蔵庫の中身を思い出しつつ、着々と料理の構想を浮かべていると、

ジリリリリリリ

と電話の音が響いた。

面倒だなと思ったが、もし重要な事だったら厄介なので出る事にする。

受話器を取り、耳に当てる。

「……はい。百棟^{モモムネ}です」

ぼくがそう言つと、

「今、楠木商店の前の公衆電話に居る」

そんな返答が返ってきた。

「……はい？」

聞き返したが電話は切れた後だった。

首を傾げているとまた、

ジリリリリリリ

と電話が鳴る。

「……はい」

「今、煙草屋の前の公衆電話」

またもそう言つて電話は切れた。

「煙草屋……？」

日向市に煙草屋は一件しか無い。日向高校の前に在る、老婆が経営している煙草屋しか。

そんな事を思っていると、また電話が鳴った。

受話器を取り、何も言わず耳に当てる。

「今、喫茶店ノクターンの前の公衆電話」

ノクターンはこの居住区に在る唯一つの喫茶店だ。

確信する。この電話の主は確実に自分の家に近づいていると。

だが、自分は見知らぬ誰かにストーカーされる覚えは無い。……

いや、まてよ。

不意にぼくは思い出す。

今朝、密木が話した事を。

メリーさんもどきの死神を。

電話が鳴る。

受話器を取る。

「今、佐々木^{ササキ}の家に居る」

佐々木って誰だ。そう思ったが声には出さず、受話器を置く。

電話が鳴る。

取る。

「今、神社^{カミヤシロ}の家」

神社とは自分の家の隣に住んでいる人だ。

つまり次で……ぼくは、刈られる。

ジリリリリ

電話が鳴る。

これが最後だろうと確信し、取る。

「今、」

君の後ろに居る

後ろから声がした。

振り向く。

後ろに居たのは黒いフードを着た、手にぼくの携帯を持つ者。身長はぼくの胸くらいだろう。

ぼくは問う。

「死神ですか？」

「……ああ」

「ぼくを殺しにきたんですか？」

「いや」

ソレはしつかりと否定した。

ぼくは困惑しながらも、問いを重ねる。

「殺しにきたんじゃないんなら、何をしにぼくの所へ？」

「宣言しにきた」

「宣言？ 何を」

「わたしは宣言しよう」

ぼくの問いを無視するようにソレ——いや、彼女は言った。

「百棟 モモムネ 弧赤 「セキ わたしと結婚しろ」

思考が停止した。

「えーっと状況を整理しようと思うけど、その前に君の名前は？」

「名前か。メリー・ミイだ」

左目に眼帯を付けた黒髪と黒い右目の少女。

「呼び方はどうすれば？」

「む……。別に。好きにしろ」

「じゃあメリーで」
「うむ、それなら良い。妻の呼び方とも言えるだろうしな」
「聞き捨てならない言葉が聞こえてきたから話を進めるけど」
「ぼくは深呼吸し、言う。」
「妻ってどういう事？」
「妻とは結婚した男女のうち、女性のほうの呼び方だ」
「いや、意味が聞きたいんじゃない。先程、メリーは結婚しろって言ってたよね」
「うむ」
「どうして？ ぼくは君と面識は無い」
「ああ、確かに面識は無い」
「じゃあどうして」
「一方的にわたしは見ていた」
「……ストーリー？」
「違う。わたしの正体は何だ」
「死神……ああ、つまり」
「そうだ。殺す人間は見なければ解らないだろう」
「じゃあなんで」
「一目惚れしたからだ」
「……ストレートだね……」
「誉めても何も出ないぞ」
「……で？ どうするのさ。今から」
「うむ。まず、住ませてくれ」
「……ぼくは良いけどさ。兄とか妹とかが反対するかもしれないぞ」
「ふむ。……まあ、その時はその時だ。そこら辺に住むでしょう」
「……まあ、これは兄と妹が帰ってくるまで保留って事で。……で、質問があるんだ」
「うむ。何なりと申せ」
「何なりとって……。じゃあ遠慮無く云うよ。その眼帯は何？」
「ああ、これか」

そう言っ
てメリーは眼帯、正しくは左目を抑えた。

「これは死神が現世うつしよに来るために必要な事でな」

「現世？」

「この世界の事だ。他の世界はわたしが生まれた冥府めいふ。お前たちが天国と云っている天嶺てんれいなどがある。」

「へえ」

「話を戻すぞ。まあ、これは封印みたいな物だ。」

「封印？ 何を封印するんです？」

「入口だ」

「入口？」

「そうだ。わたしたち死神は自由に現世と冥府を行き行き出来ない。冥府への入口は冥府側かしら開く事が出来ないからな」

「じゃあどうするんですか？」

「封印を開く」

「開く……？ どうして」

「……すまん。わたしは口下手でな。あまり上手くは説明出来ないのだが……。まあ、糸のような物だ。これを開けば冥府に帰ることができ、解けば本来の力を出せるが、冥府に帰る事が出来なくなる」

「……つまり、リールみたいな物って事ですか」

「ああ、そうだな」

「ふうん……あ。他にも聞きたい事があるんだけど」

「遠慮無く言っ
ていいぞ」

「なんで家に来る時に電話したんですか？」

「そのほうが気分が盛り上げるからだ」

「殺す時に気分を盛り上げてどうするんだろう。」

「……もう一つ。どうやって電話したの？」

「む……。どうやってとな？」

「かかってくる電話番号が違う理由」

「ああ、そういう事か。簡単だ。そこら辺の人から借りた」

「ホントに簡単ですね……。電話番号は残してませんよね？」

「まあな。そんなへまはしない」

「ならいいですけど。……もしかして、今日、トラックが真っ二つになったのも？」

「ああ、わたしだ。迷惑だったか？」

「いえ、助かりましたけど……」

そんな話を話していると、玄関から、ドタドタと云う音が聞こえ、ガチャリ

とドアから開き、叫び声が響き渡った。

「うつついー！ー！！ たっだいまあー！」

「な、なんだ！？なんだこの珍妙な娘っ子は！？」

「……もう少しボリウム落としてくれないかな、縁」

「ん、ん、ん？ 兄ちゃん、その眼帯娘は何奴？ はっ！ まさか援助交際的なナニか？」

「援助交際って……。ぼくまだ高校生だぞ？」

そう言つと縁は指をふり、

「ちつつちつ。高校生で援助交際やる奴って居るんだぜ？ 兄ちゃんもまだまだだなあ」

そう言つた。その後、縁は真剣な表情をし、言う。

「……んで？ ホント何者？ 兄ちゃんが援助交際してるって可能性はなさそうだけど」

「……まあ、ね。それは後の話にしよう」

「……ん。それもそっか！ つーわけで兄ちゃん。腹減ったから美味しい飯作ってくれ」

百棟家では、朝は縁、昼は兄さん、夜はぼくと云う決まりがある。「自分は作らないからってなあ。まあ、いいや。作るから着替えてもしてて」

「ほっほ。頼むじえい」

そう言つて縁は二階に上がっていった。

「……よし、あいつの晩飯にだけピーマン入れてやろう」
ぼくはそう呟き、キッチンに入った

後に残ったメリーは、
「むづづ……。妹殿め、なかなかやりおる」
そう呟いていたそうである。

「むづづー。そんな事ってあるんだー」

夕食後、事情を話すと拍子抜けする程に縁は信じた。

「んでんでメリっち。聞きたい物があるんだけどさー」

「メリっちって……。まあいい。なんだ？」

「メリっちってどうやって人とか捕まえるの？あんまし力無さそうだし」

「……ああ、まあ、隠していた訳では無いのだが。わたしたち死神には使役する事が出来る使い魔がいてな」

「へー。どーゆーの？見せて見せて！」

「解った。……来い影猫^{エイビュウ}」

メリーがそう言った瞬間、影が揺れ、窓に伸びる。そして

「ニャア」

黒猫が現れた。

「猫さん？」

「ああ。猫だ」

「ご飯食べるの？」

「いや食べない。使い魔は現世の物を食べないんだ」

「ふーん。ほにゃほにゃ」

ひょいと縁は黒猫の目の前に指を出す。

黒猫はその指にパンチを繰り出した。

「……影猫。戻れ」

「フニャ」

その言葉に従い、黒猫は姿を消した。

「えー。もう戻しちゃうの？」

「そこら辺に置いといたって邪魔だ」

何気に使い魔を虐げているメリー。

「ぶー」

「おい、縁。風呂入ってこい。ぼくは食器を洗わないといけないから」

「はい解りました。あ、そうだ！メリっちも一緒に入らない？」

「む、むう？別に構わないが……」

「けってーい！じゃ、じゃ入る！」

「ちよつと待て縁！メリーの着替えはどうする！」

「着替え？あ、そうだった。よっし兄ちゃんには今だけあたしの部屋に入る権利を与えよう！」

「……はいはい解ったよ。とりあえずお前がちっちゃかった頃のを持ってくる」

「少し待て！それはどういう意味だ！？」

「ほーい。じゃ、いこーねー」

「む、むうう……！は、離せ！わたしは真相を意味をおおおおおー！」

ずるずると引きずられていくメリーを尻目にぼくは縁の部屋に行く事にした。

時間制限の在るものは早めに終わらせるのが吉だからである。

部屋に入り、なるべく縁の服を見ないように素早くタンスを開け、見繕う。

一階に戻り、ぴぎゃあぴぎゃあと騒がしい浴室に服を置く旨を伝え、服を置く。

リビングに戻り、食器を洗い立て終え、さて何をするか考えていると

ジリリリリ

と本日何度目かも解らない呼び出し音が鳴り響いた。

まさか、また死神じゃないだろうなと思いいながら出る。

「……もしも、百棟です」

「いやあ、その声はマイブラザーかい？」

「……兄さんですか」

「ん？ ボクが電話したらおかしいかい？」

「いえ、拍子抜けしただけです」

「んー？ まあ、いいや」

「で、何の用ですか？」

「んー。明日までかかるって話しをしに」

ああ、そういえば飲み会だったけ。

「飲み会の割りには全然酔ってなさそうですが」

「そりゃあオレンジジュースだけで酔う人間はよほどの変人だろうからね」

「そうですか。あ、そういえば兄さん報告があります」

「ん？ なんだい？ まさか結婚するとか言わないでくれよ」

「……まあ、似たような話ですね」

「ふうん……？ じゃあ、話してくれ」

「家族が増えました」

「増えた？ 犬か猫でも拾ったのかい？」

「……まあ、そんな所ですよ。縁は諸手を挙げて賛成しています。

兄さんは？」

「んー。まあ、家族が増えるのは良いことだからね。賛成するよ」

「そうですか。縁も喜ぶでしょうね」

「そうだね……」

「……兄さん。お父さんの事を思い出してませんよね」

「……」

「気に病む事じゃ無いですよあれは、——あの事故は兄さんが悪い訳じゃ無いんだから」

「そうだね。すまないな、弧赤」

「礼は要りません。家族にそんな物、要らない」

「……また、明日。お休み」

「お休みなさい、兄さん」

受話器を置く。

そのままじっとしていると浴室から妹が出てきた。

「あり？ どしたの、そんな所に突っ立って」

「メリーはどうしてる？」

「更衣室で力尽きてる」

「……どうやってたらそうなるのだろう？」

「縁、重大な知らせだ」

「何？」

「兄さんから許可を貰った」

パサリと縁の持っていたタオルが落ち、喜びの声が百棟家付近に響き渡った。

。

深夜。キィと扉が閉じる音がして、一人の影が百棟家から出て来た。

「……………」

その影は何かを呟き、歩き始めた。淀みなく進む足。

その足が止まる。

「キキ……カカカ」

奇妙な笑い声を出しながら目前に居るモノ。

街灯に照らされその姿が顕わになる。

顔が右の肩にあるその姿は異形そのものだった。

「生キ肝ヲ渡セ……」

異形が口を開き、言う。

異形はこう考えていた。

自分のこの姿を見れば目の前の獲物は活きのいい悲鳴を上げて逃げるだろう。自分はその姿を堪能しながら、追い詰め、喰らう。その光景を想像し、異形はくつくつと忍び笑いをする。

しかし、獲物の返答は異形の想像を絶する物だった。

冷静に冷酷に冷徹にこう云ったのだ。

「断る」

たった二文字。けれど異形の思考を混乱させるには十分な言葉だった。

「……断ル、ダト……？ タダノ人間風情ガ？」

「話の腰を折るようだがわたしは人じゃない」

「人ジャナイナラ……ナンダ？」

冷たき双眸が異形を見据え、

「死神だ。……影猫、遊び相手だぞ。遠慮無く戯れろ」

そう高らかに宣言した。

影が走る。前に後ろに右に左に斜めに真下に。縦横無尽に異形を翻弄する。

影が異形に触れる毎に異形は体に傷を刻まれていく。

「グギガアアアアアアアアアア！」

異形が吼える。影を殴るが効果無し。逆に腕の一部が抉られた。

「影猫。もういいぞ」

突如、死神が言う。

「このまま、潰してしまってもいいんだがな。やはり最後まで自分も混ざりたいだろ？」

そう言いながらどこからともなく巨大な鎌を取り出した。

「さて、どこからでもかかってこい」

銀の刃が月光に映える。

「舐メルナアアアアアアア！」

交差する、異形と死神。

一瞬の後、異形の腕が腰が頭が足がコンクリートに堕ちた。

「馬鹿ナ……。死神ハ現世デハカラ封印シテイルハズダ。ナノニ、ナゼ……」

封印していると云う事はこの女は非力で無力な筈。なのになぜ？

異形の疑問に答えるように死神は言う。黒い目を右に。紅い眼を左に。

「冥土の土産に教えてやる、化け物。簡単だ。封印を解いたに決まっている」

「封印ヲ解イタダト……？ ソンナ事ヲスレバ死神ハ……」

「冥府に帰れない。そうだろう？ 結構だ。わたしはここに居場所を見つけた。帰る気など毛頭もうとうも無い」

返事はない。どうやら死んだようだ。死神は鎌を終った。

「さて、こんなものを路上に置いておくのも気が引けるな。……影

猫、飯だ。欠片も無く喰らい尽くせ」

ザワリと影が揺れ、バクリと異形の肉片を食らった。

「上出来だ。さて、戻るとするか」

眼帯を付け、メリーはそう呟き踵を返した。

彼女が立ち去った所には何も亡く、唯、街灯が照らしていた。

翌日。

ぼくは登校中、柵木に捕まった。

「さあ、キリキリ吐くがいい！ こっきーは死神を信じるかい！？」

「信じますよ」

「ふへ？」

「信じますって言ったんです」

そうだ。もう、逃げてても仕方ない。兄さんが過去と向き合うように、ぼくも向き合わなければ。

そう思っていると、柵木は何故か物凄い勢いで、聞いてきた。

「ぬっふっふ」。信じるんだね？ 嘘じゃ無いね？」

「は、はい」

「よっしゃー！！ 私は勝った！」

「へ？ な、なににですか」

いきなり、空を指差し叫ぶ柵木にちょっと引きながら、ぼくは尋ねた。

「あれ？ 聞いてないの？」

樁木が不思議そうに言う。

「蒼空さんがこっきに「信じるとか言わせるか勝負するかい？」
っていったからやろうって事で勝負してたの。ちなみに賞品はこっ
きを1日自由に使って良い権限ね」

最初はなんて言ってるか解らなかったが、数十秒かけて理解する。
そしてぼくは絶叫した。

「に、兄さんの馬鹿野郎ー！！！」

ぼくの絶叫は青い夏の空にどこまでも溶けていった。

3 B 死神のメリー（後書き）

「遅れてきた登場人物紹介」

モモムネコセキ
百棟弧赤

男

日向高校二年生。

言葉使いが何故か一定しない人。なんでだろね？

メリー・ミイ

女

死神。

黒髪黒目の眼帯少女。

現世に置いて、彼女、否、死神に勝てる者は2つの例外を置いて存在しない。が、それは現世の中だけで有り死神長など死神を束ねる者や、冥府を統一する者にとっては取るに足らない存在らしい。

シキミギホオズキ
櫛木鬼灯

女

日向高校二年生。

オカルト大好き元気少女。

モモムネヨスカ
百棟縁

女

日向中学二年生。

ハイテンションキャラ。イメージは西尾 維新さんの偽。語の火。けれどあんなにぶっ飛んでない。

モトムネソラ

百棟蒼空

男

会社員。

実は投稿時、一言も喋ってなかったのだが、加筆時に付け加えた。
フツ、命拾いしたな。ちなみに、蒼空と云う名前はカッコイイと思う。

異形

男？

化け物。

右肩に首と顔が有る化け物。一般人よりはるかに強いのだが、あつさりと負けた。

長くなりました。3月7日、ちょっと訂正。

次回予告（予定）

喫茶店の話。

4 A c a f e n o c t u r n e (前書き)

恋は時に、薬にも狂気にもなりうる。 byこくじょー。

4 A c a f e n o c t u r n e

カラン

と扉に備え付けた鈴が鳴る。来客の印だ。
俺は客との話しを中断し、扉に顔を向け、
「いらっしゃい」
と言った。

喫茶店ノクターンは日向市の西、居住区にある小さな喫茶店である。寂れている訳では無い。むしろ繁盛しているとも云える。それは店内の様子を見れば解ることだ。

ガヤガヤと騒がしい店内を一瞥し、俺、カミヤシロ神社 ジン仁はため息を吐いた。騒がしいのを鬱陶しいと思っている訳では無い。むしろこの喫茶店が繁盛している証拠だと思う。鬱陶しいのは……。

チラリと目の前の奴を見る。

「うっ、うっう……。何故僕の愛を受け止めてくれないんだマイハ
ニ……」

カウンター席で牛乳を飲んでいるこの少年。バカまだ、愚痴をぶつぶつ言っている。

正直、うざい。

一刻も早く店外に放り出したかったが、忌々しい事に常連なので実行出来ない。

再度ため息を吐くと、この喫茶店唯一無二の従業員、アフラギ蘭 ゲツカ月架が近づいてきた。

「あの、すいません……。オーダーです。良いですか？」

「ああ、良いよ……」

やや、内気な所以外は優秀な従業員である。

「はい……。えっと、アイスコーヒーが一つ、アイスココアが一つ。それにオレンジジュースが一つ、です。あってますよね？」

「俺に聞くな。アイスコーヒー、アイスココア、オレンジジュース、だな」

やや、内気な所以外は優秀な従業員である。……多分。

「はい、完成つと、ほら」

さっさっさつと注文の飲み物を作り、月架に渡す。

「それ運び終わったら帰ってもいいぞ」

「は、はい……。あの、その、」

「いいから行け」

「えっと、ええっと、……ありがとうございます」

ぺこりと顔を赤らめながら月架は盆を持って注文された席にいった。

「……なんすか、そのラブコメみたいな雰囲気。僕に対する当て付けですか？」

「……お前はいつまで居座るつもりだ？大体学校はどうした」

「僕の学校は今日から休みなんですよ」

「……あー、そうか」

もう夏休みか。気付かなかった。店内をよく見てみると学生服を着た客が何人か居る。

「……学生割引でもやろうかね？」

「あ、じゃあ、今やって下さい。助かりますんで」

「よし決めた。明日やろう」

「えー。今日じゃ無いんですか？」

「まあまあ、落ち着け。これをやるから」

胸ポケットに備え付けておいたメモ帳を破り、近くに置いてあったペンでさっさっさつと文字を書く。

「……落書きですか？」

「ちげえよ。割引券だ。お前にやる」

「な……！　なんだって！？」

奴が目を開く。

「あの、「割引券つつうめんどくさい物を作るなら新しい料理でも考えるよ」と言っていたマスターが！？」

「よし、サービスだ。顔を牛乳で浸してやろう」

「あ、すいません、失言でした。だから頭を掴まないで下さい。牛乳の中に突っ込まそうとしないで下さい。お願いですから」

「ちっ」

「今、舌打ちしましたよね！？　振りじゃなく本気でやるつもりだったですか！？」

あー。うぜえ。

心の中でそう呟いていると

「あの……。すいません」

お盆を抱えながら月架が近寄ってきた。

「先程の言葉に甘えさせて貰っていいですか？」

「ああ、いいぞ。こんな季節だ、もうこれ以上客は増えねえだろう」

「そう、ですね」

俺と月架がそう会話していると、

「ねーねー蘭サン」
アララギ

「はい……？」

奴が話しかけてきた。

「蘭サンって恋人居ないの？」

「え……？　……今の所居ませんけど」

「んー。じゃあさ」

ニヤリと奴は笑い、

「可哀想な独身のマスターに告っちゃえば？」

そうほざいた。

奴の問題発言数秒後。

最初に動いたのは意外なことに月架だった。

顔を真っ赤に染めながら、銀色に光る丸いお盆を奴の頭に叩きつ

ける。パソコンと良い音がした。

続いて俺が奴の頭を掴み、牛乳に突っ込ませる。コップの許容量を超え、溢れ出る牛乳。素晴らしき連携プレー！

近くの客が椅子ごと引いた。

数分後。牛乳が飛び散ったカウンターのテーブルは綺麗に拭かれて、何事も無かったようになっていた。ちなみにこの騒動の原因には手製の割引券三枚を謝罪にくれてやった。

ふわあと欠伸をしていると、

「すいません、会計お願いします」

客がやって来た。

やや細い顔の少年と、活発なイメージを与える少女。それに、ちっこい眼帯娘。

眼帯娘が何故かじろりとこつちを睨み付けて来たので、こつちもぎろりと睨み返した。そしたら眼帯少女は、少年の後ろに隠れてしまった。

……目つきが悪い事は知っているが、それでも少しショックだ。

「…… 650円だ」

「ああ、はい」

「毎度有り」

カラン

と音がして、扉が閉まる。

それを見送り、また欠伸をする俺に、

「マスター」

話しかけてくる者が居た。

「何だ」

声がする方向を見ると、そこに座ってたのは、なんでこんなクソ暑い日にそんな物着てるんだって思う程黒いフードを着た男だった。「空き家とかただで住める場所知らないか？」

「空き家？何でだ」

「……まあ、色々有って、な。こいつらと一緒にこの町に住む事になったんだ」

男の隣には、白い髪と黒い髪の双子らしき子供。白い髪の方はココアを、黒い髪の方は牛乳を飲んでいる。

「ふうん」

「で、知らないか？」

「あー」

これって犯罪だよなと思いながら、記憶を探る。

一つ該当する物を見つけ、黒フードに言う。

「んーと、この通りをずっと行って12件めの家の隣にある13件めが空き家だ。ちなみに12件めの家の名前は百棟^{モモムネ}って書いてある」

「解った。13件めだな」

そう言うつと、黒フードは立ち上がった。

金を払い、騒がしい双子を引き連れ外に出ようとする。

ドアの前で黒フードは振り返り、言った。

「じゃあな。愛想の無いマスター」

「じゃあな、幼児誘拐犯の怪人黒フード」

俺がそう、返すと黒フードは笑った。

「はは、幼児誘拐犯の怪人黒フードか。それは良い」

「まあな。俺も自分のネーミングセンスにびっくりだ」

くくつ、と再度黒フードは笑い、そのまま双子と共に去っていった

カラン、とドアが閉じたのを確認し、俺は伸びをした。

「今日はこれで閉店、だな」

まだ設定した時間じゃないが構わない。この喫茶店が時間通りに閉まった事が無いのは、もうこの近所の暗黙のルールになっている。取り敢えず、明日の為の材料を買いに行く事にする。

ドアに掛かっているopenをclosedにひっくり返す。

マイバックを持って、いざ、居住区唯一のスーパーへ。

「ただいま」

せんりゅうひん
品物を持って帰宅。

喫茶店の裏口兼居住スペースの玄関を潜ると玄関には靴が一足転がっていた。ってことは。

「帰ってきたのか？ 姉貴」

確か今日はデートだった筈だ。そう思いながら呼びかけるが返事はない。寝てるのだろうかと思いつながら靴を脱ぎ、入る。

自分の部屋の戸を開けると、何かがのし掛かっていた。

「ぐっ」

重さで後ろに倒れそうになるが、なんとかこらえ、のし掛かっていた物を見る。

「うっ、ぐすん、聞いてよジンちゃん」

「聞かせる前に退^どけ……！ クソ姉貴……！」

のし掛かっていた物体は姉貴だった。

「むぎゃ」

力づくで姉貴を退かし、電気を点ける。

最初に見たのはテーブル周辺に転がるビールの空き缶。

……なるほど、理解した。

やけさけ
「自棄酒はほどほどにしろって行つたよな……？」

「ひい、ジンちゃんが怖いよう」

「当たり前だ。ったくこんなに散らかしやがつて」

買った品物を床に置き、缶をまとめて拾い、タンスの横に掛けてあるビニール袋に突っ込む。明日捨てるでしょう。

「ああ、まだ飲みかけのもあつたのに！」

「うっせえ酔っ払い。こんだけ飲んだんならもう十分だろ」

「うっ、ぐずぐず」

「って聞いてすらいねえ」

はあ、と俺はため息を吐いた。

姉、カミヤシロテシリ神社巡理は駄目人間である。

と言つても二トではない。職業は多分、真つ当な会社員である。駄目人間と言われる由来は恋愛依存症と云う病に在る。

と云つても本当にそんな病では無い。精神の在り方と言つた方が確かだろう。要は誰かに恋をしなければ駄目だと云う事である。しかも独身、恋人が居ない人限定と云う、厄介な制限付きで。不健全だがなんと岡惚れしろと思つたか。

大方今回もそれがらみだろう。

「ふえね、あいつつひやら酷いのひよう。もう、付き合つてふあへないとか言つふえいきなりポイ、なんふあもによ」

「……」

予想通りだった。俺はうんざりしながら、視線を上に向ける。見えるのは少し汚れた天井のみ。仕方無く視線を戻す。

姉貴の話はまだ続く。いや、実際には終わつてるのだが、その後また、最初に帰り繰り返すのだ。もうこの話も五週目辺りだろう。

俺が帰ってくるまでに強か飲んだのか呂律が回つてない。そろそろ酔い潰れる頃だろう。

数分後。俺の予想通り、姉貴は酔い潰れた。

ため息を吐き、俺は後片付けを始める。

翌日。俺はカウンターに座っていた。

AM10時と云う中途半端な時間の為か、客は少ない。くああ、と欠伸などをしていると、カラン、とドアが開いた。

「よお。愛想の無いマスター」

無礼な声がしたので見る。

「…幼児誘拐犯の怪人黒フードか」

「そうだ」

「あの双子はどうした」

「まだ寝てる」

カウンター席に座り、奴は言った。

「……コーヒーを一つ」

月架は他の客の注文品を運んでいる為、こっちに来れないようだ。
仕方無く、俺が聞く事にした。

「砂糖、ミルクは？」

「不要だ」

「そうか」

頷き、作り始める。奴が言う。

「昨日は助かった」

「……ああ、空き家を探してたんだったか？」

「よく覚えていたな」

「記憶力には少々自信があつてね」

ニヤリと笑いながらコーヒーを置く。

「んで？ 住み心地はどうだ？」

「悪くない。あいつらも気に入ったようだしな」

「そりゃ良かった」

ズズ、と黒フードはコーヒーを啜った。

「……当座の問題は職だな。この町に来る前に失業したから、あては無いし。……今どうしようかと悩んでいる」

「あんた何の仕事してたんだ？」

「……殺し屋って云ったらどうする？」

「病院か警察に電話する」

「常識的だな」

「まあな」

しばらく二人笑いあう。

「……さて、そろそろ行くか」

そう言つて黒フードはコーヒーを飲み干し、立ち上がった。俺も机を挟んで立つ。

「悪くなかつた。もしかしたらまた来るかもな」

金を払いながら言う黒フード。

「ああ。是非来いよ。もしかしたら雇つてやるからよ」

「……それは是が非でもまた来なければな」

軽口を叩き、黒フードはドアを開け、去つた。

俺は黙つてそれを見送つた。

昼頃。今日は学生割引だと言つた話を聞きつけたのか、沢山の学生が集まつた。中にはどう見ても学生じゃなさそうな奴も居たが。

客足が少し途絶えてきたので一息吐きながら店内を見る。

昨日の奴が一人の少女に殴られている光景。それを見てクスクス笑っている少女。男一人女一人に性別がよく解らない学生の三人組。男女の二人組で、女が男にベタベタ付きまとつてる光景。ちなみに男はそんな女を鬱陶しがっている。なんか殺伐とした雰囲気を感じている五人の男女。なんか変に賑やかな空気の家族。そして、忙しく動き回っている月架。

みんな様々な雰囲気を出しているがその中には誰一人、楽しんでなさそうな雰囲気を持つ者は居ない。

そんな様々な空気を見て、俺は思い出す。

自分が何故この喫茶店を始めたのかを。

——こんな風に、様々の人の笑顔を見るためだ。

思い出し、俺は薄く笑う。

それと同時に決意する。

何年何十年の月日が経とうとも、この喫茶店は壊させないと。頭上にはこの喫茶店の名前でも有る夜想曲が変わらず、流れてい

た。

4 A c a f e n o c t u r n e (後書き)

- 登場人物紹介 -

神社 仁 カミヤシロジン

男

喫茶店ノクターンのマスター。

冷静だが、コーヒーに関しては熱血馬鹿。

蘭 アララギゲツカ
月架

女

喫茶店ノクターンの従業員。

恥ずかしがり屋。

カミヤシロテンリ
神社 辿理

女

会社員。

恋愛依存症。次の日常に登場予定……だったが飽きた。その話と言
うか結末は文化祭にて明かされる！ …… 筈。

黒フー^{バカ}ド、奴^{バカ}については…… 解るよね？

少しグダグダになりました。ついでに2月28日の夜辺り？ に3
Bのさいこの辺りを加筆してみました。ちなみにこの中には今まで

登場した人が何人も居ますし、これから登場させるつもりの人も居ます。

3月6日、タイトルと最後の方に一文加筆。

4 B n i g h t - t i m e f a n t a s i a (前書き)

少し残酷描写かもしれません。

4 B n i g h t - t i m e f a n t a s i a

禍々しく満月が映える夜。

ぼくは一人、帰路に着いていた。

淀みなく、ぼくの足は進む。

その足が止まる。

「……………」

左手の角の方に、何か居る。

左手の角。それはぼくが行こうとしている方向だ。

……嫌な予感がする。

数秒迷い、ぼくはそのまま行く事にした。他の道からも行けない訳ではないが、今は一刻も早く家に帰りたい。

少し警戒しながら角を曲がる。

——その時ぼくは知らなかった。これがぼくの運命を変える事を。

「……おや？ なぜこんな真夜中に君は出歩いているのかね？」

そこに居たのは柔和な顔立ちに穏やかな声の警察官だった。

「えっと……今、帰る所なんです」

「おお、そうか。なら、気をつけて帰りなさい」

「あ、はい」

警察官だった事に安心し、彼の脇を通り過ぎる。その瞬間、ぼくは、

「……まあ、もっとも——君は二度と家に帰れないんだけどね？」

そう呟く警察官の言葉を聴いた。

「え？」

どういう意味かと思って振り返り、警察官を見て——ゾクリと肌

が栗立つた。

警察官もこちらを見ていた。金に光る、両目で。

その直後、警察官の服が膨張し——弾けた。露わになった体は人間の肌では無く、毛皮のよう。

「……この姿になるのも久方ぶりだな」

穏やかな声も野太くなり、顔も人間では無く、まるで、犬。

二本足で立つ犬。いや——狼。

そう、それはまるで伝説上の怪物、狼男だった。

ゴキリ、と人外と化した警察官は首を鳴らし、

「そして……人を喰うのも久しぶりだ」

そう言った。

「……？ ……っ！」

数瞬かけてぼくはその言葉の意味に気づき、身を翻し、逃げた。

「生きの良い獲物だな」

「ぐう……っ！」

瞬間、腕に激痛が走り、気が付いた時には背中を塀に打ち付けていた。真正面には男。

数秒して手を捕まれ引き戻され、左の塀に叩きつけられたと気付く。逃げようとするが、男に右肩を押さえられて、それも叶わない。

「おっと。このまま戯れても良いんだがな。……ほら、食事は早い方が良いだろ？」

口から涎を垂らしながら男は言い、

「それじゃあ——頂きます」

顎を大きく開き、自分の肩に近づけた。

「……っ！」

ぼくは覚悟を決め、左手の人差し指を、男の右目に向かって躊躇い無く、突き出した。

「グ……っ！」

迫ってくる指に気付いたのか、呻きながら男は、近づけた顔を体全体を使って、反らした。

露わになる喉。そこに向かってぼくは頭突きをかます。

「グガア……！」

涎を撒き散らしながら、より体を反らし、呻く男。

右肩を掴んでいる手の力が緩む。全身の筋肉を総動員させ、ぼくはその手から逃れた。

そして身を翻し、逃げる。

「グ……ガ、調子に、乗るなあアアアアアアア！」

後ろから上がる怒声と、凄い速さでぼくに迫る気配。

再度、全身に激痛が走り、地面に転がる。

「ぐう……」

余りの痛みに涙が滲む。

滲む視界。

迫る男。

そして不意に現れた金色。

ズガアアン、と云う音が耳に響く。

「……？」

走る激痛をこらえ、涙を拭いながら、起き上がる。

音がした方、左を見て——僕は絶句した。

塀が崩れ、その中に埋まっている、先程までぼくを襲っていた男。その目の前に居る、目に眩しい金の髪の持ち主。

男が呻く。

「蝙蝠、如きが……！」

「ならあなたは犬如きね」

男の呻き声に答える声は、夜の水のように冷たく、鋭かった。

「そしてワタシは犬畜生に用は無い。手早く——死ね」

そう言つて、金の髪の主は無造作に腕を振った。

グシャ、とたるま落としのように男の頭が吹き飛び、塀に当たつて、塀と共に砕けた。赤い血が塀を染める。

頭を無くした体は噴水のように血を吹き出しながら、前のめりに倒れる。

手を朱に染めながら、それはこちらを振り向く。

蒼い目の、黒いワンピースを着た少女。……多分、ぼくと同じ年だろう。

何かなのかまだ完全に理解出来なかったが、取り敢えずぼくは礼を言った。

「……ありがとうございます」

「礼には及ばないわ。ワタシはアナタに用があるからアイツを殺しただけ」

「用って……何の？」

ぼくがそう言っていると彼女は身を翻した。

「……着いてきなさい」

ぼくは数秒迷い、着いていく事にした。

着いた所は公園だった。当然の事ながら人影はぼく達以外、見当たらない。

公園の丁度真ん中辺りで彼女は止まった。ぼくも立ち止まる。

「自己紹介がまだだったわね。ワタシの名前はモア・レインレイテ
イア。モアって呼びなさい」

「……ユイキシング結木森和です」

「ユイキ シンワ……シンワで良いわね？」

「はい、いいですよ、……モア、さん」

「ん、ちよつときこちないのが気になるけど、まあ、良いわね。さて……前置きに入りましょうか。まず、ワタシは人じゃない。それは解るわよね？」

「はい」

「で、じゃあ何か解る？」

「吸血鬼……ですか？」

僕がそう言っていると彼女は目を細めた。

「……どうしてそう思ふのかしら？」

「先程の狼男が蝙蝠如きがとか呟いてたから……。違いましたか？」

「いえ、有ってるわ。強いて言うなら……。ワタシ達の一族は普通の吸血鬼じゃない」

「普通じゃない？」

「ええ。質問するわよ。シンワ、吸血鬼の弱点って何が有るか解る？」

「確か……。日光、大蒜、十字架、でしたっけ？」

「まあ、花丸ね。他にも色々有るんだけどあんまり関係ないし……。時間も惜しいからさっさと言うわね。ワタシはその弱点が無いの」

「……つまり、日光は浴びれて、大蒜も食べれて、十字架を見ても平気……。って事ですか？」

「yes。まあ、ワタシ個人の好みで大蒜は苦手だけど……。基本的に日光は大丈夫だし、十字架も直視出来るわ」

「……どうしてですか？ 一族って言ってたから、突然変異でも無いんですよね？」

「ええ。……昔話をしましょう。話は千年近く前にも遡る。千年前のワタシ達の先祖がふと思い付いた事。そこから始めましょう」

千年前の吸血鬼で、ワタシ達の先祖でもあるグリルド・レインレイティアは異常だった。いえ、能力は普通の吸血鬼と同じだったわ。異常だったのは——不死への渴望。そう、不死。

何故不老じゃ無いのかって？ 説明するわ。基本的に吸血鬼はある一定の外見年齢まで成長するの。

この一定が曲者なのよ。何故かと言うとね、ランダムで決まるのよ、これ。

それこそ老人で止まった人も居れば、子供で止まったままの人も居る。ワタシ？ ワタシは十六歳ぐらいで止まったわ。もうこの姿で止まって百年は経つわね。

……話を戻すわ。今言った通り、不老は無理。そればっかしは彼

もどうしようも無いと思ったようなね。変わりに願ったのが——不死。吸血鬼は基本的に死にくい。傷を負ってもすぐ再生する。その代わりとばかりに弱点が多いんだけどね。で、彼は考えた。どうすればこの弱点を消せるか。——そしてたどり着いた。呆気ない程に単純で、誰もが考え付く事を。弱点を一点に集中させれば良いって事を、ね。余りにも単純明快な答え。なんでそれが本当に実行出来たと思う？ これも簡単。——誰の追従も許さぬ程の渴望。——それがワタシ達を生み出した。

まあ、もつとも彼は完成を恐れた他の吸血鬼によって殺されたらしいわ。けど、彼の怨念だか執念だかによって、彼の息子の体にそれは確かに顕現したわ。……たった一つの弱点しか持たない吸血鬼を、ね。今ではワタシ達は他の吸血鬼達に畏怖と軽蔑の念を込めてこう呼ばれているのよ。

ノライフキング
生命無き王、とね。

「……ちょっと回りくどくなったけど要点は大体こんなモノかしらね。で、シンワ。何か質問は無い？」

「……えっと、一つの弱点って何なんですか？」

「good・良い質問ね。……グリルドは一つの弱点を——制約を設定した。一人の人間、僕に生殺与奪うせとくの権限を与えなければならないと云う弱点をね」

「……？ ……どういう事ですか」

「具体的に言っと……常に召使いに拳銃を突きつけられてるって感じかしら」

「……いつ殺す事も出来るって事ですか」

「ええ。ワタシ達を生かすも自由。殺すも自由。僕とは名ばかりの関係。……彼らに裏切られればワタシ達は死ぬ。まあ、そうならないうちに一族の大半は先に相手の精神を壊すけどね」

「……精神を」

「そう。具体的にはトラウマを作ったり、恐怖を植え付けたり、ね。そうする事によって、信頼出来る僕を作り上げるの。……さしずめ奴隷よ」

「……奴隷、ですか」

「言い方は悪いけどね。本当、そう表現するしか無いのよ。アイツらを見ていると」

「アイツら？」

「ワタシが見た僕よ」

彼女は苦苦しい顔で言う。

そして、表情を改めた。

「……さて、本題に入りましょう。薄々感づいてると思うけど。単刀直入に言うわ」

「ワタシの僕にならない？」

階段を降りると、肉の焼ける音と匂いが伝わってきた。

「……おはよう」

「あら、おはよう。早いわね。昨日は遅く帰ってきたのに。そういえば昨日はどうしてあんなに遅かったの？」

「まあ、ね」

母さんの疑問にお茶を濁して、答える。

席に座り、昨日の事を思い出す。

「——これは強制じゃないわ。嫌なら嫌と云って良い。……質問はある？」

「……主人を殺した僕はどうなるんですか？」

「……どうにもならないわ。普通の人間に戻るだけ。ただ——百年近く生きていなかったらの話だけど」

「どうしてですか」

「僕から解放される時に僕になつていた期間の分だけ年を取るの。だからワタシ達に選ばれた人間は、幸運であり、不幸なのよ」

「そんな事ばらしていいんですか？」

「いいわよ別に。……ワタシはね、信頼出来る仲間が欲しいの」

「信頼出来る……仲間」

「ええ。他の吸血鬼はワタシ達一族を忌み嫌うから仲間なんて無理だし、家族はもう何十年も会ってないわ。だから……僕でも良いから、隣に人が欲しいの」

「……」

「……まあ、後悔の無いように選んで。期限は……明日の夜12時、この公園にて。良いわね？」

「……はい」

「OK・じゃあね」

そう言つて彼女はどこかへと歩き出した。
ぼくもそれに倣う形で帰路に着く。

「……」

「どうしたの？ 黙り込んで」

「……母さん。聞きたい事があるんだ」

「あら。何かしら？」

「例えばの話。ぼくがいきなりどっか行つたどうする？」

唐突なぼくの質問に母さんは目をぱちくりさせながら暫し考え、返答した。

「いつか帰ってきますって書き置きがあれば気にしないわね」

「……そう」

確かに母さんならそうするだろう。この人とは十年近くの付き合いだから。

食卓に置かれた朝食を手早く食べ、ぼくは立ち上がった。

「あら？ どこか行くの？」

「うん」

「食器洗いは私がするから堪能してきていいわよ？」

「うん。あ、母さん」

食器を持って立ち上がり、台所へと向かおうとした母さん呼び止める。

「？ 何かしら？」

「……今までありがとう」

ぼくは万感の思いを口にする。母さんはぽかんとした表情になっていたが、数秒後、口を綻ばせ、

「これからもこの恩恵に感謝しなさい」
ウインクして、そう言った。

ふと空を見ると、林檎のように真っ赤だった。

少しの間赤い空を見上げ、それから目の前を見た。

「……ここに来るのも——久しぶりですね」

目の前に有るのは瑞舟ミスフネと書かれた墓石。

この下に——父と母は眠っている。

悠久に永久に永遠に。眠っている。

お盆の時に神主さんがやってくれたのか、雑草は無く、墓石もそんなに汚れてはいない。

柄杓に汲んだ水をかけ、線香を添え、花を置き、黙祷する。

暫し黙祷した後、墓石に背を向けた。

「それじゃあ——行ってきます」

歩き出したぼくの耳に鳥の声が響いた。

。暗闇を照らす街灯の下。そこに彼女は佇んでいた。街灯に背を預け、彼女はちらりと時計を見た。

「……」

ため息を吐き、視線を戻す。

やがて時計は12時を差した。

「……来ない、か」

再度のため息と共に言葉を吐き出し彼女は街灯から背を離し、歩き出そうとした。

「——誰が来ないんですか？」

「……っ！」

立ち去ろうとした彼女の耳にそんな声が響き——彼女は振り返った。

「……シンワ」

そこに居たのは彼だった。

「来ましたよ。約束通り」

「……なんで」

「なんで？ あなたが言ったじゃないですか。僕になりたいならここに来いって」

「なつて、くれるの……？」

「その前に質問があります」

「……質問？」

「自殺できますか？」

「……」

「答えてください」

「……出来ないわ」

「ですよね。そうでなければ辻褄があいません」

自殺できると云う事は、崖から落としたり、首を絞めたりして殺

せると云う事だ。それでは弱点が一つじゃ無くなってしまふ。不死身でもなんでもなくなってしまうじゃないか。そう森和は考えたのだ。

「でもそれがどうしたの。アナタには関係の無い事でしよう?」

「関係ありますよ。そんな人がこの世界に居る事を知ってしまったら、ぼくは一生罪の意識に苛まれる」

「お人好しなのね」

「唯の自己満足です」

「ワタシは素手で人の首を吹き飛ばしたんだけど?」

「可愛いじゃ無いですか。家を吹き飛ばす狼やマッチョな男よりは」

「……変わってるわね」

「変態なだけですよ」

「それでも良いわ。……アナタをワタシの僕にしましょう」

「喜んで。我が主人^{あるじ}」

彼女の手と彼の手が触れる。

その夜、結木森和は姿を消した。

彼の家の食卓には「いつか帰ります」と云った書き置きが置いて有ったそうである。

同日朝6時。日向市南のとあるビルの屋上。そこに二人は居た。

「……行かないんですか?」

「うん。まだこの町は十分に見てないしね。寒くなり始めたら出発しようと思ってる」

「そうですか。あれ? じゃあ昨日は何してたんです?」

「……あの犬畜生の死骸を片付けたりしたり、どこか寝られる場所を探したりしてたわ」

「それは大変でしたね。寝られる場所ですか。……ぼくも寝れますよね?」

「無論よ。ワタシは僕を無いがしろにはしないわ」

「流石、我が主人」

「……からかわないで。……さ、いくわよ」
「了解」

ビルの屋上から飛び降りる影。

目覚め始める町に、2人は姿を溶かした。

「あ、モアってアイスクリームが好きだって言っていましたよね。ぼく、美味しいアイスクリーム屋知ってますよ。行きますか？」

「……後で行きましょう」

「声が震えてますよ。我慢してるんですか？」

「そうよ。だってまだこんな時間よ！？ やってる訳ないじゃない！」

「あ、そうですね」

4 B night - time fantasia (後書き)

登場人物紹介

ユイキシワ
結木森和

男

日向高校一年生もしくは家出少年。

作中で普通の高校生から人外もどきにクラスチェンジ。

モア・レインレイティア

女

吸血鬼。悪く言うところ。

大好物はアイスクリーム。不死身さに置いては死神ですら殺せない
為最強。が、どうやら彼女を滅する事が出来る存在が2つあるら
しい……？

ユイキリンナ
結木林奈

女

専業主婦

この人誰？と思った人。森和の現母です。森和が居なくなつた為、
毎夜、彼の自慢話を親友にしているらしい。

ミズフネマサカド ミズフネマユ
瑞舟将門&瑞舟真由

男&女

工事長&専業主婦

森和の両親。故人。

少々遅れた上に今回は説明ばかりです。……はあ。

気を取り直して次回は十話記念&少し遅れましたが作者デビュー1ヶ月を兼ねて、取り敢えず文化祭の話を日常、非日常の登場人物を交えて書こうと思います。……主役は柊木で良いか。何人がこの駄作を読んでいるかは知りませんが楽しみにしていてください！じゃ、次の話までさようなら！

……あ。たぬきつのやつもそろそろ最新、したいなあ。

次回タイトル「5C パーティー」準備編」

5CⅡ? パーティー 文化祭、開幕前 (前書き)

少々遅くなりました。

祝、十話記念つ!&PV10000&ユニーク5000つ!来てくれた
全ての人に感謝を!

5CⅡ？ パーティー 文化祭、開幕前

「せ、ん、ぱ、い！ 先輩の所は喫茶店をやるんですよね？ ならなら私が看板娘になってあげますよ？ 勿論純潔は先輩にあげますよ？ キー！ 言っちゃった！ こんな公衆の面前で！ もう、先輩の所為ですからね？ 責任取って私と結婚してください！」

「却下だ。そして出てけ」

「速答！？ もう、つれないですね、先輩！ あ、解りました！ 公衆の面前だから照れてるんですね？ じゃ、後でちゃんとデレてくださいよ？」

「再度却下だ。第一、華葵。ハナアオイ お前らのクラスはお化け屋敷をやるんだろぅが」

「むっふっふっふっふ。私のクラスを楯に逃げる気ですね？ 残念ながらそれについては無問題！ 担任の呉崎先生クレサキに先程先輩が如何に素晴らしいかを一時間トークモードで語ったら、二十分ぐらいで何故か遠い目と言つか死んだ魚の目みたい目つきになりながら「もういいよ……。お前はお化け屋敷の役から外させるからその先輩の所に行つて帰ってくるな」と言われました！ 何故でしょうか？ 先輩の魅力を語りすぎたせいでしょうか？ ……ライバルが増えたらどうしましょう！」

それでいいのか？ 担任。後華葵。俺は男を恋愛対象に見ては居ない。

「と言うわけで私、華葵架恋は！ハナアオイ カレン 全力で先輩のサポートをする所存であります！」

「じゃあ全力で帰れ」

「全力で拒否します！」

「……その光村の手伝いでもしてろ。俺は今から科学室に籠もっているハオルドに差し入れを持ってくんでな」

「はい！先輩の為なら例え火の中水の中！宇宙の中だって泳いで見せます！」

「あっそ」

「スルー！？先輩、もう少し構ってくださいよ！？兎は寂しいと死んじゃうんですよ？ウルウル」

なんかほざいてる華葵を無視し、俺は教室を出た。……ちなみに言っておくが華葵。その話は迷信だ。

さてこの学校の文化祭は少し変わっている。各クラス、何をやるかを学校が決めているのだ。二年C組は喫茶店。一年B組はお化け屋敷と言う風に。

何故そんな風に決められているかと言うと、三年前のとあるクラスがやらかした後遺症らしい。

……閑話休題。

何をやるか決められていると言っても、喫茶店ならメイド喫茶でも何でも良いらしい。あくまでも決められているのは本筋と言う事か。

ちなみに俺達がやろうしている喫茶店はコスプレ喫茶らしい。まあ、要は好きな服装を披露すれば良いのだろう。

そんな事を考えている内に科学室に着いた。

「おい、ハロルド。差し入れ持ってきたぞ……ってなんだこれ」

科学室のドアを開けるとなんかドラム缶の小型版みたいな物がツンツン足をつついてきた。

科学室備え付けのテーブルで何かを弄っていたハロルドが顔を上げてこっちを見る。

「ああそれ力。それは喫茶店の皿運びにしようとしているロボット

ダ

「ロボット？　これが？」

「ああ。しかしやはり、僕はロボットの設計は苦手のようダ。……姉上はやはり凄イ」

「姉上？　お前姉いるのか？」

「ああ。ロボット工学の天才と呼ばれていル。……そう言えば今日この町に来るとか言っていたナ」

「ふうん」

「デ、何の用ダ？」

「ああ。差し入れ」

「そこに置いてくれ」

「ああ」

近くの机に差し入れを置く。

「食べ終わったら感想をこの紙に記入してくれ」

「……感想？　何でダ」

「それ試作品なんだよ。んで、クラスの連中に味見させてるんだ」
「なるほど。……これも試作品力？」

ハロルドが指差したのは色とりどりのサンドイッチやパフェの中でも異彩を放っている虹色の飲み物っぽい物体

「ああ。正直疑わしいけどな。門川カドカワが作りやがった」

「門川力」

門川カドカワ創路ソウジ。迷惑料理製造者と呼ばれる変人。何か何かと独創的と言

うか毒性的な料理を作る奴。ちなみに俺も一回奴の料理を食ったがその時は一瞬、川の対岸でこっちを見て尻尾を振っているタマ♂（ダックスフンド）。享年12歳）が見えた。

「誰ダ。アイツを料理班に入れた奴ハ」

「マツダイラ松平の奴だ」

「アイツが元凶力……」

松平門人マツダイラ カトヒト。常常から「常にスリルを！　常にデンジャラスを！」とか言っている変態。

「……はア。まあ一口だけなら大丈夫だろう」

そう言ってハロルドはその飲み物を口にした。……甘いハロルド。俺はその一口でダウンしかけたんだぞ。

「！」

一口飲んだ途端、ハロルドは顔色を変えた。

手が小刻みに震え、ガシャンと飲み物が入ったコップを落とす。

そのまま吐き出すのかと思ったが顔色を百面相に変えただけで吐き出しはしなかった。……チツ。

「ゲホツゲホツ。……訂正しよう。一口でも死ねル……。と言うか料理には絶対出すナ……。！」

「ああ。他の奴らもそう言ってた」

「解っててやったの力……。！」

「そうだが？」

しれっと俺は言い、ハロルドが落としたグラスを拾おうとして、

「なあ。お前の作ったロボットって防水加工してある？」

ハロルドに質問した。

「ア？ してないガ」

「……んじゃあコレ、どうする？」

そう言いながら俺はハロルドの足下を指差した。

「コレ？」

ハロルドは足下を見、目を見開き、呟いた。

「……確かにどうするカ」

そこにあつたのはハロルドが落としたグラスと、その中にあつた液体。そしてその液体をもろに被った皿運びのロボット。

「多分、故障していると思うんだガ……」

そう言いながらハロルドは屈み、ロボットを持ち上げようとして、バチリッ。

「！」

ロボットの周りに電気が走ったのを見て、慌てて手を引っ込めた。その直後、今まで微動だにしなかったロボットがけたたましい音

を響かせ、走り出した。

「っ、まっ……！」

引き戻そうとしたが間に合わず、ロボットはそのまま俺が開けっ放しにしたドアを通り、廊下に飛び出した。

そのまま向かいの壁にぶつかるかと思ったのだがロボットは見事なカーブで横に逸れた。……っておい。

「追いかけるぞ！」

「ああ！」

脳内の疑問やツツコミは一先ず置き、俺とハロルドは廊下を飛び出した。

ギギッ

とロボットが弧を書きながら曲がり、階段を

ガッガッガッ

と降りた。

それを追いかける俺とハロルド。

「チッ、ハロルド！ お前、一体あのロボットにどんな機能付けた

！」

「前方と後方に設置したセンサート、とてつもなく丈夫な車輪、ダ

！」

「クソッ！ やたらとハイスペックな物付けやがって！」

「ああ！ 僕も今、後悔してル！」

そんな事を怒鳴り交わしながら、ロボットに追いつこうとする。

が、追いつく事は出来ず、俺達は一階に着いた。

「……このまま外に出られたら不味いぞ」

「ああ」

ロボットはそのまま廊下を進む。

廊下には少しの人が見えた。定期買い出しの帰りだろう。

ロボットが昇降口に達した。

前には黒い壁——否、学生服の生徒。それをロボットは壁と判断

したのか右に曲がった。右——つまり出口。

「チッ」

ジャリジャリと音を立て、校庭に出るロボット。

俺達は息を整えながら、靴箱に寄り、素早く上靴から靴に履き替える。

「おい、ハロルド！　どうやってロボットを止めるんだ！？」

「下にある緊急用の停止スイッチ、もしくは思いっきり衝撃を加える力、または膨大な電撃か水を浴びせる力。確実なのこの4つしか無い！」

下のスイッチを止めるのは無理。と言うか何故そこに設置した。

電撃も無理。水は調達する暇が無い。残るは衝撃か。

どっちにしてもまずはロボットに追いつかなければ。

靴を履き、校庭に出る。タイヤが故にかロボットの歩みは遅い。

走り出す。数秒でロボットの背後を取った。

そのままの勢いで迫り、ロボットを蹴ろうとした瞬間、突然ロボットが左に曲がった。

車は急に止まらない。人間も急には止まらない。

俺は数メートル前進して、ようやく止まった。

左を向く。ロボットは真っ直ぐ校門に向かっている。

左を見る。ハロルドはまだこっちに向かって走っている。追いつく確率はゼロ。

後は俺だが日頃何の運動もしていない人間が追いつけるとは思えない。……息も絶え絶えだし。

結果。ロボットは何の障害も無く校門を通り過ぎた。

。

彼女が校門に来た時ロボットは校門を通り過ぎようとしていた。近づいてくる小型のドラム缶を見て彼女は呟く。

「何だあれは」

彼女の呟きに傍らのフードを被った者が答える。

「……ロボットノ様デス。排除シマスカ？」

「ああそうしてくれただし壊すな停止させろ」

「了解」

フードが腕を前に翳す。バチリバチリと腕から音が鳴った。

「エレクトリック、ウィップ」

翳された手から勢い良く、紐のような物が飛び出る。

紐はロボットに巻きついた。その次の瞬間、紐を伝って電気が流れ——ロボットの内部を破壊した。

プスプスと煙を上げるロボットを見ながら彼女は呟く。

「こんな機械いや機能を作る奴は……ハロルド以外居ないな全くアイツは」

彼女——ミハエル・ディスクレイスは。

俺とハロルドが校門に着いた時にはロボットは機能を停止させていた。

遠目から見た所、金髪の女の傍らに居るフードの奴が腕からなんか光る紐を出して停止させた様だが……。

俺が様々な疑問に囚われていると、ハロルドが声を上げた。

「……姉上？」

姉上？　って事はこの女、先程言っていたハロルドの姉……って事か？

さらなる疑問に絡み囚われ悩む俺を余所に女は言った。

「ハロルドお前がこのロボットを作ったのは」

「ああ。皿運びにするつもりだったんだが……。見ての通り暴走した」

「何故だお前は暴走には人一倍気をつけていた筈だ」

区切り無し、句読点無しで一息に喋る女。

「世にもおかしな液体をかけてしまったんだ」

「成る程解った」

納得するのか？　それで。

心の中で俺は突っ込む。

「……でハロルドこれを持って帰っていいか？」

「いいガ、何に使うんだ？」

「いや先日ロボットを作ってみたんだが昨日事故で脚部がぶっ壊れたんだこれを組み込めば平面だけだが移動する事が出来るようになる」

「解った。但し条件が有ル」

「……ほう条件とな」

女の目つきが鋭くなる。

「何、簡単な事ダ。完成させたロボットを僕達のクラスで使わせて欲しい」

「……お前らは喫茶店をやるんだったか」

「ああ」

女はしばし思案していたが、やがて頷いた。

「解った1日だけいいだろうこれ以上は駄目だ上の堅物が目をつけるからな」

「ああ。十分ダ」

交渉は成立した様だ。

女はロボットを持ち上げ小脇に抱えた。

「じゃあ私はこれからこの学校の校長に会いに行くから」

そう言つて女は歩き出す。影の様にフードもそれを追った。

遠ざかるその姿をただ訳が解らずばうつと見る俺にハロルドは言つた。

「さテ、僕は科学室に戻る。お前の差し入れが有るからナ。まア、試食し終えたら教室に行くヨ」

「あ、ああ。そうしてくれ。……じゃ、俺は教室に戻る」

「ああ」

。文化祭開幕まで後4日。とある喫茶店のマスターと客の会話。

「文化祭？」

「ああ。後4日で始まるそうだ」

相も変わらず頭上には夜想曲が流れる店内にて。カウンターに座る彼女はコーヒーを啜った。

「文化祭……ねえ。まあその高校の知り合いが居ない俺にやあ何の関係もねえ話だけだな」

「ほお。何の関係も無いとな？」

「何だよ。含みの有る言い方しやがって」

彼がそう言うのと、彼女はコップを机に置き、カウンターの中に居る彼に向かって身を乗り出した。

傍で見ているその喫茶店の従業員はその光景が気になるようで、ちらりちらりと彼と彼女を見ている。

「な、何だよ」

「これは私の妹から聞いたのだから。二年C組は喫茶店をやるらしいぞ」

「……何？」

ピクリと彼の眉が片方上がる。

「喫茶店……か。つい事はコーヒーを出すって事だよな……？」

「ああ」

「……フツ」

バン！と彼はカウンターを思いっきり叩いた。従業員がびっくりと肩を竦ませる。

「つよし！ んなら行くしかねえ！ ふふふ、見てるよインスタントコーヒーを飲んでいる高校生のクソガキ共が！ 喫茶店ノクターンのマスターで有るこの俺が、真のコーヒーとはどんな物かとくと

教えてやるぜ！」

「……お前はたかが学園祭の喫茶店に本職のコーヒーを淹れるのか？　と言つか乗っ取る気か」

「まあな！　よっし、月架^{ゲツカ}！　4日後は休業だ！」

「は、はい！？」

従業員——月架は戸惑ったように声を上げた。彼はそれを了解の意と見做したようだ。

「繰り返す！　喫茶店^{ミス}ノクターンは4日後の文化祭の日は臨時休業！　いいな？　美鈴！」

「なんでオレにも言う」

「ノリだ！」

「……そうかよ」

「しかし美鈴。お前もそろそろその男っぽい口調は辞めろよ。婚期逃すぜ？」

「余計な世話だ。伴侶ぐらい自分で見つける」

「……ならいいんだけどな」

。

彼と彼女がそんな会話をしている喫茶店。その片隅に彼らは居た。

「ねえねえげんろー」

「文化祭ってなに？」

「……あー。まあ、学生が屋台とかをやる祭りだな」

「お祭り？」

「お祭り？」

祭りと聞いた途端に鏡のようにそっくりな子供達は、目を輝かせた。

「ボク行きたい！」

「ボクもボクも！」

合唱するように言う子供達。

それに従業員の服を着た男は返答する。

「……先程の話だとこの喫茶店は休みらしい。金もここでアルバイトをしたおかげで有るには有るし……まあ、休憩するのもいいだろう」

「わーい林檎飴」

「わーい綿あめ」

「……それが売ってるとは限らないぞ」

文化祭開幕まで後3日。とある住宅で。

「なー、兄ちゃん。聞きたい事があるんだけどー」

マットにゴロゴロ寝転がりながら縁は言った。^{ヨスガ}

「何？」

テーブル越しに、ゴロゴロ転がる縁を蹴ろうどうか迷いながらも聞く。

「兄ちゃんのクラスってさ。今年何すんの？ 去年は射的だったよね」

「あー。今年は喫茶店だよ」

「喫茶店ねえー」

ゴロゴロゴロゴロ転がりながら多くの言葉を繰り返す縁。

本当に蹴ろうかと迷っていると、クイクイツと袖を引かれた。

「？」

何かと思ってそっちを見ると、決まり無さ気な顔つきのメリーが居た。

「……ぶ、文化祭とはなんだ？」

「むさ苦しい野郎共が裸で踊るむさ苦しい祭りの事だぜ！」

「縁、二酸化炭素を吐くように嘘を吐くな」

近くにあったサルのぬいぐるみを縁に向かって投げつける。ぬいぐるみは吸い込まれるように縁の顔面に当たり、縁は「ゲフオ！」

と奇声を上げながらのた打ち回った。そんな妹を無視し、ぼくはメリーに言う。

「文化祭って言うのは――まあ、ぼくの学校のお祭りかな」

「祭り……？ ハロウィンみたいな物か？」

「あー。まあ、近いかな？」

「で、兄ちゃんはそので喫茶店をやると」

のた打ち回るのをやめ、会話に加わる縁。

「ふむ……行ってみたいな。お主が働いている所も見てみたいし……」

……

「ぼくはコックだけだね。まあ、来たいんなら来てもいいよ」

「夫の仕事を見るのも妻の役目。是非行かせて貰おう」

「……」

ぼくは黙り込む。……黙り込む以外にどうすればいい？

混乱しているぼくに縁が質問を投げかけた。

「そーいや、兄貴は参加しないのか？」

兄貴。モトムネ ソラ百棟蒼空。ぼくの兄さんで有り、無論妹の縁にとっても兄で有る。

「ぼくも昨夜聞いたけど参加しないらしいよ。なんだか用事が有るらしくて」

「ふーん。何の用事だろ？」

「さあ？ それは聞いてなかったから解らない。まあ、休日は取ったとか言ってたから仕事じゃ無いとは思うけど」

○

文化祭開幕まで後2日。とある路上にて。

「ヘイ、ハニー。知ってるかい？」

「知ってるわよ。文化祭の事でしょ？」

「oh！ まさか知っていると！ これがホントの以心伝心か！
あいによるテレパシー
やはりハニー、君以外には僕の伴侶は考えられない！ 後世まで

語られる程の結婚生活を送るべし！」

「何でもう結婚した事になってんのよ。殴るわよ」

「もうすでに殴ってるよ、ハニー……」

「……しかし日向高校文化祭の日は休校、ねえ。うちの校長は何を考えてんだか」

「日向高校の素晴らしさを見させようとしてるんじゃないかな」。

ほら、わたしたちの通り名も日向高校内のあだ名を真似た物だから」

「だから日向高校文化祭の日は休み、ね。まったく学業を何だと思ってるのかしら」

「それには同感だけど、試験一週間前は大丈夫大丈夫とか言ってる遊びほけてたのに、試験前夜になった途端に半泣きになってわたしに勉強教えてとか言った姫が言う台詞じゃないよね？」

「うっ……。そ、それはそれ、今は今！ もう昔の話だし！」

「なんて現実的な言葉なんだハニー！ 僕はまた惚れ直したよ！ だからさばくとうる！」

「黙りなさい。蹴るわよ」

「す、既に蹴ってるよハニー……」

「で？ 姫とにっしーはその日どうするの？ 無論わたしは行くよ？」

「そうね……。行ってみようかしら。どうせその日は何もする事が無いし」

「僕はハニーが行くなら何処にでも行くよ！ 僕とハニーは赤い糸で結ばれて、待って殴らないで蹴らないで！ 言葉攻めなら受けふばえら！」

「頭突きなら良いでしょ？」

「……そ、それもアウ、ト……」
ガクッ。

○

文化祭開幕前夜。とあるビルの屋上にて。

「……ねえ、シンワ。聞きたい事が有るんだけど」

「なんですか？」

「文化祭って何かしら？」

「祭りか屋台の集合体か何かです」

「……要は祭りって事ね」

「そうとも言います。もしかして行きたいんですか？」

「勿論よ。そろそろこの街を出なくちゃいけないからね」

「いいですけど……一人で行ってくださいよ」

「あらどうして？」

「ぼくは今行方不明者扱いです」

「それで？」

「そして文化祭をやるその高校は、ぼくが通っていた所です」

「それで？」

「ばれたら騒ぎになります」

「それで？」

「……どうしても行きたいんですか？」

「うん」

「……仕方有りませんね。解りました。フードやサングラスなどで顔を隠せばなんとかなるでしょう。ただしもし、ばれたら、フォロ―やなにやらをお願いします」

「賛成りょーかい合点承知。楽しみだな。アイスクリームとか売ってるかしら？」

「……出来るだけ目立たないで下さいよ」

……様々な人間や様々な思いを乗せ——日向高校文化祭は開幕する。

5CⅡ? パーティー 文化祭、開幕前 (後書き)

今回の登場人物紹介は無し。

さて、とうとう日向高校文化祭が始まるうとしています。登場した人もしていない人もみんな集合。果たしてどうなるのやら。

次回予告

開幕した文化祭。そこに殺し屋やら破壊者やら死神やら吸血鬼やら様々な奴らが登場!

文化祭は果たしてどうなるのか。

the next title

「カーニバル 文化祭、開幕」

お楽しみにしてて下さい。

5CⅡ? カーニバル 文化祭、開幕 (前書き)

今回はやり方を変えて見ました。

いつも主人公らしき人物が必ず居るのですが、今回は居ないと云うことで、とりあえず、今回は。。。視点という形になります。あ、三人称はいつも通りです。

5CⅡ? カーニバル 文化祭、開幕

ヒイラギ
柊木視点

「せ〜ん〜ぱ〜い〜」 今日から文化祭ですね! 先輩とわたしの愛の力で繁盛させましようって暗っ!? なんか先輩からネガティブフィールドと言うかマイナスオーラと言うかまあなんだか暗い雰囲気がつ!」

文化祭、当日。

ガラリとそうするのが当然のようにドアを開け、入ってきた華葵。ハナアオイその華葵が言った言葉の通り、俺は教室の隅に体育座りし、どんよりオーラを出していた。

「せ、先輩〜? どうしたんですか〜? お腹でも痛いんですか? 頭でも痛いんですか? わたしの愛が足りないんですね? そうですか、解りました、ならば先輩のためこのわたしが先輩にラブパワ〜を送りましよう、って何ですか!? 何で先輩が発するオーラがより暗くなるんですか!?!」

くだらない言葉を吐く華葵。俺はため息を吐き、体育座りを止め、立ち上がった。

「……たしか開会式は8時だったか」

「いや、その前に暗かった理由を教えてくださいよ!?!」

無視。そのまま入り口に向かう。

廊下を出たら右から声がした。

「あ、あの……すいませんっす」

右を見る。

黒髪の、平凡よりやや整った顔立ちの少年が居た。

胸ポケットに縫いつけられた紋章の赤色からして一年生だろう。

因みにこの日向高校では一年生の紋章の色は赤。二年生は青。三年生は緑だ。

「誰だ?」

訝しげに俺は尋ねる。彼はそれに答えた。

「えっと、おれは一年B組の八崎^{ヤッザキ}って言います。華葵と一緒に一年B組代表手伝いとして来ました」

「代表手伝いか」

代表手伝い。まあ簡単に言うくとトレードだ。詳しく簡潔に言うともまず手伝って欲しいと一年B組が何人かの人手を頼む。その代償としてこちらは何人かの人手を一年B組に要求する。こんな所だ。

今回、一年B組が頼んだのは二人。だからこっちは華葵と八崎の二人と言う訳か。

「はい、そうっす。……先輩、ごめんなさい」

「……何で謝る？」

「いえ、おれ華葵の制御頼まれたんですが……この辺りに来た途端、いきなり華葵が「先輩エネルギー補給！」とか言っ走っていつちやっただすよ。迷惑かけてないっすか？」

「いや、来た途端に騒いだけだった」

「あー、そうっすか」

ほっとしたような顔なる八崎。

「そんな事より、早く体育館に行こう。開会式が始まる」

「あ、そうっすね。……あれ？ 華葵はどうしたんすか？」

「アイツか」

八崎の問いに俺は今し方出た教室を振り返る。

耳をそばだてると、女子の叫び声が聞こえた。多分華葵だろう。叫んでいるだけで教室から出てこないところを見ると……さてはコスプレ好きの女子に捕まったな。

当分は出てこれないだろうと半ば確信し、俺は八崎の方を見る。

「ま、アイツの事はほっというて、さっさと体育館に行きましょう」

「……？ はあ」

怪訝そうに八崎は相槌を打った。

（八崎視点）

変わった人だなあ。

それが柊木先輩を見たおれの感想だった。

普通あんな可愛い女の子に好意を示されたら喜ぶよなあ。おれだつたらそうする。いや男だったら、その、ゲイだとかそう言う人以外は例外無く喜ぶと思うんだけど。……柊木先輩は違うよなあ？ 聞いてみよう。

先を行く先輩に声をかける。

「……先輩、聞きたい事が有るんすけど」

「……何だ？」

先輩がおれを振り返る。

「えっと、先輩は華葵の事、どう思ってるんですか？」

先輩はしばらく沈黙したあと口を開いた。

「——……俺は、」

発されようとする言葉。

生み出されようとする答え

おれはそれを聞こうとした。

けれど。

この答えは彼女の闖入によって遮られる。

「んには？ そこにいるのは尊敬すべき柊木先輩とうちのクラスの京くんじゃないかにゃ？」

突然前方から声が聞こえた。

後ろにいるおれの方を向いていた先輩は振り返り、そいつを見る。

それよりも早く、おれはそいつを見た。

猫を彷彿させる喋り方をするアーモンド形の目の少女。

「……根古御坂」

赤い紋章を付けた少女の名字をおれは言う。

「……」

柊木先輩はどう反応すればいいか解らないようだ。

一年B組の根古御坂猫美。誕生日は2月22日。常にデフォルト

で猫の絵が書かれた物を持っている、どれだけ猫好きで猫っぽいんだよと突っ込みたくなる奴だ。

「おい、根古御坂。柊木先輩が困っているだろうが」

根古御坂の隣にいる金髪ツンツン頭の背の低い男、クガミケン 狗神健が根古御坂に注意する。

「うつさいにや、いぬいぬ。犬は大人しく投げられた骨でも拾うてるにや。あ、丁度良い所に骨が。それ、取ってこい」

根古御坂はスカートのポケットから骨を取り出し開け放たれた窓の外にぶん投げた。

「ワン！ ってふざけんな！ 思わず乗っちゃまったじゃねえか！」

「ほにやほにや、怒らない。頭撫でてあげるかにや」

「ワンワン、ってだからふざけんな！ オレは犬じゃねえって言うてるだろうが！」

「……お前ら誰だ？」

ようやく先輩が呆れたような声を出した。

その問いにびびっと根古御坂が反応する。

「はいはい！ わたくしは一年B組の根古御坂猫美ですっ！ よろしくねっ」

「……星マーク付けてんじゃねーよ。オレの名は狗神健。よろしくつてうおわっ！？」

言葉の途中で狗神は叫び声をあげた。理由は解る。おれの後ろから足音と声が轟いてきたから。

「せ、ん、ぱ、いつ！ 生涯の伴侶であるわたしを何故置いてくんですかー！」

……華葵だ。

「ちっ」

柊木先輩は舌打ちをし、走り出す。

先輩が階段の方を曲がって二秒後、華葵がおれの横を通り過ぎた。そして数秒後。先輩は捕まったらしく、階段の方に華葵と先輩の声が響き渡った。

おれはため息を吐く。

根古御坂はにやはと笑った。

狗神は階段の方を呆氣に取られた表情で見ている。

やがて、おれはため息を吐くのを止め、

根古御坂は笑うのを止め、

狗神は表情を改め、

開会式に出るために、体育館に向けて歩き始めた。

〱 柊木視点 〱

「……で？ 華葵。その格好は何だ」

開会式を終えて教室に戻ったおれは、まず、開会式前から訪ねたかった事を華葵に聞く。

「えゝ？ 解らないんですか？ コスプレですよゝ」

「それは解る。おれが聞きたいのは何故そんな格好だと云う事だ。」

華葵はメイドのような格好をしていた。

華葵がにこりと笑う。

「おもてなしするにはこれが一番だからですよゝ 先輩御主人様

」

「……はあ」

「ちょ、その反応は何ですか先輩！？ まるで興味なし的な態度ですが！？」

「興味ないからに決まってるだろうが。……そっぴやハロルドが居ないな。どこ行った？」

ギャーギャー騒ぐ華葵を無視し、近くのクラスメイトに尋ねる。

「ハロルドは遅れてくるらしいぜ？ 先程、ハナミツキ華美月先生がそう言った」

……華美月か。あれでも担任だからな。信じる事にしよう。

そう自分を納得させ、俺はなんか手をわきわきさせている女子集団に気が付いた。

な、なんだ？

俺の疑問を感じ取ったのか、先頭にいるリーダーらしき女が答えるように言った。

「時間が無いから手早く行くわよ。皆の者、かれ〜！」

やけに芝居じみた台詞で彼女がそう合図した瞬間、彼女らは前に出て、俺達の横を目にも止まらない速さで通り過ぎた。

「うわっ！？」

気が付くと俺の服装は制服では無くなっていた。

「なんだ……これ。……タキシードか？」

自分が纏っている服を見て俺は呟く。周囲を見回すと他のクラスメイトも服装が変わっていた。スーツに作業服、ピンク色の服にエプロン、警察官、和服、ナース、ドクター、猫耳、甚平、果ては魔女っ子っぽい服装などe t c .

しかし何故こんな格好に？ 後、学生服はどこ行った？

その疑問を感じ取ったのか、華葵が答える。

「えっと、なんかあの人達デザイナーを目指しているらしいんですけど、紆余曲折あってあんな芸当が出来るようになったらしいです非常に気になる経歴だな。

内心でそう突っ込みながら俺は質問を変える。

「……で？ 学生服はどこ行った？」

「え、えっと、先程私もそれを聞いたんですが……文化祭が終わるまで返さないそうです」

「……は？」

俺はしばし固まり、頭を振る。

「なんだそりゃ。もしかしてこの格好で明日も通えって事か？」

「もしかしくなくてもそうよ」

「うおわっ！？」

いきなり隣から声がしたので俺はびっくりと体を震わせながら隣を見た。

隣に居たのは、忍者もどき集団のリーダー格っぽい奴だった。

心臓を落ち着かせながら俺は言う。

「もしかしくてもそうって……正気か？華美月にバレたらただじや済まされないぞ？」

二年担任の華美月はいつもはダルダルしているがやる時はやるのだ。これがバレたらこっぴどく怒るだろう。……怒るよな？いや、あの性格からして喜ぶような気がする。

俺が華美月の性格を分析していると、

「大丈夫よ。すでに先生の許可は取ってある」

自信満々にリーダー格の女は言った。

俺はせめてもの抵抗として皮肉を言った。

「……用意周到だな。是非ともそれを喫茶店に活かしてくれよ」

「誉めても何も出ないわよ」

……皮肉は通じなかったようだ。

ため息を吐いているとガラリと戸が開いた。

「すまない。少し遅れタ」

戸を開けたのはハロルドだった。

「……遅かったな。何かあったのか？」

「いや、ただ姉上からこれを受け取るのに時間がかかってナ」

「これ？」

「この事だ」

そう言っただけでハロルドは右手に持っている車輪が付いた旅行バックを掲げて見せた。

「なんだそのバック。旅行にでも行くのか？」

「まさか。中にロボットが入ってるんだ」

「ロボット？ ああ、もしかして」

俺は昨日、ハロルドとハロルドの姉とか云う奴が交わした言葉を思い出した。

「ご明察の通りダ。これにはロボットが入っている。正確にはロボットのパーツだがナ」

「パーツ？ まさかここで組み立てるとか言うなよ」

「それが言つのサ」

その言葉と同時にハロルドはしゃがみこみ、バックを開け中から肌色の物体を出した。

「今回姉上が作ったのは簡単に組み立てられ、簡単に持ち運び出来る物ダ」

ポケットからドライバーを取り出しカチャカチャと音を立てさせながらハロルドが説明する。

「その代わり知能は無くなり、耐久性も大幅に下がっている様だが……」

そう言つてポケットから今度は電池つぼいのを取り出した。

……俺的にはそんな事よりもお前のポケットの中がどうなっているかを知りたいんだが。

電池つぼいのを丸い球体に入れ、構築は進む。

数分後、人の形をした物が出来上がった。

足は車輪だが、それをドレスのように鉄板が覆い隠している。

頭は先程、電池つぼいのを入れた球体。

その最上には白い帽子が乗っかっていて、それによって目元は覆い隠されている。

……なるほど。遠目から見れば人間に見えなくも無い。

「これ、どうやって動くんダ？」

「動かし方は簡単ダ。まず、この赤いランプ」

そう言つてハロルドはバックから赤い物を取り出す。

「これを押せばロボットはそれを目印に進ム。僕達の喫茶店は注文をファーストフード店形式にしているからナ。ロボットも活用できるだろウ？」

「ああ、まあな。戻す時はどうするんだ」

「戻す時は……こノ、」

青い物をバックから出す。

「青いランプを押す。そうすればロボットは戻ってくる筈ダ」

……なるほど。よく出来ているようだ。

「何点が質問。いいか？」

「ああ。良いゾ」

「まず、もし目印とロボットの間に物とか有ったらそのまま轢いてしまっんじゃないか？」

「それについては心配無用ダ。前方だけだが、センサーが付いている」

なるほど。

「次の質問。喋れるのか？」

「喋れない。ガ、口の部分にカセットレコーダーが付いていて、赤いランプの所に着いた時に再生するように設定してある」

「……最後の質問。故障、しないよな？」

そう聞くとハロルドは得意気な表情を見せた。

「当然ダ。このハロルド、同じ過ちは二度も繰り返さない」

「……解った。信じよう」

少々不安だが仕方無い。時間もヤバいし、最終確認もしなければならぬから。

「おい、えーっとアンタ名前は？」

忍者擬き集団のリーダー格に言う。

「栗栖（クルス）よ」

「栗栖か。よし、栗栖！ ハロルドになんか着せる！」

「是非とも喜んで！」

そう言って動く栗栖。一瞬にしてハロルドの格好が変わる。

白衣から——怪獣の着ぐるみに。

「……何故に怪獣の着ぐるみ？」

「手持ちにこれしかなかったのよ」

手持ちって……。というかどっから服とか着ぐるみとか出してきたんだろうか。

服は折り畳めるけど着ぐるみは明らかに無理だよな？

しばらく俺は考え——一つの結論にたどり着いた。

まあ良いか。手品って事で。

つまり思考放棄。

……さて。そろそろ、始めなければな。

ハロルドが背後でなんか言っているが無視。

俺達（二年C組全員＋2人）は喫茶店を開店させるため、動き出した。

——AM9時00分。日向高校文化祭の開幕を告げる鐘が鳴り響いた。

AM9時01分

日向高校校門前。

。

一気に騒がしくなる日向高校。

その校門。喧騒の中で彼は呟いた。

「……ふむ。外は晴天、雲一つ無い。……が」

黒い帽子。黒い服。黒い手袋。黒いズボン。黒い靴。黒い髪。肌の色以外は全て黒の青年。

「雰囲気は曇天。はてさてこれはどういう事だろう」

顔を俯かせぶつぶつと何らかの推測を呟く青年。怪しいことこの上ない。

やがて何らかの結論に達したのか顔を上げた。

「……まあ何か起こった所で私は関われない、か。……だがもしも、運命が私の友人や見知った人間に降りかかるのなら——」

呟きながら歩き始める青年。

「その時は不肖ながらこの詐欺師。及ばずながら手助けをしよう」

一つの言葉を残して。

A M 9 時 0 5 分

日向高校校庭内。

コガネ
琥金視点

「むうう。むうう。むううううううっ！」

琥金はこれでもかというぐらい唸るです。

何故唸っているかと云うと、それは単純です。

「……ここはどこですかっ！」

道に迷ったからです。

「むうう。むうう。むいー！」

意味の無いうなり声をたてながら琥金は周囲を見回すです。

人々人々、人だらけです。

これを琥金が知っている言葉で言つと……人がゴミのようだ？

……むう？何か違うような気がしますです。

「お姉ちゃんには内緒で出て来たけど……ホントどうすればいいのですかっ！」

こ、こういう時は確かおばあちゃんの言伝……否、秘伝が役にたちそうです。

行きますよ秘伝っ！

人の顔が力ボチャのように見えると思い込む術っ！

って琥金は力ボチャが嫌いですっ！？人を力ボチャに見るとい

う事は……。つまり人に頼るなとっ！なる程、為になりますっ！

ありがとう、おばあちゃんっ！でも問題は全然解決出来ませんでしたっ！

とりあえず先に進もうと思いますです。お金もたくさんありますです。願わくはお姉ちゃんに見つからないようにっ！気分はこの前おとうさんが見てた大脱走のごとく？

あ、この射的って面白そうです。わくわくです。

よし、射的にれつごーですっ！

AM9時09分

日向高校近くの車道

マッタイラ
松平視点

キキイ、と車が大きく曲がり、オレは少しバランスを崩した。

「ちよつと之崖ノガイ！ ちゃんと前見て運転しなさいよ！」

「ひいいい！？ すいませんっす、石原さんイシハラ！ 猫が前を横切ったので思わずカーブしちゃったっす！」

「ならいいわ。次から気をつけなさい」

「は、はいい」

「……黒琉クロル。そんな馬鹿女の事なんて聞かなくていいぞ。お前は前のペースで行け」

「は、はい！ 解りましたっす、朋樹さんトモキ！」

「ちよつと誰が馬鹿女ですって！？」

「お前の事だ。穂積ホヅミ」

「アタシが馬鹿女ならアンタは陰険男ね！」

ぎゃあぎゃああと騒がしい車内。

備え付けのラジオからニュースが流れる。

「えー……で……の……きが……みつか……うです」
「む……」

ぎゃあぎゃああと騒がしい2人の所為でほとんど聞こえない。

オレは眉を顰め、2人に言う。

「……石原、木元キモト。お前らが五月蠅うるはくてニュースが聞こえん。静かにしろ」

「……解ったわよ」

「……承知」

オレの言葉に2人は渋々静かになった。

同時に後ろに居た小森コモリが呵呵大笑した。

「あつはつはつはつ！ あんた達何時も通り仲が良いねえ！

特に朋樹と穂積！ あんた等が一番最高に仲が良い！」

「誰がこんな陰険男と！」

「誰がこんな馬鹿女と……！」

木元と石原は同時に小森に噛み付いた

涼しげな表情で小森は言い返す。

「息びつたりじゃ無いかい。それに古来の言葉で言うだろ？ 喧嘩する程仲が良いって」

押し黙る2人。

沈黙する車内。

沈黙を破ったのは助手席に座っていた澄代スミシロだった。

「あ、あの……そろそろ日向高校に、着きます……よ？」

その言葉に乃崖が反応する。

「ああ、本当ですっすね。見えてきました。……そう言えば松平さん」

「……なんだ」

「この日向高校に息子さんが通ってらっしゃるんですっすよね？」

元気づくか？

「ああ。元気だよ。それがどうした？」

「いえ、言ってみただけっす」

再び沈黙に沈む車内。

車はそんな事はお構い無しに日向高校の駐車場に入った。

AM9時10分

日向高校校門前。

（森和視点シンワ）

「着きましたよ」

「そのようね」

そう言つてモアはぼくの顔を覗き込み、クスリと笑つた。

「言いたい事が有るなら言いなさい。怒らないから」

「……プ。アハ、アハハハハハハハ！ 何、何その格好！ アハ、アッハッハッハッハ！」

……怒らないと言った手前、ぼくは怒らず、呆れる事にした。
よく磨かれた校門に自分の姿を映す。

黒いサングラスに真っ白なマスク。それに白い軍手に赤い帽子。
……うん、モアが笑うぐらいの破壊力は有る。

ため息を吐き、校門を潜る。

ヒイヒイと涙目に笑いながらもモアは付いて来た。

AM 9時15分

日向高校校門前。

○

数分後。校門前に六人の人間が現れた。

「これが」

「文化祭」

「楽しみ♪」

「楽しみ♪」

鏡のようにそっくりな2人の子供と

「えっと……お子さんですか？」

「違う。居候だ」

「……？」

大人しそうな女と黒フードの男と

「いよっし！ 待ってるよ、クソガキども！」

「本当にやる気なのかよ……」

異様にやる気満々の男と乱暴な口調の男に見間違えそうな女。

「えっと、^{アララギ}蘭はコイツ等と行くんだったか」

「えっと……はい、そうです。私、子供好きなので」

「フウン。ま、その黒達磨には気を付けろよ？」

「黒達磨とは失礼だな男女」

「男女とは失礼だな。破壊するぞ？」

「その頃には殺してやる」

「……？ え、えつと2人共、喧嘩はやめて下さい……」
「何やってるんだ？置いてくぞ」

5CⅡ? カーニバル 文化祭、開幕 (後書き)

……あれ? 話が全然進んでないような……。

……。

……。

と、とりあえず、今回も登場人物紹介はありません。その代わり何かやりたいとは思っています……しばらくは保留ですね。

では次回予告。

吸血鬼、死神、殺し屋、小学生、中学生、高校生。それらが集結する文化祭は無論平凡に終わる筈が無く——様々な波乱が起きる。その上、文化祭荒らしと云う者が現れ——!?

t h e n e x t t i t l e

「バンクウイット 文化祭、波乱」

楽しみにしててください。

5CⅡ? バンクウィット 文化祭、波乱(一日目) (前書き)

大っっっ変遅くなりました! その上あまり出来は良くない……。

5CⅡ？バンクウイット 文化祭、波乱（一日目）

マッダイラ
松平視点）

日向高校に着いて、数分後。

オレは木元、小森の二人を引き連れて歩いていて、石原は木元と喧嘩になるため、別行動。乃崖は石原に連れ攫われた。澄代は別行動。何か用があるらしい。

「……で？ どこに行く」

木元がオレに聞く。オレは暫し思案し、言った。

「あー……そうだなあ。喫茶店……はまだ昼時じゃないから後にまわして、……射的辺りでも回るか？ お前射的得意だろ？」

「得意だな。腕が鳴る」

「……鳴るのはお前だけだけだな。オレはそういうシューティング系は全然駄目なんでね」

「あたしも無理だね。ああいうちましました奴のどこが面白いのかさっぱり全然解らない」

「意外だな。小森は性格上納得出来るが、松平も苦手だとは。……ふむ。ならば俺一人で行こう」

「あー。そうしよう。……すまん」

「別にいい。俺は俺がしたい事をするだけだから」

そう言つて木元はオレ達に背を向け歩き出した。

「んー。和人。ああいう男の後ろ姿はかっこいいと思わないかい？」

「……向かっている先が射的じゃなければ」

ハナアオイ ミスズ
華葵美鈴視点）

オレの事を構わずどんどん階段を上るアイツ。オレはその背後に追従する。

「ここだな……！」

階段を上りきったオレの目の前で奴は二年C組のドアをガラリと乱暴に開けた。

ずんずんと教室に入るアイツ。少し遅れてオレも入る。

「い、いらっしやいませ……ピョン」

珍妙な出迎えの言葉。どうやらウサギ耳をつけたドレスの少女が発した台詞らしい。

じろりと見ると少女は赤い顔でキャー叫び、とどこかに走り去った。

……そんなに恥ずかしいならやらなければいいんじゃないか？

そう思ったがまあ、当事者にも事情があるのだろうと自分を納得させ、喫茶店となった教室に入る。

アイツを探すと、アイツはカウンターのような場所に並んでいた。こつこつという時だけは行動が早いと思いながらアイツの隣にオレも立つ。

オレが隣に来て数秒後、列の先頭に着くとナースの服装をした女が出迎えた。

何故にナース？ 先ほどの少女はウサギ耳だったよな？ そう思い周囲を見回して納得する。

要は制服でなければ何でもいいのだ。

その証拠に従業員らしき生徒は絶対に制服を着ていない。

納得し、視線を前に戻すとアイツがナース服の従業員に注文していた。

「コーヒー2つ、サンドイッチは……ホットサンドを一皿頼む」

「かしこまりました。注文を繰り返します。コーヒー2つにホットサンドですね。コーヒーに砂糖、ミルクは付けますか？」

「いらん。ブラックで淹れてくれ」

「……かしこまりました。少々お待ち下さい」

丁寧に頭を下げ、ナース服の少女は去った。

手持ち無沙汰なオレは再び周囲を見回す。

「……お」

見回した周囲に見知った顔を見つけた。

ひとまずアイツに一言いう。

「悪い、仁^{ジン}。ちょっと外出る」

「別に構わないが……どうした？」

「妹に会ってくる」

ハナアオイ カレン 華葵架恋視点

華葵架恋です。今私は混乱しています。

なぜなら目の前にお姉ちゃんがいるからです。

何故でしょう。何故か先程前担当のウサ耳の羽美さん^{ハネミ}がどこかに逃げ出したため、もう少し後の出番だった私がいらっしやいませーと言っ役になっただけなのに。

「よお。三週間振り……か？ 架恋」

「お、おお姉ちゃん！？ 何でこんな所にいるの！？」

「なんだそのツチノコを発見したような顔は。……ってこの例えは微妙だな。まあいいか」

「質問に答えてよお姉ちゃん！ どうしてこんな所にいるの！？」

「こんな所とは失礼だね。仮にもお前が働いている所だろう。……で、どうしてオレが居るかだったな。その答えは簡単だ。オレはこのOGなんだ。来る理由はあっても来ない理由はない。お前だっ^{ヒイラギ}て、柊木とか云う奴に付きまとうななどと言われない限りは付きまとうだろう？」

「う、ううー」

反論出来ない……。

いつもの言動や行動はがさつなのにどうして時たまこういう風に頭が回るんだろう……？

「あー……そんなことは置いとくぞ。今オレがお前に話しかけたのは連れのせいだ」

「連れ……？ ……！ 何、お姉ちゃん彼氏居たの！？」

「居ねえよ。恋人居ない歴〃年齢だ。……で、まあ、アイツなんだが——今、緊急警報が鳴り始めた」

「は？ 何言ってるの、お姉ちゃん？ とつとう日本語も喋れなくなっただの？」

「よし、お前がオレの事をどう思ってるか解ったからお礼に後でぶん殴る」

「やめてよ。お姉ちゃんの腕力は馬鹿としか言えない程に強いんだから。そのぐらい常識で解るよ、ね？」

「オレが常識だ。よってオレが殴りたいと思ったらオレだけ殴れる。オーケー？」

「全然OKじゃ無いというか、何その俺の物は俺の物、お前の物も俺の物、な考えのガキ大將的思考！？ ていうか明らかに本題からずれてるよ！ 緊急警報がどうしたの？」

「ああ、そうだったな。……ほら、あれがオレの連れだ」

そういつてお姉ちゃんは喫茶店になっている教室の中を親指で指した。指した先に居るのは席に座っている若い男の人……あれ？

「ねえ、あれってもしかしてノクターンのマスター？」

「うん？ 知っているのか？ ああ、そうだ。アイツはノクターンのマスターをやっている奴だ」

「……ねえ。なんとなくこれからの展開が解ったんだけど」

「……そうか」

私とお姉ちゃんがそう話している間にマスターさんはコーヒーを啜り、飲み干した。

そして立ち上がり、足早に私とお姉ちゃんの傍を通り、キッチンとして使用している二年C組へ。

「……へ？」

C組の引き戸が閉まる音を呆然と聞く私。

お姉ちゃんが言う。

「あー……追いかけた方が良いぞ。仮にもお前、ウエイトレスなんだろう？」

「……解ってるわ」

あつさり行つた理由は2つ。

一つはお姉ちゃんから逃げるための口実。

2つめは先輩のため。

私は引き戸を力強くガラリと開いた。

〈木元視点〉

射的などのアクションが必要な物はすべて校門から入って左側に密集しているらしい。

パンフレットを見て俺はそう思った。

「……」

現在地点は日向高校校舎前。右手には何かに使うのかステージが見え、左には沢山の屋台が連なつて見える。

パンフレットを閉じ、ゆるゆると周囲を見回しながら歩く。

数十秒後。

「……あれか？」

俺は射的の屋台らしき物を見つけた。

近づいて確信する。射的だ。

更に近づき、俺はおかしな物を発見する。

黒いポニーテールの、小学生ぐらいのガキがその前で騒いでいるのだ。

「むううー！ 当たらないですっ！ これはなんですか、そうです何らかの陰謀を謀られたと考えましょうっ！ そう、例えるならばお姉ちゃんによって楽しみに取って置いたプリンを食べられたくないのレベルっ！」

低いのか高いのか解らないな、その例え。

そう思いながら俺は近づく。

本音は近づきたくないのだが、ここは高校の祭り。射的が他に有ると思えない。

まあ、目を合わせなければ関わる事は無いだろうといつも俺にしては楽観的な考えで射的の屋台に並ぶ。

そしてすぐ、俺は自分の考えを悔やんだ。

——そうだ。いくら俺が目を合わしたくないと思っても、あつちがこつちの顔をのぞき込んだら何の意味も無い。

そう思ったがもう何もかも遅い。

完璧に目が合った。

すぐさまガキは叫ぶ。

「むむむっ！ その植物に例えると柳な青年っ！ あなた、今琥金と目を合わせましたねっ！？ お姉ちゃんの友人の、自称お姉ちゃんの生涯の伴侶さんが言うには、目が合った時点でそれは運命であり必然なのだそうですっ！ つまり、あなたは琥金に運命りましたと言う事ですっ！」

……突っ込みたい所が盛り沢山だがスルーしよう。

取り敢えず無視しようとしたのだが、

「むむっ！？ スルーですか！？ スルーするのならば琥金を倒してからにして下さい！」

何故かこのガキは無視しても構わず俺に構ってきた。

無視は無理……。ならば他の方法だ。物で釣る。

屋台の中で椅子に座っている店番らしき男子に言う。

「何円だ？」

「え？ あ、ええっと一回三百円です」

「そうか」

まあ、安い方だろう。俺はそう納得し、銃を取った。

無論本物の銃では無い。コルク栓式空気銃だ。

構え、片目を閉じる。狙いは……：そうだな、大きさも手頃だしあのうさぎのぬいぐるみにするか。

神経を集中させる。……発射。

パン、ドサッ。

銃弾は見事うさぎのぬいぐるみの顔面に当たった。後ろに倒れる

うさぎ。

店番の男子が驚いた表情を浮かべながら、俺が今し方打ち倒したうさぎを拾い、俺に渡す。

俺はそれを横で呆然とした顔で見っていたガキに渡す。

「ほら」

「あ……ありがとうございます……ってハッ！」

礼を言った後、何故か目を見開いたガキ。

「まさかあなた、琥金を物で釣ろうとしてますねっ！ ふふん、あなたの考えはお見通しですっ！ これは貰って置きますが釣られませんよっ！」

……。

俺は押し黙る。

……押し黙る以外にどうリアクションをとればいいんだ？ 貰って置くのかよって突っ込めば良いのか？

「あの……」

悩む俺に射的の店番が話しかけてきた。

面倒くさかったが無視されるのは気持ち良く無いので、俺は返答する事にした。

「なんだ？」

「後二回、打てますよ？」

……そういえばまだ射的の途中だった。

～森和視点～
シンワ

様々な人で溢れる喧噪の中、ぼくはアイスクリーム屋の前に居た。買いに来たわけじゃない。ただ単にモアがここを離れないのだ。一人で行ってもいいのだけど、そうしたらモアはぼくの名を言いながら探すだろうし、第一モアは一人にすると危険だ。

ため息を吐き、無駄だと知りながらもモアに聞く。

「まだ決まらないんですか？」

「うっ、もうちょっと待って！……この抹茶はどんな味なのかしら。……食べてみたいわね。でもやっぱり濃厚クリームバナナも捨てられない……。このオレンジレモンも良さそう……。あ、このティラミスクリームってどういう味かしら。これも気になるわ……」

……モアがこんな状態に陥るのはもう何度も見ている。勿論、陥るのは決まってアイスクリームを選んでいる時だけだ。

真剣に選んでいるモアを見てぼくは思った。

——ぼくが僕になる前もモアはこういう風に悩んでいたのだろうか。

そうであって欲しいと言う気持ちとそうでなければいいと言う気持ち。2つの矛盾した気持ちが心に浮かぶ。

ぼくはゆるゆると首をふる。

——……らしくない考えだ。ぼくがどう思ったってモアはモアだ。それ以外の何物でも無い。

思考を強制的に断ち切りぼくはまたモアを見る。……まだ悩んでいる様だ。再度ため息を吐き、ぼくは周囲を見渡す。

焼きそば、わたあめ、たい焼き……。

視線を一巡りさせ、最後にアイスクリーム屋の隣のクレープ屋。結構な行列が出来ている。

「あれ？」

その列の中にぼくは異彩を放つ一人の少女を見つけた。

……否、見つけたと云うよりも感じたと云った方が正しいか？

ぼくは静かに少女を観察する。

髪は腰まである黒のロング。片目は何か怪我でもしているのか眼帯を着けている。眼帯を着けている以外は普通の可愛い少女だ。

……ただ——やはり何か違和感を感じる

首を傾げていると、ようやくアイスクリームを決め終えたモアが近寄ってきた。

「待たせたわね。……どうしたの？」

「……えつと、モア。なんかあの人に違和感を感じませんか？」
「あの人？」

「……ほら、あそこのクレープ屋の列に並んでいる眼帯の女の子」
「……眼帯？」

「ぼくの言葉に何故か訝しげな表情になるモア。

「ぼくはそれを怪訝に思いながら、眼帯の少女の位置を示す。

「あ、今クレープ屋の一番先頭に行きました」

「……あの黒髪の方？」

「あ、はい」

「……あー。なるほどね」

「どうやら見つけたらしく、何故か納得するモア。

「……知り合いですか？」

「まあね。見知った仲よ」

「見知った仲。つまり彼女も――。」

「人じゃない、ってことですか」

「そ。彼女、メリーって言うんだけどね。彼女は死神よ」

「死神？ 死神って……あの、鎌を持った、骸骨の？」

「うん、まあね。……しかしおかしいわね。メリーは仕事優先の人間の筈なのにこんな所で油を売ってるなんて。……どうしてかしら？ ……ま、聞けば解るか」

「そっついながらモアはクレープを買い終えたらしい眼帯の少女に向かつて歩き出した。少し迷い、ぼくも続く。」

（メリー視点）

「久しぶりね。メリー」

「たった今買ったクレープを食そうとしたらいきなり声をかけられた。」

「渋々私は声がかかった方を見る。そして眉を顰めた。

「……久しぶりだな。モア」

「そうね。……で、何してるの？」

「見て解らないのか？ クレープを食べようとしている」
「それは解るけど」

「……ところで。後ろに居る怪しげな男は何者だ？」

「後ろ？ ……ああ。紹介するわ。ワタシの僕」

それを聞いて私は驚く。

「……ほう。僕とな。ようやくモアにも僕が出来たか」

感慨深くそう呟き、私はクレープを齧る。

「……で？ メリー。アンタ何しているの？ 仕事は？」

「仕事か。今現在仕事など無い」

「仕事が無い？ ……もしかしてアンタ死神を止めたの？」

「……近いと言えば近いな。死神を止めてなどいない。今も肩書きは死神だ。ただ——冥府^{めいふ}に帰っていないだけだ」

「帰っていない？ どういう事よ」

「……少し言いにくい。モア。お前いつこの街を出ようと思っているる？」

「え？ ……えーっと冬になったらこの街を出ようと思っているわ」

「そうか。ならその時に話そう。……所でなんだ？ そのアイスは」

「あ、これ？」

私が先程から気になっていた事を言うと、モアは得意気な表情で言った。

「ふっふ、素晴らしいでしょう！ アイスクリーム愛好家であるこのワタシが厳選したトリプルアイス！ 一番上の濃厚クリームバリタ味！ 次にその甘さを打ち消す抹茶味！ 最後にその苦さを包み込む甘さで打ち消すティラミスクリーム！ これぞ最高のアイスクリーム！」

……。

「で？ アンタはなんなの？」

「クレープだ」

「……クレープ？ ……クレープとはお子様ねメリー！ あなたも

アイスクリームを食べて大人になりなさい！」

「これから寒くなりそうな時期にアイスなど食えるか」

「など？ 今アンタアイスクリームになどって言ったわね！」

「たかが食べ物であるアイスクリームになどと言ってなにが悪い」

「むきー！ 勝負よ、メリー！」

「望む所だ」

ハイトニ
灰谷視点

「……む？」

なにやら前方が騒がしいので私は焼きそばを作る手を中断し、前方を見た。

「……なんの騒ぎだ？」

前方は何故か人集りが出来ていた。

クロキ
「黒木、これなんの騒ぎだ」

しばらく眺めてみたが一向に原因が解らないので私は隣の黒木に聞く事にした。

「あ？ ……なんだこりゃあ！？」

どうやら彼もこの異状に気付いていなかったようだ。目を丸くして叫んでいる。

その叫びに彼の隣にいる白木シラキも反応した。

「……ええ！？ 何この人集り！ わたしが激辛焼きそばを作っている間に一体何が！？」

「って、お前はお前で何してるんだよ！？ 激辛！？ 激辛ってまさかお前買い出しの奴らが間違っって買ってきたあの激辛ソースを使ったのか！？」

「そうだよ？ だって勿体無いじゃない」

「焼きそばにかけの方が勿体無えよ！ はいはいその焼きそばはゴミ箱に捨てる！」

「えー」

「白木、黒木、前」

「えーでもやーでも捨てる。ん？　なんだ灰谷、ってなんか俺達の前にも人が集まって来ている！？　なんでだ！？」

「多分、小腹が空いたんじゃないかな？　この通りでまともに飯になるのはここだけだから」

「いや、俺は理由を聞いてるんじゃない。この世の不条理を叫んでいるんだ！」

「ねえねえわたしもあの人集りに入っていい？」

「だめだ！　ただでさえ俺達以外はサボタージユしてやがるのに余計な事をするとはいえお前が抜ければもうここの営業が成り立たない！」

「えー」

「……二人共言い争ってないで早く手を動かす」

「ああ」

「仕方ないな。その代わり後で何か奢ってよ？」

「……この焼きそばならやるぞ」

「いない」

（ヒイラギ）
柊木視点

「ただいま。おーい調理組大丈夫か……　ってなんだこりゃ」

PM 4時30分。

調理室にしているB組を訪れた俺はそう呟いた。

ぼうつと突っ立っている華葵が俺を見つめ近づいてきた。

「……せんぱい、早く私に愛の言葉と婚姻届と指輪をプリーズううう」

「いつもよりも元気が無いな華葵。馬鹿な事を言うのは変わらんが……で、この状況はなんだ？　なにやら台風が通過したような惨状だが。テロリストでも襲来したのか？」

「あー、テロリストと言うべきかは解らないけどある人が来まして

ねー。急遽お料理教室が始まったんです。わたしもその煽りを喰らいましたー」

「……親切な人も居たもんだな」

「……でー？ 先輩は今まで何をしていたんですかー？」

「宣伝だよ」

「せーんぐでーんぐ？」

「そう宣伝。ほら俺今日こんな服装だから目立つだろ？ だから宣伝に行ってたんだ。……まあ宣伝って言っても即興で作ったビラとかを配ったりしたただけなんだけどな」

「そういえば先輩の服装は何故かタキシードでしたねー。わたしのにはスーツがいいんですけど。でー？ 明日はどうするんですー？」

「明日はここで雑用だ」

「えー。そーんーなー。わたしの先輩とラブラブデート計画はどこいったんですかー！」

「最初からそんな計画無い」

「そんな〜！」

叫ぶ華葵。それを眺め俺は思い出した。

「そういえば華葵。今俺の手には食べ物が有るんだが」

「屋台で買ってきた物ですか？」

「違う。嫁入りした俺の姉が今日この学校に来たんだよ。廊下であった時に土産として貰った。ちようどうちのクラスと手伝いの一年二人分有る。食べるか？」

ちなみに俺が朝暗かった理由は苦手とする姉が来ると知ったからだ。華葵が頷き、言う。

「じゃあ頂きます」

俺は持っていた紙袋から袋に包まれた饅頭マシユウを華葵に渡す。

「おまんじゅうですか？」

「そうだ」

袋を破り、饅頭を口に入れる華葵。

「美味しいですね。先輩に食べさせて貰えばもっと美味しくなるん

ですけど……」

「誰がするか」

そう言い返ししながら俺も袋を破り、饅頭を口にする。

教室にいた外の奴らも目ざとく饅頭に気付いたらしく、俺等の周りに群がってきた。

一気に騒がしくなる教室。

その中で俺は栗栖を探していた。が、一向に見つからないので華葵に聞く。

「おい、栗栖知らんか？」

「せ、先輩がわたし以外の女の人の名前を呼ぶなんて……浮気！？ 浮気なんですか！？ ……そうですか。もうわたしなんかいらな
いと言うのですね？ ならわたしはあなたを殺すわ。そしてわたし
も死」

「すまん。お前に聞いたのは間違いだった」

なんかおかしいな方向に暴走し始めたのですぐさまその場を離れる。
再度辺りを見回し栗栖を探す。

「栗栖？ 居るか」

「居るけど」

「うお！？」

無駄を承知の上で呟くと後ろから返答があった。

「な、なんで後ろに居るんだよ」

「ただ通りかっただけ。で？ 何」

「あ、ああ。服装の事なんだが」

「制服の返却は明日よ」

「いや、そうじゃなくて。明日もこの服装で行くのはさすがに無理
が有ると想うんだ。ほら模擬店とは言え俺達はやってるのは飲食業
だ。服装は清潔にしたい」

「ふむ。そうね。……解ったわ。明日の服装も用意しておく」

「あ、ついでに今日帰る時用の服も頼む」

「……あのねえ。わたしを何だと思ってるの？」

「忍者擬きコスプレ集団のリーダー」

「その通り」

「……納得するのかよ。……あ、そうだ、先程廊下を歩いてたらなんか騒がしかったんだが。なんかあったのか？」

「む？ ああ、わたしも又聞き故よくは知らないけど強盗騒ぎがあったらしいわよ」

「……強盗？ 何を盗まれたんだ」

「売上金よ。当事者によると数瞬の隙をつかれたらしいわ」

「……大事件だな。で？ 教師とかはどう言ってた？」

「しばらくは様子を見るらしいわ。その強盗が二日目にも来るとは限らないからね。と言つか来ない確率が高いわね」

「……ふうん。強盗……ねえ。ま、気を付けるか。情報提供ありがとな栗栖。帰りの服も頼むぞ」

「まかせて。全身全霊を込めて面白いのを選ぶわ！」

「……頼むから普通の格好にしてくれよ」

俺はそう言い返し、なんか叫んでいる華葵を止めるため歩き出した。

歩き出した瞬間、学校中にチャイムが鳴り響く。

それは文化祭一日目の終わりを告げる鐘。

鐘の音を聞きながら俺は明日を思い描く。

誰もが楽しく過ごす文化祭。そこに強盗の影が浮き上がる。

——俺が願う事は唯一つ。

文化祭が無事に終わる事だけだ。

5CⅡ? バンクウィット 文化祭、波乱(二日目) (後書き)

……ううん。最後が納得いかない……。

まあ、それは書き直す事でカバーしましょう。

と言う訳でようやく最新しました文化祭！しかしまだこれで一日目何ですよ……どの行事に置いても盛り上がるのは一番最後です。竜頭蛇尾にならないように尻に火が付いた勢いで行きたい、なあ……。

ま、とりあえず一日目終了！ 二日目続く！

まあ適度に早く頑張る所存であります！ たぬきつも無理矢理完結させたから一点集中出来そうだしね！
では！

次回予告

文化祭二日目。

詐欺師、小学生、吸血鬼、中学生など様々な人間が集う日向高校。
果たして文化祭は無事に終わるのか！
そして詐欺師はどこで登場するのか！
そして文化祭荒らしの目的とは！？

the next title

「セレモニー 文化祭、波乱(二日目)」

最新、頑張るぜ！

5C#?セレモニー 文化祭、波乱(二日目) (前書き)

今回も割と適当ですよ

5CⅡ? セレモニー 文化祭、波乱(二日目)

マッダイラ
松平視点)

快晴に恵まれた午前。オレは日向高校の敷地内を歩いていた。

「マクドナルズのメニューで一番美味しいのは何だと思う?」

ふとそう思ったので歩きながらオレは後ろに居る4人に聞いてみた。

「……フライドポテトだな」

「ストロベリーシェイクが一番美味しいですっ!」

「アタシはアップルパイね」

「あたしゃビックリマックかねえ」

「……なんであんなだけ男のようなメニューを好むのよ。そのくせ腰は細いし……詐欺よね」

「ぐちぐち言うなって。で、言い出しっぺのあんたはどうなんだい? 松平」

「オレか。オレはバナシエイクが一番だと思っている」

「^{「ガネ」}琥金と同じですっ!」

「そうだな。……で」

そう言いながらオレは歩みを緩め、後ろの4人の右端に並び、何故か自然に混じっているポニーテールのガキの襟首をむんずと掴み持ち上げた。ガキは「ぼびゅわ!」と奇声をあげたが無視。

「こいつはなんなんだ? 校門を通り過ぎた時から混じっていたが

……」

「む、むぎゅー! 琥金はそのこの植物にたとえると柳な人の知り合いなんですっ! と言う訳で仲間外れは断固拒否しますっ!」

「そうか。おい、木元。こいつお前の事を知っているようだが」

「知らん。赤の他人だろ」

「確かに赤の他人ですけど、琥金と柳な人は知り合いですよっ! ? あの射的で交わした熱い約束を忘れたんですかっ! ?」

「射的？ …… ああ」

「思い出しましたかっ！？」

「記憶に無いな。俺にウサギのぬいぐるみをどっかのガキにくれた記憶は無い」

「あるじゃないですかっ！？ はっきり明言してますよっ！？」

「…… はあ。まあ、いいか」

二人の漫才じみた掛け合いに呆れながらオレはそう呟き、ガキを地面に下ろす。

そしてオレはガキに忠告した。

「オイ、ガキ。付いて来るのは構わないが一つ言っておく。…… 金は自分で払えよ？」

…… 恥ずかしい話だが今のオレの財布には千円しか入ってないのだ。

一年視点

「…… ふう」

目の前の客が外に出た所を見計って私は一息吐く。すると前方のカーテンから受付をしていた友人の日向日向ヒュウガ ヒナタが顔を出した。

「なにしつきー、もう疲れたの？」

誰も聞いてないと思ったのだがどうやらヒナタは目敏く——いや、この場合は耳聴くか——私の溜め息を聞き取っただけらしい。心配そうに聞いてくる。

「一時間に五人近くの客を占って素人である私が疲れない道理が無いでしょ？ あとその呼び名は止めて。怒るわよ？」

「あはは、ゴメンゴメン。…… んで、四季シキ。少し休んだら？ 昨日は休憩も取らずにずっと占ってたって聞いたよ？」

「…… そうね。疲れてない…… って言える気力も無いし。お言葉に甘えて休憩するわ。ヒナタ。ここの替わりを宜しく」

「オツケ」。一人ここの占いをやってみたって子が居るから、そ

れについては心配無用！ 存分に休憩をエンジョイしてくるがいいさ！」

「ハイハイ」

椅子から立ち上がり私はヒナタの横を通り、板で区切っただけの簡易な部屋を出ようとする。

出る瞬間、チラリとヒナタの横顔を見て——私は“視た”。

シャツ、とカーテンを引く。一時間振りに見た外は人の行列に覆われていた。

首を後ろに捻り、ヒナタの顔を視界の隅に捉える。

「——ヒナタ。これは忠告だけど」

「ん？ なになに」

「廊下を歩いている時は女の子に気を付けて」

「……もしかしてそれ“予言”？」

「……まあね」

「……そう。……女の子……ねえ。偏ひとえに女の子って言っても解らないなあ。思い出せる特徴は？」

「黒い髪のポニーテールで小学生くらいの身長。視たのは後ろ姿だけだから解るのはこれくらい」

「それだけあれば良いわ。要約すると黒髪ポニーテールの小学生くらいの女の子……ね。解った、気を付ける」

「うん。じゃ」

右手を上げ私は行列を掻い潜り、教室のドアに向かった。

私、一年四季ゼンシキには特殊能力が有る。

未来を視れるのだ。

といつても任意に使う事は出来ずいきなり視えたりする。

時間はそこに時計が無い限りは解らない上に場所も自分で思い出すしか無い。視れるのも決まって事故の瞬間だけ。余り役には立たない。せいぜいが視た被害者に忠告するのみ。それが良かったかどうかは解らない。視れるのは事故の瞬間のみ。結果を視る事は出来

ない。

「もうそろそろお昼時かあ。……混まない内に食事は済ませた方がいいかな？」

そう呟きながら私は同じ階にある二年B組の喫茶店へと足を向ける。外の屋台で食べてきてもいいのだが歩く手間を考えると喫茶店の方が良い。まあ喫茶店が混んでたら屋台に行く事も考えるが。

そう思いながら中を窺うと執事の服を着た男子が目敏く気付き、いらっしやいませと声をかけてきた。

中を見る限りまだそんなには混んでいないので入る事にする。

カウンターでコーヒーとサンドイッチを頼む。

席に着き、ウェイターが持ってきてくれたお冷やを一口飲み、私は一息吐いた。

程なくして頼んでいたサンドイッチとコーヒーが来る。

それをぱくつき味はまあまあかなーと思っていると、突然窓際の方から悲鳴があがった。

びくりと肩を震わせ悲鳴があがった方を見る。

そこでは二人の男女が居た。女性は座ったままコーヒーを啜っていて、男性は立っている。その事からして悲鳴をあげたのは男性のようだと私は推測する。

「な、なんだこの辛いミルクティーは！？ 砂糖を五個、ミルクを五杯加えたのに何故辛い！？ と言うかそれ以前に辛いミルクティーなんて聞いた事も無いぞ！？ ……ハッ、まさかこの辛いミルクティーはこの名物なのか！？」

よく解らない事を叫ぶ男。落ち着けば顔は良い方だろうと私は推測する。

そしてその意味不明な言葉にコーヒーをソーサーに戻しながら答える女の人。こっちも顔は整っているが表情は無表情だ。

「安心して下さい先生。そのミルクティーが辛いのは店の仕様では無くわたくしが常備していた唐辛子やガラムマサラを入れたのが原

「因だと思われます」

「ああ、そうか、それなら納得——出来るか！　うつかり聞き逃しそうになったが原因は君か！何故こんな事をした！？」

「……べ、別にミルクティーを見て狂気乱舞している先生を見て、思わずミルクティーに嫉妬なんかして無いんだからねっ」

「いや何故にツンデレ風！？　しかも無表情で！　せめてツンデレな言葉を言うなら表情を改めてから言ってくれ！」

「じゃあ良いです。嫉妬なんてしてませんし」

「ワオ！　なにその切り替えの早さ！？」

「で、先生。辛いと言ってましたが収まりましたか？」

「！　……うぐぐ……！　そ、そうだった……！　意識したらまた辛さがぶり返ごほっごほっ！　み、水！」

「はい、どうぞ」

女性がお冷やを男性に差し出す。その行動に問題は無い。問題があるのは差し出したお冷や。普段なら透明なお冷やはとてつもなく赤い色をしていた。男性はその色に気付かず、受け取るや否やゴクゴクと一息に飲み干した。

「……ぐげふあ！？　何故に辛さが倍増している！？」

「それはわたくしがそのお冷やに七味と香辛料を沢山入れたのが原因ですな」

「どう考えてもそれしか無ぐぐつ……！　も、もはやこの辛さでは水を飲んでも効くかどうか……！　かくなる上はトマトアイス……！」

「……！」

トマトアイス？

そんなアイスがあるのかと私は思った。

「……お言葉ですが先生。トマトアイスはマイナーな食べ物ですからこんな所で期待するの無理かと」

「ふっふっふっ。期待する？　何を言っているのだキミ。期待するのでは無い、気配を感じるのだ！　トマトアイスの神聖なる気配を……！」

「……」

「ふっ、余りにも予想外過ぎて声も出ないようだな。では、行つて来るとしよう！」

そう言つて男は側の窓ガラスをガラリと開け、飛び降りた。

響き渡る悲鳴。

騒然となる店内。

呆然とする私。

残された女性は優雅にコーヒーを啜り静かに一言呟いた。

「……馬鹿ですか？」

（松平視点）

前方から悲鳴と怒声が聞こえる。

「な、何ですかっ、このビッグウェーブな雑踏はっ！」

オレの頭にしがみつきながらそう喚くガキ。

大声に顔をしかめながらオレは木元に問う。

「何が起きてる？」

「——……あー。どうやら三階から人が飛び降りたらしい」

「……人が飛び降りた？どうしてだ」

「さあ？ 辺りの人の会話内容からしてトマトアイスがどうとからしいが……」

「トマトアイス？」

なんだそれは。

「む、むうっ！この人混みをどうにかしてくださいっ！ 野菜に

たとえるとジャガイモな人っ！」

「それは暗に太いと言いたいのかコラ。て言うかい加減オレの頭から降りろ」

「嫌ですっ！ あなたの頭は操縦桿に丁度良いのですっ！」

「うっせえ。誰が操縦桿だ」

オレはロボットか。ロケットパンチで相手をなぎ倒して、背中

ロケットで空を飛ぶのか。

「良いコンビだねえ。アンタ達」

「どこをどう見てそう思ったのか教えてくれ小森。と言うかガキ。お前親とかはどうした」

「ふっふっふっ、琥金は今単独でミッションに挑んでるのです」

「ミッション？」

「そうです、今多分この文化祭に来ている筈のお姉ちゃんにみつからず、文化祭をエンジョイする任務を琥金は、」

「見つけたわよ！ 琥金！」

「びゅっ！？」

突然ガキの言葉を遮るような大声が聞こえた。びくりと震えるガキ。オレは声のした方を見る。

そこに居たのは動きやすそうな服装をした少女だった。歳は多分中学生くらいだろうか。

ガキがオレの頭から降り、オレの足に隠れる。

「見つかったみたいだが、感想は？」

「なんとかしてくださいっ、ジャガえもんさん！」

「ふざける」

「……？ 誰ですか、あなた達」

少女の言葉が礼儀正しい物になる。

「あー。まあなんと云うか……巻き込まれた人って事で」

「そうですか。琥金がお世話になりました。琥金、行くわよ」

「嫌ですっ！ 琥金はお姉ちゃんとは別行動でこの文化祭をエンジョイするのですっ！」

「……」

沈黙する少女。それを裂くように大声が響いた。

「見てくれハニー！ このハート形の綿菓子を！」

そう叫びながら人混みをかき分け少女に近づく少年。

少女のこめかみがぴくりと引き攣る。

「まるでぼくと君との輝かしい未来を暗示しているみた「ちょっと

「黙れ！」ぐふお！？」

少女の隣に来て本当にハート形の綿菓子差し出す少年。少女はその少年をラリアットでぶっ飛ばした。宙を舞う綿菓子と少年。

土煙を撒き散らし、地面に落ちる少年。それを尻目に少女はガキを見る。

「……解ったわよ、琥金。あたしとアンタは別行動で良いわ。ただし」

視線を今し方ぶっ飛ばした少年にずらし、びしっ指差す。

「その男と一緒に行きなさい」

モモムネ ソラ
「百棟蒼空視点」

「……ん？」

なにやら前方が騒がしい。

事件でもあったのかと背伸びし前を見ようとするが、人が多くて叶わない。

「？……何してるの、ソラくん」

「……ん、神社さんか」

ボクがそう言つと神社さんは怒ったような表情をした。

「も」。この前言ったでしょ、ソラくん。わたしはソラくんって呼んでいるんだからソラくんもわたしを道理テシリでもテンちゃんでも好きに呼んで良いって」

「……あー。そうは言われてもですね……。まだ付き合い始めて1ヶ月くらいですし……」

「んん」。……ま、それもそっか」

残念そうに唸る神社さん。ボクはそれを見て悪い事をしたかなあと思った。

「……あれ？ こっきーのお兄さんで有る蒼空さん？」

唐突に横から声がかかる。見ると、弟の友人で有る鬼灯ちゃんだ。

「あ、鬼灯ちゃん。久しぶり」

「蒼空さん、縁ちゃんと一緒に来たんじゃないんですか？」

「ん、いやあ、ちょっとした諸事情だね。縁ならそこら辺の屋台を回ってると思うよ」

「……そうですか」

そう呟き鬼灯ちゃんは怪訝そうな目で後ろを見た。

「……ところで蒼空さん。後ろの女の人は誰ですか？」

「ん？ ああ、こちら仕事の同僚」

「であり彼女の神社巡理さんなのだ！」

「ちょ、神社さん！？」

慌てて止めるがもう遅い。

今の言葉は確実に鬼灯ちゃんの耳に入った。

「……ほほう」

ニヤリと笑う鬼灯ちゃん。黒い。黒いよその笑顔。

「なるほどなるほど。解りましたよ、蒼空さん」

「……解ったって何が？」

「蒼空さんがこの事を弟で有るこっきーや妹で有る縁ちゃんに内緒にしていると言う事が」

「……うっ」

凶星なので思わず呻く。

「さて、提案です蒼空さん。この事をばらされたくなければお金をください」

「……それは提案と言うよりも恐喝って言った方が正しいとボクは思っただけだな……。まあいいや。千円で良いよね」

「はい。毎度あり」

財布を取り出し、千円札を鬼灯ちゃんに渡すと鬼灯ちゃんは満面の笑みでそれを受け取り、さっと回れ右をして人ごみに紛れた。

「……ん、何今の。新手のかつあげ？」

「いや、違うよ。まあ近いけど」

小首をかしげ、言う神社さんにそう返答し、ボクは周囲を見回し呟く。

「……それにしてもホント何があったんだろうね？」

（モモムネ「セキ」）
百棟弧赤視点）

「……？ 何か下が騒がしいな」

廊下を歩いていると、喧騒とは違った騒音が耳に入った。

近くの窓を開け、騒がしい方向を見る。

なにやら人だかりが出来ている。どうやら騒ぎはその中心にあるようだ。

「？」

首を傾げ、ぼくは歩き出す。

歩き出した理由は2つ。

一つは関わる気が無いから。

もう一つは現在ぼくは休憩時間。のんびりしている暇は無い。時間には限り無く有限なのだから。

「この階のはあらたか見終えたかな……」

呟きながらぼくは階段に向かおうとし、図書室の文字を発見した。足を止め、考える。

「……図書室……か。何かやると聞いた記憶はありませんが……物は試しです」

そう呟き、ぼくはドアをガラリと開ける。

図書室はとても静かだった。まるで誰も居ないような“錯覚”に襲われる程。

そう錯覚は錯覚だ。人は居る。……一人だけ。

カウンターに座り、黙々と本を読んでいる一人の少女。この一人だけだ。

周囲を見回す。なにも無い。けれどそれだけで帰るのは早計だ。ぼくはとりあえず少女に話しかける事にした。

「あの、聞きたい事が有るんですが」

少々の間の後、少女は顔を上げる。

その顔を見てぼくはぼんやりと思った。

一目見た時から思ってたけど……。

この人、黙ってても目立つ。

鳩の羽のように真っ白な、三つ編みにした髪。灰色の目。

髪の色だけでも目立つのにその上顔も整っていて、雪のような肌と合わせり西洋人形をイメージさせる。

そして止めにこれでもかと云うくらいの無表情。それがより彼女を目立たさせている。雪の中のカラスのように。

「……なんですか？」

「ええつと、ここでは何かしているんですか？」

「……いいえ、と答えたい所ですがそうです。私達文芸部は文集やら詩集やら部員達の家にある古本やらを手抜きで売っています」

「あ、そうなんだ。……手抜きってどういう事？」

「私以外はどこかに行ってしまいましたから」

「あ、なるほど」

「で、どうします？」

「んー。そうだね。料理の本とか無い？」

「……料理の本ですか」

「無いの？」

「いえ、一つ有ります」

「じゃあそれを見せて」

「解りました」

そう言って彼女はカウンターの上に置いてある箱の蓋を開け、ガサゴソと探し始めた。ホッチキスで止められた紙束がたくさん重なっている事からして詩集や文集などはそこに入っているのだろう。

やがてお目当ての物を見つけ出したのか、「ふう」とため息を吐き、ホッチキスで止められた一つの紙束を取り出し、箱の蓋を閉める。そして顔を上げ、ぼくに取り出した紙束を差し出した。

「はい」

「あ、はい」

差し出された紙束をぼくは受け取り、パラパラと中をざっと見る。
ふむふむ。成る程、これは良い。

作者の名前は哭塔 無闇と言っらしい。ぼくが言うのもなんだけ
ど変な名前だ。

ポケットから財布を取り出す。

「何円ですか？」

「……二百円」

財布から百円を二枚出し、彼女に渡す。
ぼくは買った文集を手に図書室を出た。

「はあああああああああああ」

「……えーっと」

「ああ、愛しのハニー……。どうしてキミは姿を消してしまったん
だ……」

「……あのー、すいませんお兄さん」

「はあああああああああああ」

「返答して下さいーい」

「ああハニー……」

「……言う事聞いてくれたらお姉ちゃんの写真十枚あげますよー？」
……ピクリ

「……更に今なら密かに撮ったパジャマ姿と食パンをくわえて学校
に急ぐ制服姿をセットで」

「……さあ、何がお望みだい？ キミが望むなら大砲でも学校でも
宇宙船でも何でも買って来てあげるよ！」

「じゃああそこにある日向高校名物の王様綿菓子（¥500円）を
2つ買ってきて下さいっ！」

「了解承知っ！」

砂煙を立てて綿菓子屋に突っ走る少年。それを見て少女は呟く。
「……^{ヒシリ}聖さんの言う通りですっ」

校舎 校長室

どたとたばしーん

「こーうーちよーうッ！」

「なんですか騒がしい。ああ、騒音コンクールに出るための練習ですか？ それなら大丈夫です。あなたはもう優勝出来る程の騒音をいつも出していますから」

「思いつ切り間違ってますよ！ ていうか騒音コンクールってなんですか！？」

「間違えている……？ ああ、成る程。騒音コンクールでは無くてツッコミコンクールに出るつもりなんですか」

「そうじゃありません！ 大変なんですよッ！」

「大変？ 今私が食べようとしているモンブラン以上に大変な事ですか？」

「断言しますッ！ 今校庭で——」

「強盗が出たのでしょうか？」

「知っているんですか！？」

「知ってます。そしてもう手は打ってあります。だからもうその強盗は大変でも何でもありません」

「——！ まさかあの男を……！」

「ええ。——私は何よりもこの学校を愛しています。故にこの日向高校を荒らす物には容赦はしません。」

……まあ無礼なチンピラに有り余る末路でしょうね。強者に、否——この学校の教頭であり、

この世界の裏側に於て“伝説”と呼ばれている男に潰されるのは「

校舎 屋上

立ち入り禁止である屋上の縁にその男は佇んでいた。

「……つかし校長も無茶苦茶言つよな。この人ごみの中から強盗を見つけるだなんて」

呟きながら男は目を細め、背中を曲げて、人で溢れている校庭を覗き込む。

「……まあ出来ない事も無いんだが」
その呟きから数秒後。

細めていた目を元に戻し男は言う。

「……見つけた」

その刹那、男は幻のように掻き消えた。

「……???視点」

はあっ、はあっ、はあ……。

「……なんとか撒いたか？」

顎から流れる汗を拭い、おれは周囲を見渡す。校門の前、周囲の人間が汗だくのおれを不審そうに見ている。が、肝心な事には気付いてないようだ。

おれが——先ほどたこ焼き屋やら林檎飴屋やらを襲い、売上金を奪った強盗だと云う事に。

息を整える。

もう一度周囲を見渡す。……追っ手はまだここに来ていないようだ。

視線を紙袋、否、その中にある先ほど盗んだ売上金が入った紙の箱に移す。

……金がどのくらい入っているのかは帰ってからのお楽しみだ。
今は一刻も早くここから離れよう。

そう思いおれは歩き出そうとして、

「随分と儲かったようだな。“文化祭荒らし”、だったか？」

「——ッ！」

唐突に後ろから人の声が聞こえたので顔を強ばらせ、おれは振り返った。しかしそこには誰も居ない。

……幻聴か？

そう思ったがその考えはすぐ否定される。

「急に振り向くなよ。不審に思われるぞ？」

また、耳元で声がした。

もう振り返る事はしない。無駄だと判断したからだ。その代わりおれは問う。

「てめえ……何者だ？」

「反応が古いな。その言葉を使うのは殆ど三流の悪役だぞ？ ま、ここでお前は奪った金と記憶を失うのだから手向けの言葉として答えておこう。」

——俺の名前は矢神^{ヤガミ トウヤ}統夜。ここの教頭であり、そしてしがない管理人さ。んじゃ、さよなら」

その言葉を聞き終えると同時に首筋に衝撃が走り、おれの意識は暗転した。

5C〃?セレモニー 文化祭、波乱(二日目) (後書き)

はいと言う訳で文化祭荒らしさん(しかもこの呼び名で呼ばれたのは一回きり)敗北!。登場したばかりの人に。

ちなみに文化祭はこれで終わりではありませんよ? 張りすぎた伏線を回収したりまた新たに張ったりするために後日談って言うか後始末的な話を次に掲載して終わるのさ!。もしくは登場回数が無かった人のラストステージ。頑張って書け、自分!ではまた。

次回予告。

文化祭は閉幕する。たくさんの人々と、たくさんの会話と共に――。

the next title
「フェスティバル 文化祭、閉幕」

5CⅡ? フェスティバル 文化祭 閉幕 (前書き)

短い上に半分手抜きかも知れません。 目指せ「適度に適当に」。

5CⅡ？フェスティバル 文化祭、閉幕

PM 6時00分

（ヒイラギ
柊木視点）

「……なあ」

おれは栗栖に問う

「なに？」

「なんでおれ達はここにいるんだ？」

「寝ぼけてるの？ 打ち上げよ」

「いや、それは解るんだが」

周囲を見渡す。

「普通打ち上げる所の定番は焼き肉屋だろ。なんで喫茶店なんだ？」

「昨日華葵ちゃんから聞かなかった？ 急遽料理教室を開かせた人が居るって」

「ああ。そういえば言ってたな。それが？」

「ここマスターがその人よ」

「……つまり、恩返しって事か」

「ええ。あの人のおかげで料理の出来が良くなって喫茶店が繁盛したのは事実だし」

そう言ってふふっと笑う。

「ま、相手に取っては仇返しとも取れるかも知れないけど」

「……まあ、そうだろうな」

夏休み、華葵の誘いでこここの喫茶店に来た事は有るのでこここの喫茶店の面積は臃げながら解る。

けして広く無く、どちらかと言えば狭い空間。

そこにまるまる一クラスプラス何人かの部外者が混じったらどうなるか？

簡単だ。室内は満員電車のように混む。

人に押されながら俺は栗栖に言う。

「栗栖。2、3点聞きたい事が有る」

「私に答えられる範囲なら答えるわよ？」

「ああ。それで良い。じゃ、まず一つめの質問。おれはその時は材料の買い出しに言ってから見てないが、おれ達の喫茶店から人が飛び降りたんだって？」

「ええ。人伝に聞いたから何故飛び降りたかは知らないけど」

「それで良い。おれが知りたいのは何故飛び降りたかじゃなくてどうなったかだ」

「……ああ。結論から言って逃げられたわ」

「……へえ。おれの記憶が正しければこの警備員はなんでも元自衛隊だとか元SPだとかふざけた奴らって聞いたんだが……そいつ等から逃げた奴は大した奴だな」

「そうね。……で、次の質問は？」

「ん？ ああ、二つめの質問。強盗は捕まったと聞いたが……どういう事だ？」

「こつちも人伝に聞いたから詳しいは知らないけど……。突然倒れたらしいわよ」

「倒れた？」

「ええ。いきなりドサツと」

「ドサツと……ねえ。……ん？ じゃあなんで強盗だって解ったんだ？ いきなり倒れた奴が強盗って証拠は無い」

「それが有るのよ。その人が持っていた紙袋に売上金が入った箱があつたの」

「へえ。で、ばれて警察行き、と」

「まあそんな所よ。他には？」

「あ、んじゃ、三つめの質問」

「そう言っておれは右を見る。」

そこに見えるのはハロルドだった。

カウンター席に座り、優雅にオレンジジュースを飲んでいる。普

段なら格好良かったらう。普段なら。

そう、ハロルドの服は普段通りじゃないのだ。誰が好き好んで赤いもじゃもじゃの雪男の着ぐるみなど着るのだらうか。

「なんでハロルドの格好だけあのまんまなんだ？」

「ああそれはね……」

ゾクリ。

瞬間、おれの背筋に悪寒が走った。

何故かは解っていた。目の前の女の微笑みにだ。

「逸材だからよ」

背筋の悪寒を堪え、おれは聞く。

「逸材？」

「ええ。私の想像によると彼、女装もタキシードも似合うのよ。私達に取ってこれ以上の逸材は無いわ」

そう言つて「ふふふ」と笑う栗栖。

もう限界。おれは後ろ向きで迅速に栗栖から距離を取る。一定の所まで離れた所で背中を向けた。

とりあえず三珠ミタマの所に行こう。あいつは性悪だがまともだし。

「せ〜んぱいっ！」

三珠の居るテーブルを見つけると同じテーブルに居た華葵が変な呼びかけと共におれに突っ込んできた。三珠を見つけた時点で華葵が居る事に気が付いていたので素早く避ける。ずざー、とダイナミックにフローリングの床を滑る華葵。

おれはそれを華麗に無視し三珠に声をかけた。

「よお」

「……んー？ 信マユに声をかけられるのってなんか久しぶり」

「？ 何言ってる。文化祭の準備中に何回かかけただろ」

「……どうせ主役級の人間には解らないのさー」

そう言つてテーブルに突っ伏す三珠。なんなんだ？

ツンツンと頭を突くが反応無し。仕方無く同じ席に居る菱谷ヒシタニに話

しかける。

「なあ菱谷。聞きたい事があるんだが」

「……なんでうちやねん。他にも居るやろ」

「言っちゃあ悪いが三浦は少々頼りないからな。三珠はあんな調子だし」

「……んー。そやな、解ったわ。で、何を——って柵木ヒイラギ後ろ後ろ」

「んあ？ 後ろって——うおわ!？」

「せ・ん・ぱ・い・追尾タツクルー!」

菱谷の言う通り後ろを向くと、先程避けた華葵が変な技名をほざきながらおれに向かって来やがった。

慌てて横に避けるが追尾タツクルだとかなんだとか言うだけはあつて華葵はテーブルにぶつからず綺麗にカーブしておれを追ってくる。

テーブルと人の間を縫って逃げるおれ。追ってくる華葵。

「だあ、付いて来るな華葵!」

「ふっふっふっ、無駄ですよ先輩! この技は先輩に抱きついてもしまりません!」

「いや止まれよ! 迷惑だ!」

「ならさつさと観念してください!」

「断る!」

「ならどこまでも追い掛け回します! 波打ち際で「待てよこの!」

「捕まえてみなさい」とか言うウッフアハハな追いかけっこみたいで楽しいですし!」

「いや楽しくねえよ!」

そうツツコミながらおれは逃げる。華葵はしぶとく追ってくる。

……どうすればいいんだ。

く美端視点ミハタく

「楽しそうだね」。あの二人」

喫茶店にて追いかけてをしている高校生らしき2人組を見ていると聖^{ヒシリ}がそう言った。あたしはその言葉に反論する。

「どこがよ。あの先輩の方明らかに嫌がってるじゃない」

「むっふっふっふ。甘いね姫。あれはツンデレなのよ。そう、姫がにっしーにツンツンデレなように！」

「誰がツンデレよ。というか何を根拠に」

「根拠？ そんな物は無いわ！ この人がツンデレだって瞬間的に思えばその人はツンデレ！ おっけい？」

「はた迷惑ね、その理論……。そう言えばあいつどこ行っただの？」

「ふっふっふっやっぱ姫はツンデレだねー」

「なんでよ」

「好きな人の名前を呼べない、これもツンデレの証拠！」

「……勝手に決めつけないでよ」

とある路上にて。

「ああ愛しのハニー……。キミはどこへ行ってしまったんだ……！」
待ち合わせをし忘れていたとある少年が路上をさまよい歩いていた。

彼が「ハニーの気配がする！」とか言って喫茶店に乗り込むまで——あと数十分。

P M 6時10分

日向高校校門前。

真っ白な三つ編みの髪の少女が一人壁に背中を預け、夕焼けに照らされ立っていた。

どうやら何かを待っているようだ。

やがてパタパタと足音が聞こえ——三人の人影が街灯に照らされる。

「ごめんごめん待たせたかにゃ？」

猫のような喋り方をする少女と、

「あー、ごめん。待たせた」

平凡な体つきの少年と、

「一応謝っとく。すまん」

背の低い少年。

「……遅い」

真つ白な少女は無表情で言う。

「謝ったから許してくれにゃ」

「……私はそんな事で怒ってるんじゃないやありません。私が怒ってるのは店番をサボった事にです」

「あにゃー。湧き上がる情熱ほんのうに従っただけにゃ。断じてサボリじゃないにゃ」

「いやそれはサボりだ」

猫な少女に背の低い少年がツツコミを入れる。

猫な少女はそのツツコミに目を細めた。

「ふにゃ。にやらにやんでいぬいぬは居なかったによ？」

「お前よりはまともな理由だ。助っ人を頼まれたんで手伝ってきたんだよ。……ま、そのお陰で遅くなったんだが」

「まともじゃにゃいにゃ。他の部活か組の手伝いをしたと言う事は、文芸部に対する裏切りにゃ」

「裏切りって大げさな……」

「大げさじゃにゃいにゃ。これが昔だったら尋問か拷問だにゃ」

「……二人が遅れた理由は解りました。で八崎ヤッザキ、貴方は」

「おれは華葵と一緒に二年B組の手伝いをしてた。ちなみに華葵は今頃二年B組の打ち上げに参加している」

「貴方は？」

「断った」

「そうですか。打ち上げみたいにとりあえずレストランにでも行きましょう」

そう言って白い髪の少女は歩き始める。平凡な少年もそれを追う。言い争っていた猫な少女と背の低い少年も気付き慌てて歩き始めた。

「にゃ、そういえばコクトー。売上はどうだったにゃ」

「古本は三冊。文集は一冊。後は実作が一冊」

「へにゃ？ 古本は良いとして実作？ 売れそうにゃ実作本なんてにゃかった気がするんにゃけど……誰のが売れたんにゃ？」

「私の」

「コクトーの？ コクトーが作ったのって確か料理の本だったようにゃ……」

「そうその本」

「……ふにゃー。物好きにゃ人もいたものにゃー」

「それはどういうこと？」

「にゃ、にゃんでもにゃいにゃ」

じつと凍るような視線を向けられ、うろたえる猫な少女。真っ白な少女はしばらく見つめた後、ふいと目をそらし、見え始めたレストランに向かって歩みを早めた。

PM 6時半以降

日向市南。ビルとビルの間にある路地にて。黒いフードの男と男と見間違えそうな女が佇んでいた。

黒フードが口を開く。

「……こんな所まで呼び出して何の用だ？ まさか告白するとか言っ
なよ」

「する訳無いだろ。漫画じゃ有るまいし」

「それもそうか。で？ 何の用だ」

「ああ。……と、その前に質問だ。お前今どこに住んでる？」

「……？ 空き家だが」

「そうか。電気とかはどうしてる？」

「……懐中電灯とかを使っている」

「食事などは」

「外食だ。殺し屋の時の財産と喫茶店のアルバイトで食ってる」

「……じゃあ最後に一つ。お前はその生活から抜け出したいか？」

「おれだけなら別に良いが……流石にいつまでもあいつ等にこんな生活は送らせたくない」

「そうか。なら一つ提案だ」

「……提案？」

「ああ。オレは一つお前等が住める場所を知っている」

「本当か」

「ホントだよ。住み心地は悪くない。食事は各自で。風呂は近くに銭湯がある。家賃は一人三万。どうだ。悪くないだろ？」

「確かに悪くは無いな。それにそんなに詳しいって事はお前、そこに住んでるんだろ」

「そうだ」

「……ふむ。解った、その提供受けよう。が、流石に今からは駄目だ。明日で良いか？」

「ああ良いぞ。これはオレの独断だから日は置こうと思っていたしな。いきなり連れてきたら管理人にぶん殴られる」

「……お前をぶん殴れるって事はまともじゃないんだろうな。その管理人」

「まあね。んじゃあ場所はこれに書いて置いといたからな」

「ああ」

黒フードの男は女から紙を受け取った。

女はひらりと手をあげた。

「じゃ、また明日」

「ああ明日……な」

そしてその路地裏には誰の気配もなくなった。

ヤガミ
「矢神視点」

同じくPM6時半以降。

路地裏から少し離れたビルの屋上にて。

全身真っ黒の青年と俺は対峙していた。

俺は口を開く。

「お前だろ詐欺師」

「何がだい？」

「とぼけるな」

「いやだなあ。とぼけてはいないさ。唯お前だろと言われる事に覚えが有りすぎるだけさ」

「その態度が既にとぼけている証拠だ。答える。お前、文化祭荒らしに何か吹き込んだな」

「……どうしてそんな事を言うのかな？」

「あの後あいつ、警察に捕まっただろ？俺はそこに侵入して、警察の奴らがあいつの部屋を離れた時に自白剤を飲ませた。ちなみに痕跡は完璧に消しといた。俺が持っている自白剤はすぐ溶ける物だしな」

あっけらかんと俺は言う。それを呆れた表情で眺めながら青年――詐欺師は言った。

「無駄な事をするね」

「校長に命令されたただだ。……で？どうする？弁明するかそれとも黙殺するか」

「……そうだね、弁明するのも悪くない。伝説相手にならより……ね」

詐欺師がそう言う。俺苦々しい表情で否定した。

「その伝説ってのは止める。俺はしがない管理人だ。最早暗殺者でもない」

「ん？ そのわりには鈍って無さそうだけど？」

「サボると覇峰^{ハミネ}の奴に殺されるんだよ。あいつ顔を合わせる毎に稽古稽古言いやがるし」

「ふうん。まあいいや。で？ 何が聞きたい？ 別に弁明してもいいんだけどよく考えると今日は見たい番組が有るんだよね」

「……マイペースだな、オイ。ま、俺も早い所終わらせたい。早く帰らんと巴手^{ハデ}はともかく覇峰や華葵が五月蠅い」

「随分と所帯じみてるねえ。キミのアパートの人々。しかも女ばかりだし」

「失礼な。男も居るぞ。俺とかサnderスとか」

「二人だけじゃん。……とと、また話が脱線してる。もう番組が始まるまで一時間しか無いんだ。早くしてよ」

「ああ解った。じゃ、質問だ。結局お前何がしたかったんだ？ 金は違つよな。お前腐る程持つてるし」

「ん、ご名答。お金じゃないよ。僕がしたかったのはね、知ってる人を巻き込まない事さ」

「？ なら強盗なんてさせなければいいじゃないか」

「それが無理だったんだよね。僕が彼と会った時にはもう彼は止まる気がなかった。強盗する気満々だったんだよ。キミも知つての通り僕が出来る事は言葉で騙す事のみ。彼にはそれすら通用しないんだからしょうがない。だから僕は手助けする振りをして被害を最小限に抑えた。悪い判断じゃないだろ？」

「……確かに。お前にとつちや良い判断だ。見知った人間以外は——見知らぬ人間は人間だとも思わないお前にとつちやな」

「ま、そうだね。で？ 質問はこれだけかい？ それなら僕は帰るよ」

「ああこれだけだ。ま、今の質問も校長の命令云々じゃなくて唯の好奇心だからな」

「そうかい。じゃ、さよなら」

そう言つて、くるりと踵を返す詐欺師。

そのまま下に通じてる階段に向かう。

ちなみに奴は考え方以外は普通の人間だ。よって鉄骨をぶん投げたりするどこぞの馬鹿力女やサンドバックを拳骨一発でぶっ飛ばす修行大好き女のような事は出来ない。無論ここから飛び降りる事も俺は出来るが。

ま、普通に俺達の方が異常だと言う事だろう。考え方はあいつの方が異常だが。

そんな事を考えながら俺は屋上から飛び降りた。
さつさと帰って夕飯の支度でもするか。

P M 7 時 0 0 分。

柊木信は逃げていた。

華葵には無い。華葵暴走形態からだ。

「せ・ん・ふぁーい。火照ったこの体をせんふぁいの愛力^{まなむちから}で冷やしてくだひゃーい」

「っだああ！ 誰だよ、ウイスキーボンボンなんか持ってきた奴は！」

「ぼくだ！」
「お前か、^{マッタイラ}松平ああああ！」

原因は以上の台詞から察する通り。華葵がウイスキーボンボンを食べ過ぎ酔っ払った。

「だああ！ くそ、後で覚えてろよ松平！」

「ぼく的には忘れてくれると嬉しいなあ！」

「絶対忘れねえ！」

そう喚きながらおれはテーブルを跳んで跨ぐ。いつもの正常(?)な華葵に捕まるのならともかく今この異常な華葵に捕まる訳には行かない。捕まったら最後、子供には見せられない何かをされる筈だ。なりふり構っている暇は無い。

そう考えながらおれは店内を駆け回る。外に出ても良いのだが華

葵の事だ。愛の力とかなんとかで追跡するに違いない。そうしたら近所によからぬ噂が回ってしまう。それはいやだ。

とりあえず華葵が酔いつぶれるまで逃げ回ろう。幸い明日は休み。筋肉痛になっても支障は無いだろう。

バターンと扉が開く。入ってきたのは整った顔立ちの少年だった。少年は店内を見回し叫ぶ。何故店がこんなに荒れているのか等の叫びでは無い。

「ハニー！ どうして君は僕の前から姿を消してしまったんだい！？ 僕はまるで月明かりの無い夜の砂漠を歩いている心地がしたよ！ さあハニー、もう二度と僕の前から消えないように愛を誓ってく」「うつさい黙れ」れびおるふ！？」

なんか華葵みたいな事を言い出し始めた少年を止めたのは少年の知り合いらしき少女とノクターンのマスターだった。二人の拳を受けて床に沈む少年。華葵から逃げながらそれを見ておれは思った。

華葵みたいじゃない。華葵そのものだ。

さぞかし苦労しているであろう少女に合掌し、おれは逃げ回る速度を速めた。

5CⅡ?フェスティバル 文化祭、閉幕 (後書き)

と言う訳でようやくのところ文化祭終了。次からは通常営業に戻ると見せかけて戻らないとか。登場人物紹介全集をやるとか。まあ、とりあえず予告しときましょう。

次回予告

日向中学校。その屋上で彼らは語る。

凡人。暴食少年。無気力少女。快樂求道者。疑問人間。

これは仮想の話だ。それを理解しさあ始めよう。

the next title

「仮想倶楽部」

誇張95,999999%

おまけ 柊木と華葵の夫婦漫才

(フェードイン)

「……おい、なんだこれは？」

「なんらかのタイトルらしいですよ。……しかし間違ってますよね、このタイトル」

「まあそうだな」

「私だったら先輩と架恋のラブラブ、トークってタイトルにします！」

「ああ、そう言うと思ったよ。……で、俺達は今から何をすればい

「いんだ？」

「私とのラブラブウフフな会話をするんですよ！」

「絶対違うだろ」

「むうう、つれないですねー先輩。まあいいです。これもツンデレと言っ事で諦めましょう……はっ、先輩のツンデレな台詞を想像したら萌えてきました！」

「萌えるな頼むから。ん？ 華葵、その紙はなんだ？」

「え……あ、これですか？ なんかこのコーナーに関係する何からしいですよ。……あ、そうです、先輩、この紙に書いてある事を読んでください！ そうすれば早く終わりますよ！」

「……あー、まあそんなんで早く終わればいいがね。なにになに……。『感想、批評、質問、助言、要望等待ってます。……べ、別に貰っても喜ばないぞっ！』……って、おい華葵。なんだこれ」

「キヤー、先輩ツンデレですっ！」

「よし、質問だ華葵。これを書いたのはお前か？」

「前半の方は違いますけどね。後半のツンデレ台詞は私が書きましたっ！」

「……はあ」

「あれ？ 先輩どこに行くんです？」

「帰る」

「えー。先輩、私とのラブラブトークは？」

「無い。じゃあな」

「……ホントに行っちゃいましたよ、もう。……はっ！ これは一種の作戦ですね！？ 私が追い掛けた直後に現れて「寂しがり屋だなあ。しょうがない、ぼくの懷に飛び込みなさい」と爽やかに言う作戦！ フッフ読めましたよ先輩！ さあ我慢比べと行きましょう！」

（無論そんな事はありません。柊木君は普通に家に帰りました）

(フヘーアド)

登場人物全集と用語集（前書き）

さつさと書いたので不足している部分があるかもしれません。御容赦を。

ネタバレ注意

登場人物全集と用語集

登場人物紹介全集の見方

台詞（どっかで繋がってるセリフもあるのでじっくり見てください）

名前

性別

容姿

職業

備考

1 A

「ねえねえあれ何！？ 気になる気になる！ 気になるから調べて来ていいよね！」

シラキ
白木

女

黒いショートヘア。顔立ちは可愛い方に入る。

日向高校一年生

何でも知りたがるため、学校内では破壊者と呼ばれている。多分B型。

「だあ、良い訳ないだろ！ ちつとは制限しろ、って聞いてねえ！？」

クロキ
黒木

男

立派なアホ毛の持ち主。顔立ちはかっこいい方。

日向高校一年生

何でも知りたがる、白木を常に抑制しているため、
『対破壊者最^{たいはかいしやさいし}終防衛壁』と呼ばれている。
多分A型。

「……私になにか？」

灰谷^{ハイタニ}

性別不詳。

肩まである黒髪。顔立ちは中性的で男か女かは不明。

日向高校一年生

自称傍観者。多分AB型。

1B

「壊されたい奴あかかってこい！」

ハナアオイ^{ミスズ}
華葵美鈴

女

一つに束ねた黒髪。鋭い目つき。

不明

男っぽいけど女。元破壊者。現在は朝霧荘に住んでいる。

「ダリい」

少年

男

金髪に染めたツンツン頭。

学生

改心したらしい。が、この先登場しない。

「だああ、離れる華葵！」

ヒイラギ マコト

柊木信

男

平凡。

日向高校二年生

平凡な少年。ツツコミ役。

「待って下さい、せ〜ん〜ぱ〜い♪ 私と一緒に愛を育みましょう

！」

ハナアオイ カレン

華葵架恋

女

明るいつ茶髪（地毛）に可愛い顔立ち。

日向高校一年生

柊木 信に片思いしている少女。もし柊木の出番が無くなれば必然的に架恋の出番も無くなる。一蓮托生。ちなみに一年生のマドンナで、ファンクラブがある（本人非公認）。

「人の恋路を邪魔する奴はー……アルキメデスに蹴られて死んでしまえ？」

ミツムラ ミタマ

光村三珠

女

おかつぱ頭の少女。胸は無い。本人も気にしている。

日向高校二年生

剣道部主任。柊木からは「性悪女」と呼ばれている。二年生ガールズトリオの斬り込み隊長。可愛い顔立ちであり、それを利用して中学校の時には食べ物で沢山もらっていた。

「羊に蹴られてだよ……三珠ちゃん」

三浦 ミウラ くるみ

女

黒い背中までかかる黒髪に気弱そうな目つき。胸は割とある。

日向高校二年生

やや気弱な少女。最近、少々天然ボケな所があると発覚した。二年生ガールズトリオのブレーキ役……なのだが全然ブレーキとして使えない。

「……うつん、ここは馬やろって突っ込むべきなんか、それともく
るみと一緒にボケるべきか……迷うわほんま」

菱谷 ヒシタニ エリ 絵理

女

黒いショートヘアに平凡な顔立ち。

日向高校二年生

似非関西弁を喋る。二年生ガールズトリオの火付け役。

「……ム、なんだか最近、背筋に悪寒が走るナ。……風邪かネ」

ハロルド・ディスクレイス

男

肩までかかる黒髪。顔立ちは整っている。

日向高校二年生

クスノキ
楠商店に居候している。あだ名はマッドサイエンティスト。何故か最近背筋に悪寒が走るらしい。

2 B

「……さて、行くとするか」

玄狼 ゲンロウ

男

ボサボサの黒髪に死んだ魚のような眼（神社仁曰わく）。

喫茶店ノクターンの従業員

元殺し屋。昔は黒いフードを好んで着ていたが、今は普通に色んな服を着る。

「お引越し」

「お引越し」

ミオ・パイルレット

マオ・パイルレット

男＆女

可愛らしい顔立ち。将来は有望らしい（神社仁曰わく）

元破壊者。ミオが白髪で兄。マオが黒髪で妹。一人称は両方「ボク」。現在は玄狼と一緒に居る。

「どうしたの、ハロルド。……風邪？　じゃあ風邪薬でも飲みなさい」

楠風樹

クスノキ フウジュ

楠風樹

女

背中まである茶髪。

日向高校三年生

楠商店の次女。

3A

「誰がツンデレよ！」

ミハタニシキ

美端西姫

女

茶髪につり目。

日向中学二年生

友人である聖曰わくツンデレ。『怒濤烈虎』と言う通り名の主。

「今日もハニーはツンデレだなあ」

ミハタ ニシキ
深旗錦

男

茶髪に整った顔立ち。だが変態。

日向中学二年生

自称愛の求道者。その実態は変態。顔立ちはわりかし整っているが、変態。『純正善行』と言う通り名を持つ。けれどやっぱり変態。

「あ、一番星見つけ」

コクトウ ヒジリ
石堂聖

女

黒髪に綺麗な顔立ち。

日向中学二年生

キョウカイノシロアクマ
教会之白悪魔と言う通り名を持つ。苦手な人は居候している教会の持ち主の息子。

3 B

「今日も平和……だよな？」

モトムネ コセキ
百棟弧赤

男

茶髪でやや頼りなさそうな顔立ち。

日向高校二年生

自らの体が傷付こうとも別に気にしない少年。そのため兄である

蒼空や、妹である縁は彼のその性格を直そうとしている。

「あ、こっきー。見せたい物があるんだけど」

シキミギ ホオズキ
櫛木鬼灯

女

栗色の髪

日向高校二年生

オカルト大好き少女。色んな情報源を所有している。

「……む。弧赤、私はこのスイーツフェスティバルとやらに行ってみたいのだが」

メリー・ミイ

女

黒髪に小さく可愛らしい顔立ち。

元死神

眼帯の少女。自称弧赤の妻。ちっちゃい彼女に「小さい」は禁句。

「あたしの名前は百棟 縁！ 通りすがりの妹なのさ！」

モモムネ ヨスガ
百棟縁

女

茶髪に活発そうな瞳。

日向中学二年生

元気洩刺元気娘。

「いや、ちょっと待って下さいよ、神社さん」

モモムネ ソラ
百棟蒼空

男

茶髪眼鏡。柔和な顔立ち。

会社員

神社 辿理の彼氏。

「ニヤア」

影猫エイビヨウ

雄

使い魔

猫。いつもは主人であるメリーの影に入っている。将来の夢は猫又。

「グキヤキヤキヤキヤ！」

異形

男

化け物

メリーと影猫によって瞬殺された怪人。生き肝を収集していた。

4 A

「毎度有り」

カミヤシロ シン
神社仁

男

束ねた黒髪に鋭い目つき。

喫茶店ノクターンのマスター

コーヒー馬鹿。玄狼とは話が会う（主にコーヒー関係で）。

「い、いらっしやいませ。ご、ご注文は何にしましゅか？ ……す、すいません。噛んじやいました……」

アララギ ゲツカ
蘭月架

女

黒髪に気弱な顔立ち。

喫茶店ノクターンの従業員

玄狼が来るまでは喫茶店ノクターン唯一無二の従業員だった。恥ずかしがり屋であるが常識人ではある。

「蒼空くん！ いつも言ってるように私の事は辻理かテンちゃんなど好きに呼ぶように！」

カミヤシロ テンリ
神社辻理

女

黒髪に綺麗な顔立ち。

会社員

恋愛依存症。現在は落ち着いている。百棟 蒼空の彼女。

4 B

「……モア。そこらへんで止めといた方がいいよ？」

ユイキ シンワ
結木森和

男

黒髪に優しそうな顔立ち。

ノイライフキング
元日向高校二年生。現在は『生命無き王』モア・レインレイティアの僕

モアに会う前は至って普通の高校生だった。丁寧に喋る。

「何を言うのよシンワ！ アイスクリーム愛好家のワタシにアイスクリーム10個程度など造作も無いわ！」

モア・レインレイティア

女

ノイライフキング
鮮やかな金髪に赤い眼。
生命無き王

アイスクリームラブな吸血鬼。尋常無い再生力と生命を持ち、身体能力も人間を超えている。メリーとは三年來からの付き合いらしい。

「臓物が餓える……」

狼男

男

白髪混じりの柔和そうな顔立ち。

警察官

夜更けに人を食らう獣人。モアに頭を潰され死亡。死骸はどこかに埋めたらしい。

「さうで、今日は何して過ごそつかな」

ユイキ
結木 リンナ 林奈

女

専業主婦

両親が死んで、身よりの無い森和を引き取った人。森和が居なくなつた為、毎夜、友人に彼の自慢話を電話で親友にしているらしい。

ミスフネ マサカド
瑞舟将門と瑞舟 ミスフネ 真由

男&女

工事長&専業主婦

森和の両親。交通事故により故人。

5 C

「よし、炭酸にハツカ飴を入れてみよう」

カドカワ ソウジ
門川創路

男

目元まで隠す長く伸びた髪。

日向高校二年生

トラブルクッキンググメイ
『迷惑料理製造者』と言う通り名を持つ少年。その料理に気絶しないのは松平のみ（といっても一瞬気絶するようだが）

「何か面白い事無いかなー」

マツダイラ カズヒト
松平和人

男

黒髪で頭にターバンを巻いている

日向高校二年生

常に刺激を求める少年。松平門人の息子。

「後はこの部品を組み込んで……」

ミハエル・ディスクレイス

女

真っ赤な赤毛（多分地毛）に縁無しメガネ。

工学者

ロボット工学の天才でハロルドの姉。大学の寮に住んでいるらしい。

「……あれ、根古御坂。どこに行くんだ？」

ヤッザキ キョウシン
八崎京仁

男

茶髪にライトブラウンの眼。

日向高校一年生

普通の少年。姉が居る。

「にゃはーん、内緒だにゃ」

ネコミザカ ネコミ
根古御坂猫美

女

茶髪に可愛いらしい顔立ち。

日向高校一年生

猫っぽい少女。気紛れ

「おい待て根古御坂！」

クガミケン
狗神健

男

ツンツン頭の黒髪。顔立ちは整っていると言つより可愛いらしい。

日向高校一年生

背の低い少年。突っ込み。根古御坂からはいぬいぬと呼ばれている。

「ふふふ……見れば見る程最高よ……！ ハロルド・ディスクレイ
ス……！」

クルス カネコ
来栖影子

女

黒髪のボブカットに小麦色の肌。

日向高校二年生

コスプレ大好きな少女。最近のターゲットとはある狂科学者。

「嘘だと思つたら思つてみなよ。それが本当に嘘なら君は正しかった。本当に本当なら君は間違つた。分岐点は今だ。……さあ、どうする？」

詐欺師（名前）

男

黒い髪に黒い瞳。整っているが全身黒尽くめで怪しさ満々。よつてだれも近寄らない。

詐欺師（職業）

黒尽くめの青年。矢神 統夜とは知り合いらしい。

「手の平に人と書いてそれを飲み込めば緊張しないそうですっ！

試してみしよう……1、2、3、ごくん。……あ！ 書き終わっ

てから気付きましたが琥金が飲み込んだのは人では無く人ですっ！」

ミハタ コガネ
美端琥金

女

ポニーテールの黒髪。

小学生

西姫の妹で色々と間違った言葉を使う少女。

「……あー。バニラシェイクはやはり美味い」

マツダイラ カトヒト

松平門人

男

無精ひげにくたびれた顔立ち。

公務員

松平 和人の父。リーダー格。

「おい、ケチャップ貸せ」

キモト トモキ

木元朋樹

男

冷静な顔つき。

公務員

冷静沈着な青年。石原とは仲が悪い。ひっくり返してもキモトトモキ。

「自分で取りなさいよ！」

イシハラ ホツミ

石原穂積

女

気の強そうな顔立ち。

公務員

強引な女。木元とは仲が悪い。

「えーと、小森さんそんなに食べるんですか？」

ノガイ クロル
乃崖黒琉

男

黒髪。整っているには整っているがヘタレオーラの所為で台無し。
タクシードライバー

気弱な青年。運転手。

「当たり前だよ！ このくらい朝飯前さ！」

コモリリン
小森燐

女

黒い束ねた髪に艶やかな顔つき。

公務員

豪快な女。みんなの姉御。希望している愛称は『もりりん』。

「それにしだってビックリマック四個は多すぎ……」

スミシロ ヤヨイ
澄代弥生

女

肩まで伸びた茶髪に眠そうな目。

花屋の店員

もの静かな女。旧姓は柊木。

「……何してるの？ ヒナタ」

ヒトトセ シンキ
一年四季

女

腰まである黒髪に可愛い顔立ち。

日向高校一年生

予知の力を持つ少女。

「ラジオ体操だ」

ヒュウガ ヒナタ

日向日向

女

茶髪にツインテール。

日向高校一年生

一年 四季の友人で日向市長の娘。ヒナタヒナタと言ったら怒る。
ヒュウガヒュウガでも。

「トマトアイスは最高だ！」

先生

男

金髪に整った顔立ち。

不明

ヒナタ
一年が喫茶店にて見つけた男女の男の方。トマトアイス信奉者。
この先の登場は不明。身体能力はとんでもなく高い。

「そうですか。ところで仕事が溜まっておられますよ?」

女

女

真っ黒な髪に整った綺麗な顔立ち。

不明

一年が喫茶店にて見つけた男女の女の方。丁寧な口調で喋る。

「……何か用ですか?」

コクトウ ムヤミ

哭塔無闇

女

三つ編みにした真っ白な髪に透き通るような白い肌。
日向高校一年生

白い髪の美少女。だが素っ気ないためマドンナには選ばれ無かった模様。

■■■■の■■■（現時点では公開不能）。

「よし、今日の夕飯はカレーだ」

ヤガミ トウヤ
矢神統夜

男

黒髪。顔立ちは整っているがいつも疲労した顔のため台無し。

アサギリ
朝霧荘の管理人兼料理人兼日向高校の教頭

元暗殺者。四年前に脱退。“裏側”に置いて今現在伝説と呼ばれている。

「……なんか用か？」

文化祭荒らし

男

不明

文化祭にて強盗を働いた男。現在は警察に居る。かませ犬？

以下、用語解説擬き

裏世界

“裏側”

マフィアや犯罪者などが居る世界
三つの系統に別れている。

組織

三つの系統の一つ。主にマフィアや極道などが属す。

犯罪

三つの系統の一つ。詐欺師などの犯罪者が多い。

武力

三つの系統の一つ。破壊者、殺し屋、暗殺者などの総称。

十指
ジユウシ

三つの系統、武力の世界での最高称号。

全員で十人居る。

サイレント、マッドネス、ブレイカークラッシャーオールクリア、エンフティブランク
音無し、気狂い、破壊殲滅、死角無し、虚無などの呼び名を持つ。

サイレント
現在は音無し——矢神統夜の脱退により実質九人。今の所矢神の後釜に座る物は居ない。

ちなみに全員銃弾を避けたりする程度の運動神経がある。

幻想

呪い

この世界に存在する魔法に近い物。噂では千年の時を生きる呪いもあるらしい。

呪物
アンティク

呪いの力が封じられた物。

魔力

悪魔、死神などが体から常に放つ波動のような物。

6 A 仮想倶楽部

「なー、世界は何で出来ていると思うー？」

こんな問い掛けが有ったらあんたはどう答える？ あ、ちなみにこれは俺が言ったんじゃないからな。言ったのは俺の友人だ。ちなみに俺はこう答えた。

「辺り見回してみる。そうすりゃわかる」と。

んで、他の奴らはそれぞれ自由に答えやがった。

「食料」

だとか

「知らない」

だとか

「世界が何で出来ているかって？ 快楽さ」

だとか

「解らない事だらけですよー？ この世界は」

とか、まあ個性的過ぎる回答ばかりだ。

で、これは俺達のそんな日常の一コマ。良かったら見てくれ。

見上げた空は何処までも高く、澄んでいた。

「あー。すっかり秋だな」

「そうね」

俺が呟くと、床に寝転がって本を読んでいた郡山「オリヤマ」が無気力に返答した。そして怠そうに言葉を続ける。

「……で、いつまでそうしてるつもり？ 時間は永遠じゃない。有限なのよ？ やるなら早くやりなさい、みたらし団子」

「……てめえ、そのあだ名はやめろって前々から言ってたんだろ……」

！ 確かに俺の名前は御手洗ミトラシ タンゴ断悟だが、いつもは御手洗か断悟、も

しくは御手洗、断悟つて言う風に区切れって言ってるだろ……！」

「別に良いじゃない。あたしなんか『かき氷』よあだ名が。名前にこおりが二つ入ってるからってこれは酷すぎない？　せめてシャーベットとかにしてくれないかしら」

「文句が有るなら唐崎^{カラサキ}に直談判してみろよ。別にあいつは強制してないぞ。変えたきや変えろ」

「嫌よ。直談判なんて面倒臭い。第一御手洗。あんただって変えてないじゃない」

「俺の場合は他に付けようが無いって言われたんだよ」

「じゃああたしの時にもそう言うかも知れないじゃない」

「——……あー、確かにな」

「……で？　現実逃避もいい加減にしなさい。今はまだ飛び降りようとしてないけど……そろそろ時間の問題よ？」

……現在俺が居るのは日向中学校の屋上（ちなみに放課後）。人影は俺と郡山とそしてフェンスの外に佇む少女の三人。

簡潔に言おう。俺と郡山はたった今、自殺しようとしている現場に遭遇している。

……さて、どうするか。

先生を呼ぶか？　いや、ここは立ち入り禁止になっているからややこしい事になる。この案は却下だ却下。……ん？

「なあ、普段はここに鍵がかかっている筈なんだが。あいつはどうやって入ったんだ？」

「ああそれね。簡単よ。鍵が壊されてたわ。あの子の仕業ね」

……ああ。そう言えばさっき扉の前に立った郡山が扉を見て不思議そうな表情になってたな。

疑問も解消された所で俺は再度考える。

いや、もう選択肢は一つしかないな。

俺が助ける選択肢しか。

決意し、俺は少女に近付いた。

背後まで行き、ポンと肩を叩く。少女は「ひやうゆ!？」と奇声を上げ、こちらを振り返り、

――落ちた。

「……あ」

「きゃあああああつ――!」

悲鳴を上げ俺に手を伸ばす少女。俺は慌て身を乗り出しがしり、とその手を掴んだ。

「ぐっ……!」

重力と重量が手に伝わる。一瞬放しそうになったが、ぐっとなえ、足を踏ん張った。

少女を見る。少女は目を瞑っていてピクリとも動かない。どうやら気絶したようだ。

ビクリ、と腕が軋む。数分も持たないと俺は思った。

とりあえず郡山に助けを乞おう。

そう思い、郡山が寝そべっていた所を見る。が、そこには誰も居ない。視線をずらし屋上唯一の入り口を見る。ここに来た時確かに閉めた筈なのにドアは何故か開いていた。ここから導き出せる結論は唯一つ。郡山の奴、逃げやがった。

ぎしり、と手すりが軋む。やばいな。早くなんとかしなければ。

俺が焦っていると、入り口から声がした。

「おーい、断悟。さっきすれ違った郡山から聞いたんだけど、お前食べ物持つてるんだって? 本当か?」

「……この状況を見てよくそんな台詞が吐けるな、イチギ壱木」

俺は首を捻り、声がした方を見た。そこにいたのは黒い学生服を来た童顔の男。

……なるほど。こいつは結構早く来るからな。郡山もそれを見越してこいつを呼びに行ったんだろ。……それよりもお前が手伝えよとツッコミを入れたい。

とりあえず声をかける。

「手伝え壱木。手伝ったらなんか買ってやる」

「本当か!？」

キラン、と目を光らせる壱木。俺はもう一声かける。

「ああ本当だ。なんならコンビ二のデカプルパフェプリン(¥444)でも良いぞ」

「何をすればいいんだ? 早く教えてくれ!」

「よし、この女を引き上げるの手伝え」

数十秒後。俺は息も絶え絶えに寝転がっていた。傍らには少女。

「なあー断悟ー。このうぐいすパン食っていいか?」

「ふ、ざ、け、ん、な」

息も絶え絶えだから喋るのも辛い。俺はなんとか体を起こし、壱木の手から本日のおやつ代わりのうぐいすパンを奪い取る。

「んで? こいつ誰なのさ。断悟の彼女?」

「んな訳無いだろ。彼女居ない歴〃年齢の俺に」

……言ってて悲しくなってきた。

ため息を吐き、俺はうぐいすパンの袋を破る。そしてうぐいすパンをかじりながら、後ろを見る。

「……で、いつまでこつちをみているつもりだ。唐崎」

「おや。気付いていたのかい?」

振り返った先。そこには学生服を着た長身の、銀縁眼鏡をかけた男が立っていた。

唐崎刀牙。カラサキ トウガ俺の友人で有り、郡山の幼なじみで有り、“自称”快樂

楽求道者で有りそして……“仮想倶楽部”の部長で有り創生者。

「まあな。と言ってもお前がいつ来たかしらん」

「君が自殺しようとしている少女を引き上げている所からだよ」

「……なんで助けなかった?」

「助ける? 誰がそんな事をするのかな? 助けると云うのはほら、何らかのメリットが無ければならないんだよ。壱木君だって君が奢ってくれると聞いたからこそ手伝った。これが人として当たり前
の行動だ。そうだろう? 偽善者君」

「……確かにそうだが……」

ちなみに話題に上った壱木はぱくぱくと持参してきたトンカツパンを食べてやがる。

俺の目の前に居る男を睨みつける。唐崎はじつとこっちを見ている。俺はその視線を真っ向から受け止め、言った

「……やっぱりお前は最悪だ」

「誉め言葉として受け取って置くよ」

俺の言葉に唐崎は肩をすくめ、言う。腹立たしい事にその動作は似合っていた。

俺は舌打ちをし、うぐいすパンにかぶりついた。

俺がうぐいすパンを食べ終え、壱木がトンカツパン三個目を食べ終え寝転がり、唐崎が某10円で買える菓子（コーンポタージュ味）をかじり始めた時、郡山は帰ってきた。

でっかい荷物を引き摺って。

「……はあ。ただいま」

「お帰り氷華^{ヒョウカ}。やけに帰りが遅いと思ったらぴよりちゃんを連れてきたんだね？」

「……ええ、そうよ。道連れにしようと思って。どうせあんたの事だからあたしが逃げられないように何らかの手を使って阻むんですよ？」

「うん、正解。伊達に僕の幼なじみをやってる訳じゃないね」

「ええ、そうね」

疲れたように呟き、郡山は荷物を横に置いた。数秒の間の後、むくりと起き上がる荷物。そして言う。

「……むいー。もう少しで憎きあのきょうとーのカツラが取れたのにー」

……この見た目小学生、言動も小学生の女の名前は緋村^{ヒムラ}ぴより。こんなナリだが俺達と同じ三年だ。

きよろり、と俺を見る緋村。そして呟く。

「んんー？ みたらしだんご、その女はなんだー？」

「そのあだ名は止める緋村。殴るぞ。……で、こいつか。こいつは空から降ってきたんだよ。どうやら俺は勇者らしい」

「郡山ー。みたらしだんごが馬鹿になったー」

「放って置きなさい。馬鹿につける薬は無いし、馬鹿に近づいたら馬鹿が移るわ。放って置くのが得策よ」

そう言って冷ややかな眼差しで俺を見る郡山。

ほんの些細な冗談を吐いただけなのに、何故そんな目で見られる。パンパン、と唐崎が手を打ち合わせ、言う。

「んん、まあ、御手洗君が馬鹿になったのはさて置き、始めようか。

――部活動」

仮想倶楽部。

俺達がここ日向中学校の屋上に集まる理由。

ちなみに何をするかと言うと駄弁る。

それだけでクラブになるのか？ と思った人。

その感想は正しい。

クラブにはならない。

当たり前だ。何故なら仮想倶楽部はクラブと名乗ってはいるがクラブでは無い。ただの集まりなのだから。

「さて、今回話す事は学校名物の七不思議だ」

「……学校名物ねえ。確かに七不思議は学校の特産品だが……。日向中学校に七不思議なんてあったか？」

「無いよ。花子さんも増える階段も校長像の目からレーザービームが出ると言っ噂も無い」

「じゃあどうやって七不思議を話すんだ」

「簡単だよ。日向高校の七不思議を話せばいい」

「……まあこの町には中学校は一つしか無いし、高校も一つしか無いから自然とそうならざるを得ないが……。だが日向高校に通っていないお前が日向高校の七不思議を知ってるのか？」
「知ってるさ。僕をなんだと思ってるんだい？」
「変態だろ」

「……快樂求道者さ。あらゆる快樂を求める者。そのためならどんな役に立たない知識でも覚える。……故に日向高校の七不思議を知る程度、造作も無い」

「そりゃ凄いな。んで？ 能書きはいいから早く七不思議を教えてください」

「ふう、せっかちなね。そんなに興味が湧いたのかい？」
「いや、ただ単に早く帰りたいだけだ。そう思ったが声には出さない。」

「まあ僕は人を焦らす趣味は無いし——さっさと話すでしょう」
そう言って唐崎は人差し指を立てる。

「日向高校七不思議その1。爆走する女子高生」

「は？ 爆走する女子高生？」

「うん、どこが七不思議なんだって反応と表情ありがとう。僕も人伝に聞いた話なんだけどね。今の日向高校の名物の一つらしいよ」
「名物……って事は毎回やってるのか……」

「そうらしいよ。とある先輩を追いかけてるって話だけど。まあいいや。で、その2」

そう言って中指を立てピースサインを作る唐崎。

「爆発する調味料」

「……爆発、する調味料……？」

「ん。焦がしチャーハンの話か？」

「全然違う」

いきなり割りこんできた壱木の言葉につっこみを入れて、俺は質問する。

「とうとう狂ったか唐崎」

「狂ってなんかいないさ。誰かが作ったマヨネーズが何故か爆発したらしい」

「……漫画みたいな話だな……」

「そうだね。その3。善人さん」

「は？」

俺は呆けた声をあげる。いやなんだ善人さんって。花子さんの仲間か？

「ん、これは七不思議って言うより噂なんだけどね。とある小学生が車に轢かれそうになった時、日向高校の制服を着た人が助けてくれたんだってさ」

「その人はどうなったんだ？」

「助かったらしいよ。何故か車が真つ二つになったらしい」

「……そっちの方がはるかに不思議じゃないか？」

「まあそうだね。けどほら、今話してるのは日向高校の話だから」

「……まあ、確かにそうだが」

「その4。これはとっておきだよ」

「とっておき？」

「うん。一番謎めいている話さ」

「今までのも色んな意味で謎めいてたが」

「まあ聞きなよ。その4。見えない教頭先生」

「……どういう意味だ」

「日向高校には教頭先生が居ないって事さ。いや、居るらしいんだけど姿を見た人が居ないんだ。教頭が受け持つ資料もいつの間にか机に置いてあるらしいし」

「その教頭は忍者かなにかか？」

「馬鹿だね。忍者がいる訳ないじゃないか」

「……言ってみただけだ」

「そうかい」

そう言っバツクを漁る唐崎。しばらくして知恵の輪を取り出し、いじり始めた。

「？　おい、唐崎。他の七不思議はどうした」

「どうしたもこうしたも。もう無いよ」

「……は？」

「だからもう無い。これで打ち止めお終いだ」

「いや、じゃあ七不思議じゃ無いじゃないか」

「当たり前だよ。第一七不思議その物だって7つ全部言つと呪いだかなんだかにかかるって事で実際には六つだし」

「まあ確かにそうだが……」

「それに」

俺の言葉を遮るように唐崎は言う。

「日向高校は不思議の巣窟だ。これからも増えてくる確率が高い。だから不思議な話が七つも無いなんて怒らなくてもいいよ」

「……そんな所に俺達は来年通うのか……」

「仕方無いじゃないか。日向市には日向高校しか無いんだから」

「そうだけど……な」

俺はため息を吐いた。ふと、自殺未遂事件の女を思い出した。

「そう言えばこの女はどうすればいい？まだ気絶してるが」

「ん？　僕が連れてくよ」

「言い訳とか考えてあるのか？」

「ああ問題ない。貧血で倒れていたって先生に言つとくつもり」

「そうか」

相槌を打つと、唐崎は立ち上がり、少女を抱え慌ただしく階段を降り始めた。演技が上手い奴だ。降りる唐崎を見ながら俺はそう思った。やがて階段を下り終えた唐崎から目を離し、辺りを見回す。郡山は本を読んでいて、緋村はキャンデーを食べていて、壺木は寝転がっていた。先ほどから会話に加わらなかった理由はそう言う事らしい。

俺は鍵が壊れたドアに向かう。部長である唐崎は今居ない。いや、あいつの事だからもう今日は帰ってこないはずだ。

ドアを開け、階段を下りる。

とりあえず帰って寝るか。そう思った。

——その時俺は知らなかった。明日の放課後の集まりに自殺しようとしていた少女が加わる事を。

6 A 仮想倶楽部（後書き）

登場人物紹介

ミタラシ ダンゴ
御手洗断悟

男

日向中学三年生

凡。あだ名は「みたらしだんご」。

コオリヤマ ヒョウカ
郡山氷華

女

日向中学三年生

無気力を目指す少女。けれどいまいち無気力になれない今日この頃。
あだ名は「かき氷」。

イチギ コクゲン
壺木黒彦

男

日向中学三年生

暴食少年。なにかと物を食べているが太らない女の人が羨ましが
る。体質。あだ名は「胃袋」。

カラサキ トウガ
唐崎刀牙

男

日向中学三年生

快樂求道者。様々な快樂を求めるため、今日も色々なんかする。あ
だ名は無し。

ヒムラ
緋村 びより

女

日向中学三年生

疑問追求者。様々な事を疑問に思い、周囲の人に問う。外見、行動は小学生。あだ名は「ひよこ」。

自殺しようとした少女。（名前はいつか出る…… 筈！）
女

日向中学三年生

ネガティブにネガティブを重ね足したくらいネガティブ。

と言う訳でやっとこさ最新。

次回予告

日向市の西にある朝霧荘。そこには破天荒な人間が住んでいる。これはその管理人と住人の日常の一つ。

the next title

「朝霧荘日常録」

期待せずにお待ちを。

おまけ

西姫と錦のどつき漫才

（フェードイン）

「……何よこのタイトル」

「そうだ、そうだ！ここは錦くんとハニーのイチャイチャ
トー
クにするべ——」

ドゴ。(ボディブロー)

「——ぎぼヴるっ!？」

「それはより却下。……なんでこいつと2人つきりなのよ。さっさと終わらせて帰りたいわ」

「そ、そんな言葉も素敵だよハ——」

ドガア。(かかと落とし)

「——二ふらむ!」

「さっさと終わらせたいからもう何も言わないで。……聖曰わくこの紙に書いてある事を言えがいいのね。えっと、『感想、批評、質問、助言、要望等、待ってます。P.S. 登場人物紹介全集に容姿を追加しました。ついでに設定も何点か。よろしければ見てください』。……その後に『か、勘違いしないでよ。べ、別に貰っても喜ばないんだからっ!』とか書いてあるけどこれは無視ね」

「なっ! 僕の仕掛けた罠に引つかからないとは……さすがハニー、冷静だ……! さあ、僕と一緒に同じ墓に——」

ゴッ、ドカーン。(アップパー)

「入りたければ一人で入れば? もう帰っていいわよね? じゃ」

「そ、そんな言葉も素敵だよハニ……い」
ガク。

(フェードアウト)

6 B 朝霧荘日常録（前書き）

遅れました……！ とりあえず最低でも1ヶ月に2つは……！

6 B 朝霧荘日常録

ヤガミ
矢神視点

「これはなんて読む？」

昔懐かしいのちゃぶ台。そこで双子が勉強をしていた。
覇峰^{ハミネ}が紙に漢字を書き双子に見せる。

「読めません！」

「解りません！」

双子が同時に答える。

覇峰がニヤリと笑った。

「正解は融^{イタチ}だ」

よし突っ込もう。

「オイこら待て覇峰。どうやったら小学校の漢字でそんな難しい漢字が出てくる」

「出て来ないに決まってるだろう。呆けたか矢神」

……殴っていいか？

ため息を吐き、深々と床に座る。そんな俺に覇峰は言う。

「矢神。腹が減ってきた。何か作れ」

「……解ったよ。もう昼だ。昼飯にしよう」

管理人を顎で使つなと言いたくなつたが、言ったら面倒くさくなるので言わない事にした。再度ため息を吐き、立ち上がる俺。……
卵が沢山あつたから……オムライスで良いか。

料理の内容を考察しながら俺は戸を開け廊下に出る。

台所に向かう道中、巴手^{ハテ}と会った。

「あ、あ、あ、えっと、おはようござむきゅっ!？」

言葉の途中で躓き転ぶ巴手。顔面から床に衝突。
いつもの事なので気にせず俺は巴手に挨拶した。

「おはよう巴手」

「……うう。……おはようございます、統夜さん」
鼻を押さえながら恥ずかしそうに挨拶を返す巴手。
俺はそんな巴手の様子に苦笑しながら巴手と別れた。

台所に入るとサンダースがプリンを食べていた。

「ン？ ……オー、トーヤ。おはようございマッスル！」

「……サンダース。そのギャグは止める。寒気がする」

「寒気？ アア、ワタシのこのセンスに寒気がしたのデス？」

「いや全く」

「オウ、シヨック！」

大げさなりアクションをするサンダース。

それを無視し、俺は冷蔵庫を開けた。さて、ちゃっちゃと作るか。

料理を作り終えて俺は覇峰の所に戻った。

「オムライスか」

「……そうだが。文句でもあるのか？」

「いや、ない」

「そうか」

「ねえ、ボクのは？」

「ねえ、ワタシのは？」

「2人揃って言うな。ちょっと待ってる。流石に俺も六人分を同時に持てん」

そう言い残し、俺は台所に戻った。

「あ、ありがとうございます」

「どういたしまして」

部屋に戻っていた巴手にそう言葉を返し、俺は踵を返した。

サンダースについては台所で食うらしい。手間が省けた。

華葵と最近加わった玄狼はそれぞれ仕事。華葵は午後に帰ってく

るらしいが……。

そんな事を考えながら俺は覇峰の所に自分の分を持って戻る。

「なんだ、また来たのか」

戸を開けると覇峰がオムライスを食べながら俺を見て言った。双子は隅でババ抜きをしている。

「……あのな」

俺は空になった双子の皿をどかし、自分のオムライスをちゃぶ台に置いた。そして言う。

「ここは俺の部屋だ！来るのは当たり前だろ！　って言うか俺の方がまだ居たのかって言いたいよ！」

「別に良いじゃないか。お前の部屋が一番でかいんだし」

「良くねえ。確かに俺の部屋はこのアパートの中で一番広い方だ。」

……だがな。それでも4人は無理なんだよ。食べ終わったら帰れ」

「帰るも何も。私はここに住んでるんだが」

「部屋に戻れ」

「嫌だ。良いじゃないか。こんなに可憐な女が部屋に居るんだぞ」

「お前は可憐と言うより凜々しいだ」

「お前の疲労顔を直すお手本になる」

……耐えろ。耐えろ俺。こいつの言葉なんか昔コンビを組んでい

キョウカ

た響歌の「百回回って自害しろ」とか「五千万円稼いで、清水寺か

ら飛び降りろ」とかの理不尽すぎる命令に比べればはるかにましだ。

……というかあいつの命令、全部最後には自害しろとかだったよな。

まだ続く覇峰の暴言を聞き流し、俺はオムライスを食べる。……

うん、我ながら悪くない味付けた。

覇峰も無駄だと気づいたのか暴言を吐くのを止めた。しばしの沈黙。

「……ああ、そう言えば矢神。頼みがあるんだが」

沈黙を破るように覇峰が俺に言う。

口の中の物を咀嚼し、飲み込んでから俺は聞く。

「頼み？　何のだ」

「金の引き出し」
「……自分で行けよ」
「今日は午後から道場に行くんだ」
「解ったよ。引き出すついでに家賃三万円も引き出す。いいな？」
「了解了解。んじゃこれ暗証番号と引き出す金額だから」
「……不用心だな。もし俺がお前の金を抜き取ったらどうするんだ」
「勿論ぶん殴る」
「……言うと思ったよ」
「呟きながら皿を持ち、立ち上がった。」
「じゃ、行ってくる」
「もう行くのか？」
「さっさと済ませたいからな。じゃ、行ってくる」
「んあ。行つてらっしゃーい」
「「行つてらっしゃーい」」
覇峰の言葉に倣うように双子が笑顔でそう言う。それを背中であきながら俺は戸を開けた。

「——次、299の番号でお待ちのお客様」
アナウンスの声が響く。俺はそれをぼんやり聞きながら見るともなしに雑誌を見ている。
雑誌には「カツとなった少年の恐怖！！ 記者は見た！ 子供の
中に潜む悪意！！！」と書かれた記事が乗っている。
……悪意ねえ。
悪意つてのはもつと残酷で残忍で最悪だ。
それに比べれば子供がカツとなつてやつたくらいの事、年端も行
かない子供がフォークを持って襲いかかってくるくらいの出来事だ。
そんな事をぼんやりと思いながら俺は雑誌を捲る。
「——次、300の番号でお待ちのお客様」
——ん。

整理券を見る。書かれている数字は300。
立ち上がり、俺は受け付けに向かった。

店員から引き出す金額＋家賃を受け取る。
さて、どうするか。

暫しの思案後、行動を決める。
とりあえずスーパーで買い物だ。もしかしたら安売りしているかもしれない。

そう思い銀行の向かいにあるスーパーに向かう。

数分後。

俺は満足な気持ちでスーパーを出た。
うん、まさか米が安売りしていたとは。割と得した。

これからは広告を必ずチェックしよう。そう思いながら俺は帰路についた。

華葵視点

「結婚しよう」

歩いているとそう声をかけられた。

「は？ ……なんだそりゃ」

声の主にオレは問う。

「ん？ なんだい聞こえなかったのかい？ じゃあ仕方ない、もう一度言おう。結婚しよう」

「いや、それは聞こえてた。幻聴だと思ったかったがな。オレが聞きたいのは――」

首をめぐらし声の主を見る。

灰色の中折れ帽を被った黒髪の青年。顔立ちは、まあ悪くないだろう。――ただ。

「なんで見ず知らずの男に求婚されなきゃならないんだ」

オレはこいつの名前も何も知らない。と言うか今が初対面だ。

男は暫しの沈黙後、

「ああ、ああ！ そうだったねマイハニー！ ぼくとした事が大切な事を忘れてたよ！」

そう叫び、中折れ帽を取り、頭を下げた。

「ぼくの名前は唐崎銃牙。カラサキ ジュウガ いや、結婚したら君と同じ名字にするから——えっと、マイハニー、名前は？」

名前を聞いてきた唐崎某。突っ込みたい所が色々あったが、全て飲み込む。

とりあえず名乗っているのにこちらが名乗らないのは礼儀に反する。なのでしぶしぶオレは名乗った。

「……ハナアオイ ミスズ 華葵美鈴だ」

「華葵！ 良い名字だ！ ぼくの唐崎よりかはるかに良い名字だ！
そして下の名前も良い！ 美鈴か……可愛い名前だね。さあこれにサインを——」

「……誰がするか」

差し出された婚姻届と書かれた書類を受け取りビリビリと破る。

「ああ、なんて事するんだマイハニー！ それは君とぼくを繋ぐ虹色の架け橋なんだよ！？」

「常識的に考える」

「常識的に……？ 成る程解ったよマイハニー！ 恋人から始めよう！」

「初対面の男と付き合えるか！」

「照れ屋なんだねマイハニー！」

「……」

プツン。

矢神 視点

「！」

朝霧荘が見えてきた辺りで目の前を黒い物が通り過ぎた。響く轟

音。

俺は身構えながらそつちに視線を移す。

「……なんだ、これ？」

轟音の元凶はゴミ箱に上半身をつ込みコンクリートに寝そべった男だった。何らかのパフォーマンスか？　と思つたが途中で一人、この惨状を作る奴が居ると云う事を思い出す。俺がその名前を思い浮かべると同時に声が聞こえた。

「——つたくよお。ちつたあ人の話を聞きやがれ」

いつにも増して乱暴な口調で言葉を紡ぎながら現れる女。

「……華葵か。どうした？　いくらむかっているからといって殺人を冒すお前じゃないだろ。と言うかそこら辺の物をぶっ壊して気を紛らわせるのがお前だ」

「……その納得の仕方はどうかと思うがよ……。ま、何時もの所業が所業だからな。否定はしない」

「……で、何があつたんだ？　この男にセクハラでもされたか？」

「……あー、まあそんな所だ」

「へえ。華葵にセクハラするとは——無謀なのか無知なのか」

「どつちにしたつて無えのは間違いないがな。……ハア。なんか疲れたから帰る。矢神。そいつの後始末は頼んだぞ」

そう言つて朝霧荘に向かう華葵。それを見送りながら、この男をどうするかと思つていると、いきなり男が飛び起きた。……ゴミ箱を被つたまま。

「あのパワー、そして体を走るこの衝撃……！　間違いない！　これは——恋！」

よく解らない事を言いながら男はフッフッフッと怪しげに笑う。
「そして彼女は照れ屋……フッ、燃えて、いや、萌えてきた！　まつてくれよ、愛の求道者のこのぼくが、君をぼくの虜にしてあげよう！」

一層訳の解らない事を言いながら男はゴミ箱を被つたまま、走つた。直後派手な音を立てて壁にぶつかる。

ゴミ箱を取り、よろけながら走り去る男。

……何だったんだ？

俺は首を傾げた。

○

日向市南にあるとあるコンビニ。

「全員動くな！ 金を出せ！」

その中で黒い目出し帽を被った男が出刃包丁を店員に突きつけていた。——強盗だ。

「もたもたすんな！ さっさと金を出せ！ 刺されたいのか！？」

「ひ、ひいいい」

情けない声を上げ、店員は金を出し始める。強盗は周囲を警戒しながらそれを待つ。

緊迫した雰囲気が店内を包み込む。

——不意に自動ドアが開き、緊迫したその雰囲気が破られた。

「ん？ ……なんだ、強盗か」

自動ドアの外。緊迫した雰囲気を破ったスーツ姿の女はなんとも無さそうにそう呟いた。

「——っ、だ、誰だデメエ！」

「誰だと言われてもね。ただの通りすがりの会社員だよ」

「……刺されたくなかったら手を上げて中に入れ！」

出刃包丁を見せびらかし、強盗は女にそう強要する。それに対する女の返答は、

「嫌だ」

その一言だけだった。

「……ッ、な、な、な、何だと！？」

動揺を目と声に現しながら強盗は焦った。

普通、出刃包丁を出されたら拒否する事が出来ない筈だ。だがこの女は拒否した。

なんでだ？ 俺は他の奴らより優れてる筈。出刃包丁なのもそこら辺に捨てれば俺だとバレないからそうしたんだ。銃を持って強盗した癖に捕まった間抜けな奴らとは違うんだ！

なのになんでこのアマはこんな顔をする？ ——は、どうせ俺には人一人刺せないと思っっているんだろう？ 残念だったな！ 俺は特別だ！ 普通のお前ら如きに特別な俺の行動を止められるか！

支離滅裂な思考の終わりと共に強盗は出刃包丁の切っ先を女に向け、

「おおおおおおおおオオオオオオオオ！」

雄叫びを上げ、突進した。

店内に悲鳴が轟く。誰もが腹から血を出す女を思い描いた。

そして数秒後にそれは現実になる筈……だった。

女が呟く。

「……程度が知れるな」

次の瞬間、男は床に寝転がっていた。

「——？、！」

驚愕の表情を作る男。

その理由は喉に突きつけられた出刃包丁にあった。

「んーと。動くなって言うのかね。この場面」

男の顔の横に跪き、出刃包丁を喉に突きつけながら気怠そうにそう呟く女。

（な……。なにが起きた？）

混乱する男。その混乱を見通しているかのようなタイミングで女は問う。

「で、どうする？」

「——……な、何がだ？」

「このまま死ぬかって事。嫌なら地獄のような痛みを受けて気絶。どれが良い？」

気怠そうに恐ろしい事を言う女。

「な……」

言い渡された言葉に愕然とする男。

女はそんな男を眺め、

「十秒以内に前者か後者か決めて。ああ、もし選べなかった場合は前者ってことで。――10」

カウントダウンを始めた。

淡々とカウントダウンをする女に男は呆然としながらも彼女の力
ウントダウンが4秒内になった所で叫んだ。

「ここここここ、後者だ！ 後者にしてくれ！」

「解った」

カウントダウンを止め、女は男の顔を覗き込んだ。

「……？」

最初、自分の顔を覗き込む女に男は戸惑いの視線を送ったが、や
がてその目が恐怖に彩られる。

「――ッヒッ、ヒギヤアアアアアアアアア！」

店内に悲鳴が響き渡る。

数分後。気絶した男は店員が通報したと思われる刑事に連行され
た。

パトカーに載せられる男。それを背に女はミートスパゲティと鮭
おにぎりが入った袋を携えコンビニから離れた。

不意に電子音が響く。女は一瞬動きを止め、すぐさまスーツのポ
ケットに手をつ込み、携帯を取り出した。通話ボタンを押し、耳
に当てる。

「……はい、もしもし。――仕事ですか？――はい、解りました。
とりあえずタご飯を食べてから行きますので。――はい、1時間以
内には。――はい、では」

しばしのやりとりの後、女はため息を吐いた。

「……まったく。今日は久し振りに弟に会おうかと思ったのに。こ
れじゃあまだ会うのに時間がかかるなあ」

そう言いながら近くにあったベンチに座る。袋からミートスパゲティを取り出し、一言。

「……あ。フオーク忘れた」

矢神視点

翌日。俺はさっさと作った朝ご飯を食べながら新聞を見ていた。

「……ん？」

ふと、新聞の記事の一つが目にとまった。どうやら昨夜日向市の南側でコンビニ強盗事件があったらしい。

強盗はその場に居合わせた一人の女によって取り押さえられたらしい。ちなみに女は強盗を伸した直後ミートスパゲティと鮭おにぎりを買ったらしい。呑気な女だ。

そう思いながら記事を置き、俺はふと眉間に皺を寄せた。

どうやら女は手を使わずに男の顔を覗き込んで気絶させたらしい。俺は嫌な予感がした。

強盗を伸した直後に食べ物を買い、“見る”だけで人を気絶させる女。俺は一人、そんな奴に心当たりがある。

（まさか……な）

嫌な予感がした。それを振り払うように俺は首を振り、新聞を置く。

とりあえず、今日も良い天気だし洗濯物でも干そう。

6 B 朝霧荘日常録（後書き）

登場人物紹介

ハミネ マオ
覇峰真生

女

道場師範

バトルマニア
戦闘狂の女。割と強いらしい。

ハテナ ノコ
巴手菜野子

女

とあるレストランの給仕

何も無い所で転ぶ女。そんな彼女が働いているレストランは何か特殊らしい。

サンダース・M・クリプソン

男

フリーター

金髪の白人の男性。通信空手をしてるっぽいよ。好物はプリン。外国人3人目

カラサキ ジュウガ
唐崎銃牙

男

とあるレストランの店主

中折れ帽を被った青年。唐崎 刀牙の兄。自称、愛の求道者。

強盗

男

ニート

コンビ二強盗をした男。現在は警察に。

女 女

unknown

詳細不明。矢神の知っている人物であり、弟が居る。

朝霧荘日常録とは銘打ってありますが実際には華葵美鈴求婚される、あんど謎の女出現の、朝霧荘まるつきり関係無い今回。

次回予告

10月31日。その日に起こる日常。

the next title

『ハロウィンオブパニック』（仮）

気長にお待ちを

おまけ

く出番がありそうで全然無かった人達く

「……えつと……どこですか……？　ここは」

「オウ！　残念ながらここにココアは無いよ！」

「いえ、ココアでは無くて……」

「じゃあコーヒーなのかい？」

「いえ、コーヒーでもありません……」

「じゃあ——」

「止めるサンダース。話が進まない」

「あ……覇峰さん」

「オウ、ハミーネ！　久しぶり！」

「数時間前に会っただろうが。ったく。巴手、さつさと終わらせるぞ」

「あ、はい。……何をするんですしたっけ？」

「この紙に書いてある事を読めば良い」

「読めば良いんですか？ ……えっと、『感想、批評、質問、助言、要望等、待つてましゅ』」

「……しゅ？」

「ご、ごめんなさい、噛んじゃいました……」

「……お前、本当にとある人種に受けそうな性格だな
「そうですか？」

「ああ。……つと、もう帰っていいよな？」

「あ、はい多分」

「じゃあ先に帰ってるよ！ ハミネ、ハテ！」

「ああ。さつさと帰れ」

7Aハロウィンオブエブリデイ(前書き)

祝、P V 4 0 0 0 & ユニーク2000!来てくれた全ての人に感謝!

7A ハロウィンオブエブリデイ

カミヤシロジン
神社仁視点

10月30日。俺は一人の客とカウンターを挟んで口論していた。
「だからトマトアイスは無いのか!？」

「ねえよ! アイスクリーム屋行け! て言うか喫茶店にそんなマ
イナーなアイス期待する方が間違っている!」

「バカな! トマトアイスがマイナーだと……!？」

「マイナーだよ! 現に俺はお前に聞かれるまで知らなかった!」

「なん、だと……! くつ、なら教えてやろう、トマトアイスが如
何に素晴らしいかを!」

「——先生」

白熱する口論を打ち破るように女が現れた。そして俺と口論して
いた男の鳩尾を容赦なく殴る。

「ぐほ!？」

苦悶の声を上げる男。女はそれを無視し、静かに言う。

「そろそろ約束の時間です。早く御用意を」

「……ちよ、ちよっと待ってくれ! 今私はこの店の主と交渉をし
ているんだ!」

「わたくしには決裂しかけているように見えたが」

「これから逆転する所だったのだよ!」

「……解りました。ですが約束は約束です。急いってください」

「痛い痛い痛い! ちよ、耳を引っ張らないでくれ!? 凄く痛い
!」

「問答無用です」

女に耳を引っ張られ、ドアに連れ出される男。

「……まったく」

俺はため息を吐く。

「大丈夫か？」

近くで皿を拭いていた玄狼ゲンロウが心配そうに話かけてくる。

「ん？ ああ……大丈夫だ」

その声に返答し、俺は椅子に深々と腰掛けた。

カラン、とドアに付けた鈴がなる。

「よう」

「……華葵か。何しにきた？」

「何しにきたとは酷いな。コーヒーを飲みに来たんだよ」

「じゃあ一番高いコーヒーでいいな」

「一番安いコーヒーよろしく」

「……チツ」

舌打ちし、俺は注文された飲み物を淹れる。

数分後。出来たコーヒーを啜りながら華葵は今日来た理由を言う。

「明日はハロウィンだよな」

「ああ。そうだな」

「気を引き締めろよ」

「は？ なんで」

「ハロウィンは家を回って菓子を貰う行事だ。つまり、お前の喫茶店にも近所の悪ガキが来る確率があるのさ」

「……成る程。そう言う事か」

「そう言う事だ。ま、菓子つても別に飴玉とかで良いだろ」

「まあ確かにな。解った。肝に命じておこう……。と、そうだ華葵」

「なんだ」

「明日の夕方、一緒にレストランにでも行かないか？」

「……デートの誘いか？ だとしたら下手だな」

「いや、デートじゃない。姉貴がこの前持ってきたチケットにそのレストランの割引が有ってな。何故かペアじゃないと駄目らしいんだ」

「変なレストランだな」

「まあな。とりあえず玄狼や月架ゲツカでも誘おうかと思っただが、玄狼はなんか住んでるアパートのイベント準備に忙しいらしいし、月架は誘ったら何故か挙動不審になったし……他に心当たりも無いんだ」

「……ん？ 月架の場合は問題ないだろ」

「いや、ある。やたらと顔が赤いし熱も有りそうだったんで無理矢理休ませたんだ。最近風邪とかが流行っているだろ？」

「……不憫な奴め」

「ん？ 何がだ？」

「いや、なんでもない。……まあ、大体の事情は解った。明日の夕方だな……どこに集まればいい？」

「南側の日向デパートの前。名前は——bouquet cat……
ブーケ キャット……
……だったかな」

「花束の猫……ね。解った。じゃあ明日10月31日午後6時に日向デパートの前の噴水に集合……でいいか？」

「ああ」

10月31日。AM7:00

とある高校生の玄関にて。

「先輩ー！ 今日は10月31日だからハロウィンですよー！ と言う訳でとりつくおあとーと！ あ、別にお菓子は要りません！ と言つかむしろ拒否！ 先輩に悪戯するのが目的ですから！ ……」

……つふふ、先輩にあーんなことやこーんな事を——」

「近所迷惑だ。黙れ」

「へぶっ！？ 先輩、なんですかこれ！？」

「見て解らないか？ 煎餅だ。もう一つやろうか？」

「えー。私は先輩への悪戯の方がいいんですが——」

「……今なら俺のかじりかけの煎餅とちっちゃい頃の写真を」

「欲しいです欲しいです！ 早くかじりかけの煎餅と先輩のぷりていな子供の頃の写真を！ 早く私の胸に！」

「……ほらよ」
「パサリ。」

「……きゃー!? なんなんですか、このちっちゃく可愛らしい先輩は!? 鼻血が出そうになりましたよ!? どんな核兵器ですか!?」

……そしてこのちびっ子先輩が抱いているイワトビペンギンのぬいぐるみが憎い! 出来る事なら、いえ変わりたい! そしてこの先輩がかじった煎餅……! 今すぐ食べたい! けど我慢、我慢するのですハナアオイカレン華葵架恋! この写真と煎餅は我が家の家宝に永久保存するのです!」

「いや、写真はともかく煎餅は湿気るだろ。あとどんどん変態化してないか? お前……」

ヤツザキ キョウジン
八崎京仁視点

昼。食堂でうどんを食べていたら哭搭コクジョウが本を読みながら話しかけてきた。

「トリックオアトリート」

「……は?」

「トリックオアトリート」

「……」

「トリックオアトリート」

「いや、トリックオアトリートって……。なんのまねだ? 哭搭」
「菓子ちようだい。くれないと悪戯する」

「……」

「……持つてない?」

「持つてないと言ったら?」

「悪戯決定」

「……だから黙ってたんだよ」

「……そう」

そう言つて無表情で手に持っていた本を閉じ、たった今の発言なんて無かつたように席を立て、食堂を出て行った。

「……？」

何だつたんだらうとオレは首を傾げる。

「ヤッホー！」

哭搭が去つて数秒後。いきなり横から声が聞こえた。視線を向け、おれはため息を付く。

「……なんだ日向か^{ヒュウガ}」

「なんだとはなんだー！ 声をかけたのが根古御坂^{ネコミザカ}でも狗神^{クガミ}でも無くあたしだと言う事が不満かー！」

叫ぶ日向。食堂に居る何人かがこつちを見た。傍に居た一年^{ヒトトセ}が日向をなだめる。

「……落ち着きなさいヒナタ。八崎くん。隣、良い？」

しばらく考え、おれは頷いた。

「……どうぞ」

「あたしもー！」

「却下。他を当たれ」

「酷っ！ もうやつつんの非道！ 悪魔！ 変態！ 幼児趣味^{ロリコン}！

マザコン！ シスコン！」

「……お前は小学生か。て言うかやつつんってなんだ」

「無論八崎の八を取つてやつつん！ なに？ やつしーとかの方が良かった？」

おれは日向を無視する事にした。

「で？ お前らなんで来たんだ？ おれの記憶が正しければお前らはいつも弁当^{ベンドウ}だった筈だ」

「なんで知つてるの！？ まさか……ストーカー！？」

「お願いだからちよつと黙つてて、ヒナタ。……噂を聞いたのよ」
「噂？ なんの」

「10月31日の今日、食堂のメニューが安くなるって噂」

「……ふうん？ 安く、ね……。このうどんはいつもと同じ値段だったか？」

「そう？ ならデマだったのかしら」

「そう言つて首を傾げる一年。」

「……八崎、か？」

「……ん？」

唐突に横から声を掛けられた。顔を向け、そっちを見る。

そこに居たのは柊木先輩だった。

「……久しぶりですね柊木先輩。」

「ああ。久しぶりだな」

「……んー？ ……誰さ、しつきー？ あの人」

「二年B組の先輩で、華葵ちゃんが熱をあげてる人。知らないの？」

ヒナタ

「知つらな〜い。アタシ一年生だし」

「それは私も同じよ」

先輩としばらく雑談を交わす。

会話が途切れ、ふとたった今一年から聞いた事を先輩に聞く事にした。

「先輩。聞きたい事があるんですが」

「なんだ」

「さっきクラスメイトから聞いたんですけど……。今日は食堂のメニューが安くなって嬉しいんです」

おれの言葉に先輩は一瞬不思議そうな顔をしたが、すぐ何かに思い当たったのか返答した。

「そりや多分ハロウィンキャンペーンだ」

「……ハロウィンキャンペーン？」

「ああ。ほら、八崎。今日廊下にガムが置いてあつただろ？」

「……。ああ。ありましたね、そう言えば」

おれは何故か廊下に置いてあったガムを思い出す。

「あれ、もらったか？」

「あ、はい。二つ程」

そう言っておれは学生服のポケットからガムを取り出す。駄菓子屋で見かける、十円で買えるガム。

「そう言うガムにはくじがあるだろ。当たればもう一つ貰えるくじ」

「ああ……そうですね」

「その当たりのくじを食堂のおばあちゃんに見せてトリックオアトリートと言つと百円安くしてくれるそうだ」

「へえ……。やっぱり変わってますよね。この高校」

「そうだな。そのガムも十円とは言え、500個くらい買ったら五千円はするだろし」

「その上百円も損になりますし」

「まあだからこの事を知ってる奴は少ないんだがな」

「……」

改めておれはこの高校は変だと自覚する。

「よっしゃー！当たり前出たぜー！」

ふと日向の声が響いた。

どうやらおれが机に置いたガムの一つを勝手に取って破いたらしい。

どうせもう昼飯のうどんは買っているから要らないのだが……やはり無断で食べられるのは気分が悪い。

とりあえずおれはテーブルに残ったガムを日向に向かって投げた。見事ガムは日向の額に命中。何するのさ」と日向が文句を言ってきたが無視。

唐突に入り口から声が聞こえた。

「せんぱーい！どこですか？早く私の愛に答えてくださいーい！」

問わずとも解る。華葵だ。先輩が眉をひそめる。

「……チツ。もう来たか華葵のヤツ。八崎。またな」
「あ、はい」

先輩は素早く人混みに紛れていった。

それを見送っていると日向が真剣な顔でおれに言った。

「八崎。頼みたい事がある」

「……なんだ」

「財布を忘れたから金を貸してくれ」

「断る」

ハナアオイ ミスズ
華葵美鈴視点

ふと空を見上げると赤が混じった黒い空が見えた。

赤なのか黒なのかはつきりしろと思いつながらオレは視線を前に戻す。

「ここがbouquet catか。……ふうん。なかなかしゃれてるな」

「華葵。お前にも綺麗とか汚いとかそう言う感性があったのか」

「……理由は聞かないからぶん殴っていいか？」

「理由を言うから殴るな」

「いや、別に良い。殴らせろ」

「……暴れるならこの料理が不味いとかそんな理由で暴れてくれ」

勝手な事を言う隣の馬鹿。……オレは流石に料理が不味い程度でキレたりはしない。……多分。

そう言い返したくなったが面倒なので止めた。

「くだらない事を言ってるな。入るぞ」

ひらりと仁^ジに腕を振りオレはドアを開けた。

カラン、とベルが響き、

「「いらつしやいませー！」」

ドアの中から数人の女がオレを出迎えた。

……メイド服を身に着けて。

オレは数歩下がり、呆氣に取られている仁の肩をポンと叩く。

「……仁。お前がどんな趣味を持っていようがオレはお前の友人だからな」

「……いやいやいやちよつと待て！？ 俺も知らなかったぞ！ bouquet catがこんな店だなんて！？ ……クソッ、あの馬鹿姉貴……！ 帰ったらシメる！」

焦ったように呟く仁。その様子からして本当に知らなかったみたいなので、とりあえずオレは放って置き、店に入る事にした。

ウエイトレスの案内に従い、席に着く。

とりあえず周囲を見回す。まあ繁盛はしているようだ。

「し、しし失礼します」

そんな事を思っているとどもりながらウエイトレスがお絞りとお冷やを持ってきた。

「……」

オレのその顔に見覚えがあつた。いや見覚えなんてとんでもない。なんと巴手^{ハテ}だ。

「……おい、巴手。なんでお前がここに居る」

「へ……？ ……ぴよお！？」

どうやら気付いてなかったらしい。巴手は変な声を上げ、ねずみのように素早く店の奥に消えた。

奥から話し声が聞こえる。

「ん？ どうしたんだい？ 巴手ちゃん」

「あ、あの店長！ わたし、今日は帰りましゅ！」

「うん、ナチュラルに噛む所が素晴らしいよ巴手ちゃん。なに？

嫌いな人でも居たのかな？」

「いえ、同じアパートの人です」

「ふうん、そうかい。名前はなんて言うのかな？ もし良かったら

次その人が来た時に知らせるけど」

「あ、はい。ありがとうございます。……えっと、名前は華葵さんです」

「華葵？ …… タケルくん。 ぼく用事思いついたから、ちょっとこの指示頼むよ」

「ええ！？ ちょ、カラサキ唐崎さん！ この料理、あんたにしか出来ないんですよ！？ 思いついた事は後にしてください！」

「それは、まあ、根性で頑張つて？ ぼくは愛の為に行くから」
「無理ですよ！？」

奥から男の叫ぶ声がした。 それと同時にコック帽を被った男が奥から姿を表す。

そしてオレの顔を見るなり一言。

「やあ、マイハニー。 なんでこんな所に来たんかい？ まさかぼくの匂いを辿つて来たのかい？」

「オレは犬じゃねえ。 この変質者」

「変質者？ ぼくはそんな下種じゃない。 ぼくは愛の求道者だ！」

「…… なんだよ。 その愛の求道者って」

「ふっ、何も知らないマイハニーに教えてあげよう！ 愛の求道者とは、ロリコンマザコンファザコンシスコンブラコンなど、様々な形の愛の集合称号だ！」

「つまり変態と」

「…… やれやれマイハニーは照れ屋だな。 まあいいや。 さあこの手を掴んでくれマイハニー。 一緒に桃源郷あいのらくえんに行こう！」

オレは差し出された手を掴む。 そして

「とりあえず、吹っ飛べ」

力任せにぶん投げた。

変態は宙を飛び、ドアに向かって吹っ飛ぶ。

「うおっ！？ なんだこれ！？」

ようやくメイドシヨックから回復したのか、ドアを開けた仁が驚きの声を上げる。

「…… しまった。 強すぎた」

騒音の中、オレは一人呟く。 多分仁はすぐにオレの仕業だと気付くだろう。 …… アイツの説教、長いんだよな。 …… よし。

逃げる。

ヤガミ トウヤ
矢神統夜視点

華葵 美鈴が窓からこつそり逃げ出したその頃。

俺は朝霧荘の屋上に居た。

「……」

手に持っている紙を見る。先程机に置いてあった物だ。

紙には手書きでこう書かれていた。夕刻、朝霧荘の屋上にて。

この字面、そして5時でも6時でもなくわざわざ“夕刻”と言う不明瞭な時間を指定する性格。そこから生まれる答えは、あいつ。

——不意に風が止んだ。

それと同時にコツリと固い感触が後頭部に当たる。

「んーと。こういう場合、ほーるどあつぷって言うのかな？ いや、

トリックオアトリートも捨てがたいな」

「……どちらにしたって俺には通用しないで、響歌」

「ありや。ばれた？」

「ばれてないとも思ってたか？」

「いや？ 全然」

とぼけた答えを返す響歌。

俺は懐かしいその声を聞きながら振り返る。

振り返った先には何時も通りのスーツを着た女。

ウイザード ヤツザキ キョウカ
——奇術師。八崎響歌。

とりあえず俺は何時も通り人を食った表情を見せる奴に言う。

「まあ上がってけよ。再会の印として菓子でもくれてやるからよ」

……ちなみに。

響歌が俺の後頭部に突きつけた物は水鉄砲だった。……どうやら不審な行動を取った場合、水をかける気だったらしい。

7A ハロウィンオブエブリデイ（後書き）

当初のタイトルはハロウィンオブパニックでしたが、パニックという程でも無いのでエブリデイに変更しました。

（7/17、手直しと伏線を回収）

今回のおまけはお休みです。

まあとりあえず次回予告了。

次回予告

日向市に二人の悪魔が訪れる。それを追う十字架を背負った少女もまた日向市を訪れた。そして彼女は一人の少年と出会う。

the next title

『クロスオブアリス』

……頑張って最新しよう。

7 Bクロスオプアリス（前書き）

なんかあまりコメディが無い今回。ついでに言つと最後は急ぎ足。

7B クロスオブアリス

○
日向市、北。某日の夕刻。高くそびえる山中にて。二つの影が日向市を眺めていた。

「ふーん。ここが日向市かあ」

「……そのようだな。他にこのような混沌に染まった土地は無い」「有るかも知れないじゃん？ まああたしには解らないんだけど。て言うかめんどくさい」

「お前はもう少し努力しろ。……まあそれはさて置き、行くぞ。日向市であるうが無かるうが、街なのに変わりは有るまい。のんびりして追っ手に捕まるのもつまらん」

「ん。そだね。じゃ、行くよ！ いえい、一番乗り！」

そう言つて影の一つは器用に山を下り始めた。

「……全く。そそっかしい奴だ。……まあ急げと言つたのは我なのだがな」

そう呟き残されたもう一つは羽ばたいた。

同日数時間後

日向市南の中央。

煌びやかな光溢れるとある広場。

その一角にある喫茶店。

そこで一人の少女がコーヒーを飲んでいた。

それだけならどうって事も無いだろう。矛盾はするが、おしとやかな家出娘か夜遊びする少女にしか見えない筈だ。だが、少女は明らかにそれでは無い。

何故なら——少女の傍らには巨大な十字架が置いて有るから。

通り過ぎる人間がちらちらと自分と十字架を交互に見るのにも構わず、少女はのんびりとコーヒーを啜る。

やがて飲み干したらしく、カップをソーサーに戻す。

そして立ち上がり、傍らに有る十字架をベルトで巻き付けて背負う。そして彼女は喫茶店を出た。

広場を横切る少女を、路地裏から一匹の猫と一羽の鳥が眺めていた。やがて猫が“喋った”。
エクソシスト

「歩き出したよ。あの払魔師」

「そうだな。これから探索とするのだろう。まあ何にせよ我々には気付いて無いようだがな」

「うん。多分、この街に居る何かが原因なんだろうね。あいつらが持っている魔力探査機は魔力を感知するだけだから魔力が沢山有る場所じゃあ正常に探知出来ないようだし」

「ふん。どっちにした所でそれによって我々は命を長らえている訳だ。感謝しよう。……さて。どうする、ルージュ」

「どうするって言われてもねー。まずはどう動くか決めないと」

「……ふむ。そうだな。まずはあの女を攪乱して様子を見よう。…

…ただ。この姿は常に魔力を放出しているからなすぐばれるぞ」

「なら人間に変化すれば？ 変化すれば魔力の放出を抑えられるし、なにより人混みに紛れられる」

「ふん。それもそうだな」

「そんなじゃお先」

そう言った瞬間、猫の周囲に不気味な黒い泡が染み出し、猫を覆う。泡は徐々に人間くらいの大きさになり——はじけた。

はじけた場所に猫は居ず、代わりに赤い帽子を被った黒い髪の少女が立っていた。

「……んん。やっぱり人間に変化すると視界が変わるよねー。夜目が効かないのがちよつと面倒だけど」

そう言いながら猫、いや少女は帽子のひさしをくいと上げる。

「そう言う物か……？」

元猫に呆れたように問いながら烏も黒い泡を纏う。

猫の時と同じようにはじける泡。

はじけた場所にやはり烏は居ず、代わりに黒い髪やや痩躯な青年が居た。

「ん〜？ カツコイイーじゃんノワール！ な〜んか、ほら、繁華街のナイトクロウみたいないな！」

「……人間に変化してもお前の言ってる事はさっぱり解らん……。と言うかその格好はなんだルージュ」

じろりとノワールと呼ばれた青年はルージュの姿を見る。

赤いコートを羽織り、その下に黒い薄手のタンクトップとホットパンツ。

「今は秋だ。と言うことはそれに相応しい格好をするのが一番目立たない物だ」

「と、言われてもねー。ノワールの格好も秋に適しているとは思えないんだけど？」

そう言いながらルージュはノワールの格好を眺める。

黒いコートに黒いズボン。黒い手袋に黒いブーツ。ぶっちゃけ全身真っ黒。

「お前よりははるかにまとまだ。……っと。互いの服装を責め合ってる場合じゃないな。急いでそこら辺の魔力を集めるぞ、ルージュ」
「はいはい」

???視点

日向市西の居住区。

二人の悪魔が行動を起こしたその頃。十字架を背負った少女は胸元に有る方位磁石のような物を眺めていた。

「……魔力探查機が乱れている……？ 近くに何か強いモノ——死神クラスの妖怪がいる？ ……まあいい。とりあえず今日の所、探索は無理そう。一旦、居候先に行く」

そんな事を呟きつつ、少女は悠然と歩く。

——ふと目の前に人の頭蓋をかたどった紫色の煙の様なモノが現れた。

眉をひそめる少女。

「……悪霊？ ゴースト 何故こんな所に……？ ……詮索は後。目の前に悪

霊がいるのなら——エクソシスト 払魔師である私が取る行動は一つ」

そう呟きながら少女は右手で胸にあるベルトの金具を外す。空いた左手は十字架の長い部分に。

「慈悲深く、容赦なく、昇天すのみ たお」

左手で長い部分を握り、右手をその下に添え構える。そして少女は走り出した。

——自らの正義の下に。

ヤッザキ キョウジン
八崎京仁視点

同じ頃。八崎京仁はコンビニを後にしていた。

「……いや、まさか牛乳を忘れるとはな。あのまま忘れてたら明日のカルシウムが補給出来ない所だった。やっぱりコンビニって便利だなあ」

そんな事を呟きながら、帰路を辿る京仁。

そんな彼の耳元に轟音が響いた。

「……ん？」

暫し首を傾げる京仁。しばらくの間そうした後、その音が響いた場所に向かって歩き出した。

理由は無い。ただの野次馬根性だ。

——数分後。彼はその行動を後悔する事になる。

???視点

京仁がそこに来た時、私は悪霊を追い詰めていた。

塀を背に悪霊が悲しげに鳴く。

「……詫びる気は無いし、詫びさせる気も無い。だから、死んで」
そう言っ、私は十字架を振りかざす。そして、振り下ろそうとした。

「……！？ ……なんだこりゃ！？」

ふと後ろで声がした。

大方先程塀を破壊した音を聞きつけて来たのだろう。それはいい。
問題は——それに気を取られた事。

ぐざぐざ、と悪霊が断末魔のような声を上げ、私に襲いかかる。
振り上げた十字架は防御に使えない。かといって振り下ろすのも
得策では無い。

結果。私は悪霊の体当たりをまともに受けた。
吹き飛ぶ体。流れる髪。背中から塀にぶつかる。

「あぐ……！」

その衝撃に息が詰まった。

背中 of 痛みをこらえつつ、前に視線を向ける。

右斜めには逃げる悪霊。左斜めには先程の声の持ち主と思わしき
少年。真正面には先程吹っ飛ばされた時に落とした十字架。

数瞬のためらいの後、私は少年に向かって叫ぶ。

「そこにある十字架をあの怪物に投げて！」

少年は数瞬目を白黒させたが、やがて表情を引き締め、十字架を
拾うため屈んだ。

呟く様に言っ。

「……アンタが怪我したのはおれの所為っばいからな。……だから
これはアンタの命令を聞いた訳じゃない」

十字架をよるよると持つ。少年は「……っ。重いな、これ……！」
と呻きながらもなんとか十字架を抱える。そして。

「——ただの、罪滅ぼしだ」

そういつて、力の限り、十字架をぶん投げた。

塀をこするようにして、十字架は角を曲がりかけた悪霊に飛来す

る。

そして直撃した。

「――」

苦悶の声をあげる間も無く、悪霊は消えた。

肩で息をする少年に私は言う。

「ありがとう。助かった」

その言葉に少年は照れたように言葉を返した。

「いや、アンタがそんな事になったのは多分おれの所為ですし。礼を言われる事はしてませんよ」

「それでもいい。私は礼が言いたいだけ」

そう返しながら少年から視線を切り、ゆっくりと立ち上がる。：

：まだ痛みはあるけど幸い骨は折れてない。安堵しながら少年が投げた十字架を拾いに行く。

屈み、十字架を起こす。それを支えに私は立ち上がった。

そのまま歩き出そうとした所で声をかけられた。

「あ、ちょ……っと待ってくれ」

振り返る。視線の先には少年。

「なに？」

「……名前、教えてくれ。もしかしたらまあ会つかも知れないからな」

私は少し迷ったが、名乗る事にした。

「……アリス」

「アリス、か。おれの名前は八崎京仁だ」

「八つ裂き狂人？ ……物騒な名前」

「……まあな。よく言われる」

「そう」

短く返答し、私は前を向き、歩き出した。

夜。俺は食器を洗いながらのんびりとテレビを見ている奴に言う。

「おい、響歌^{キョウカ}。いつまでここに居座るつもりだ」

「んん？ 決まってるじゃん統夜。飽きるまで」

「……さっさと飽きる」

「やだ」

あっさりと拒む響歌に俺はため息を吐く。……そう言えばコンビを組んでた頃からこいつはこんな奴だった。昔はどうやってコントロールしてたんだっけ。

——ん。

と、昔の記憶を探ろうとした所で俺はある事を思い出した。

「なあ、響歌。ちよっとお使いに行ってきたくないか？」

「無論断る」

「……今度お前の好きな漫画、買ってきてやるから」

「……」

ぴくりと響歌が反応する。

……思い出した。こいつは大の漫画好きだから、漫画で釣ってたんだ。

「……本屋で買えよ？」

「解ってるって」

そう返答すると、響歌は座っていたソファから立ち上がった。

「手短に行ってくる。だからさっさと用事を言え」

「ああ、実は今日、入居者が来るらしくてな。九時くらいに来る筈なんだが……何故かまだ来ない」

「だから迎えに行けと。……まったく。やっぱり昔からずれてるな、お前。普通、そんな重要な事を忘れるか？」

「忘れた物はしょうがないだろ。ほら、写真」

「また女か。矢神、まさかお前、ハーレムでも作る気か？」

「そんな訳無いだろ。ふざけた事言っていないでさっさと行け」

「……まったく。人使いが荒い奴め」

そう言いながら頭をかきむしり、いつものスーツ姿で響歌はリビングを出て行った。

それを尻目に俺はひたすら食器を洗う。

響歌が出て行って数分後。全ての食器を洗い終え、一息吐く。さて、どうするか、と考えていると不意にチャイムがなった。首を傾げながら、玄関に向かう。

ドアを開けるとそこには巨大な十字架を背負った少女が居た。

「えーっと……。君、誰？」

「……アリス」

「アリス……？ ……ああ。もしかして君が今日来る筈の入居者？」

「はい」

「そうか、ごめん。……とりあえず、上がって」

「……失礼します」

そう言ってアリスは靴を脱ぎ、丁寧に入室。

「えっと、とりあえず、どうする？」

「部屋の案内を希望します。夕食は喫茶店で既に摂取済み。風呂に着いては今日は入らない予定です」

やや変な口調で喋るアリス。とりあえず希望通り案内する事にする。

二階に上がり、階段のすぐ傍にある空き部屋に彼女を案内する。ちなみに掃除はしてある。

部屋に入ろうとする彼女に俺は先程から思っていた事を聞く。

「背中、大丈夫？」

何故か彼女は驚いたような表情を取る。暫しの沈黙後、返答した。

「別に良いです」

「そう？ 痛くなったら言って。少しは楽になるかも知れないから」

「……はい。ありがとうございます」

ややぎこちなく礼を言うアリス。

それを背に俺は階段を降り始めた。

「……っと、響歌に入れ違いになったって電話しないとな」

ポケットから携帯を取り出し、アドレス帳を開いて響歌に電話。
前方のリビングに、着信音が響いた。

アリス視点

案内された部屋のベッドに腰掛け、私は一人思う。
驚いた。

背中の打撲は結構上手く隠していたのだけど、まさかすぐにばれるなんて。

たった今会ったこのアパートの管理人である青年の顔を思い出す。
……リリナの説明によるとたしか元十指だとかなんとからしいけど……。十指ってなんなんだろう。

思考しながら窓際に立て掛けてある十字架を見る。

否、それは十字架では無い。真つ白な十字架の形をした、“魔”
エクソシストを滅す払魔師の武器。

それから視線を外し、私はベッドに寝転がる。

少し疲れた。眠ろう。

目を瞑る前に見たのは黄金色の満月。

○
満月が空に映える頃。

二人の人影が路上からアパートを見ていた。ルージュとノワールである。

「ねえノワール。あの忌々しい払魔師は^{エクソシスト}どうやらあの平凡なアパートにいるらしいけど。どうする？ 今から襲撃でもする？」

ルージュが物騒な言葉を言う。

「……どうするのさノワール」

「……襲撃するのはあまり得策では無いな。普通のアパートをあの小癪な プライアサンクチュアリ 荊の聖域 が選ぶとは思えん。……慎重に行くぞ」

再度問うルージュにノワールはそう返答した。

「ちえ。今行けば手負いの^{エクソシスト}払魔師を殺せるのに。……もう良い。あたしだけでやる」

やや口調を粗暴にしながらアパートに向かおうとするルージュ。後ろからのノワールの制止も聞かず、彼女はアパートを襲撃しようとした。

「その兄ちゃんの言う通りだ。襲撃なんてしない方が良いぞ？」

——その言葉と共に不意に前方の街灯の下に女が現れた。

「……ッ。誰だアンタ」

鋭い眼差しで問うルージュ。そんな彼女に女はどこか惚けた返事を返す。

「……んーと。この場合、通りすがりの美女とも言えば良いのかね。……いや、ヒロインも捨てがたいな」

「……ふざけてるのか？」

「いや、大真面目だけど？」

「……まあ良い。とりあえずアンタ、あたしの敵なんだろう？ なら、容赦はしない」

「そりゃこっちの台詞だ。ワタシはあそこに居候してるんでね。壊されると野宿するはめになるんだよ」

「……そんなの知った事か！」

そう言いながらルージュは女に向かって歩き出す。

「……そこをどけ。どかないと、殺す」

「……それもこっちの台詞だ」

そう言いながら女は身に纏っているスーツのポケットに手を突っ込み、白い手袋を取り出した。それを手に嵌める。

ルージュはどこからかナイフを取り出した。一触即発の雰囲気が流れる。

その間にノワールが口を挟んだ。

「……あー。まあ落ち着けルージュ。^{エクソシスト}払魔師の事になると激昂するのはお前の悪い癖だ」

「別に良いだろ。悪魔が^{エクソシスト}払魔師を嫌いで何がいけない」

「いや別にいけなくはないが……」
「なら良いだろ」

「……激昂した状態のお前の相手は、やはり疲れる。まあ仕方ないか。生まれながらの性根を直すのは至難の技だからな。良いか、ルージュ。よく聞け。一旦退くぞ」

「なんでさノワール！まさかお前、この女を恐れてるの！？」

「否定はせん。いいから退け」

「断る！あたしはこの女を——」

「——ルージュ。四度目は無い。だから退け」

「……！」

言い募るルージュにノワールは目を鋭くして言う。言葉に詰まるルージュ。やがて諦めたように目を瞑った。

「……解ったよノワール。退けば良いんだよね？」

「……解ったのなら良い。先に隠れ家に行っている。我は後から行く」

「うん」

首を縦に降り、ルージュは歩き出した。それを背に、ノワールは女と対峙する。

「なんだ兄ちゃん。告白でもするのか？」

「……二点聞くぞ、女」

茶化すような女の言葉を聞き流し、ノワールは女を睨む。

「貴様、何者だ？」

「——裏の世界、三系統が一つ、武力。その頂点に君臨する十指が一人——^{ウィザード}奇術師、^{ヤッザキ キョウカ}八崎響歌。それがワタシだ」

「……十指。聞いた事が有るぞ。……成る程。なら貴様のその、研ぎ澄まされた殺気も納得出来る」

「誉めるなよ。照れるじゃないか」

「……もう一つ質問だ、^{ウィザード}奇術師。お前のその“右目”はなんだ？」

「……ああ、これの事？ さあね。ワタシも詳しくは知らんよ」

「……そうか。なら良い」

そう言ってノワールは踵を返す。

「さらばだ奇術師。^{ウィザード}……願わくは我々と貴様に縁が無い事を」

そう呟き、烏の悪魔は響歌に背を向け、歩き出した。

響歌はそれをしばらく見送り——不意に天を仰ぐ。そして腹を押さえながら呟く。

「小腹が空いたな。戻って統夜になんか作って貰うか」

くるりと踵を返し、響歌はルージューとノワールの事など忘れたようにアパートに戻った。

満月はそんな彼女を静かに眺めていた。

7 Bクロスオブアリス（後書き）

登場人物紹介

ルージュ・スカーレット

女

悪魔

赤い衣装を纏う悪魔。普段は気楽な性格だが、天敵である^{エクソシスト}^{エクソシスト} 弘魔師に
関しては容赦しない。ちなみに名前の由来はフランス語。

ノワール・ジェットブラック

男

悪魔

黒いコートを身につける悪魔。冷静な性格であり、ルージュのブレ
ーキ役でもある。名前の由来はやっぱりフランス語。

アリス

女

^{エクソシスト}
弘魔師

十字架を背負う少女。どこかずれているようだ。現在は二人の悪魔
と日向市の観察のため、朝霧荘に移住。

^{ヤッザキ}
八崎響歌 ^{キヨウカ}

女

十指『^{ウイザード}
奇術師』

前話でも登場したけどこっちに記す。

スーツを常に纏う女。ノワール曰わく、右目に“何か”、あるらしい。

ちょこつと説明

悪魔

冥府より来る魔。現世では普段は動物になっているが、どうやら人の姿も出来るようだ。

エクソシスト
払魔師

魔を滅す者。悪魔の天敵。聖装具と呼ばれる物を武器とする。ちなみに聖装具に決まった形は無く、十字架や布、ボウガンなど色々あるらしい。

フライアサンクチュアリ
荊の聖域
エクソシスト

払魔師など、魔を滅す者達のアジト的存在。簡単に言えばバックアップ。

という事で颯爽と最新！ けれど最後は急ぎ足、の今回。
おまけは今回もなし。その変わり上に説明が有るよ。
さてさてとりあえず次回の話。

次回予告

唐崎の言葉で夜に学校の屋上で天体観測をする事になった俺達妄想倶楽部。だが多分普通の天体観測はやらないだろう。って言うかなんだよこのお菓子は444円までって。やけに不吉だな、おい。：
：まあ、何事も無い事を祈ろう。

the next title

「流星観測―shooting star observation―」

「（未定）」

とりあえず来月になりそう。

7 ↓ 8 番外とある吸血鬼の出奔（前書き）

7 Bのあとがきに書こうとしたけどなんかおまけっぽくなるので仕方無く記念すべき二十話に。計画性が無いなあ、自分。ちなみに最新されたと思った方、すいません。これは番外です。

7 ↓ 8 番外とある吸血鬼の出奔

いよいよ肌寒くなり、冬が到来し始めた日向市。

その東側、日向市と隣合わせの街の境。そこに朝靄の中、ぼくとモアは佇んでいた。

「うつつ、さぶさぶ。なんでこんなに寒いのか。シンワ、何かあったまるとな物持っていない？」

「持ってませんよ。と言うか寒いのが嫌ならどっか暖房が利いた店に入れば良いじゃないんですか」

「嫌よ。旅立つ雰囲気にならないじゃない」

「いや、旅立つのに雰囲気は必要ないと思うんですが」
「必要よ。何言ってるの？」

「……まあ良いです。で、これからどこの国に行くんですか？」

「んー。そうね。アメリカあたりかしら」

「東、ですか。漠然としてますね」

「別に良いでしょ？ どうせワタシ達の旅に終わりは無い。だから目的地も無い」

「……まあ、確かにそうですが」

「解ったのなら良いわ。さて、行こうかしら」

そう言ってモアは歩き出す。ぼくもそれを追う。

「そう言えば、シンワ。聞きたい事が有るんだけど」

そう言いながら顔を後ろに向ける。先程までそこにはモアの知り合いである死神が居た。

「なんですか？」

「メリーの話、どう思った？」

「……ああ、何故死神さんがこの世界に止まっているかと言うと一目惚れしたからって話でしたっけ。……どう思ったってどういう意味ですか？」

「その話を聞いた時、シンワはどう思った？ 気持ち悪いと思った

？ それとも変な話と思っただけ？」

「そうですね。気持ち悪いとは思いませんでしたよ。ただ、凄いなあ、と」

「凄いな？」

「はい。死神さんにとって、冥府^{めいふ}って言うのは家みたいな物なんですよね。その家を捨ててまで止まっているのは純粋に凄いなと思いますよ」

そう言って、ぼくは微笑む。

「ま、僕達の世界じゃ、駆け落ちとか家出とかそんな物で処理されそうだけど」

「……。確かシンワってメリーが片思いしている百棟弧赤^{モモムネ コセキ}って子と同じ高校に通ってたんだっけ？」

「はい。と言うか元クラスメイトです。何度か話した事もあります」「ふうん。で、どんな子だった？」

「……。一言で言くと善人、ですかね」

「善人？」

「進んで人を助けるんですよ、彼。打算も無く、下心も無くただ純粹に単純に人を助けるんです。…… ああ、確かそれで去年階段から突き落とされたらしいですよ」

「へえ。凄いなね。クラスメイトにさぞかし人気あったんでしょう」

「ええ。…… 一部を除いて」

「一部？ なに、中には嫌った人も居たの？」

「はい。あの献身的な態度が怖い、とかそんな理由ばかりですが」

「ああ。ま、確かに、ね。世の中には様々な人間が居る物よ。――

シンワ。アナタがこれからの旅で様々な事を学ぶことになるわ。様々な人間を、様々な思考を、様々な悪意を、ね。心して置きなさい」

「はい。解りました、モア」

「何でか話がずれたわね。ま、とりあえず上手くいくように祈りましょう。メリーの事は、勿論、ワタシ達のこれからの旅の事もね」

「……そうですね」

そう返答しながらぼくは後ろを見る。十七年過ごした街が見えた。
静かにぼくは呟く。
「……さようなら」

7 ↓ 8 番外とある吸血鬼の出奔（後書き）

モア・レインレイティア、結木^{ユイキ} 森和^{シンワ}、秋の終わり頃に旅立つ。よって今後の登場予定は未定。

ついでに8Aもどうなるやら。まだ完璧には決まって無いんですよ。ねえ。時間かかりそうです。

タイトルはほとんど無視。

ミトラシダンゴ
御手洗断悟視点

昼休み。のんびりまったり机に突っ伏し、寝ようとした所、友人の氷司^{ヒョウジ}が目の前に現れた。

「おい、断悟。お前に届け物だ」

「届け物……？」

首を傾げる。この中学校に個人宅配便なんかあったっけか。いや、無いな。

「誰からだ？」

「確か……隣のクラスの唐崎^{カラサキ}だったかな」

「唐崎……？」

その名前に俺は眉をひそめる。そしてひらひらと氷司に手を振り、言った。

「じゃあゴミだ。ゴミ箱にでも捨てといてくれ」

言い終え机に再び突っ伏す。さて昼寝昼寝。

「おい断悟」

再び氷司の声がした。反応しようかと一瞬思ったが結局無視。

「断悟。……寝てるのか？」

そつだよ。だからあっち言ってくれ。

「……よし。みんな聞いてくれ。ここにいる御手洗 断悟は実は去年、路地裏にある本屋で——」

「何、秘密にしようとお互い誓いあった事をばらそうとしてんだ氷司——」

「……お。やっぱり狸寝入りだったか」

「……狸寝入りじゃなかったらどうしてたよ」

「ん？ そりゃ、あのままばらしてたさ」

恐ろしい事を平然と言う氷司。

「……」

その言葉に俺は冷や汗をかき、前の男を再認識する。

日向 氷司^{ヒュウガ ヒョウジ}。肩まであるお前それ染めてるだろとばかりの艶やかな黒髪。そして整った顔立ち。はつきり言って羨ましい。

そして性格は天然クール。冷静なのだがどこか抜けてやがるのだ。例としてこの前のテストで全問正解だったのだが名前を書き忘れて0点、と云う様な。

俺は冷や汗を拭いながら氷司に訪ねる。

「で、どうしたんだ？ 氷司」

「なんか呼んでるぞ」

そう言っ指を入り口に向ける氷司。

俺はそっちを見て、顔をしかめた。

「……げ」

「「げ」、とはなんだい御手洗くん」

入り口に居たのは自称快樂求道者であり、仮想倶楽部の創生者でもあり、部長でもある唐崎だった。

「なんのようだ、唐崎。屋上は使えないから仮想倶楽部の活動は無いんだろ？」

「そう身構えないでくれ。安心してよ。紐無しバンジーに挑戦しろとかじゃあ無いから」

「いや、それは人として当たり前だ」

「そうかな？ まあいいや。で、なぜぼくが来たかと云うとね。ちよつとした招集のお知らせだよ」

「……招集？ なんのだ」

うん、と唐崎は笑顔で頷いた。背筋がゾクリとする。こいつがこんな笑顔の時はろくな事が無い。

「天体観測だよ」

詳しくは彼に預けた紙に書いてあるから。そう言っ唐崎は教室を出た。

「なんで冬にやるんだよ……。普通やるとしたら夏だろ」

「……そう言えば。今日流星群が観察されるそうだぞ」

「……そうなのか？」

「さあ。今朝は珍しく姉が作った料理によって死にかけたからな。二ユースを見てないんだ」

「死にかける料理ってどんな料理だよ……」

呆れながら俺は呟き、氷司から紙を貰う。手書きらしい文字を眺めていると、

「なあ。お菓子は何円だ？」

氷司がそう聞いてきた。

「444円とか書いてあるよ。普通300円くらいが妥当だろうに」

「ふむ。444円か。十円の駄菓子が40個は買えるな」

「そうだな。しかしお前やけに菓子の事聞いてくるな。なんでだ」

「それは無論、おれも行くからだ」

「……は？ なんだって？」

「ふむ。耳が悪くなったのか？ もう一度言うぞ断悟。おれもこの天体観測に行くからだ。ほら、そこに書いてあるだろ。参加は自由
つて」

「本当、いきなりですよ。御手洗さん」

夜。指定された時間まで後一時間。

春日から電話がかかってきたので俺はのんびりだべっていた。
カスガ

「御手洗さんはお昼食が終わった後なんですよ？ 私の時は昼休みの終わりごろに来たんですよ。……嫌がらせですかね？」

「いや、多分、ぴよりで手間取ったんだろ。あいつ、どこに居るかまったく解らないからな」

「あー。ぴよりさんなら確かにそう云う事しそうですね」

「あいつは頭がお花畑だからな」

「お花畑ですか。うらやましいですね。私の頭の中なんか始終雷が

鳴ってて、ゾンビがうろろする墓場ですよ」

「……お前、もう少しポジティブに考えろ。そうすりゃ少しはマシになるって言うか頼む。まともになっしてくれ。変人に大食らいに頭お花畑の子供だけでも精いっぱいなのに、これにネガティブを加えたら俺は疲労死する」

「はあ。……努力はします」

「そうか。努力してくれ。じゃ」

「あ、ちょ——」

電話を切る。春日が何か言いかけたようだが、電話代が勿体無いので諦める。ま、後で聞けばいいや。そう思い、風呂に入る。

数分後。風呂から出た俺はその事をすっかり忘れた。

「呪いは願いや絶望、希望などで出来ているんだ」

指定された時間まで後三十分。

とりあえずさっさと行こうと早足で夜道を歩く俺にいきなり男が話しかけた。

「希望や固執、妬みなど、強い思いだけでも呪いは作れる。例えばとある大会の準決勝戦。彼が勝てば、決勝進出、負ければ敗退する試合。勿論チームがかかる希望は尋常じゃない。声援にもそれが現れる。でも当事者にとっては妨害の何物でもない。背負われた希望が重荷になる。^{プレッシャー}その重荷に彼は耐えきれず、負ける。——ほら、呪いになった」

「……あんた誰だよ」

「……会話のキャッチボールを放棄するとは嘆かわしいなあ。これが……んーと……、うつとり——いやしつとり——いやゆつたり——うつとりしつとりゆつたり教育だったかな。その影響かな？」

「……ゆとり教育な。うつとりしつとりゆつたりしてどうする」

「んー……。会話のキャッチボールは放棄する癖に言葉の間違いは箒で掃く様に指摘するね」

「……いや、上手く無いから。放棄と箒をかけたんだろうがまったくもって上手く無いから」

「……ふう。やれやれ。これだから浴衣教育は」

「だからゆとり教育って言ってるだろ。て言うかあんたホント誰だよ」

「語り部終。僕の名前だよ」

「……は？ かたりべ？ ……変な名前だな。いや、俺が言えた義理じゃないが」

「変な名前だよ。だって偽名だし」

「……おい」

「そんな表情しないでくれよ。引き止めた詫びにこれをあげるからさ」

そう言つて語り部とか言う男はよれよれのポケットから長方形の紙を取り出す。

「はい。これを持ってばくの店にければもれなくすべて半額にするよ」

紙には『骨董屋秋海堂店主 語り部 終』と書かれていた。

「骨董屋、ね」

「そう、髪が伸びる人形や人を映す鏡など、なんでもござれの骨董屋」

「ようは怪しげな物を売ってる店、って事か」

「やだなあ。そんなにはつきり言われると照れるよ。御手洗 断悟くん」

そう言つて俺の傍を通る語り部。

「おい……！ なんでお前、俺の名前知ってる！」

そんな奴の背に俺は問う。

「安心してよ。ぼくは君のストーカーじゃない。君の名前を知っているのはただ単にぼくがこの街の人間——全員の名前と顔を覚えてるからさ」

信じられない事を言いながら、語り部と名乗る男は闇に消えた。

煌めき輝くネオンを横目に俺は歩く。やがて右斜め前方に日向中学校が見えてきた。

「やあ。早かったね」

その校門に寄りかかるように立っていた唐崎が言う。

「……今何時だ？」

「9時15分。指定した時刻よりも15分早いよ」

ポケットから懐中時計を取り出し、ネオンにかざす。

「確かに少し早いな。もう少し遅く出れば良かったか……」

「良いよ。別に。備えあれば憂い無し。時間が嬉しいな……と。それに流石のぼくもセキュリティを解除するのは得意じゃないからね」

「……は？」

「おい待て唐崎。なんでセキュリティを解除する必要がある」

「そりゃ無論侵入するからさ。だって校長から許可もらって無いし。言うか話しても無いよ」

「……帰る」

「ん？ なんでだい」

「なんでも何も有るか。俺はまだ、犯罪者になりたくは無いんだ」

「ばれなければいいじゃないか」

「ばれたら終わりだ。じゃあな」

そう言つて俺は踵を返し、帰ろうとした。が、後ろからの声によって阻まれる。

「ん？ なんだどうした断悟」

「……氷司か。早いな」

「まあな。……で、あの男——唐崎だったか。は何をしている？」

「不法侵入」

そっけなく俺はそう言う。

「なるほど。大体解った」

そう言って氷司はポケットから携帯を取り出す。そして俺に背を向け、どこかに電話し始めた。

「……あ。もしもし、お爺ちゃん？——うん、ちょっと頼みたい事があるんだ。——うん、解った。……で、えっと、ちょっと今から学校で天体観測をしようとしているんだけど。手違いがあつてね。門が閉まつてるんだ。——うん。——うん、ありがとう、お爺ちゃん」

しばらく話した後、日向は携帯を閉じ、俺に向き直った。

「少し待て。すぐに開く」

「ははは！ 天体観測の為に不法侵入しようとするたあ、面白い奴らだ！」

数分後。俺と唐崎と氷司と、そして合流した郡山とぴよりと春日と共に、用務室に居た。目の前に居るのは爆笑する頭がはげたおっさん。緑色の作業着には久世と書かれて^{クゼ}いる。

「面白い……ですか？ ぼくは真面目ですが」

「真面目エ？ はっ、ははは。お前が真面目だとしたらオレは大真面目だ！」

そう言って再び爆笑する

唐崎が不愉快そうな表情をする。いつもひょうひょうとした表情しか見てない俺はそれに驚く。

ヒィヒィと笑いを収め、おっさんは問う。

「……で？ お前ら屋上を借りたいんだって？」

「はい。駄目ですか？」

「いや構わんよ。ほい」

あっさりとそう言いおっさんは懷から鍵を取り出し、唐崎に投げた。

「帰る時にゃあ閉めとけよ。そうしねえと泥棒やら変態やらが入っ

てくるからな。せつかく鍵、付け替えたばかりなのに無駄になつまう」

付け替えた、と言う言葉に春日がびくりと肩をすくめる。そう言えば鍵ぶつ壊したの春日だったな。

「解りました。では返す時にまた伺うので」

「おうよ。さっさと行け」

そう言っであくびをするおっさん。それを尻目に俺達は屋上へ向かった。

屋上に上がると^{イチギ}壱木がうつぶせに倒れていた。

「ど、どうしました、壱木さん！」

「……は、はら……」

「お腹？ お腹がどうしたんです？」

「腹……減った……」

「……」

沈黙する春日。ちなみに春日と氷司を除いた他の奴ら（俺、唐崎、郡山、びより）は大体オチが読めてたので駆け寄りすらしなかった。氷司はただ単にボーっとしてただけだろう。

「うふふ、うふふ……。そうですよ。私の心配なんて塵芥ちりあくたのようににいらなですよ。なのに私ったら舞い上がっちゃって……。ごめんなさい。さようなら」

そう言っって屋上の縁に行く春日。……——ってまずい！ 春日の奴、飛び降りるつもりだ！

「待て早まるな春日！ ……おい、氷司も手伝え！」

「ん。ああ」

数分後。俺と氷司と春日は息も絶え絶えに、冷たい屋上の床に寝そべっていた。

「なんで……俺がこんな目に……」

そう呟きながら横目で唐崎を見る。唐崎はビニール袋から某10
円で買える棒（サラダ味）をかじっていた。……手伝えよ。

ちなみにぴよりと壱木は菓子を取り合っていた。ぴよりはともか
く、壱木。元凶はお前だろ。

心の中で愚痴っていると突然、頬に熱い物が触れた。

「熱っ」

「あら。ごめん断悟。熱かった？」

「……郡山か。どこ行ってた？」

「ちよっと近くの自販機に。はい。喉乾いたでしょ。熱いお茶」

「おう。すまん」

郡山から缶のお茶を貰う。郡山は隣にいる氷司にも渡した。

「む。すまん」

「例には及ばないわ。あたしが好きにやっているだけよ」

「ぼくはないのかい？ 氷華^{ヒョウカ}」

「そこから紐無しバンジーしたら考えなくもないわ」

そう言って郡山はいつも座っている場所に座り、そつぽを向いた。
隣で春日の寝息が聞こえる。どうやら寝たようだ。

眠る春日。そつぽを向き続ける郡山。チーズ味を開ける唐崎。菓
子を取り合う壱木とぴより。のんびりとプルタブを開け、茶を啜る
氷司。春日と氷司を覗けばほとんどいつもと変わらない光景だ。眺
めながら俺は思った。

……俺以外誰も夜空を見ない。

登場人物紹介

日向氷司 ヒユウガ ヒョウジ

男

日向中学三年生

御手洗 断悟の友人。性格は御手洗曰わく『天然クール』らしい。
名前の通り日向 ヒユウガ 日向の弟 ヒナタ。

春日陽奈 カスガ ハルナ

女

〃

仮想倶楽部の新人。実際には6Aで登場しているけどこっちに。
普段は割とまともだが、一旦ネガティブスイッチが入ると飛び降りたりしようとするので注意が必要。御手洗の事を少し気にしている。

語り部終 カタリベ

男

骨董屋『秋界堂』店主

口調は唐崎、詐欺師に似ている。『呪い』を集めているらしいが

……？

久世 クゼ

男

用務員

不明

と言う訳でちょっと最後に納得してない刻城 黒徒です。と言うか今更だけど終わりをどうするか余り解らない……。うつむ……。

次回予告

狂ったように嗤う、そいつの呼び名を俺は呟いた。

マッドネス
「——気狂い」

その呼び名にそいつは嘲笑する。

「ああ、そうだ。オレの名は気狂いだ。マッドネス覚えてくれて嬉しいなあ、サイレント音無し！ お礼に八つ裂きに切り裂いてやるよ！」

the next title

「気狂い (Madness)」

明日朝7時をお楽しみに。

おまけ〜ガールズ・トリオの日常会話？〜

「……んん？ なんか久しぶりな感じがするよ？」

「そうやな。な〜んか久しぶり、って感じや」

「うん。……なんか……久しぶり」

「うつん。のんびりしていきたい気分になるんだけど……どうしよう、エリ絵里」

「うつむ。うちもそれには賛成したいんやけど……。うち、今日は日直やねん」

「わたしは……先生に朝の花壇の水やりを頼まれてて……」

「んー。仕方ないなあ。じゃ、この紙に書いてある事を言えば良いんだね？」

「そうらしいわ。ほな、ミタマ三珠。その役うちにやらせてくれや」

「嫌だよ。ボクが読むっ」

「いやいやうちが」

「ボクが」

「うちが」

「ボ（略）」

「う（略）」

「……えっと、三珠ちゃんと絵里ちゃんはなんか喧嘩しちゃったので……わたしが読みます。『感想、批評、質問、助言、要望など……待ってます』」

「……あー！くるみに言われた！」

「そんな殺生な！」

「え？ え？ えっと……ごめんなさい？」

8 B 氣狂い (Madness) (前書き)

残酷有り。注意

8 B 氣狂い (Madness)

ヤガミ
矢神視点

その襲来は唐突だった。

いつも通り、朝食を作り、なんでこいつはまだ居るんだろうと、優雅にコーヒーなんか飲んでる響歌^{キョウカ}を朝食を並べながら睨みながら席に着き、さて食べようとしたその時だった。

突如上空から轟音が響いた。

「!？」

席を立ち、俺は玄関に駆け寄った。覇峰^{ハミネ}、玄狼、双子、アリス、巴手^{ハテ}、華葵^{ハナアオイ}も玄関に駆け寄る。ちなみに巴手は途中ですっころんだ。戸を開け、上空を見る。そして俺は凍りついた。

「……ヘリコプター!？」

黒いヘリコプターがプロペラを回しながら朝霧荘の上空に浮かんでたのだ。他の奴らも驚いた表情をしている。

ヘリコプターのドアが開く。そこから二人の人影が飛び出た。

一人は黒いローブを被っていて顔はわからない。もう一人は――

「――ッ!？」

もう一人は左手に光る物を持っていた。太陽の光を浴び、煌めくそれ。もう一人は躊躇いなく、それを俺に振り下ろす。

「――チィッ!」

振り下ろされる瞬間、その煌めく物がナイフだと俺は気づき、素早く横に転がる。その直後、ナイフはコンクリートを豆腐の様に切り裂いた。

コンクリートをナイフで切り裂く事が出来る人間。そんな人間は――俺が知る限りでは一人のみだ。

俺が思考を巡らしている間にそいつは立ち上がり、漆黒のコートと銀髪を風に靡かせ、嗤^{ワラ}う。

「――良い避け方だ。どうやらまだまだともに戦えるようだな!

サイレント
音無し！」

狂ったように嗤う、そいつの呼び名を俺は呟いた。

マッドネス
「——気狂い」

その名にそいつは嘲笑する。

マッドネス
「ああ、そうだ。オレの名は気狂いだ。覚えてくれて嬉しいなあ、サイレント
音無し！ お礼に八つ裂きに切り裂いてやるよ！」

マッドネス
そう言っ、気狂いはナイフを前に構え、走り出した。

マッドネス
ひゅん、と気狂いが右斜めからナイフを一閃する。

「チツ」

舌打ちしながら後退し、それを躲す。今度は左横からの一閃。体制を低くしてそれも躲す。続いて肘打ち。右手で受け止め、掴む。マッドネス
気狂いがナイフを右手に持ち変える。そして右斜め下からの一閃。

左手でその手首を掴み、なんとか防ぐ。さらに前蹴りが俺に向かって放たれた。流石に受け止めるのは難しいので、仕方なく掴んでいた肘と手首を放し、後ろに下がる。マッドネス
気狂いが嗤う。

「ハハハッ！ 楽しいなあ楽しいなあ。なあ音無し。おサイレント
前も楽しいだろ？」

「……全然楽しく無いけどな」

「はあん、そうかア？ ま、テメエが楽しかろうが楽しく無いだろうが関係無え。オレが楽しめればそれで良い。だからもつともつともつとだ！ もつともつと楽しませろ！」

マッドネス
そう言っ、再度迫る気狂い。すくい上げる様に右斜め下から迫るナイフ。俺はそれを避けず、左手で受け止めた。

「——ッ」

ナイフの刃が左手に染みる。俺はその痛みに目を眇めつつ、逃がさないように握りしめた。そして無防備に晒された気狂いの脇腹を思いっきり蹴る。たまらず、後ろに下がる気狂い。マッドネス
続いてもう一撃蹴りを入れようとしたが、後ろに下がられたため、避けられた。

「ケホッ。……やアっぱ、“この程度”の攻撃じゃあ殺せねえか。もう少し楽しみたかったがお前のその左手の傷じゃ長引かせるのも悪い。仕方無い。“本気”で行くぞ」

「……！」

その言葉に俺は痛む左手を右手で抑え、血止めしつつ、素早く^マ気^{ツドネス}狂いと距離を取る。——^{マッドネス}気^{マッドネス}狂いの本気。それはもはや今のように受け止めるはもう出来ない^{マッドネス}と云う事だ。

^{マッドネス}気^{マッドネス}狂いが両手をだらりと下げた。そして、ゆらりと薄のように揺れ——疾風のごとく、二十メートル以上あった距離を一瞬にして詰める。

真正面に立ち、ナイフを振りかざす^{マッドネス}気^{マッドネス}狂い。

「……」

迫り来る殺意。襲いかかる恐怖。ダメ元で右手で受け止めるか？

——いや、無理だな。通用しない。そう俺は判断した。

振りかざされたナイフを、^{マッドネス}気^{マッドネス}狂いは振り下ろそうとして——ぴたりと停止した。

「——そこまでだ。^{クセ}久世」

横から響歌の声。視線を向けると両手に白い手袋を嵌めた響歌が戸口にもたれかかり、佇んでいた。^{マッドネス}気^{マッドネス}狂いもそちに視線をやる。

^{ウイザード}「奇術師……か。休暇取ってどこに行ったかと思ったらこんな所に居るとはね」

「……どこに居ようがワタシの勝手だ。で？　どうする、久世。お前がこのまま戦闘を続けるのなら、ワタシも加わってやる」

^{ウイザード}「……そうだなア。奇術師と音無し。^{サイレント}十指と元十指を相手取るのも悪くは無い。が、……流石に腕一本持つてかれそうだからな。止めとく」

「そう言っておきながらワタシが背を向けた途端、矢神に襲いかかる腹積もりか？」

「そんな事する訳が無ねえよ。ていうかお前の事だ。何らかの手を打ってあるだろ」

「……まあ、な」

「やっぱり。だからしない。なんならいちごミルクにでも誓おうか？」

「なんでいちごミルクなんだ。……まあ良い。信じる事にしよう。だからさっさと帰れ」

そう言つて響歌は踵を返し、朝霧荘に入ろうとした。右手で左手を血止めしつつ、俺も続く。

「待て、矢神。頼みがある」

「……？　なんだ」

訝しみながら俺は聞いた。マッドネス 気狂いは真剣な眼差しで言つ。

「子供を預かつて欲しい」

「えつと……これで良いですか？」

「ああ。すまんな巴手」

「い、いえ。いつもお世話になってるですから当然の事ですっ！」
そう言つて手をぶんぶん振る巴手。その行動に苦笑する。

「で、どういう事だ」

前方で食卓に腰掛け、コンビニとかで売っているいちごミルクを飲んでいる、マッドネス 気狂いに俺は尋ねた。

「ああ？　何がだ」

いちごミルクのストローをくわえながらマッドネス 気狂いは尋ね返した。

「子供を預かつて欲しいって事だよ。あれはどういう意味だ」

「意味も何も無い。そのままの意味だ」

「そのままの意味……って。子供が居ないじゃ無いか」

「そこに居るだろ」

そう言つてくわえたストローを俺の後ろに向けた。

「……そこ？　——！」

示された方向に首を向け——俺は絶句した。

マッドネス そこには確かに気狂いが言う子供が居た。やや血のように赤い髪

の少女。着ているローブからして先程^{マッドネス}気狂いと一緒に飛び降りた奴だろう。それは良い。問題なのは——今まで俺がその子供を全く認識してなかった事だ。困惑が脳を占める。

「落ち着け音無し。^{サイレント} そいつは人間じゃない」

「狼狽する俺に気狂いはそんな事を言う。」

「……人間——じゃない？」

「……人外計画、って覚えているか」

「人外——計画？」

いきなり飛んだ話に困惑しながらも、俺は精神を落ち着かせた。

そして記憶の中から人外計画を検索する。

「……確か、俺が“引退”する数ヶ月前、立てられた計画……だよ。風の噂じゃ二年前に中止になったと聞いたが」

「ああ。ま、実際にやあ中止になったんじゃないやねえけどな。潰されたんだ」

「……潰された？ 誰にだ」

「^{せんめつ}殲滅屋だよ。依頼したのはどっかのでっかい国——中国やアメリカ辺りだろう」

「……破壊殲滅が。……確かに奴ならうってつけたな」

俺達十指には“特性”がある。俺は目の前に居ても解らないほどに気配を絶つ技術。響歌は様々な道具を使う^{マッドネス}技量。気狂いは全てを絶つ剣術。そして破壊殲滅は無慈悲に全てを破壊し殲滅する、暴力。

「どうした。もっと喜べ。その人外計画の首謀者は——お前が十指を辞めるきっかけとなった^{ドルズ}DOLL・Sを創った奴らだ」

「……lost ^{バベル}Babelの連中か」

「ああ。あの一匹でも取り逃がすと戸棚の裏やら、台所やらで繁殖する黒き帝王^{ゴキブリ}みたいな奴らだ。まあ流石に今回ばかりは“一人”を除いて誰も逃げられなかったみたいだな」

「まああいつから逃げられる奴は……ん？ “一人”を除いて？」

「そう。そいつの母親を除いてな」

そう言って再度くわえたストローで俺の後ろを指す。そこにはや

はり赤毛の少女。

コートから二パック目のいちごミルクを取り出し、くわえたストローを突き刺す。そして啜りながらマッドネス気狂いは立ち上がり、俺の後ろ、少女の方に向かって歩き出す。

「殲滅屋から逃れられ、音無しサイレントに気配を悟られない存在。そんなものは――人外以外には有り得ない」

マッドネス気狂いは少女の傍に立ち、少女の髪をかき分け、それを見えるようにした。

少女の前頭部に生えた小さな角を。

数日前。山奥にて。

「いやー。まいったまいった」

マッドネス気狂いは雨に濡れる銀髪を撫でながら呟いた。

「まさか通訳と依頼人が結託して裏切るとはなあ」

マッドネスそう呟く気狂いの目前には雨によって鎮火されつつある、炎上した真つ二つに割れた車と、その傍でおびただしい程の血を流して倒れている、二つの死体。その手には拳銃が握られている。

「まったく。拳銃があれば殺せるとでも思ったのかね。拳銃で狙われる。その程度の事に、対処出来なかったら十指は名乗れない。……

……まあ誰かが勝手につけた名前だから愛着も何も無いんだがな」

マッドネスそう呟きながら気狂いは踵を返す。そして再度、呟いた。

「しかし困ったなあ。通訳が死んだから、ここの言葉は解らないし……それに薄まっているとはいえ、こんな血まみれの格好じゃあ逮捕されるな」

ガリガリと頭を掻き、しばらく佇むマッドネス気狂い。やがてブルリと肩を震わせる

「……とりあえず雨宿り出来る場所でも探すか」
マッドネスそう呟き気狂いは山の奥へと足を踏み入れた。

コートに仕込んであるナイフを使い、木の枝を斬る。それを続けていると突然目の前が開けた。前方になんかの建物が見える。なんの建物かは解らんがそのボロさからして人は住んでなさそうだ。

建物の周囲を見渡し、入り口を発見する。ナイフを胸に構え、警戒しながら軋む戸を開け、侵入る。

しばらく進む。どうやらここは研究所のようだ。辺りに用途が解らん機具やその部品が散らばっている。

不意に物音が響いた。

？

いりぐちからちいさなおとがきこえた。いりぐちがひらくおとだ。とじていたのをひらき、たちあがり、わたしはいってきたヒトをころすために、へやからでる。

はいってきたヒトのちかくまできたところでちかくにほうちしてあったものをけとばしてしまった。はいってきたひとがこつちをみる。……きづかれてしまった。きづかれたらすることはひとつ。

……ごめんなさい。わたしはあなたをころします。

物音が響いた瞬間、オレは驚愕を心に秘めながら首をそっちに向けた。

オレは自分の強さに自信を持っている。持たないで渡れる程裏の世界は甘くない。

そのオレが——物音がするまで敵の接近に気付かなかった。

心に興奮を浮かべながら物音がした曲がり角の先を睨む。一瞬でも気を抜いたら——死ぬかもしれない。口に笑みを浮かばせオレはナイフを逆手に持った。

数瞬の静寂。ドドン、と外から轟音が響いた。雷でも落ちたらしい。

それを合図に相手は動き出す。傍目から見ても異形の腕を構えて角から飛び出した。

それに倣い、オレも動く。

相手が右腕をこっちに向かって風ぐ。オレはそれをナイフで一閃した。切断される右腕。

「――？」

何が起きたのか解らない様子の奴の首を返す手で切り裂く。床に首が落ちた。

「ふう」

一息吐き、オレはコートにナイフを仕舞い、替わりにコートのポケットからいちごミルクを取り出し、開けようとした。が、暗闇のためはつきりと見えない。よって開けられない。

「……チツ。何か明かりになる物は……っと」

明かりになる物はないかとポケットを探り、ジッポーを見つける。
ブレイカークラッシュャー
確かこの前破壊殲滅から貰った奴だ。オレは煙草を吸わないから全く使わなかったが。

ジッ、とジッポーを擦り、火を点ける。今までおぼろげだった物がはつきりと見えた。

「――……は。どうやらオレは化け物を殺したらしい」

血に沈む、赤毛の頭に山羊の角が生えた女の顔と、赤い毛むくじやらの裸体。人間にしては明らかに異常だった。屈み、角を引っ張りそれが本当に頭から生えているか確認する。果たして角は頭から生えていた。

「こりやきな臭くなってきたな。山にひっそりと建てられた研究所それにこの化け物。……少し探ってみるか」

オレは呟き、オレはいちごミルクをしぶしぶポケットに戻して奥に進んだ。

「で、進んだ先で人外計画の資料とこの娘を見つけて今に至る、と」
「ああ。まあオレが見たのは人外計画の資料って言うよりは日記だったな。英語で書いてあったからなんとか読めた。オレには読めなかったが人外計画の資料もあったんだろう。研究所ごと燃やしたから解らんが」

「……よく山火事にならなかったな」

「まあな。で？ どうする音無し。^{サイレント}預かるのか預からないのか」

「そりゃ無論預かるよ。ただ金は払え」

「……ま、それくらいなら別に良いか。何円だったっけ」

「ひと月に三万円だ」

「あ、そ。じゃあ今持っている手持ちで——」

そう言いながらポケットから財布を取り出す。こいつのポケットは四次元にでも通じてるんだろうか。

「ひいふうみい……ほい、とりあえず一年分だ」

そう言って36万をオレに手渡し^{マッドネス}気狂い。そして踵を返して朝霧荘を出た。路上に出た所で振り返る。

「頼んだぞ。じゃあな」

「……じゃあな。……と、そう言えば^{マッドネス}気狂い。この娘の名前は？」
ふと名前を聞いてない事に気づき、^{マッドネス}気狂いに問う。

「……ああ。名前、ね。日記には^{バケモノ}キャロル^{キャロル}って書いてあったよ。…
…皮肉なもんだよな。人外に聖歌と名付けるなんてな」

「さあ……ね」

曖昧に返答する。

^{マッドネス}気狂いはそんな俺を見て唇の端を歪めた。

そして今度こそ振り返らず、朝霧荘を去った。多分、広い所でへりに乗るつもりだろう。冬の日差しに溶ける^{マッドネス}気狂いの姿から視線を切った。

そして朝霧荘に入る。時計を見るとそろそろ昼が近かった。さて、今日の昼食は何にしよう。

ふと食卓を見る。食卓の上にはからっぽのいちごミルクが乗って

いた。

8 B 気狂い (Madness) (後書き)

登場人物紹介

クゼ
アラタカ
久世 荒鷹

男

マッドネス
十指―気狂い

銀色の髪をした黒衣の青年。噂によると染めてるらしいよ。『断剣』という剣術を使うっぽい。好きな物はいちごミルク。

化け物 (女)

女

母

山羊の角を持つ、全身毛むくじやんな女。キャロルの母らしい。
フレイカークラッシュヤ
父親は破壊殲滅によって殺されたと思われる。化け物である故、一流の人間でも気配を察知出来ない。武器は爪。

キャロル

女

無し。

真っ赤な髪の少女。母親とは違って頭に角がある事を覗けばほぼ人間。だがやはり気配が無い。

用語解説

断剣

『久世』のみが使える一子相伝の剣術もどき。硬さ関係無く斬る

ドールズ
DOLL・S

正式名称、複製生態兵器DOLL・S。ドールズ 矢神 統夜が脱退する要因となった存在らしい。伏線の一つ。

lost Babel マッドネス
組織の一つ。失われた叡智。 気狂い曰わく、ゴキブリ 黒き帝王。破壊殲滅ブレイカークラッシャー
により殲滅された。

人外計画

lost Babelが建てた計画。完成させられる事を恐れた
ブレイカークラッシャー
大国の依頼により動いた破壊殲滅により消滅。

書き溜めておいたので連続とうこう。ちなみに気狂いの過去編
マッドネス
も今現在書いてますよ？ 割とのんびり書いているのでいつになるかは不明けれども。

さーて、次のお話は？ (サザエさん風)

次回予告。

クリスマス当日。

語り部は探し物を探し、歩く。

悪魔達は街を楽しむ。
ヒトトセシキ

一年四季は風邪を引く。

日向 日向は弟を連れその見舞いに行く。

柊木達はいつも通り。
ミハタニシキ

美端西姫はクリスマスプレゼントを探す。
マッドネス

気狂いは殺人鬼を追いまだ日向市へ。

矢神はキャロルの扱いに困る。
モモムネコセキ

百棟弧赤はメリーとのんびりまったり。

cafe nocturneはクリスマスキャンペーン実施中。

仮想倶楽部ズは受験勉強中。

季節外れのクリスマス。とりあえずお楽しみに。

the next title

「9Cクリスマス・カプリチオ（仮）」

何話になるかは未定！

マッドサイエンティストスノキフウジュ
おまけ〜狂科学者と楠 風樹〜

「あ、ハロルド。……なんかはじめましてって感じね」

「……ム。そうだな。毎朝顔を合わせているのに、何故かお前と会うのはじめてな気になる」

「うーん。なんでだろ？」

「さア。まあいい。とりあえず今日はやりたい事があるんです。テキパキと終わらせたい」

「そうね。私も弟妹たちが心配だし」

「うム。えっと、『感想、批評、質問、助言、要望など、待っている』。これでいい力？」

「さあ……。ま、とりあえず帰りましょ」

「うム。……風樹。今日の夕飯はなんだ？」

「今日の夕飯？ えっと、鍋にしようと思っているんだけど」

「鍋力。風樹の料理は美味しいからナ。楽しみにしているゾ」

「……ッ！ 誉めても何も出ないわよ。バカッ！」

「……ム？」

（楠家のその日の鍋は心なしかいつもより美味しかったそうです、まる）

8・5B | past—気狂いへと至る手順 (madness bringing

残酷有り。 苦手な方は見なくてもいいらしいよ。

赤々と炎が村を染めていく。

「おかあ——さん」

生きているものはほとんど居ないその状況下、一人の少年が恐怖に彩られた表情で炎の中、ゆらゆらと歩いている。

「——どこ」

突然だった。突然、槍や青竜刀を持った男達が襲撃してきたのは、抵抗する者はほとんど殺され、逃げようとした者は斬られたり、焼かれたりした。

生き残ったのは奇跡的に見つからなかった少年のみ。

男達が去った後、少年は母親を探した。それ以外に精神の拠り所は無かった。

「お母さん。どこ？」

少年は探す。母親が生きていると信じて。

「！」

不意に少年の目が倒された壺の後ろのラベンダー色を捕らえる。確か、少年の母親が着ていたのはラベンダー色のスカート。

「お母さん！」

顔輝かせながら、少年は走る。

少年が倒された壺に近づく事によって、ラベンダー色のスカートの持ち主がはつきりと見える。それは確かに少年の母親だった。

……生き残ったのは奇跡的に見つからなかった少年のみ。

「お母、さん……？」

少年の母親は顔や手足をぐちゃぐちゃに斬られていた。少年の目が絶望に染まり始める。

嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ嘘だ！ これはお母さんじゃない別の人、そう、隣に住んでいるお姉さんだ！ お母さんは無事に村を出ているんだ！ 死んでなんかいない！ 早く早く早く早く早く、お母さ

んを――。

そこで少年の意識は停止した。ぐちゃぐちゃにされた死体の左手。そこには四つ葉のペンダントが握られていた。

――はい！ お母さん、誕生日おめでとう！

それは紛れもなく、数週間前、少年が母親にくれた物だった。悲鳴が、誰も居ない村に響いた。

「……これは酷いな」

雨がしとしとと降る中、灰と化した村を前に剃髪ていはつの男は顔をしかめながら呟いた。

「この一切の容赦もないやり方。大方軍人崩れの山賊辺りかね。……まったく。嫌な時代になったもんだ」

そう呟きつつ、男は雨によつて鎮火されつつある村の残骸に、足を踏み入れる。

「おい。誰か、生きている奴は居るか？」

口元に手を添え、男は問う。しばらく待ったが返事は無い。

「……こりゃあ全滅かね。……いや、それでも無いか。気配がする」
そう呟きながら頭を撫で、さらに進む。

「……居た居た」

しばらく進んで、男は足を止める。視線の先には、ぼつ、っと空を見上げる少年。

「やれやれ。男か。女だったら喜ぶんだが男じゃねえ……。ま、良いか」

そう呟き、少年に向かって歩む。

「おい。ボウズ。何があつた」

男が問ったが少年は答えない。

不思議に思つて顔を覗く。

少年の目はゾツとする程に虚ろだった。

「……なるほどね。その虚ろな目、肉親を殺された時の目だ。――」

つまり」

少年の目の前にあるかつて人だった物を一瞥する。

「そこにある顔面やら手足やらをぐちゃぐちゃにされた女はこいつの母親か姉……って事か」

そう呟きながら男は首を回し、少年の目の前にしゃがんだ。そして問う。

「……で、どうする？ 死ぬか生きるか。さつさと決める」

少年は答えない。ただ、人形のように虚ろな目で灰色の空を見るのみ。

「……死にたいのならばそれでいい。だが殺された村の奴らはどうする？ せつかく生き残ったのに死ぬたあ、さぞ悲しむだろうな」

「……」

殺された、と言う単語に少し反応する少年。男はそれを意に介さず、言葉を紡ぎ続ける。

「生きればお前はこの村を殺した奴らに復讐出来る。だが死んだら終いだ。もう一度言う。さつさと決める」

「——復讐出来るって、本当？」

ようやく言葉を返す少年。だがその声色はどこか虚ろだった。

「……本当だ。オレは殺し屋なんぞでな。腰抜けのハナタレ小僧に殺し方を教えるのは、赤子の首を切り裂くほど簡単だ」

その言葉に少年はどこか狂った笑みを浮かべ、言う。

「じゃあ、教えて」

それから数年後。とある寒冷地の山奥

「はあつ、はあつ……！」

一人の男が息を切らしながら山中を走っていた。やがて周囲を見渡して、誰も居ない事を確認し、近くの木の本根元に座り込む。

「くそつ……！ なんで俺が狙われるんだ……！？」

「——わからないのか」

「——!？」

男の呟きに答える声。それと同時に男の首筋に冷たい物が触れた。
「な、なんで……。い、今まで居なかったのに」

冷たい双眸が男の顔を見る。

「……お前。最後に言い残したい言葉はなんだ」

「し、死にたくな——」

ブシュリ。少年はナイフで男の頸動脈を断った。人形のように横に倒れる男。大量の血が辺りに飛び散る。その血に顔を斑に濡らしながら少年は白い息を吐いた。

「……これedyやく、一人目、だ」

そう呟き、少年は脇目も振らず山を下った。

「よう。人を殺した感想はどうだ？ アラタカ 荒鷹」

とある山奥。崖の上に座る少年の隣で、杯と酒を携えながら男は言った。目を細めながら夕日を見つつ少年——荒鷹は、ぼそりと答える。

「……さっぱりしたよ」

その言葉に男は嘲笑する。

「はっ。くだらねえ嘔吐いてんじゃねえよ、糞ガキ。さっぱりした？ んじゃあその今にも衰弱死しそうな面はなんだ？ それがさっぱりした奴の面か、おい？ 嘔吐いてねえでさっさと答える久世クゼ」

アラタカ 荒鷹。人を殺した感想はどうだ？」

「……気持ち悪い」

そう言つて、荒鷹は男を見た。

「なあ、ハゲオヤジ。なんでこんなに気持ち悪いんだ？」

その言葉に男は酒を開けながら答えた。

「お前がまだ人だからだよ」

「……？」

訝しげに男を見る荒鷹。男は杯に酒を注ぎながら言葉を続ける。

「人を殺すって事は人を捨てて鬼になる事が必要だ。捨てなきゃ人は殺せねえ。まあ中には人のままで人を殺す奴も居るがな……。だがそれは少数だ。殺人鬼、復讐鬼、殺人犯——大半はそう呼ばれる事になる。……荒鷹。復讐を成し遂げたいなら人を捨てなければならねえ。今ならまだ止められるがな」

ぐいつと杯を傾け、男は酒を飲み干す。口元を拭いながら荒鷹を見た。

「……どうする？ 人を捨てて復讐の鬼になるか。復讐心を捨てて人のままで居るか」

よつこらせ、と呟き立ち上がる男。荒鷹に背を向け、住处である小屋がある林へと歩き始める。

「——ま、じっくり考えて決めてくれよ」
そう言い残して。

男が去ってしばらくした後、荒鷹は一人呟いた。

「……人を捨てて復讐の鬼になるか、復讐心を捨てて人になるか——か」

服の袖からナイフを取り出す。そして抜き身の銀に自らの目を映した。鮮明に見える濁った眼。まなこ

「……解りきった事じゃないか。オレはあの日、決めたんだ。——どんな手を使っても、あいつらに復讐する、と。そのためなら何だって捨ててやる。人も、ためらいも、優しさも、弱さも。必要となれば理性すら、捨ててやる」

——静かに夕日は沈む。

「腹は決まったか？」

夜、小屋にて。蝋燭に火を点けながら男は荒鷹に言った。

「ああ」

ためらいなく、頷く荒鷹。

「――オレは人を捨てる。捨てて、あいつらに復讐する」
確認する様に男は言う。

「……本当に良いのか？ 繰り返すが今ならまだやり直せるぞ」
「別に。オレはあの日決めたんだ。あいつらだけは徹底的に殺すと」
その言葉に男は深く嘆息した。そして、壁に体を預け、胡座を掻く。

「……なら仕方ねえ。荒鷹。テメエに断剣を教える」
「断剣を？」

断剣。最強と呼ばれる剣術であり、荒鷹の目の前に居る男しか使えない剣術。

「ああ。まずは断剣について、教える」
そう言つて男は姿勢を正す。

「断剣、ていうのはオレの師匠のそのまた師匠の御先祖サマが編み出した剣術だ。まあ剣術つても居合いも何もねえ。構えて斬る。それだけ」

「それだけか」

「ああ。……ただ、構えに一癖あつてな。長刀にゃあ長刀の型。短剣にゃあ短剣の型つて風に決まつてるんだ。そして長刀の型を覚えたら最後、短剣の型は覚えられず、短剣の型を覚えたら最後、長刀の型は覚えられねえ。ちなみに居合いなどの剣術も……な。ちなみに全ての構え方や鍛え方は巻物に書いてあるから長刀の型だけしか教えられないつて訳じゃないぞ。……理解したか？」

「……ああ。理解した。つまり、オレが短剣の型を覚えれば、長刀の型はおろか、居合い、二刀流はおぼえられねえ、つて事だろう？」
「ああ。無理に使うと体がおかしくなる。注意する点はこれとも一つ。……断剣は一子相伝……つて事だ」

ゆらりと炎が揺れた。

それから一年の月日が経った。

山頂付近、切り立った崖の上にて。

「……さて、荒鷹。最後の試練だ」

その真ん中で日本刀を携え、男は言う。

「オレを、殺せ」

相対する荒鷹はその言葉に目を見開いた。

「行くぞ」

その言葉と共に、男は一瞬で間合いを詰めた。

「……ッ！」

振り下ろされた斬撃。後ろに飛ぶ事で荒鷹はそれなんとか躲す。数歩、距離を取り、叫ぶ。

「なんでだよ……！　なんであんたを殺さなきゃならないッ！」

「それが決まりだからだ」

荒鷹の叫びとは対極の物静かな声を出す男。そして、日本刀を横に振るい、荒鷹に向かって歩き出す。

「師を殺す……それが断剣を継ぐ最後の試練。これ乗り越えるにやあ——オレを殺す。それしかない」

「——なんでだよ　！　なんでそんな決まり事を守る必要がある！」

「……荒鷹、オレを殺せ。殺さないならオレはお前を殺す」

「——クッ」

ナイフを構える荒鷹。だがその腕は小刻みに揺れていた。

荒鷹の動揺を余所に男は日本刀を振るう。荒鷹はそれをナイフで受けずに躲した。

一太刀でも喰らってはいけない。一太刀でも受け止めてはいけない。躲して躲して躲して躲す。一太刀受け止めた時点で死となる斬り合い。

隙無く連続で放たれる斬撃。荒鷹はそれを後ろに下がって躲すしか無い。

——やがて踵が崖の縁を捉えた。

男は言う。

「もう逃げる事は出来ねえぞ、荒鷹。助かる道は一つ。オレを殺す事だ」

「……もし、オレが殺さないであんたに勝った場合は？」

「自害する。一年前に言っただろう。断剣を継ぐ人間は一人だつてな」

「……」

荒鷹はその言葉に目を瞑る。素早く近づき、攻撃すればあっさりと殺せるほど、明らかな隙。しかし男はそれをしなかった。日本刀を上段に構え、荒鷹をじつと見る。

やがて荒鷹は目を開いた。そして左手に持ったナイフを前に構える。先程とは違ってその手は、震えてない。

「やっと殺る気になったか」

「……まあ、な」

短く返答する荒鷹。

「じゃ。行くぜ」

そう言つて男は上段から斬撃を放った。荒鷹もそれに続き、左腕を振るつた。

走る白銀、瞬間の交差。

数秒の沈黙。やがて、

「……オレの、勝ちだ」

男の背後で荒鷹は言つた。

「……ああ。そうだなお前の勝ちだ」

著しく真つ二つに斬られた日本刀を眺め、男は答える。その足元には夥しい朱。

「……一つ、問う」

血を吐き出しながら男は言う。

「……なんだ」

「人を殺して、楽しいか？」

その問いに荒鷹は嗤つて答えた。

「……楽しくねえよ。ただ、ひたすら気持ち悪いだけだ」

「……そうか」

呟き、荒鷹の横を通り、崖の端に向かう男。たどり着き、くると荒鷹の方を向いた。交差する一対の双眸。

「……とりあえず、荒鷹。お前に断剣はくれてやる。これからは堂々と名乗っていいぞ」

「……あんたはどうするんだ？」

ゲホツと、再度足元に血を吐いた後、男は答えた。

「オレは一足先に引退だ。……じゃあな」

そういつてニヤリと笑みを浮かべ——男は後ろ向きに崖から落ちた。

「——……ああ。あばよ。——クソオヤジ」

やや悲しそうにそう呟き、荒鷹は崖から背を向けた。

そしてその場には血と折れた刃だけが残された。

久世^{マッドネス} 荒鷹が復讐を成し遂げたのはそれから数ヶ月後で、
気狂いと呼ばれるのはそれから数年後の話だ。

8・5B | past—気狂いへと至る手順 (madness bringing

登場人物紹介

クセアラタ
久世新

男

殺し屋兼元断剣使用者。

マッドネス 気狂いの師。マッドネス 気狂いが断剣を継承した際、自ら崖から飛び降りる。

その後の行方は不明。頭は禿げているのでなく剃ってるらしい。

8 ↓ 9 番外クリスマスイブの酔っ払い上村さんとクールビューティー仲村君。

「^{オカムラ}仲村あゝ」

日向市南。焼鳥屋、^{ゴクラクチョウ}極楽籠。カウンターの端っこでスーツ姿の男
女が飲んでいた。

酔いで顔を赤くしながら女は自分と同じ量を飲んでいるにも関わ
らず、素面の男——仲村にやや呂律の回らない舌で言う。

「……明日はクリスマスよねえい」

「はい、そうですね^{カミムラ}上村さん」

無表情でそっけなく相槌を打つ仲村。

「クリスマス。それえは恋人がイチャイチャしてバカップルはより
一層イチャイチャする日よねえい」

「まあ。そうですね」

表情を変えず、やっぱりそっけなく相槌を打つ仲村。そのまるっ
きり適当な返答に女——上村は机に突っ伏し、嘆く。

「なによに……なによに……！ どおおおしてあたしには恋人が

居ないのよ！ 同僚の^{テンリ}辿理もこの前付き合い始めたというのに」

「！」

「さあ。この前別れたからじゃないですか。と言うかそれくらいし
か考えられません」

「うつゝ。……なんであたしの部下はこんなに冷徹なのよ」

「運命だからです」

「そんなときめかない運命は嫌々！」

「と言うかそんなに嘆くのなら別れなければ良かったじゃないです
か」

仲村が無表情でそう言うとお上村はやや潤んだ眼で、きつ、と仲村
を睨みつけた。そして言う。

「だってだって！ アイツ、あたしの胸を——」

「はい、ストップ。衆人環視の中、堂々とそんな事言わないでくだ

さい。品性が疑われます」

生々しい事を言おうとした上村の言葉を、仲村は素早く遮る。

「疑われたって構わないもんっ！」

そう言つてジョッキに入つたビールを飲み干し、赤ら顔で上村は叫ぶ。

「どーせあたしなんかを好きになる奴にやんかにろくな奴は居にや
いんだし」

「……そうですか」

「……でえ？ あたし、あんたと何の話してたんだっけえ？」
「胸の話です」

「あー、ひょうひょう。アイツつたら高校時代、ちよっぴりキュボ
ンの上村と呼ばれたあたしのおっぱいを――」

「だからストップです、上村さん。と言うかなんですかちよっぴり
キュボンで。ボンキュボンじゃないんですか？」

「――……ハッ！ そう言えば！」

「……気づいてなかったんですか」

仲村が呆れたように言う。上村はぐいつと仲村の手にあるジョツ
キをぶんどり、呷つた。そして口元を拭い、叫ぶ。

「……もゝ！ 今日はアルコール中毒になるまで呑んでやるゝ！」

「止めてください。明日の仕事に支障が出ますよ」

「構わないもん！ 親父っさゝん！ 生ビールもう一杯！ 後ついでに
焼き鳥パラダイスもゝ！」

「あいよ！ 美鈴^{ミスズ}、三番席のお客さんに焼き鳥パラダイス一丁！」

「あいよ。ところで店長。前々から思つてたんだが焼き鳥パラダイ
スってネーミング、おかしくねえか？」

「細かいこたあ気にすんな！ ほらほら。さつさと行け」

「――来年はもつと良いオトコを見つけてやるゝ！」

なみなみと生ビールが入つたジョッキを掲げ、宣言する上村。そ

の横で仲村はぼそりと呟く。

「横に居るじゃないですか。……っといけないいけない。つい本音が。どうやら飲みすぎたようですね」

8 ↓ 9 番外クリスマスイブの酔っ払い上村さんとクールビューティー仲村君。

この2人はちょいキャラですぜ。なので登場は未定。

9 Cクリスマス・カプリチオ 上 (前書き)

祝、PV7000以上、ユニーク3000以上！ 来てくれた人に感謝をしつつ、頑張ろうと思うよ。

今回は視点切り替えを重視してるので一人一人の視点が短いんだべさ。ついでに小説も五千字未満なのさ。その代わり付録が2つあるんだぜ。口調が変わるのには突っ込まないんで欲しいんだ。

9Cクリスマス・カプリチオ 上

12月25日未明。

マッドネス

気狂い視点

アホロキ ショウゴ

「等々力将吾だな?」

歩道橋の上。そこで走る車を見ている男にオレは言った。包帯を頭に巻いた男は血にまみれた服をたなびかせながら、オレを見る。そして言った。

「……だつたらなんだ?」

「殺す」

迅速に答え、オレはナイフの切っ先を等々力に向ける。等々力は歯をむき出しにして笑った。

「……ヒヤハハハハ! 殺す!? 殺すだつてえ!? ヒヤハハハハ! やってみるよ! ……俺を捕まえれたらな!」

そう言つて、歩道橋の手すりを乗り越え、落ちる等々力。着地する場所にはトラック。

軽い音を立ててトラックの上に等々力は着地した。そしてこつちを見てにやりと嗤う。

「——チッ」

舌打ちし、オレはナイフをしまう。今追つた所で無駄だ。追つたらあいつは事故を起こし足止めするだろう。とりあえず、コートのポケットからいちごミルクを取り出す。

「確かあのトラック……日向市行きて書かれてたな」

12月25日朝

ヒイラギ

柊木信視点

日向市西。閑散とした住宅街の路地で、俺は華葵と戦っていた。

「先輩！ 早く私に愛の接吻を！」

「誰がするか！」

「じゃあ愛の抱擁を！」

「無論、拒否だ！」

「ええ！？ 私と先輩は「好きですっ！」と言えば、「じゃあ結婚しよう！」って言う仲でしょう！？」

「……言わねえよ」

無茶振り過ぎる華葵の言葉に突っ込み、俺はため息を吐いた。

「……大体なんで俺はお前と一緒に歩いているんだ？」

「それは勿論、デートに決まっています！」

「……デートっても昨日お前が強引に言った事だけだな」

……まあそれに付き合う俺も俺だが。

再度ため息を吐いて、俺は歩き出す。

とりあえず、日向広場にでも行くか。

ヒュウガ ヒナタ

日向日向視点

反対側の歩道に、華つちと柊木先輩が並んで歩いて居た。一瞬、声をかけようと思ったけど止める。人の恋路を邪魔する馬鹿は馬と鹿に蹴られてアンドロメダ星雲にでも行ってしまうってお母さんが言ってたし。

「……で、どこに行くんだ、姉さん」

「ん？」

あたし達とは反対の方向を歩く華つちと柊木先輩を見ているとマイブラザーこと氷司がそう聞いてきた。デフォルトされたパンダの顔がプリントされたニット帽を被り直しながらあたしは言う。

「ん〜言って無かったつけ？ 親友の家」

「姉さんの友達？」

「うん。四季^{シキ}って言うんだ。なんか風邪引いちゃったらしくてね。だからちよつと見舞い^{からか}に」

「……とりあえずその人の安泰を祈る」
「あれ？ どうして？」

モモムネ コセキ
百棟弧赤視点

「……えーっと。どこに行くんだっけ、メリー」
可愛らしくデフォルメされたパンダの顔が目立つニット帽を被った女の人が、灰色のマフラーをした男の人に何か言っているのを車道を挟んで見つつ、僕は縁ヨスガと話しているメリーに聞いた。

「む？ 言って無かったか？」

くるりとメリーが縁から僕に顔を向ける。

「うん。のんびり寝ている所を、さっさと着替えるー！ とか言つて腹にダイビングした縁に起こされて、言われるままに厚着して今現在に至るんだ。だから今現在お腹が空いてる」

「む。すまん。……妹殿。もう少しまともな起こし方は無いのか？」

「あれが一番面白、いや有効なんだぜ」

「……今、面白いつて言いかけなかった？ 縁」

「き、きのせいだぜ」

「……まあいいや。で、どこに行くんだっけ？」

「日向デパートだ」

「日向デパート？ 何かイベントでもあるの？」

「うむ。世界のスイーツフェアが開催されているそうだ」

「ふうん。まあとりあえず、まずはどっかの喫茶店に行こう。腹が減っては戦は出来ぬ、って言うし」

「それもそうだな」

「わかったぜー！」

「……で？　どうするのさ。これから」

時を同じくして日向市南。開店したオープンカフェにて。

カルボナーラを巻きつけたフォークを真正面のノワールに突きつけ、ルージュは言った。

「……しばらくは様子を見る。下手に動いたら^{エクソシスト}払魔師に見つかってしまうからな」

「そう言ってもう1ヶ月以上じゃん」

カルボナーラを食べながら反論するルージュ。

「仕方がないだろう。あちらは一人とはいえ^{エクソシスト}払魔師だ。もうしばらく様子を見るのが無難と言える」

「……ならせめて魔力でも集めようよ」

「駄目だ。感づかれる恐れがある。それに。あの女がなんなのかまだ解ってない」

「あの女？　ああ、あの夜、アタシたちの邪魔した女ね」

「ああ。あの女、普通の人間には無い物の気配がした。……何かは解らんが、警戒した方が良い。故に様子を見る。解ったな」

その言葉にルージュはしぶしぶ頷き、

「……解ったよ。様子を見れば良いんだね？」

むくれながらそう言い、カルボナーラを食べ終えた。そして明るい声で言う。

「ま、様子を見てるのもつまらないし、とりあえず人間の食事でも楽しも？　……えっと、すいません、このアラビータって奴を一つ！」

「……ふむ。それもそうだな。よし、ではチョコパフェでも頼むか」

ヤガミ トウヤ
矢神統夜

食後のコーヒーを飲みながら俺は目の前に居る響歌の横顔を見る。響歌は赤毛の少女——キャロルの髪を真剣な表情で見つめ、——唐突に白い手袋に覆われた右手で、その髪を掠めるように薙いだ。

僅かに切れる赤。揺らいだ赤毛から見える僅かに傷がついた小さな角。それを見て響歌は顔をしかめる。

「……やっぱワタシじゃこの角は斬れない。気狂いの『断剣』^{マッドネス}なら話は別だろうけど……あいつの事だから髪ごと斬るだろうな」

「……どっちにしたつてもうしばらくはキャラルの外出は無理か」

「そうだな……すまんキャラル」

「……」

かくん、と首を傾げるキャラル。

言葉が解らない……訳では無い。ただ単に喋れないだけだ。首を傾げたままこつちを見るキャラルを眺め、俺は呟く。

「……やはり言葉は覚えさせた方が良いか」

「小学校には通わせないのか？」

「それはまだ検討中だ。校長のコネが有るから通わせる事は出来る。だがな……」

「馴染むかどうか解らない……か」

「ああ。言っちゃあ悪いがキャラルは人の形をした化け物だ。上手く学校生活を送れるかは解らない。だからまだ検討中なんだ」

「……ふむ。まあ、どっちにした所でやはり角はどうにかしなきゃな」

「まあな」

そう相槌を打ち、キャラルの頭を撫でると、響歌が思い出したように聞いて来た。

「ところで華葵……^{ハナアオイ}だったかはどこ行つた？ 昨日の夜から帰つてきて無いけど」

「ん？ ああ華葵ね……。あいつなら確か昨日の夜から今日の朝まで仕事らしいぞ^{バイト}」

「ふうん。バイト……ね。あの気性の荒い奴が働けるバイトってあるのか？」

「あるさ。あいつが働いている焼き鳥屋——^{ゴクラクチョウ}極楽籠。お勧めは焼き鳥パラダイスだ」

「へえ。いつか行ってみるか」

「……本当にいつまで居座るつもりだ、響歌」

呆れながら俺は響歌にそう言った。

その傍でキャロルは不思議そうに首を傾げた。

ミハタ ニシキ
美端西姫視点

「ったく、聖ヒシリの奴め」

ぶつぶつと呟きながらあたしは歩く。その先には日向デパート。

なぜあたしがこんな寒い日に日向デパートに行こうとしているか。
それは昨日の夜にさかのぼる。

ジリリリリ

居間で寛いで居る最中、備え付けの電話が鳴った。

「……はい。美端ミハタですが」

「……あ、姫？ ワタクシだけど」

「聖ヒシリ？」

あたしは耳を疑った。

コクトウ ヒシリ
石堂聖。あたしの友人だ。今日から北の親戚にお邪魔していると
言っていたけど……。

「何？ 何か有ったの？」

「いえいえ、北線上異常無しよ。ただ、ね。姫に言い忘れたことが
有って」

「言い忘れたこと？」

「うん。実は今日、につしーに「姫がクリスマスプレゼントをあげるらしいよ」って言っちゃって。冗談だったんだけどにつしー、本
気にしちゃってねー。訂正しようかなーと思ったけどもう出発しな
きゃならなくなったから訂正出来なくなっちゃってさー。仕方ない
から姫、につしーにクリスマスプレゼントよろしく！ お詫びに今
度日向デパートにあるbaroqueバロックのスペシャルケーキ奢るから

じゃ！」

「え、ちよつ、ま——」

がちゃ。つーっ。

あたしの静止も虚しく、通話は途切れた。

「……さて、どうしようかなあ」

見えてきたデパートの前にあたしは呟く。あいつが好きな物って何があったか。……や、まずあいつ自分の事はほとんど話さなかった。

……仕方ない。デパートを散策して決めるか。

ハナアオイ ミスズ
華葵美鈴

「……ふう。やっと解放された。全く。店長の奴め。こんな時間になるまで突き合わせやがって……」

日向広場。中央の噴水を眺めながら奇怪なオブジェに挟まれたベンチに座り、オレは呟く。自販機で買った缶コーヒーを両手で弄びながらさて、どう過ごすか、と考える。昨日たっぷり昼寝したため、眠くはない。

しばらくコーヒーを弄ぶ。仁の喫茶店にでも行くか。確か今日はなんかのキャンペーンをやっているらしいし、と考えをまとめ、ようやくコーヒーが普通に持てる熱さになったのでプルタブを上げる。口元にコーヒーを運んだ所で、不意に殺意を感じた。

殺意の先に視線を巡らす。自販機のそばに怪我でもしたのか、頭に包帯を巻いた男が居た。

男はゆっくりと茶色のジャケットのポケットに手を伸ばす。

強まる殺意。

男がポケットから手を抜く。その手には光る物。オレはそれを視認し——。

手に持っていた缶コーヒーをぶん投げた。

。響く轟音。当たりにまき散らされるネジや金属片。投げられた何かによって壊れた自販機を横目に男――殺人鬼、等々力 将吾は何かが飛来した方を見る。

そこに居たのは一人の修羅。

ざわめく周囲を後目に憤怒の表情でその男は言う。

「……テメエの所為でよお」

がしり、と男の右手がベンチのそばの奇怪なオブジェを掴む。みしり、と何かが軋む音。

なんの音だ、と周囲が思う間も無く、

「テメエの所為で、コーヒ―が無駄になったじゃねえかあああああああ！」

根元がコンクリートで埋まっていた筈のオブジェを男は等々力に向かつてぶん投げた。

クリスマスカプリチオ 中 につづく。

9 C クリスマス・カプリチオ 上（後書き）

付録〈これからの登場人物について〉

…… 重大な事実が判明しました。

8 ↓ 9 番外までのにちひにに登場した人物の合計が…… 75 人以上になってたのです。そしてこれからも増えます。このままでは読者様も自分も混乱します。

だから今回、登場しない人物、登場するか解らない人物もしくは名前のみ、登場する人物、メイン、に分けようと思います。ちなみに登場した人物の合計にはモブ、死んだ人、名前のみも入ってます。では、登場した順にまずは登場しない人物を発表しましょう。ちなみに死んでる人や捕まった人、には（故）や（死）や（補）などが付け加えてあります。あ、疑問などは感想でお願い申し上げます。

● 登場しない

1 B 少年

3 A 不良ズ（名前のみ）

3 B 異形（死）

4 B 狼男（死）、瑞舟 将門 & 瑞舟 真由（故）

5 C 文化祭荒らし（補）、口ボ

6 B コンビニ強盗（補）

7 B 悪霊（死）

8 B 化け物♀（死）

○ 解らない

2 A 華葵ファンクラブ

5 C 詐欺師、ミハエル、松平ズ、門川（名前のみ）、松平 門人

登場する

登場しない、解らない、^{メイン}主要人物以外の予定です。

^{メイン}主要人物

華葵 美鈴

柊木 信

美端 西姫

神社 仁

百棟 弧赤

八崎 京仁

矢神 統夜

御手洗 断悟

XXX登場予定(変動有り)XXX

草薙 樟葉、稲荷 群葉、ロウ、グリユウ・レインレイティア、羽

対 一葉、ユウ

…… 大体こんな物ですね。どうにか70人以下にはなりました。

…… え？ 最後に変な物が有った？ それは多分、幻覚か見間違い

か気のせいかもしれない伏線です。

その二

仮想倶楽部の成り立ち

二年の春。唐崎がふと部活を創ろうと思い立つ。名前はなんとなくで仮想倶楽部。

だが、許可を取れず断念。仕方ないので非公認に作ろうと決意。そのために部員集めを開始。

とりあえず昔の事を盾に、郡山を強制入部。

部活を作るのに必要な最低人数は四人。変人で名を轟かす唐崎に友人などいないため、無愛想だが少なからず友人が居る郡山に部員集めを命令。郡山、幼稚園の頃の恥ずかしい写真を破棄する事を条件に、命令を実行する。

まず郡山は友人であるびよりを勧誘。びよりは面白そうと言ってあっさり入部。

他に当てが無いため郡山は、びよりに任務を引き継がせ、帰宅。

びよりは何を思ったか、廊下に（鳥を捕まえる奴）を設置。

何故か通りすがりの壱木がそれに引っかかる。

隣に居た御手洗がそれに突っ込む。

びより、菓子を餌に壱木を攫う。

あっさりと攫われた壱木に突っ込みながら御手洗も追う。

紆余曲折あって、びより屋上に逃げ込む。

何故かそこに唐崎が居た。

郡山によってびよりが入部している事を知っていた唐崎は丁度良いと壱木とびよりを追ってきた、御手洗を勧誘。

壱木は一旦は断るが、菓子を釣られて入部。

御手洗は直感的にこの男、放っておくと何かやらかしそうだ、と思入部。

それによって仮想倶楽部誕生。空き部屋が無かったため屋上をたまり場に。必然的に雨の日は活動無し。

三年生の秋には春日も入部。屋上はある意味で賑わう。ちなみに仮想倶楽部は三年生だけで成り立っているため、三年生が卒業すると自動的に消滅。つまり仮想倶楽部は春まで。以上終了。

次回予告。

華葵 美鈴VS等々力 将吾。

ウィザード マッドネス
奇術師VS気狂い

柊木 信VS華葵父

矢神 統夜VS華葵父

メリーVSお菓子の山

美端 西姫VSクリスマスプレゼント

the next title

「クリスマス・カプリチオ 中」

さて、どうしよう。

9 Cクリスマス・カプリチオ 中 (前書き)

大変遅れました！まさかこんなに遅れるとは……。
あ、ちなみに名前の表記を少し変えました。(例。 ヤマダ タロウマル 山田太郎丸)

9Cクリスマス・カプリチオ 中

ミタラシダンゴ
御手洗断悟視点

「……ん？」

ふと大きな音がしたような気がして俺は悪戦苦闘していたプリン
トから顔を上げた。

「どーした？ 御手洗ー」

その拳動に横で漢字を書き連ねていたぴよりが俺に顔を向け、話
しかけた。

「ん、いやなんか日向広場で大きな音がしたような気がしてな」

「大きな音？」

俺の言葉に右斜めで俺と同じく数学を解いていた唐崎が顔を上げ
た。

「大きな音ってどんな音だい」

「……んー。さあ。……まあいいや。なんかの事件だったとしても
どうやったって俺達は関係ないんだし。て言うか俺はそんな事より
も聞きたい事があるんだ」

「ん？ なんだい」

「なんで、お前は俺の家で勉強しているんだ？」

「そりゃ勉強会だよ」

「ああ、それは聞いている。だがな、俺は許可してない！」

「御手洗のお母さんが許可したんだよ」

「……母さんが？」

「うん。「御手洗君とお勉強をするんですけど」って言ったら快く
通してくれたよ」

「……つまり騙したと」

「ん？ どこがだい」

「「御手洗君“と”」、って所がだ！ さっきも言ったけど俺は許
可はおるか断った筈だぞ！？ なのになんで御手洗君“と”になっ

てるんだ！」

「仕方ないじゃないか。氷華は明日までベトナムだし、壺木君は日向デパートのスイーツフェスタに行っちゃったし、春日ちゃんは電話番号が解らないから無理だし」

「……壺木の所が少々不満だが納得しよう。だがな！　なんで俺の家なんだよ！　お前の家でも良いだろ！？」

「いやあ、それはちよつとねえ。ぼくの家は口に出すのもはばかれる有り様だからねえ。ちよつと勘弁」

何時にも増して軽い口調と軽薄な笑み。だが目は笑ってない事に俺は気付いた。

「……ならばよりの家は？」

その言葉に宿題に勤しんでいたぴよりがまた顔を上げた。そして言う。

「ん。アタシの家も無理ー」

「理由は？」

「のーぷろぶれむ」

「……いやそれを言うならノーコメントだろ。イプロブレム無問題じゃ理由が無い事になるからな」

「ん。あ、ホントだ」

「……まあいいや。で、唐崎。これはどうやって解けばいいんだっ
たか」

「ん？　ああそれはね——」

ハナアオイ ミスズ
華葵美鈴視点

前方で砂塵が巻き上がる。

「……さて。思わずオブジェをぶん投げちまったが——死んじゃあ
いねえよな。生きてるよな。つーか生きてないと困る。いくらオレ
でも殺人犯は勘弁願いたいし」

オレがそう呟いていると不意に前方からゴミ箱が飛んできた。

「お。どうやら生きてるみたいだな」

そう呟きゴミ箱を躲すため、オレは後ろに跳んだ。
それを追うように、一つの影がゴミ箱を飛び越えた。

「ッアアアア！」

雄叫びを上げ、宙にいるオレに向かって、その男はサバイバルナイフを振り上げた。

……不味い。躲せない。

足掻きとばかりに体をよじる。ナイフはオレのほつぺたを掠めた。
……足掻いてみるものだ。

外した事によって出来る隙。オレはそれを見逃さず、がら空きの脇腹に拳骨を突き出した。

吹き飛び、再度砂塵の中に消える男。死んではいないだろう。通常だったら解らなかったが、今し方放った拳骨はそ通常の半分も出てない。空中だった事もあるし、変な体勢だった事もある。何にせよ多分、相手は死んでいない。

そう思いながらオレは素早く身を翻し、その場を去った。理由は簡単。留まっていたら器物破損とかで捕まるからだ。

ヤッサギ キョウカ
八崎響歌視点

「——ん？」

ふと日向デパートの方で大きな音が聞こえたような気がして、ワタシは読んでいた漫画から顔を上げた。窓を見ると灰色の雲が空を覆っている。

大方華葵辺りが暴れてるのだと結論づけ、漫画に視線を戻す。
「よう」

不意にリビングの入り口から声をかけられた。ワタシは驚きもせず、再度顔をあげ、静かに言う。

「……何の用だ。久世^{クセ}」

「ん。なんだ気付いていたのか」

やや拍子抜けたような声を上げ、久世は土足のまま上がる。……

矢神が怒るぞ。

「ん。音無しは居ないのか？」
サイレント

「クリスマスパーティーに出す料理の買い出しだ」

「ふうん。なあ奇術師。ウィザードあいつの料理は旨いのか？」

「三ツ星レストランのシェフと互角」

「そりや凄い」

「で？ 何の用だ久世。用件によっては殺すぞ」

「やってみろよ、奇術師。ウィザードオレは嗤いながらお前を殺して、サイレント音無しを殺して、ついでにテメエの肉親も殺すからよ」

「……良いだろう」

漫画を閉じ、後ろにやる。そしてスーツのポケットから白い手袋を出した。嵌める。

「後悔するなよ久世、いや気狂い。マッドネスワタシは同僚だからといって容赦はしない。命乞いなら同僚のよしみでさせてやるが」

「そりやこっちのセリフだ」

そういつて気狂いはポケットからナイフを取り出した。
マッドネス

合図はいらない。殺し合いにそんな物は不要だ。
マッドネス

気狂いが走り出す。入り口とワタシの距離は10メートル程度。
マッドネス気狂いなら数秒で詰めれるだろう。させはしないが。

両手を振るう。ひゅん、と指先から光る何かが音を立てて気狂いに襲いかかる。
マッドネス

気狂いはそれを躲さず、左腕を霞む速さで数回振った。光る何かはそれに連動しフローリングの床に落ちる。

「手袋の指先に繋いだワイヤーを手で自由に操作する——そのタネはもう見飽きたぜ？ さあさあ次は何を仕掛ける！？ ウィザード奇術師！」

その言葉にワタシは答えた。その場にかがみ、一見傷跡にしか見えない取っ手を勢いよく引く事によって。

「……おいおい」

露わになった黒光りするそれを見て気狂いは嬉しそうに言う。
マッドネス

「まさかマシンガンを出してくるとはな。最高の手品だなあ、おい？」

「矢神の目をごまかすのは大変だったぞ？」

そう言っ、床に隠したマシンガンを構える。そして気狂いに
向かって放った。響く爆音。

「——とお」

呟き、横に跳ぶ気狂い。マッドネス その直後、奴が居た場所は木っ端微塵にな
った。

「——……ふう」

木っ端微塵になった場所を眺めながら床に着地する気狂い。マッドネス 無論、
休ませる気は無い。

マシンガンを放つ。マッドネス 気狂いは右斜め後ろに跳んで避ける。直線上
のテーブルと椅子が餌食になった。

「やれやれ。少しは休ませろよ？」

気狂いがそう呟く。無論、却下。再び気狂いに銃口を向ける。マッドネス
爆音、爆音、爆音、爆音、爆音、爆音、爆音、爆音、カチリ。弾
がなくなった。

「——チッ」

舌打ちをし、マシンガンを放り投げる。弾がなくなった事を察知
し、こっちに突っ込む気狂い。マッドネス ポケットに手を入れる。ワイヤーは
斬られた。マシンガンは弾切れ。だが、まだ品切れではない。

気狂いの距離が縮まり、ポケットから手を引き抜こうとしたその
時。

「……なにしてるんだ……？ テメエら」

食材が入ったビニール袋を提げる鬼のやがみ声を聞いた。

数分後。

「ったく……好き勝手な事しやがってお前ら」

裏の世界では最強であるはずの十指が正座している姿がリビング

にあった。

「す、すまん矢神」

「すまんで済むなら殺し屋はいらねえ。……つかしどうしようかねえ」

ワタシの謝礼をざっくり切り捨て矢神は頭を掻いた。その視線の先には木っ端微塵になった床と家具。

「とりあえず床は校長のコネに頼るとして……問題は家具だな。……仕方ない。今から買いに行くか。金は気狂いと響歌、お前等二人で折半だ。いいな」

「それくらいなら……まあ」

「別に構わない」

ワタシと久世がすぐに答える。

「よし決定だな。じゃあ行くぞ」

モモムネ コセキ
百棟弧赤視点

「ねえねえ絵里はどうする？」

「んー。ウチは駄菓子系列に行くわ」

「くるみは？」

「わ、私は和菓子……」

「ふうん。じゃボクは洋菓子系列に行こうかな？」

見覚えのある活発そうな少女と関西弁を喋る少女と気弱そうな少女の三人組がぼくのそばでそんな会話をしている。……確か同じクラスの……光村さんと菱谷さんと三浦さん……だったけ。

そんな事を考えていると菱谷さんが光村さんに言った。

「どっちにしたって急いだ方がええわ」

「ん、それもそうだね。じゃ各自解散！ 11時くらい経ったらb
パロツク
aroqueの前に集合！」

「了解や」

「うん。わかった」

各自、そう言つて別れた。それを横目にぼくも呟く。
「……どこ行つたんだろ？ メリー」

ヒイラギ
柊木信視点

「……何があつたんだ？」

それが日向デパートの前の広場の惨劇を目にした俺のセリフだつた。

真ん中がへこんだ自販機とその隣の壁に突き刺さったオブジェ。そして周りには警察官。……はつきり言つて何が起つたのかまったく解らない。

「そんな事より先輩！ 早く行きましょう！」

「……そんな事つて……。結構重大な事だと思うんだが」

「わたしと先輩の前では大した障害ではありません！ と言つがこの惨状は大方お姉ちゃんが暴れたからだと思います！」

「……あー。確かに」

華葵の言葉に頷いていると、不意に視界の端に黄色い何かを捉えた。

「……？ ——！」

何気なくそちらに視線をやり——俺は素早く後ろに下がった。何故かと言うと、

「カアアアレエエエン！」

くぐもつた声と共に“トラ”の着ぐるみが突つ込んできたからだ。俺の前で緊急停止するトラの着ぐるみ。……な、なんなんだ？

「……なんですか？」

「キサマ、名前は？」

「……柊木ですが」

「キサマが柊木かああああ！」

そう叫び、俺の肩を掴み揺するトラ。

「ちょ、ちょっとお父さん！？ 先輩になにするんですか？」

慌てて華葵が俺とトラの仲裁に入る。……って、

「お父さん？」

「キサマにお義父さん呼ばわりされる筋合いは無いわあああああ
！」

「ちょ、お父さん！？」

より強まる肩揺すり。視界が揺れる揺れる。

「はい。そこら辺でストップですよ、あなた」

不意にその肩揺すりが止む。視界の揺れも収まり、俺は眼前の光景を見る。

今し方トラを止めた声の持ち主と思わしき、羊の着ぐるみがトラの斜め後ろに居た。華葵が叫ぶ。

「もしかして……お母さん！？」

……もう一体なにがなんなんだ。

ミツムラ ミタマ 光村三珠視点

「……んん。やっぱり無いな。めばしいの」

お菓子の山を横目にボクは呟く。シュークリームやらチーズケーキやら色々あつて目移りしそうだけど予算が限られているからね？
慎重に選ばないと。

……とりあえずこの唐辛子シュークリームは却下だなあ。と言うかなんでシュークリームに唐辛子？ 作った人は一体なにを考えたんだろっ。

疑問に思いつつ、唐辛子シュークリームをお菓子の山に投げる。

絶妙なバランスで積まれたお菓子の山はそれだけでバランスを崩し、
「……ぶぎゅ！？」

お菓子の山を挟んだ向こう側に居た黒髪の小っちゃな女の子に降り注いだ。

次々と降り注ぐお菓子によって形成される山。それを見、あたりに誰も居ない事をボクは確認し、

「……知らないって」
踵を返し、素早くその場から立ち去った。

百棟 弧赤視点

「メリー？ どこにいるんだ」
周囲にそう呼びかけるが返答無し。

「おい」

迷子の放送をかけようかと思ったその時。

「……せき」

微かにメリーの声が聞こえた。慌てて声のした方を見る。
長机の上の菓子を山ほど積んだトレイ。均等に積まれたその一つ
が何故か半分になっていた。……まさか。

慌てて反対側を覗き込む。そこには菓子の山が形成されていた。

「だ、大丈夫！？ メリー！」

その山の中から聞こえる声に僕は慌てて発掘を開始した。

ヤガミ トウヤ 矢神統夜視点

「……で、オレン所に電話した訳か」

携帯越しの華葵の声に俺は頷いた。

「ああ。出来れば玄狼も手伝ってくれと良いんだが……無理そう
か？」

「……んー。無理っぽい。客に忙殺されてるから」

「解った。じゃあ、とりあえず特徴を言うぞ。もしかしたらその喫
茶店に来るかもしれないしな。ああ。その場合は電話してくれ」

「りょーかい」

「……んーと、まず名前は等々力将吾^{トドロキ ショウゴ}。北の方で五人くらい殺した
殺人犯だ」

「……ああ。つい最近ニュースでやってたな」

「特徴は大柄で黒髪。多分服は変えただろうな。ああ、マッドネス 気狂いと対峙していた時に白い包帯を巻いてたそうだな。まあそれも取ってあるだろうが」

「白い包帯……？」

華葵がふと訝しげな声を上げた。

「ん、どうした」

「……いや、なんでもない」

「そうか。じゃあ、頼んだぞ」

「おう」

通話終了。携帯を閉じ、いちごミルクを飲んでいるマッドネス 気狂いと漫画を読んでいる響歌と朝霧荘住民ズに俺は言った。

「さて、とりあえず床は校長がなんとかするらしいから近くの路地裏にでも行こう。いいな？ マッドネス 気狂い、響歌」

「……その前に本屋に寄って良いか？」

「却下だ」

華葵美鈴視点

携帯を閉じ、オレは呟いた。

「白い包帯……ね」

もしかしくなくてもオレが先程ぶっ飛ばした奴か？

「……とりあえず広場に戻るか」

殺人犯は現場に戻るってよく言うし。

そう結論付けオレは立ち上がり、レジで会計をしているシン 仁に言った。

「仁。会計」

「おう」

パチパチとレジを打ち、仁は金額を言った。ポケットから取り出した財布を取り出し、出す。釣りを受け取りながらオレは仁に言った。

「仁。客の中に茶色のジャンパー着てる奴が居たら気をつけろよ。白い包帯を頭に巻いてたら大当たりだ。ジャックボット……あ、これは玄狼にも言つてくれ」

「？ ああ……解った。いやよく解らんが……とりあえず伝えとく」
「頼むぞ」

クスノキ フウジュ
楠風樹視点

「で、ハロルド。どこに行くの？」

商店街の喧騒の中、私は隣を歩くハロルドに聞いた。

「……ン。そうだな……。おもちゃ屋にでも寄ってクリスマスプレゼントでも買おう。ハルナ ナツキ春奈や夏生が楽しみにしているからナ」

「それもそうね。……えっと、ハルは図書券でナツは……なんだっけ？」

「今やってるなんとか戦隊のロボとか言ってたような気がするナ」

「戦隊……ねえ。まあいいわ。とりあえず早く行きましょう。今放送されているなら目立つ所にありそうだし」

「ン。それもそうだな」

話が纏まったので私とハロルドはおもちゃ屋に向かった。

柊木信視点

「……と言つ訳で私は架恋と約束したのだ。故に貴様に架恋はやらん」

「……それ何年前の話だ？」

「しらん」

「確か七年ぐらい前じゃありませんっけ？ ほらその当時カレンちゃん日向小学校の暴君って言われてましたし」

「もう、お母さん！ それは今言う事じゃないでしょー！？」

「あら。そうかしら？」

「そつだよ！」

「……どっちにした所で架恋は渡さん。……あの放蕩娘なら喜んでくれてやるが」

誰の事だ、と考え俺は言った。

「美鈴さんの事ですか」

「ん？ あの放蕩娘を知ってるのか」

「去年、華葵と会った時にな」

「なら話は早い。貴様、いや柊木といったか。美鈴はいらんか」

「先輩！ 断ってくださいよー！」

華葵が遠くから叫ぶ。言われなくてもそうする。

「せつかくですがお断りします」

「そつか。ならとりあえず帰れ」

「却下です」

うんざりしながら俺は言う。このトラはいつになったら仕事するのだろう。

いやもしかしたら忘れてるのかもしれないな、と思った時、びきり、と何かが軋む音がした。続いて響く轟音。

「む？」

「わっ！？」

「な、なんだ？」

「あらあら」

周囲から聞こえる音を聞きながら、左から来る砂煙に目を細め俺は轟音がした方を見る。

「よう。久しぶりだな？ クソ親父」

そこに居たのは美鈴さんだった。

クリスマス・カプリチオ 下 へ続く。

9 Cクリスマス・カプリチオ 中（後書き）

付録

日向市MAP

北

山

名前は不明。日向市の北にでん、とある。潰れた病院やら墓場やら何かと不吉。幽霊が出ると言う噂もあるらしい。

日向豪邸

山のふもとにある大きな一軒家。日向校長こと日向兵蔵ヒュウガ ヒョウゾウとその家族が住んでいる。

東

商店街

色々と騒がしく、活気に溢れている。

路地裏迷路

商店街の裏。空き家やら寂れた映画館やら何かと無人な所。とても入り組んでおり、秘密基地やら不良の溜まり場などがある。近道に通る人も目標にカツアゲもあるよ。そのため時々サングラスを掛けた人が循環している。

中央

日向高校

普通の高校だが何かと変人が集まっている。警備員はSPだとか

なんか。

タバコ屋

日向高校の前にある店。老婆が営業している。

西

cafe nocturne

神社仁が営業している喫茶店。恥ずかしがり屋な従業員と無愛想な従業員目当ての客があり、割と繁盛している。

空き家

cafe nocturneから13件離れた所にある空き家。

殺し屋が住んでたりしていた。

朝霧荘

矢神統夜が管理人をしているアパート。

南

日向中学校

美端西姫や御手洗断悟が通う中学。

日向小学校

未登場。美端琥金が通っている。

日向デパート

色々と品揃え豊富なデパート。前には広場がある。

極楽龍

焼き鳥屋。華葵美鈴が働いている。オススメは焼き鳥パラダイス。

日向図書館

未登場。通称本の日向デパート。

日向駅

未登場。小さな駅。

と言う訳で次は下と書いてありますが実際はどのような事やらと先行き不安です。まあとりあえず次回予告へ。

次回予告

逃げる殺人犯。

追う奇術師。
ウイザード

様々に交差する人々。

そして――。

the next title

「クリスマス・カプリチオ 下」

9 Cクリスマス・カプリチオ 下 (前書き)

祝、PV1万、ユニーク4000！ 来てくれた方には本当に感謝しますっ！

……あれ、最新する度に祝っているような。

9Cクリスマス・カプリチオ 下

ヒトリセシキ
一年四季視点

「……ねえ、ヒナタ」

「んー？ なに？」

「これは、なに」

「何って……お粥だけど」

「……お粥って、普通白じゃないっけ」

「焦がしたんだぜ」

「……そう」

そう言って私は立ち上がる。

「んん？ どーした、しつきー」

「作り直すのよ……。全く」

ヤガミトウヤ
矢神統夜視点

「とりあえず、だ」

とある路地裏。そこに集う華葵と玄狼と双子とアリスとキャロルを除く朝霧荘メンバープラス2人に俺は言った。

「響歌、^{マッドネス}気狂い、^{ハミネ}覇峰は等々力の^{トドロキ}搜索。俺は家具の調達。巴手、^{ハテ}サ
ンダースは双子とアリスとキャロルの見張り。——質問は？」

その言葉に覇峰が言う。

「……矢神は追わないのか？」

「……俺はもう十指でも暗殺者でもなんでもない。しがないアパートの管理人だ」

「……そうか」

納得してなさそうな表情で言う覇峰。続いて巴手が聞いた。

「えっと……見張りって……？」

「そのままだ。今日は曲がりも何も入居者が増えた事を祝うパーティー

イーだからな。当事者に余計な心配をさせたくない」

「……解りました。……あれ？　じゃあ私だけでいいんじゃない？……？」

「それはハテがうつかりばらすかもしれないからだよ！　だよねえ、トウヤ！」

「そうだ」

「……ああ」

「……本人を前にしてひどいな、オイ。て言うか巴手。納得したような表情をするな」

覇峰が呆れたように言う。俺はそれを横目にまとめる。

「……とりあえず。今の所被害は出てないが……それもいつまでも持つとは思えん。急ぐぞ」

その言葉と共に^{マッドネス}気狂いは北に、響歌は東に、覇峰は西と別れ、巴手、サンダースは朝霧荘へ戻った。俺はそれを見送った後、家具を調達するため、日向デパートに向かった。

去る前に覇峰が去った方に顔を向け、一人呟く。

「……すまん、覇峰。俺にはあいつとの約束があるんだ」

。どこかの部屋の会話。

パチン、と部屋に指を鳴らす音が響く。続いて響く心底楽しそうな声。

「——イエイ、イエイ、イエエ！　ようやく、動き出したみたいだねえ？」

ハイテンションなその言葉に心底めんどくさそうな声が返答する。

「……どうやらそうらしいな」

「んでんで？　あーたーしーたーちーはー、どう動けばいいのかな？」

「……兵蔵^{ヒョウゾウ}曰わく、出来る限り殺さずに退場願いたいそうだ」

「ふーん？　それだとあんたが適任ね？」

「……まあな。というか^{カナ}華奈。お前が活躍出来るのはハッキングと

か機械関係のインドア根暗な方向じゃねえか」

「……まあね？ でもあたし的にはどこぞの大量殺人禿げ親父よりはましだと思うけど？」

「……その禿げ親父つてのはもしかしくなくても儂^{わし}の事か？」

「……あら。自分が禿げてるって自覚あつたの？」

「……ひやはは。殺してやろうか？ 根暗女」

「望む所よ大量殺人バカ」

険悪な雰囲気が部屋に流れる。それを破るように穏やかな声が混じる。

「——まあまあ2人とも。今は争ってる場合じゃ無いよ？ ヤミちやん曰わく早く終わらせたいらしいから。争つてると多分、今日の夕飯は2人の嫌いな物が出ると思うし」

「げー。……オッケー」

「むう。……了解」

穏やかな言葉に、“2人”の声が返答した。

「よし。それじゃあ行こうか」

ミハタニシキ
美端西姫

数時間粘つてみたけど結局これと言った物は見つからなかった。

「はあ……」

ため息を吐きながらゾンビのような足取りでデパートを出る。

ほんとどうしようかと思ひながら日向デパート前の広場のベンチに腰掛ける。

「……あれ？」

見るともなしに広場を眺め、あたしは違和感を感じた。

いや違和感と感ずるには明らかに変わつてゐる所があつた。

目の前のビルに何か変な物が突き刺さつてゐるのだ。目を凝らしてよく見る。ベンチの横にあるオブジェに似てゐるような……。

そこでもう一つ気付く。あたしが腰掛けているベンチにオブジェが無い事に。

「まさか……ね」

脳裏に巡った想像を頭を振る事で消し、あたしは立ち上がった。

……とりあえずそこら辺りを歩こう。もしかしたら何か良い物が見つかるかも知れないし。

ヒイラギ マルト
柊木信視点

「大体お前は！　いつもいつも——」

「そりゃテメエが悪いんだろうが——」

……いつになったら終わるんだろうか。目の前で行われている美鈴さんVS華葵父の言い争いを眺めながら俺は思った。ちなみに華葵は母親との会話を終え、何故か俺の腰にひっいていた。正直、邪魔だ。

「……何やってるんだ、華葵」

もうこれ逃げていいか？　そう考えていると、横から声がした。思わずそつちを見る。視界の端で華葵父と美鈴さんが振り向くのを捉える。

視線の先に居たのはラフな格好で身を包んだ一人の男。よくよく見れば整っているのだろうが全身を包む疲労感がそれを台無しにしていた。

「……矢神」

美鈴さんが言う。どうやら知り合いのようだ。矢神と呼ばれた男はポリポリと頭を掻きながら美鈴さんに問った。視線の先には壁に突き刺さったオブジェ。

「……この惨状はお前の仕業か？」

「……ああ」

美鈴がこくりと頷く。そして、

「で、矢神。お前はなんでこ「貴様！　まさかこの放蕩娘の彼氏か

！？」……おい」

何かを言いかけたが華葵父に阻止された。

「……は？」

矢神とやらも動きを停止する。華葵父はそれに構わず続ける。

「成る程。つまり貴様、僕に娘さんをくださいと陳腐で使い古された定番極まりない台詞を言うつもりだな？　よし解った、貴様にこの放蕩娘はくれてやる」

「……いや、アンタだ「テメエ、このクソ親父！　何勝手に娘の将来決めてやがる！」……」

矢神が何か言おうとしたが美鈴さんに阻止される。

「ふん、だからOKしてやったんだろ。これからお前は自由だし、それを今すぐ振るもよし、付き合うもよし。結婚式をするもよし、だ」

「勝手に妄想を進めるな！　いいか、矢神はオレが住んでいるアパートの管理人だ！　テメエが考えている関係じゃねえ！」

「知ってるか？　人目がある所ではツンツンし、人目が無い所ではデレデレする奴の事をツンデレと言うらしいぞ」

「……オレがそれだと言いたいのか！？」

「そうだ」

「——ッ、この——！」

再開する言い争い。傍目から見ればトラの着ぐるみと男のような女のシュールな喧嘩にしか見えないだろう。親子喧嘩だと誰が思うか。……いや、これが親子喧嘩だと解る奴はほとんど居ないな。

そんなどうでもいい事を考えながらぼんやりトラVS美鈴さんの第二言い争い戦争を眺めると不意に袖を引っ張られた。見ると華葵だ。

「先輩先輩」

「……なんだ華葵」

「今の内に逃げませんか？　母さんはわたしを止めようとはしませんし、お父さんはお姉ちゃんと喧嘩してますし」

「……ふむ」

しばし考え、俺は頷く。

「よし、さっさとこの場を離れるぞ」

「はい！」

元氣良く頷く華葵をお供に俺はようやく日向デパートに入った。

。

「ふー、ふー……」

息を整え、等々力はこれからの行動を考える。

……あの馬鹿力男は多分デパート辺りに居るだろう。よってあそこには戻れない。他に沢山人が居る所と言えば――。

「商店街……か」

呟き一人頷く。そうと決まれば行動だ。片っ端からバラバラに切り裂いて殺してやる。

湧き上がる殺人衝動を抑えつつ、等々力は歩きだそうとして――。風を切る音を聞いた。

「ッ!？」

反射的に頭を逸らす。その直後、今し方頭が合った場所にダーツのような物が突き刺さった。

「……」

首をダーツが飛んできた方に向ける。

「惜しい。外したか」

そこに居たのはスーツを着た女だった。言葉からしてダーツを投げたのはこの女のようなのだ。

「誰だ？ テメエ」

問いながら等々力はナイフを構える。馬鹿力男に殴られた腹が痛むが、行動を妨げる程では無い。

「誰だ、とはご挨拶だな。まあとりあえず通りすがりの美女とでも名乗っておくか」

「……ふざけてるのか？」

「いや？ 大真面目だが？」

そう言つて肩をすくめる女。

その態度に等々力は何を言つてもはぐらかされると悟つた。だから、とりあえず切り裂く事にした。

走り出す。前置きはいらぬ。今から斬る相手に必要だとは思へない。

「ん？ なんだもう始めるのか？」

気怠げに女は呟く。そしてスーツのポケットに手を入れ、一本のダーツを出した。振り払うように投げる。

「——ツオオオオ！」

放たれたダーツ。それは正確に等々力の肩を打ち抜こうとした。バランスを崩しながらも体を捻る。ダーツは服をかすめ、後方に飛んでいった。

再度ダーツを取り出す女。させるかとはかりに等々力はナイフを持った右手を振る。女はそれを素早く屈む事で躲す。そして瞬時に狙いを定め、ダーツを放つ。

「っ、が——！」

右肩に走る激痛。思わずナイフを取り落としてしまう。

それを後目に後方へ跳ぶ女。その最中に再度ダーツを取り出し、着地する。狙いを付けるより早く、等々力は無事な左手でポケットを探り、玉のような物を取り出した。そして勢い良くコンクリートにぶつける。

ぼん。

間の抜けた音が響き、煙が噴き出す。

「……煙玉か。一昔古い逃走手段だな？」

そう言いながらダーツをろくに狙いをつけず、等々力が居た方に投げる。当然の事ながら手応えはなかった。

「……やれやれ。まあ手傷を負わせただけ、良しとするかな」

そう呟き、何事もなかったように女は踵を返した。

柊木信視点

「……あつれー？　そこに居るのはもしかしくなくても信？」

華葵と共にイベントコーナーに向かっていると横からそんな言葉が聞こえた。

「……光村か」

「あれ、華葵ちゃんも。なににこれはもしかしくなくてもデート？」

「男女が揃って歩いているのをデートと言うのならな」

「違うの？」

そう言つて首を傾げる光村

「違う。こいつが勝手に来ただけだ」

俺がそう否定すると、

「あ、そうなの？　華葵ちゃん」

光村は華葵に問った。

「違いますよ！　先輩は照れてるんです！」

百%嘘の言葉を躊躇いもなく吐く華葵。

「……それこそお前の勘違いだ」

ため息を吐きながら俺は再度否定した。

「もー、相変わらずのツンデレなんですから！」

ミハタニシキ
美端西姫

「やあ。君、買わないかい？」

「……？」

何か無いか何か無いかと商店街をふらふら歩いてると声をかけられた。

声のする方を見る。そこには路地裏に続く道があった。暗い方へ続くその道の壁際に、しかれた灰色のシートとそれに座る男。

他に人が見当たらないので彼が声をかけたのだらう。

「……何を、ですか？」

警戒しながら男に近寄る。男はにこりとあたしに笑いかけ、自身が座っている灰色のシートを指差した。その指先には何か光る物が置いてある。屈んで見てみる。どうやらキーホルダーのようだ。

「……手に取って良いですか？」

「どうぞ」

許可が出たので一つ掴み、目の前にあげる。奇妙なデザインだがどうやら虎をかたどっているようだ。……うん。なかなか良いかも知れない。

「何円ですか？」

「千円、と言いたい所だけどね。キミの運命はなかなか面白いから二百円にまけよう」

奇妙な事を言いながら男はまたニコリと笑う。

「……え？ いいんですか？」

「うん」

「えーっと……じゃあお言葉に甘えて……」

ポケットから財布を取り出す。開き、百円を二枚摘んであたしは男に渡した。

立ち去ろうとすると男はまた奇妙な事を言う。

「それにしても本当、キミの運命は面白いね。まさかこの先の人生で一回も“呪い”に遭遇しないなんて……僕の運命と交換したいくらいだよ」

「はい？」

「いや、別に何も無い——いや、一つあったね」

そして爽やかに笑いながら言った。

「パンツ、見せてくれないかい？」

あたしは脱兎のごとく逃げ出した。

「うん、やっぱりあんな事言われたら普通は逃げ出すよね」

美端西姫が去った後。

男——語り部終は一人頷く。
カタリベ シュウ

そして不意に灰色のシートの上に並んだキーホルダーを全て掴み、傍に置いてある大きな青いリュックサックに無造作に入れた。続いて立ち上がり、シートを丸め、同じくリュックサックに入れる。

「よいしょつ、と」

そしてリュックサックを背負い、足早にその場を立ち去った。

「それにしても——本当に面白い運命だ。数十分後、殺人犯が通るこの場所で僕に会うなんて、ね」

そんな言葉を残して。

それから数十分後。

語り部終カタリベ シュウの言葉の通り、その路地裏に等々力が姿を表した。

「ちくしょう……！目についた奴みんなバラバラにしてやる……！」

等々力は錯乱していた。二回の思わぬ妨害と逃亡。更にその時に負った怪我によって。

「……………！？」

ようやく、商店街にたどり着いた等々力が感じたのは圧倒的なまでの静けさ。

静けさの理由は直ぐに解った。誰一人として人が居ないのだ。

「なん、だ………？」

一瞬等々力は自身が異世界に迷い込んだのかと思った。だが直ぐに滑稽な話だと否定する。

——……不意に。

静かな商店街に足音が響いた。

「——！」

急いで等々力は振り返る。そこにいたのは、猫のお面をつけた真っ白な髪の少女だった。

普通の等々力ならすぐさま飛びかかって殺しただろう。だが今はなかった。いや出来なかった、と言うべきか。その少女は異様な雰囲気を漂わせていた。数瞬の静寂。不意に少女が口を開いた。

「お主が殺人犯、等々力将吾、か？」

「ッ！？」

驚愕を浮かべ、等々力は後ろに飛んだ。そして左手でポケットのナイフを掴み、引きずり出す。

「誰だ……ッ、テメエは！」

恫喝させるかのごとく、叫ぶ等々力。それに少女は容姿に合わない口調で答える。

「儂の名か？ 儂の名は、ヒノハラ リョウゲン火野原燎原。元十死、ジェノサイドスーサイド虐殺自殺、と名乗

った方が良いかね」

ジェノサイドスーサイド「虐殺自殺、だと……！？ 馬鹿な、ジェノサイドスーサイド虐殺自殺は——」

五年前に死んだ筈だ。

ジェノサイドスーサイド「ほう。虐殺自殺は死んだとな。なら、今貴様の目の前にいる火野原燎原は、誰だ」

「……そんな物、決まっている」

やや落ち着きを取り戻して、等々力は言う。

ジェノサイドスーサイド「お前は虐殺自殺を語る偽物だ」

「……普通なら誰もがそう思うだろうな。だが違う」

ジェノサイドスーサイド「何……？ まさか虐殺自殺が生きてると言うつもりか？」

ジェノサイドスーサイド「いや、虐殺自殺——火野原燎原は確かに死んでいる。だが——まだ、火野原燎原と言う意識は完璧に死んではない」

「はっ。つまり幽霊だとも？」

「近いが違うな。幽霊は人間の意識で出来た物。……儂は、コピーだ」

「コピー？」

「そう。コピーだ。火野原燎原と言う意識を完全に復元した、な」

「ふざけるなよ。完璧に復元？ 有り得ないだろう、そんな事」

「どこまでも疑う男だな。なら試してみるか？ 今から儂を殺して

見ろ」

「……言われなくてもやってやる」

その言葉を最後に等々力は火野原燎原と名乗る少女に向かって走り出した。

火野原燎原（仮）は身動き一つ動かさない。

等々力が火野原燎原（仮）の前に立った。そしてナイフを振りかぶる。

「……あ？」

振り下ろす瞬間、火野原燎原が居ない事に気づく。変わりにあるのは黒い玉。

それが小型の爆弾だと気付いた時には手遅れだった。

弾く事も逃げる事すら出来ず、爆弾は――爆発した。

爆発音が商店街に轟いた。

「――ふん。何も出来ずやられるとは若いな」

倒れる男を背に少女はポケットから携帯電話を取り出した。

「――……ああ、兵蔵か？ たった今終わった。……安心しろ殺しちゃいねえよ。半殺しにはしたがな。……ああ解った。じゃあ儂らはこれで帰っていいな」

ひとしきり話、少女は携帯電話をしまう。そして被っていたお面を外した。

「さて、と。おい無闇。今日の晩飯はなんだ？」

一人ごとのように言う少女。その返答は少女の口から帰ってきた。

「シチューよ」

「なら人参は入れないでくれ」

「いや。人参は体に良いの。あなたのわがままで体を悪くする訳には行かないわ」

「……むう」

「アハハハハ！ ザマーミ口禿げ親父ー！」

「……華奈。あまり騒ぐと明日の昼ごはんにピーマン入れるわよ」
「えー。ピーマンいやー」

「こらこら華奈ちゃん。好き嫌いは良くないよ」

「いーじゃん別にー。どうせ私たちに影響は無いんだしー」

「闇ちゃんには影響があるんだよ。だから我慢しよう」

「うー」

「……あまり外で騒がないで。万が一でも見られたらこれから動き辛くなる」

「解った」

「はい」

「うん」

少女——哭搭無闇コクトウ ムヤミは自分の口から漏れ出る言葉にため息をついた。そしてお面を手に自らが住まうマンションへと帰路を辿る。

矢神統夜視点

朝霧荘にて。

「……あー。そうですか。……はい。解りました……では」
受話器を置くと響歌が俺に聞いてきた。

「ん、どうだった？」

「終わったそうだよ。大きな被害は日向デパート前の広場の壁とオブリエのみだ」

「……ほう。奇跡的だな、それは」

「ああ、俺もそう思う。……っと」

「ヘイ、トーヤ。おかわり頼みますヨー」

「おい、矢神！ 酒もつと持って来い！」
サイレント

「音無し。苺パフェのおかわりたのむ」

「ボクはチョコレートパフェー」

「ワタシもー」

「すいません管理人さん。このチキン、まだあります？」

「あー、ハイハイ、解った解った。今用意するからまってる！」

リビングから大勢の催促。

「多忙だな、矢神」

響歌がニヤリと笑う。

「ならお前も手伝え」

「却下だ。ワタシは食べる方専門なのでな。まあこれが終わったら一緒にシャンパンでも飲もう」

「……その前に死ぬかも知れんがな」

華葵家

「ぐうう、柊木めええ……！ 次会ったら絶対にぶん殴ってやる……！」

「お父さん！ 先輩に迷惑かけないでくださいよー。かけたらしばらく無視しますから！」

「おのれえええええ……！」

深旗家、玄関前。

「……はい、プレゼント」

「は、ハニーから、かい？ サンタさんからじゃなくて？」

「そうよ。別に聖に言われて仕方無くやっている訳じゃないからね」

「……っ！ は、ハニー！ 今テープレコーダーを用意したからもう一度今のツンデレ台詞を言ってくれ！」

「誰が言うか」

「ぐふっ。きよ、今日もハニーはツンデレだなあ」

御手洗家

「よー断悟ー」

「……何しに来た、イチギ壺木」

「ちよつと夕食を集りに」

「帰れ」

「みたらし団子ー。お前の白菜だけで良いかー？」

「バツ、良いわけ無いだろこの鳥頭！ くそ、そこで待ってるよ、壺木！」

「……お邪魔しまーす。おー、鍋だー」

「待ってるって言っただろおお！」

「あ、すいません、お茶お願いします」

「あたしもー」

「お前らはお前らで寛ぐなっ！ さっさと帰れっ！」

百棟家

「ただいまー」

「あ、兄さんお帰り」

「……なんだい？ このお菓子の山は」

「あ、それ？ ちよつと通りすがりの人に貰った」

「……面白い人もいたもんだね」

また戻って御手洗家

「……つたく。ちつとは人の家だと言う事を考慮しやがれ。……ん？ そういや壺木、その菓子の少なさはなんだ？ 俺はお前の事だから埋もれる程に買うと思ってたんだが」

「あー。確かにそれくらい買ったよ。けれどなんかお菓子の山に巻き込まれた子が居たんで可哀相だからあげたー。あ、所で御手洗。この鍋の中に煎餅入れていいか？」

「……入れてもふやけるだけだ。やめとけ」

道端で一人の男が凍てつく空気の中、夜空を見上げていた。やがて囁くように呟く。

「メリークリスマス」

9Cクリスマス・カプリチオ 下（後書き）

ぐだぐだ感が否めない終わり方だー。そしてとても長い……。補足。

十死。間違いでは無い。十指の前の十人を示す。

付録

とりあえず本文での説明が結構おざなりなので今更ながら種族の特徴をば。別に良いって方は飛ばして結構ですよ。

No.1 死神

冥府に居る死の使い。

寿命以外（事故、病死など）で死ぬ人の元に現れる。場合によっては戦う場合があるらしい。

一番偉いのは死神長って呼ばれる人。噂によるとその人は死神を人間にする事が出来るとか。

能力 使い魔の能力を上げる。魔力が必要らしい。ちなみに常時発動しているため、魔力の補給が期待出来ない現世では眼帯や包帯などで封印している。

使い魔 カラス、猫など動物が多い。死神を補助する。

弱点 身体能力は人間と同じ。

No.2 不死の王

ノ・ライフキング

太陽に弱い、十字架を直視出来ない、など吸血鬼の一般的な弱点を一切廃した吸血鬼。

能力 蝙蝠になるなどの一般でいう吸血鬼が使える技は使えないが、その代わり再生能力は凄まじく、塵にされても灰にされても細胞が跡形も無く消滅しても一瞬で再生する。身体能力は常人の二倍くらい。

弱点 自身の僕がつけた傷のみ、瞬時には再生せず人間並みの速度になつてしまう。

シモベ 僕。不死の王唯一の弱点。ノイライフキング 不死の王同様再生能力があるが不死の王とは違って一瞬ではなくジワジワと再生する。身体能力は人間の頃の身体能力のままであるが、鍛える事で伸びる。

No.3 悪魔

冥府の住民。悪戯が大好きな奴らが多い。現世では主に本体である動物で活動する。

能力 人間に化けたり、炎を出したり、飛んだりする事が出来る。
弱点 エクソシスト 払魔師の武器。

十指表（決定している物のみ）

名前、特徴

ブレイカークラッシャー
破壊殲滅暴力

ウィザード
奇術師手品

マッドネス
気狂い断剣

エンフティブランク
虚無不明

オールクリア
死角無し万能

キルサイド
殺戮者殺戮

タイラントシャーク
霸王鮫大食い

出す予定は殺戮者と霸王鮫かなー。まあまだ先の話だけど。とり
あえず次回予告ー。

次回予告

春。それは別れの季節。

春。それは出会いの季節。

春。それは物語の始まりに相応しい季節。

——春。それは街に人が増える季節。

それは日向市も例外では無いのだ。

the next title

「10C（表）草薙樟葉」

と、大見得を切りましたがその前に何件か季節物をやる予定で
すぜ。

short1元旦（前書き）

このままでは1ヶ月に一回になってしまつという危機感。

short 1 元旦

「あけましておめでとぅございますっ、せーんぱーいっ!」

「ごぶっ」

惰眠を貪っていると何か腹に重い物が乗った。意識が覚醒する。

「……華葵?」

目を開けるとそこには去年の半年間でいやと言っ程見慣れた顔があった。

「なんでお前がここに居る」

「愛故です!」

きっぱりと断言する華葵。とりあえず辺りを見回す。入り口のドアの隙間に好奇心むき出しの目を発見。……どうやら母さんが手引きしたらしい。溜め息をつきながら俺は頭を掻く。

「何の用だ」

「初詣に行きましょう!」

「……初詣?」

じろりと華葵を見る。そう言えばこいつ、若草色の着物着てる。

「一人で行け」

「いやです。先輩と行きたいです!」

「……いやだと言ったら?」

「この部屋のどこかにあると思われるえっちな本を探します」

「……解った解った。付き合ってやるよ」

仕方無く俺は承諾した。

……別に華葵の言葉が原因じゃないんだからな。

着替え、リビングに向かう。何故か華葵と母さんが仲良く話していた

「でねー。これが3歳の頃の信！」

よく見るとアルバムを机に広げている。

「きゃー！ 可愛いじゃないですか、この先輩！」

「そうよねえ……あの頃はまだ今の風にひねくれてなくて純真だったのに……」

遠い目をする母さん。……良い年した男に可愛さを求めるのは間違ってると思う。

「お義母さん、お義母さん！ 先輩込みでこのアルバム、貰って良いですか！？」

「もちろん良いわよ？ スペアはいっぱいあるし」

「良い訳ないだろ。人売るな」

なにやら話が変わる方向に行きかけ始めたので止める。

「あれ？ 先輩なんで着物じゃないんですか！？」

「いきなりそんな物用意出来る筈が無いだろ。……母さん。今日の

朝ご飯は」

「そこにトースターと食パンがあるからバターなりマーガリンでも塗って食べなさい」

「……解った」

母さんの言う通り、食パンをトースターに入れた。ついでにコーヒ―（インスタント）を淹れる。

「……せ、先輩が、あのひねくれ者の先輩が……！ お義母様の言う声をすんなり聞いた……！？」

「……何が言いたい、華葵」

朝食を食べ終え（ちなみに華葵は家で食べてきたそうだ）、華葵と共に近くのバス停に向かう。バスに揺れる事数十分。バスは日向市の南に座する音是市に着いた。

「……寒いな」

寒風荒ぶ中、音是市の北側にある音是神社の前に立ちながら俺は

言う。

「なら私の豊満な胸に飛び込んで下さい！」

「断る。と言うか自分の体型を捏造するな。どう見てもお前の体型は標準じゃないか」

「いやん。そんなに私の胸を見てくれるなんて……先輩のえっち」

「……今、俺はお前を猛烈に殴りたい」

そんな馬鹿な掛け合いを続けていると、不意に聞き飽きた声が耳朶を打った。

「……あつれー？ 信がこんな早く来るなんて珍しいねー」
首を声のした方に曲げる。

「……光村か。三浦と菱谷は一緒じゃないのか？」

「んー。ちよつと寝過ごしちゃって……。まあ何はともあれあけおめー」

「あけおめ」

そう言えばこいつ、授業中にも眠ってる事が多かったな。納得しているともた聞き飽きた声が。

「ム。あけましておめでとウ、だナ。柊木」

「ハロルドか。お前も初詣か？」

「ああもう済ませたがナ」

「そうか。……所で横に居るのはお前の姉か？」

「いや。姉は文化祭の日に来た姉さん一人ダ。こいつは僕が居候している家の次女」

「ん……と。初めまして。クスノキ フウジュ楠風樹です。君達は……柊木さんと光村

ちゃんと華葵ちゃん、かな？」

「あれ。なんで解るんですか？ ボク達名乗ってませんけど」

「ハロルドから聞いたのよ。ツンデレな柊木くんヲラに、元氣娘の光村ちゃんと、柊木くん一筋の華葵ちゃん」

「……ハロルド。お前は俺の事を今までツンデレと認識していたのか……？」

「イ、いや。ツンデレとは言っていないゾ、僕ハ」

俺の殺意を感じ取ったのかハロルドが慌てて弁解する。

「……信がツンデレなのは置いといてさあ。早く済ませない？ ポク、朝食抜いてきたからお腹ペコペコなんだ」

じりじりとハロルドに近づく俺を後目に光村が言う。風樹さんが頷いた。

「そうね。バスも来たし……。……うん、と。柊木くん。悪いけどハロルドをいじめるのは今度にしてくれないかしら」

「……解りました。ハロルド、今度会った時は覚えてろよ」
華葵に引つ張られながら俺は言う。

「忘れてくれると僕としては嬉しいんだけどナ……」

背後で日向市行きのバスに乗り込みながらハロルドがそうぼやくのが聞こえた。

モモムネ コセキ
百棟弧赤視点

「相変わらず凄い人混みだよなー、兄ちゃん」

「うん、そうだね。……メリー、大丈夫？ だめそうなら上着貸すけど」

相槌を打ちながら、僕は傍で寒さに震えているメリーに聞く。

「だ、大丈夫だ……。わ、私は弧赤の妻だからな、こんな寒さ如き、で、敵では無い……」

「無理しちゃだめだぞーめりっち。こうゆう時は「疲れたわ、あ・な・た（はあとまーく付き）」って言うんだぜ！」

「……縁ちゃんの戯言はともかく、休んだ方が良くわよメリーちゃん」

縁の戯言に被せる様に柊木シキミキが言う。

「むっつ……。こ、弧赤」

「……？ 何、メリー」

「……上着を、貸してくれ」

「……はいはい」

すまなそんな表情で言うメリーに微笑みながら僕は上着を脱いだ。

ハイタニ
灰谷視点

「……何時もながらの事だが……凄い人混みだな」

「そうだね！　なんでこんなに人が多いのかな？　わかるー？

灰谷」

「……私に振るのか……うんと、……日向市に神社が無いからだよ。いや、実際には合ったらしいんだけど15年前に神主が謎の失踪を遂げて。その上なにやら囁き声や呪詛がするとかで次の神主も決まらず廃れたらしい」

「へえー！　ミステリーだねー。肝試しの舞台にピッタリ！」

「……ところで早く並ばないか？　寒くてたまらん」

シキ
一年四季

「うおりゃー！」

無駄極まりない大声を上げて、ヒナタはおみくじを開封した。そしてがつくりとした表情と声を出す。隣で同じく根古御坂も同じくがつくりとした表情と声を出す。

「……また微凶……？」

「あたしはまた微吉だにゃ！」

「……ならまだチャンスはあるって事だよ！　待ってるよー、大吉！」

「負けないにゃー！」

そして再び無駄極まりない大声でおみくじを売っている店に突進した。

残された私は手に持ったおみくじを開封しながら呟く。

「……おみくじって、競技じゃないわよね？」

「そうだな」

「そうね」

「……って言うかい加減に止める！ 周りの人に迷惑だろ！」

隣に居るクラスメイトの八崎^{ヤッサキ}くんと哭搭^{コクトウ}さんが同意し、狗神^{クガミ}くんがヒナタと根古御坂を止めに言った。

それを眺めながら開封したおみくじを見る。

「……あ、大吉」

ハミネ マオ 覇峰真生視点

バスから降りた所でサンダースが話しかけてきた。

「そう言えばハミネ。トーヤさんとキョウカさんはどこに言ったんですか？ まさかドラマとかである、カケオチですか？」

「気軽に駆け落ちとか言うな。横で巴手が拳動不審になっただろ」

「oh、それは失礼！」

「謝る気無いかお前は。まあいい。八崎響歌は大晦日の朝に出てったぞ。多分、掃除を手伝うのが嫌だったんだろうな。……矢神は、」

そこで私は言葉を切った。話して良いかどうか迷ったからだ。

「トーヤは？」

興味津々と言った表情のサンダース。仕方なく私は言った。

「矢神は、昨日から墓参りに言ってる」

「ハカマイリ？ 誰か死にましたっけ？」

「正確に四年前だがな」

四年前。矢神が十指を脱退した年。

「一体誰なんですか？」

「さあな。私もそこまでは」

これは本当だ。私はあいつが誰の墓参りに行くか全く知らない。墓参りの当日には必ず開けておくから大切な人間だったらしいと言う事は解るが。会話を打ち切るように言う。

「……とりあえずさっさと終わらせよう。いつまでも外にはいたく

ないからな」

「同感です、覇峰さん。あ、ところで」

十字架を背負い直しつつアリスが首を傾げながら私に言う。

「カケオチ、ってなんですか？」

「からあげのことー？」

「違うよかきあげだよ！」

双子がアリスの質問に便乗する。

「……………どうしろと？」

覇峰がアリスの質問にどう答えるか困窮しているその頃――。

同日。どこかの国のとある岬にて。

「……………ここに来るのは一年ぶりだな」

黒いコートをたびなかせながら男――矢神統夜は呟く。

そして手に持っている色とりどりの花束を、目の前の小さな墓石の前にそっと置いた。そして手を合わせ黙祷する。

「……………」

しばらく黙祷した後、矢神統夜は立ち上がる。

「またな、アイ」

ミハタ ニシキ
美端西姫視点

「……………やった、大吉。姫はどうだった？　なんか微妙な表情だけど」

「……………微吉だったわ」

「あー。だから微妙な表情なんだね。この神社、変な物が混じってるからねー。で、琥金ちゃんは？」

「甘食です！」

「……………甘食？」

「はい、甘食ですっ」

「ちよっとみせて。……………本当に甘食って書いてあるわ」

「……もう吉も凶も関係なくなつて来たわね」

「そうだねー。あれ？　につしーはどこに――」

「ハニーイイイ！」

聖がそう言いかけた瞬間、人ごみを突き抜け馬鹿が現れた。

「あ、居た居た」

「今年初めのデレをばくにく「永眠しろっ！」ぴぽ！」

羞恥心無くしてるとしか言い切れない奴の行動にいつも通りあたしはブチキレ、

いつも通り奴は吹っ飛んだ。

御手洗断悟

「相変わらず凄い人の数だな」

人の波に押されつつ俺が言つと隣の唐崎がいつも通りの飄々とした表情で答えた。

「日向市には神社が無いからね。賽銭箱にたどり着くのに時間かかりそうだね」

「……げ。……まったく早く終わらないかね？」

「そうね。いつその事全員消滅してくれたら良いのに」

郡山も言つ

「物騒な事ほざくな」

「……苦労してるなあー御手洗。団子食べるか？」

「……団子は嫌いだ」

「なあなあみたらしだんごー。あのおっさん見るからにズラだよなー。ちよつと剥いできて良いか？」

「やめる緋村^{ヒムラ}。そのおっさんも髪が無い事を気にしてるだろうから、下手にその心をえぐるな」

「ほーい」

「……断悟、金を忘れてしまった。貸してくれ」

「……いいけど。返せよ」

「ああ、十倍にして返す」

「そこまでは要らん」

「ねえ御手洗さん」

「……ん、どうした？ 春日」

「御手洗さんってこの前、お勉強会やったんですよね……？ なんでも呼ばなかったんですか？ もしかして私の事嫌いなんですか？」

「お前の家の電話番号知らなかったんだよ。携帯買ったら電話番号教えてやるから」

「！ 本当ですか？」

「……？ 本当だが」

「こらそこー。恋人居ない歴〓年齢の僕には目に毒だからラブらないで」

「誰がラブってるだ唐崎」

同日日向市。ビルの屋上にて。

「ノワールが恐れて居た女は居なくなつた」

「……」

「ついでに管理人もいない」

「……」

「動くなら——今夜、だよな？」

「……多分な」

赤いコートの女に黒いジャケットを着た男はゆるりと答えた。頬を膨らませる少女。

「煮え切らないなあ。慎重になるのも大概にしてよ」

「……軽すぎるのも問題だがな。……まあ良いだろう。今夜我達は、
エクソシスト
払魔師の住処を叩く」

「待つてました！ で、それまで何すれば良いの？」

「……とりあえずじつとしている。世の中には理不尽がそこらに転

がつているからな。何が起きるか解らん。備えあれば憂いなし、と
はいい言葉だ」

「解ったよ。今夜、だね？」

「ああ。今夜だ」

「じゃあそれまで寝てるね？」

「……構わん」

???

「にくにくにくにくにくにく。なまにくほしくひきにくぎ
よにくぎゅーにくぶたにくばにくよーにくとりにくじんにくはむべ
ーこんすてーきはんばーぐ」 にくにくにくにくにくにくだらけ」

無理やりにリズムも合わせたようなメロディーが、寂しく夜を過
ぎる。

声の主がどういった風貌なのかは解らない。何故なら声の主は雨
も降っていないのに真っ白な雨合羽に身を包んでいたからだ。背の
低さと声の質で少女とは解る。

「にくにくにくにくにくにく……」

不意に少女の声がぐう、っと言う音に遮られ止まる。

「……おなか、すいたなー。よし、ゆーごはんだー」

そう言って少女は背中に背負った人が二人入れそうなバックを下
ろした。

そしてジッパーを開け、中からラップに包まれた肉を出す。片方
の端は棒きれ、もう片方の先端は五つに分けている。

迷わず少女は五つに分かれている方からかぶりついた。もぐもぐ
と咀嚼しつつ、少女はバッグを背負い直し、歩き始めた。

「つぎはどんなところかなー。にくがいっぱいあったら幸せー」

肉を咀嚼しながら呟く少女。それに答える者はいない。ただ少女
の足音が聞こえるだけだった。

short 1 元旦（後書き）

悪魔達が朝霧荘に強襲するようです。そのシーンを書くかは現時点では不明。

何者かが日向市に接近中。

八神統夜の過去は今現在執筆中。さていつになるやら。
とりあえず次回の予定。

2月14日。

the next title

short 2 Valentines Day .

12月こそは二回最新……！

（訂正情報）

八神統夜の脱退を四年前、ブレイカークラッシュヤー破壊殲滅による人外計画の殲滅を二年前に変更。

あと巴手の名前をちょっと訂正。ナソコ謎子からナノコ菜野子へ。ハテナのこ。評価、感想、批評、質問、助言、要望等、待ってますよ！。

番外―interval―telephone night (前書き)

おまけと言うか裏設定と言うか本編のはみ出しと言うか。まあ読まなくても別に支障は無いっばいです。

番外—interval—telephone night

「……夜分遅くにお電話失礼しますよ。氣狂いさん」
マッドネス

「——……ふん。誰かと思えば音無しの雇い主か」
サイレント

「おや？ 私を御存じで？」

「ああ存じてるよ。日向高校校長、日向兵蔵。ヒュウガ ヒョウソウ 食えない爺さんだと聞いてる」

「それは買いかぶりですよ氣狂い。マッドネス 私はただ臆病なだけです」

「臆病な奴が殺し屋を手元に置くかねえ？ カルロス・ハスコックって知ってるか？ 有名な狙撃手なんだがな。カルロスは臆病なほどに慎重だったから戦場を生き残れたんだぜ？ ……まあいいか。ところで氣狂いは止める。あれは殺し屋の時や仕事、もしくは同じ裏の世界での名前であって本名じゃねえ。……まあ誰がつけたかは知らんがな」

「そうなんですか？ なら本名はなんと言つのです？」

「久世荒鷹。もっともこれは養親父が勝手につけやがった名前だがな」

「解りました荒鷹さん……でいいですか？」

「ああ、それで構わん。……で？ 何の用だ」

「……単刀直入に言いましょう。あなた達十指で一番強いのは誰ですか？」

「……夢見がちな事を言うね。じいさん」

「おや。それはどういう事で？」

「十指にはそれぞれ特性が有る。すべてを絶つ剣術もどきやら、見ただけでその技術が何か解り、扱える観察力と器用さやら、敵味方関係無しに殺戮する狂気やら、な。ブレイカークラッシャー 全員極端な特性ばかりだ。それ故にオレは暗殺が苦手だし、破壊殲滅も暗殺が不得手だ。だから誰が強いかなんてわかる筈が無い。もし暗殺も殺しも破壊も出来る奴を最強と言うなら万能屋——オールクリア 死角なしだろうな」

「……ふむ。なるほどなるほど。しかし私の定義は誰が強いかであって万能さは求めてないですよえ。では質問を変えましょう。荒鷹くん。今まで会った十指の中で、あなたが勝てないと思った人は居ますか？」

「……該当者は二人、居るな」

「二人も、ですか？ 荒鷹くんの特長である断剣は残鉄剣のようになんでも斬れるんですよ」

「勘違いするなよ、じいさん。確かにオレの断剣に斬れねえものは無いが——。触れられなきや終いだろ。と言うかオレの断剣は短剣の型だ。糞親父の長刀の型よりも遙かにリーチが短い。近距離なんだよ。まあその代わり、死角なしはこの断剣を会得する事が出来ないみたいだな」

「なるほど、参考になります。……で、荒鷹くん、君が勝てないと思った人物は誰なのですか？」

ブレイカークラッシャー

「——破壊殲滅だ」

ブレイカークラッシャー

「破壊殲滅さんですか。矢神さんから聞いてますよ。確か殲滅専門なんでしたっけ？」

「ああ。破壊者の頂点って言うても良いくらい破壊しか出来ねえ馬鹿だ」

「ですが勝てないと思ったのでしょうか？」

「……まあな。何回か奴の殲滅を見てみたが遠目から見ても奴に勝てる奴は居ないって確信している。まあオレも十指を全員見た訳じゃないからひよつとしたら虚無やら霸王鮫辺りなら勝てるかもしれないがね」

「ふむ？ そのエンプティ……って人は何の特性を持っているのですか？」

「会った事はねえから本当かどうかは知らないが……。なんでもターゲットに関する情報を消すんだと」

「……？ どういう事ですか？」

「一夜にしてターゲットの姿もターゲットの家族も無くなるらしい。」

まあ流石にターゲットに関する記憶が無くなる訳じゃねよ。あくまで知らず知らずの内に消えているってらしい」

「ふうむ……？　なかなか面白いですね。で、^{タイラントシャーク}霸王鮫さんと言う人の特性は？」

「知らん。会った事はないし、噂も聞かないからな。まあ名前からして破壊者系統だろ」

「おざなりですねえ。まあ良いです。で、あなたが勝てないとされるもう一人の方は？」

「……^{キルサイド}殺戮者」

「^{キルサイド}殺戮者？　……おかしいですねえ。矢神さんから聞いた中には居ませんが」

「そりゃそうだ。^{キルサイド}殺戮者が十指に入っただのはざっと一年くらい前だからな。四年前に脱退した音無しが知る訳無い」^{サイレント}

「……言われて見ればそうですね。^{キルサイド}殺戮者と言う方はどう言った方で？」

「狂人だ」

「おやおや。仮にも^{マッドネス}気狂いがそう言うとは」

「……さっきも言ったが^{マッドネス}気狂いは十指に入っただ際に誰かが付けた名前だ。それに……もしオレが^{リバー}切断者とか呼ばれたりしたら^{マッドネス}気狂いと言う名前はあいつになっただろうな」

「あなたがそこまで言うとは……会ってみたい物ですね」

「止めた方が良くぞ。一回しか会った事が無いが——あいつは横を通った人間を簡単に殺す奴だ。迂闊に近づいてみる——死ぬぜ？」

もし依頼をするなら電話でやった方が得策だ」

「……依頼をするつもりは無いんですがね。まあ解りました。もし依頼をする機会が有ったらそうしますよ」

「そうしとけ。……と。最後に一つ忠告だ」

「はい？　なんでしよう」

「^{サイレント}音無しを怒らせるな」

「……それはどう言う意味でしょうか」

「あんたの事だから解つてんだろ。今でこそ普通の一般人だが、昔のあいつは暗殺者なんだ。さっきの勝てない相手には実は音無しも入っているんだよ。以前断剣無しで戦った時には奇術師に止められたが——もし死にそうになった場合、あいつは音無しサイレントになっただろ。誰にも知覚されず誰も気づかず、相手がどんなに人を雇おうが最新の防犯を付けようが、難なく近づき、あっさり殺す。奴が伝説と呼ばれ、音無しと呼ばれる由縁。幽霊のように姿を消す暗殺術。あれを使えばオレは負けてただらうな」

「へえ。知りませんでしたよ。矢神さんの特性がそう言うのだとは」
「嘘吐け。……まあ良い、忠告はしといたぞ。肝に命じとけ」
「了解しましたよ。こんな時刻に失礼しました。では」

電話は切れた。

番外 とある夜（前書き）

舞台の裏。残酷描写有りなので出来る限りそう言っのが見たく無い人はあとがきにれつつごー。

番外 とある夜

「……」

意識が覚醒して最初にノワールが自覚したのはだるさだった。膜のようにだるさが体を覆っている。

首を動かし、そこがビニール袋の上だと気づき、ようやく何故こうなったかを思いだす

「……ああ。確か、襲撃したは良いが、返り討ちにあっただった、な……」

呟きつつ、その時の事を思い出す。

最初は有利だった。ルージュが十字架を構えた^{エクソシスト}払魔師と茶髪の格闘家を相手をし、我が黒髪のナイフ使いの投擲を避けつつ、空から魔力で構築した羽根を投げる。長い攻防の末、^{エクソシスト}払魔師が膝をついた。そこを突こうとしたその瞬間――あの男が現れた。

「……なんなのだ……？ あの男は」

黒コートを着た男。^{エクソシスト}払魔師は管理人と呼んでいたその男が、状況を一変させた。

消えたかと思えば現れた。反撃する間もなく我は酷く傷つき、我の援護がなくなったルージュも追い詰められた。傷ついた体でなんとか宙に浮きつつ、我はルージュに逃避を言い渡し、その場から逃げた。そこから記憶は無いが――、大方途中で力尽きたのだろう。そして今に至る。

「……」

状況を整理し終え、ノワールは立ち上がる。少しふらついたが、壁に手をつき耐える。

そして辺りを見回す。どうやらここは路地裏らしい。薄汚れた壁が頼りなく瞬く電灯に照らされ、どこか腐敗した臭いが漂う。

場所を確認し終え、次に自身の魔力を確認する。この体を維持できる程には残っているが、^{エクソシスト}払魔師が襲ってきたら絶対に逃げられない

いだろう。

「よー。兄ちゃん」

ノワールが色々と確認していると不意に軽薄な声が聞こえた。顔を上げると金髪の男が一人、ノワールの目前を遮る様に立っていた。

「……」

「おうおう、シカトとかやっててくれるじゃん？ まあ反応したこたあ聞こえるんだろ？ まあ大した事じゃねえよ。ただ金を恵んで欲しくてね？ ざっと財布の中身全部」

目の前の男が腰の鎖をじゃらつかせ、ベラベラと喋る。

さてどうするかとノワールは考える。

この程度の輩、エクソシスト払魔師に比べれば可愛い物だ。だが、今は割と疲弊している。能力で追い払うのは出来る限り避けたい。かといって財布は持っていない。と言うか金自体、魔力で作っていた。

「何黙り込んでんだ、オラ。ここは泣きながら許しを請って有り金あるだけ出す所だろ？」

苛立し気に男が呟く。

「ねえねーおにーさん」

それに反応した訳ではないだろうが——……不意に幼い声が男の耳朵を打った。

「……あ？」

振り返る金髪男。

そこには白装束のような雨合羽を来た子供がいた。声からして少女だろう。

意外な闖入者に男は動揺する。

「いまねー、わたし、とつてもおなかすいてるの。だからね」

そんな男に少女はお構いなしに言っ

「おにーさんのおにく——ちよーだい？」 瞬間、雨合羽が伸びた。

否、伸びたのでは無い。少女が跳んだのだ。

「がっ！？」

子供の顔が近距離で見えた瞬間、男の両肩に激痛が走る。悲鳴を

上げる余裕すら無く、ただ痛さに膝をつく。

たん、と何かが目の前で着地する音。男は激痛をこらえ、前を見る。そこには満面の笑みを浮かべ、足まで伸びた金髪を尻尾のように跳ねさせた少女。

「えへへ。いただきまーす」

少女が言う。その直後、男は、

肉と血管を引きちぎる不協和音と、骨を砕く音色と、それらを咀嚼する、断末魔が、奇妙に重なり合い、路地裏に歪んだ音を生み出す。

——路地裏に充満した血と死の臭いを、我は嗅ぎ取る。

がつがつがつ

眼前には数分前まで人だった物を喰らう少女。

「……おい」

我は少女に呼びかける。咀嚼する音が止まり、一心不乱に食事をしていた少女はしぶしぶと言った風に顔を上げた。その口元は不吉な赤に汚れている。

「……なあに、おにいさん。わたしいま、おしよくじちゅーなんだよ？ れでーのしよくじちゅーはせきをはずすのがまなーって、おとーさんがいつてたよ？」

「……それは失礼」

「わかればよろしー」

がつがつがつ

再び食事を始める少女。

「……失礼を承知で聞きたい」

「……んー、なに？」

もぐもぐと咀嚼しつつ答える少女。

「お前は何故わざわざ人を食べる？」

「んーとねー。おかねないし、かといってイヌさんとかをたべるの

はなんかかわいそうだしー。トリさんはおにくすくないしウシさんやへびさんとかつごーよくみつかるわけないでしょー？ だからヒトをたべるの」

「人は可哀想じゃないのか？」

「かわいそうじゃないよー。だってこんなよなかにいるのがわるいんだから」

「……ふん」

「でさー」

食事を終え、ふきふきと男の服で口元を拭きながら、少女はこつちを見た。

「おにーさん、だれ？」

「……奇妙な事を聞く。我は今し方カツアゲされていた一般市民だ」
「いっぱんしみんならわたしのしょくじをれいせーにながめてないでにげるよね？ それにわたしがききたいのはおにーさんがニンゲンかどうかなの」

「ほう。我が人では無いと？」

「うん。なんかにおいがちがうもん」

「……」

この奇妙な少女に正体を言うか、言わないか。……言わなかったら喰われそうだ。数瞬の躊躇いの後、我は正体を言う事にする。

「我は、悪魔だ」

「アクマ？ くまさんじゃなくて？」

「ああ」

「ふーん」

相槌を打ち、ふんふんと少女は鼻を鳴らす。やがてにこやかに笑

い、
「たべていい？」

物騒な事を言った。

「……どうしたら見逃してくれる？」

「……んー、そうだねー。おいしいたべものをだしてくれたら、み

のがすよー？」

「……ふむ」

逃げる事は不可能だろうな、と我は結論づける。走って逃げてもすぐ追いつかれるだろうし、飛んで逃げても少女は追ってくるだろう。この惨状からして周囲の被害も考えないで。それは好ましくない。かといって戦うのは論外だ。なら――。

「食べた事が無い食べ物でも有りか？」

「んー？　どんなのかなー？」

「悪魔だ」

「……んー。それでもいいかなー」

「そうか。……ならこういうのはどうだ？」

その言葉に結論をつけ、我は慎重に切り出した。

「どういうのー？」

「……我を殺さないかわりに、ボディーガードをする」

「……むしのいーていあんだねー」

「勿論無償では無い。貴殿がボディーガードをするなら我は貴殿が食べた事も無い物をだそう」

「……んー」

少女は顎に手を当て、考える仕草をした。

「ちょうど、ほごしゃみたいなやくわりのひとがほしかったんだ。

おにーさんみたためおとなだし、あくまだからいろんなこととしてそうだしー。……んー。むー。わかったよー。ワタシ、おにいさんのボディガードになる！　そのかわり、おいしいもの、たべさせてよ？」

「……解っている」

「じゃあまずはねるところあないして？　ワタシこのマチにきたのはじめてなんだ」

「……廃屋だが、いいか？」

「べつにいいよ。あ、そうだー！」

不意に叫び、少女は小指を差し出した。

「……なんだ、これは？」

「知らないのー？ ゆびきりげんまんっていうんだよ？」

「……ああ。たしか約束事を守らせるための儀式か」

「んー。まあそうかも。で、はやくこゆびさしだしてよー」

「ああ」

小指を差し出す。少女はそれに指を絡ませ、楽しそうに言った。

「ゆびきりげんまん、うそついたらはりせんぼんのーます、ゆびきったー」

「……ア」

目を覚ます。ここはどこかの部屋のようにだ。

「ここは……」

「やあ。目が覚めたかい」

「……！？」

隅から声。飛び起き、声のした方を見る。

そこにいたのは黒尽くめの男だった。

「……誰よ、アンタ」

「おやおや。恩人に誰だ、とは躰が成ってないね。黒猫ちゃん？」

「！」
慌てて自分の体を見る。黒い体毛に愛らしい手。自分で言うのもなんだけどそこら辺の猫よりも上等だと思う。……ってそうじゃない。

「あんた……驚かないの？」

「生憎とぼくの友人には元暗殺者が居てね。それに比べれば喋る化け猫なんかには驚かないよ」

「……あたしは化け猫じゃない。悪魔だ」

「そうかい？ まあいいさ。化け猫だろうと悪魔だろうとどっちにしたって変わらないだろう。ぼくが君を助けたと言う事は」

「……それがどうしたの。あたしは恩返しなんかしない」

威嚇するように睨みながら言う。男は腹が立つ程の笑顔で、ひらりと手を泳がせた。

「や、ぼくはそう言うの期待してないから。自発的にやるならどうぞ」

「誰がやるか」

「そう。ちょっと期待してたんだけどね」

「……今、期待してないって言ったじゃない」

「そうだよ。だから今の言葉は嘘」

「……なんなんだよ、あんた」

「ん。ああそういえば自己紹介がまだだったね」

思い出したように言い、男は笑顔を崩さず言った。

「ぼくの名前は鷺ノ宮崎^{サギノミヤザキ}。職業はしがない詐欺師だよ。あと名前は

偽名。……さてと。自己紹介もしたし、」

ふざけた事を言った後に男は笑みを深め――。

「取引でもないかい？」

そう言った。

番外 とある夜（後書き）

鷺ノ宮崎

文化祭に登場した彼。名前は偽名。詐欺師。

???（名前不明）

少女。常識が通じない。

状況。

ノワール。少女と行動を共にしている。

ルージユ。詐欺師に“取引”を持ちかけられた。

幕間 バレンタインデーのツンツン上村さんとクールな仲村君。(前書き)

バレンタインデーは一年に一回しかない！ と言う事で書いたぜ。

幕間 バレンタインデーのツンツン上村さんとクールな仲村君。

2月14日。青い春を過ごす少年がドキドキするイベント、バレンタインデーがある日だ。

ちなみに僕は甘い物があまり好きではなかったため、高校生の頃にはなんか挙動不審溢れるクラスメイトを横目に悠々と帰宅していた。

さて、そんな擦れた高校時代はさておき今に戻ろう。

目の前には少し顔を赤らめラッピングされた包みを差し出す僕の上司上村さん。

現在昼休み。弁当を食べ終えた所でいきなり奇襲され、このままもうカップ麺やカップ焼きそばが作れるくらいの時間が経っている。もう青い春の頃を回想するのも飽きてきたので聞いてみた。

「……なんでしょうか、これ」

「見てわからない？ チョコよ」

……ふむ。とりあえず近くで上村さんが差し出した包みを凝視している同僚の頬をつねりあげる。

「いてえ！？」

騒ぎ出す同僚A。どうやら夢では無いようだ。煩い同僚Aから視線を切り、上村さんの方をみる。

「何よその目。爆薬が入ってるんじゃないかと疑ってるの？」

「いえ。……義理ですよね？」

「……そうよ、義理よ！ 文句ある！？」

いつもよりツンツンした口調で言う上村さん。僕が答える前に乱暴にチョコレートを置き、隣の同僚Aにも置いて自分の机に向かって歩いていった。

「残念だったな、仲村」

隣の同僚Aがざまーみろとばかりの表情で言う。

「別に残念じゃないですよ、同僚A」

「負け惜しみか？ …… って誰が同僚Aだ！」

喚く同僚Aの机をみる。そこには上村さんのチョコレート。正し、素っ気なくラッピングされている自分のと違って可愛くラッピングされている。通常なら負け惜しみを言うのは僕だろう。だが、僕は仲村さんの性格をよく知っている。だから負け惜しみは言わなかった。それどころかホツとした。

——… 僕が思うに仲村さんは、恥ずかしがり屋なのだ。故に興味の無い人間には可愛くラッピングされた物を出せるが、父親や母親やら親しい人間には可愛くラッピングされた物を出せない。そう言う難儀な性格なのだ、仲村さんは。

そう考えた所で僕は思った。

…… 仲村さんの性格をここまで解っている自分も難儀な性格なんじゃないか？

その考えに苦笑しつつ、僕は仕事を再開した。

幕間 バレンタインデーのツンツン上村さんとクールな仲村君。(後書き)

ちなみに上村さんと仲村君は絶対本編に出ません。インターバルな形で出てきます。

short 2 Valentine's Day・(前書き)

とても遅くなったのでとりあえず土下座。

short Valentine's Day .

「氷司ー」

「……なに、姉さん」

制服に着替え終えた時ドアの向こうから姉さんの声。いつもはもつと遅く起きてくるのに今日はやけに早い。何故だろう。

「お姉ちゃんからプレゼント」

「ほとんど変な物だから要らない」

「そう言わずにさー。ドア開けてよー」

「……」

無視を決めようかと思ったが、すぐドアを蹴りやらでぶち破る姉さんの姿を幻視し、止めた。

ため息を吐き、ドアを開け、

光の速さで閉めた。

「むお！？　なんで閉めるのさ、マイブラザー！？」

「姉さんの手に巨人を殺せる殺戮兵器があったからだ」

「なにおう！？　せつかく作ったこのチヨコが殺戮兵器だとう！？」

「殺戮兵器以外に他の呼び名は考えられない」

「むーぎー」

「……あれ？　お姉ちゃん、お兄ちゃんの部屋で何してるの？」

扉越しに睨みあっていると、不意に弟の豹真ヒョウマの声が聞こえた。

「お、ヒヨウマ！　丁度良い所に！　甘い物好きだよな？」

「……？　うん、好きだよ」

「じゃあ優しい優しいお姉ちゃんからこれを入れてやろう！」

「……！　いらないっ」

「おう？　逃がさんぞー？　ヒョーマー」

ドタドタと騒がしい音がドアから響き、やがて台所付近から悲鳴が上がった。……豹真、死ぬなよ。

ヒイラギ
柊木信視点

「あー……くそ。早く着きすぎた」

人気の無い廊下を歩きながら俺は呟く。教室のドアを開けようと
し、漏れ出る声に気づいた。

「最近ね、先輩が冷たいんですよー。」

明らかに華葵だ。

「それは大変そうだね」

こっちは……光村か。一体何をしているんだ、この二人。……ま
さか待ち伏せ？

「そうなんですよー。もう私浮気してないか心配でー。で、相談な
んですよ、この倦怠期、どうにかありません？」

「そうだね、一つあるよ？」

「なんですか？」

「ずばり、既成事実を作れば良いんだよ！」

「なるほど、それは良いですね！　じゃあ今夜早速、」

「やるな馬鹿」

ガスッ。

「痛っ！？　誰ですか、って先輩！？　なんでここにいますか
！？」

殴られた頭を押さえながら、こっちを見て驚愕する華葵。どうや
ら待ち伏せではなかったらしい。

「その質問はそっくり返す。光村はとにかく華葵。何でお前はここ
にいるんだ」

前述の通り現在の時刻はやや普通の生徒が登校するには早すぎる
時刻。

「べ、別に今日がバレンタインだからじゃないんですからね！」

「おー。華葵ちゃんツンデレー」

「……」

殴ろうかどうか迷ったが「どめすていっくばいおれんすですよー

！」とか叫ぶのが浮かんだので止めた。かわりに自分の机に向かいバックを持つ。

「ふふふ、先輩がツンデレなら私もツンデレになればいいのです！」
「逆転の発想だね」

馬鹿げた会話をしている二人組にばれないように教室を出ようとして、

「あ、華葵ちゃん信が逃げようとしているよ！」

光村^{バカ}のリークによって失敗に終わった。

「逃がさないですよー！ 先輩！」

「チッ」

舌打ちし、走る。後ろから「待ってくださいよ先輩！」と追いかけてくる声。

「……やあハニー。今日は絶好のチョコ日和だね！」

「……それが？」

「おやおや、解っている癖に惚けるとは流石ハニーツンデレだ！」

「殴っていい？」

「殴った回数だけ愛を囁いてくれるなガフッ」

「蹴りならいいわね」

「殴った回数と蹴った回数ゴホッ」

「じゃあ頭突きで」

「くっ……流石ハニー、賢いぜ！ だが今日のぼくは一味違うのさ！」

そう言ってポケットから何かを取り出そうとした馬鹿だが「トマトアイスが呼んでるぜ！」とかなんとかを叫びながら走ってきた男と激突し、吹っ飛んだ。

「……む。すまない少年！ だがわたしにはトマトアイスが待っているのだ」

そう言って男は走り出した。

「あ、姫。おはよう」

「……おはよ」

とりあえず角を曲がって現れた聖に挨拶をした。

「今日は絶好のチョコ日和だね」

「日和じゃなくてもあんた貰えるでしょ」

「まーねー。所でなんかにつしーが倒れてるんだけどどうしたの？
まさか隕石でも降ってきた？」

「そんな訳ないでしょ。通りすがりの人にぶつかっただけよ。ほつ
といて大丈夫だろうから早く行こ。もうそろそろ急がないと行けな
いし」

「そうだね。につしーも早くしなよー？」

馬鹿に声を掛けあたしと並ぶ聖。

八崎 京仁

廊下を歩いていたら哭搭が現れた。

「チョコです。受け取ってください。ちなみに義理です」

「……お前の事だからホワイトデーの返しを狙ってるんだろぅが」

「……ノーコメント。ちなみにリリースは受け付けません」

「あつそ。ま、とりあえずバッグの中に入れておくよ。からかわれ
るしな」

「そう。じゃあ」

「おう」

ミタラシダンゴ
御手洗断悟

「おー御手洗。チョコくれ」

昼休み。屋上に来た俺に寝そべりながら壱木はそう言った。

「なんでだよ……」

ツッコミながら定位置に座る。そして壱木に尋ねた。

「ていうかお前、今朝会った時にたくさん貰ってなかったか？」

こいつの胃袋キヤラが好みなのか、それとも残飯処理が目的なのか、こいつは毎年たくさんチョコを貰っている。確か今朝会った時も、チョコが入った紙袋を沢山抱えていた筈なんだが……。

「さつき全部食っちゃったー」

……さいですか。

胃袋キヤラっぷりに少し呆れていると唐崎がやって来た。

「やあ。御手洗君。チョコ貰えたかい？」

「……残念ながら妹からの義理チョコのみだ」

「そうかい」

「そう言う唐崎はどうなんだ」

「ん？ まあまあ」

そう言う唐崎は何時もの所に腰を下ろした。

「まあまあって事は少しは貰えたのか？」

「まあ。こんな変人になんで惹かれたのか解らないけどね」

不思議そうに言う。そして俺に言った。

「ああ後、御手洗君。君が貰えるチョコは3つだ。良かったね」

「……？」

唐崎の言葉に首を傾げていると校舎へと続くドアがまた開いた。見ると郡山と春日だ。

「郡山。おはよう」

「……おはようみたらし団子」

「そのあだ名で呼ぶな」

「ああごめん。お詫びにこれあげる」

そう言う郡山はチロルチョコを取り出した。

「義理か」

「当たり前よ」

簡潔に返す郡山。まあもともと本命を期待していた訳では無いし、むしろ郡山らしい。

「あ……あの、」

郡山の後ろで背をこごんまりとさせながら春日が言った。そして口をもごもごさせる。郡山が気がついたように言う。

「ああ……御手洗。喜ばない。手作りチョコよ」

「……ん？」

郡山が春日を押し出す。

「え、えっと、御手洗さん、受け取って下びや……」

言葉を途中で切り、口を抑える。どうやら噛んだようだ。

「……おい、大丈夫か春日？」

「……ふ、ふふ、どうせ私なんか……」

呟く春日。嫌な予感アラームが全力で警報を鳴らす。

ふらふらと春日がフェンスに向かって歩き出す（ちなみに前はフェンスはなかったのだが鍵が壊された事によりついた）。うん、このパターンはあれだ。いつものあれだ。

「まて春日ー！」

フェンスによじ登ろうとした春日を止めに走る。

横目に見えるのはあまたか、と言う表情の郡山、遺憾せずむしやむしやと何かを食ってる壱木。……頼むから手伝ってくれ……。

時間は流れ夕方。

「やあ冴えない男」

とんでもなく失礼な言葉が後ろから聞こえた。振り向くとスーツ姿の女。その姿を見て俺はため息を吐いた。

「……今の言葉は世界暴言辞書に載っても良いくらいの暴言だったな」

「そうかな」

首を傾げる女に問う。

「……で、なんでお前がここに居る、響歌。1ヶ月くらい前までサボってたから仕事溜まってるんだろ」

「いやーねー。なんか飽きた」

「飽きたって……お前な」

「まあいいだろ。そんな事より今日はあれだ」

呆れ顔の俺に構わず響歌は言った。

「あれ？ …… ああバレンタインか」

「いえす」

そう言つて響歌は手を差し出す。

「……なんだ、その手は」

「プリーズギブミーチョコレート」

「……普通、それを言うのは俺の方だと思うんだが」

「世の中には便利な言葉がある。「お前の物は俺の物、俺の物は俺の物」」

「……どこのガキ大将だ。……はあ。解つたよ。ほい」

手提げていた紙袋から袋に包まれたチョコをつまみ、渡す。渡されたチョコを頬張りながら響歌は言った。

「ひゃへにひゅんひがひひな？」

「……食べながら喋るな」

「ひゃいひゃい。……やけに準備がいいな？」

チョコを飲み込み言う響歌

「なんかそんな予感がしたんだ」

「ふーん？ まあいいや」

「で、お前は今日もか？」

「ああ。弟にこつそりチョコ渡してくる」

「……相変わらずだな。そんな事をするなら普通に会えばいいのに」

「駄目だ。下手に会つたら巻き込んでしまふ。いつどこで誰が見てるか解らんからな」

「……俺はいいのか？」

「冴えない男を巻き込んだ所で何か変わる？」

両手を肩の高さに上げ、やれやれと首を振る響歌。

「……とりあえず次来た時、出される物はピーマンの鮭詰めだと思

え」

言った瞬間、土下座された。

「すいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいませんすいません！　ワタクシが悪う御座いましたからどうか御慈悲を！」

「解った、解ったから土下座やめろ」

「ヘイ、聞いたかジョニー？」

「何をだ？　ブライアン」

「女に土下座させた鬼畜野郎がこの辺りにいるらしいぜ」

「oh！　ところでブライアン。一つ言いたい事がある」

「なんだよジョニー。真剣な顔しやがって。まさか便秘か？」

「いや、それは昨日治った」

「そうか、良かったな！　で、なんだ？」

「社会の窓が開いてるぜ？」

「oh、no」

神社仁

「……なあ」

ちよつと気になっていたので帰り仕度をしている玄狼に聞いてみる。

「む。なんだ」

「今朝から蘭アララギの様子がおかしいんだが」

「ふむ。確かに。心当たりはあるか？」

「んー。これと言っては。——ああ、そう言えば去年もちよつとおかしかったな。翌日は普通になっていたが」

そう言つと玄狼はなにやら心当たりがありそうな顔つきになった。

「この日だけにか？　翌日は正常だったのだな」

「ああ。ちょっと落ち込んでたけどな」

「……なるほど」

ガタリと玄狼は立ち上がる。

「ちょっと外に出てくる。帰ってこなかったら帰ったと思ってくれ」

「ん？ ……ああ」

「矢張りか。先程から気配がしたからな」

店の外。近くの電柱に潜む女に玄狼は声をかけた。

「……あ、玄狼さん……」

驚いた表情で蘭は玄狼を見た。その手にはラッピングされた包み。玄狼はため息を吐いた。

「お前の気弱はいつもの事だな……。今時アルバイトの女子ですらお返しを期待して義理チョコを与えるんだ。渡した所で気まずくはならないだろうに。ずっと後込みしては駄目だぞ」

「わ、解ってはいますけど……」

言い白む蘭を横目に玄狼は電柱に背中をつけた。

「……後押ししてやる」

「……え？」

「誰だって好きな人を好きだと言えない時期がある。それは一瞬だったり一年以上だったりする。お前はそれが二年以上続いている。ただそれだけの事なんだ」

「……慰めているんですか？」

「……そう思っているのか？ だとしたら見当違いだな。言っただろ。これは後押しだ」

「……」

「さて、俺がこんな臭い台詞を吐いたんだ。さっさと渡してこい」
「……はい」

返答し、蘭は俺の横を通り、店内に入ろうとした。入る直前、こちらを向いて立ち止まる。

「ありがとうございます」
ひらひらと玄狼は手を振った。
きい、とドアが開き、鈴が鳴る。それを聞き届け、俺は歩き出す。
「お邪魔虫は退散とするか」

夜。百棟家

「ただいま。……なんだい、これ」

帰って来た家長、百棟蒼空はリビングの光景を目にして呟いた
目の前には茶色の野原。否、崩れたチョコに埋まった机。

「……あ、おかえり兄さん」

「ん、ただいま」

次男である百棟弧赤が蒼空に気づいて挨拶する。

「で、なんだいこれ」

「えっと、今朝兄さんが出勤した後——」

「弧赤弧赤。バレンタインとはなんだ」

「おっさんを祭るイベントだぜ！」

ゴスッ

「いつものように嘔吐かない。バレンタインって言うのは好きな人にチョコをくれるイベントだよ。その翌月の14日にチョコをくれた人がお返しするホワイトデーって言うのがある」

「……最近兄ちゃんのツツコミが激しくなってないか？」

「気のせい気のせい」

「ふむ……よし、弧赤。ワタシはチョコを作るぞ！」

「え？」

「よっしゃー！ あたしも手伝うぜ！」

「……とまあこんな感じで夕方から作り初めて……」

「その結果がこの惨状かい」

「うん。あ、兄さんその包みは？」

「ん？ ああ。辻理さんから貰ったんだ。ホワイトデー期待しているってさ」

「ふうん」

「あ、兄貴お帰り」

台所から縁が姿を現す。

「あ、そろ辻理さんからのチョコ？」

「うん」

「ほうほう。……で、式はいつの予定で？」

「まださすがにそこまでは……」

short 2 Valentine's Day・(後書き)

と言う訳でようやく完成。嘘みたいだろ……。これ書いたの11月か12月辺りからなんだぜ……？

ホワイトデーやろうとしたけど無理っぽいのでまたどつかの時に次回は入学式編……の予定。

ちんたらしてる間に登場するキャラが少なくなっちゃったよ……。まあ無駄な所もあったので良い事だと思いますが。では次回予告。

――春。それは出会いであり、花粉症真っ只中であり、別れであり、物語の始まりに相応しい季節である。

それは日向市も例外では無い。

the next title

10C 草薙樟葉

の予定。後、その前に幕間を追加予定。

←以下全く持つて役に立たないコーナー。

「……と、言う訳で始めました。新コーナー『八崎響歌の説明不足』」

「……いきなりなんだ、響歌」

「ちょこつと電波がビビビビ」

「……病院紹介してやろうか」

「つれない相方は置いといて、今回はワタシの能力スペック〜ポロ

りもあるよ」だぜ」

「最後嘘だろ。……ん、なんだこの紙。ええつと、「実は響歌にはとある設定があったのですが……」なんだこれ」

「おお、説明欲しいかいワトソンくん!？」

「いや別に」

「つれないZE。まあ馬鹿はともかくワタシの能力だが——ほら、ワタシが一度この日向市に来た時コンビ二強盗を伸しただろう」

「やっぱりあれはお前の仕業か」

「あの時ワタシはある技で不埒な強盗に止めを差したんだが……あれな、没設定みたいなもんなんだ」

「没設定？」

「簡単に言えばもうこの先では使用しない一回こっきりの技」

「言ってる意味が全く持って意味不明だが——つまりあれか。一度こっきりの大技か」

「ワタシの場合は小技だけだね。で肝心の技に入るけど、なんか生まれつき備わっていた能力なんだ、これ」

「超能力ってどこか」

「まあ何でもぶった斬る剣術やら姿、気配を完全に消せる暗殺術に比べればはるかにまともかもしれないね。ちなみに肝心の超能力もどき。相手の感情を増幅させる。以上！」

「……つまり、相手の恐怖やらを増幅させたり出来ると？」

「そ。一般人を無力化させる事は出来るんだよ。ただ、裏側の人間には全く持って効果無し。その上悲鳴を上げたりするからこっそり気絶させる事も出来ない。全く持って使えないオプシヨン」

「だから一回こっきりののか……じゃあなんで使ったんだよ」

「さあ？ 神の味噌汁だ」

「神のみぞ知る、だろ」

強制終了。

— p a s t — 音無し (サイレント) (前書き)

一向に筆が進まないのでお茶濁しとして番外編を。

— p a s t — 音無し（サイレント）

12月31日

「なあ矢神！」

台所で蒲鉾を切っていると覇峰がやって来た。髪の毛々に埃がくつついている。

「なんだ。今調理中だからあまり入らないでくれ」

「ほいほい。で、これ矢神のか」

そう言って持っていた物を掲げた。黒いノート。

「……………ああ。俺のだ」

「ああ、やっぱりか。にしてもこれやけに古びてるな？ 大切にしまわれていたし。もしかして思い出の品とか？」

「……………まあ、な。とりあえずそこに置いといてくれ」

「らじゃ」

ポスンとテーブルにノートを置いて覇峰は廊下に出た。それを見送った後、ノートを見る

「そつえば、あれから五年……………なんだな」

—— 五年前。

空港を出て、指定された場所へ歩く。

やがて見えた野原。そこには一人の男が佇んでいた。

「……………お前が、依頼人か？」

この国の言葉など知らないので日本語で話しかける。

「……………イエ。ワタシハアンナイニン、デス。アナハタ、サイレントサマ、デスカ」

たどたどしい日本語で男はそう言った。「案内人……………ね」

「キニ、サワリ、マシタカ？」

「いや、別に」

まあ別に相手が案内人だろうがなかろうがどうでも良い。

「で何を案内するんだ」

「イライナイヨウト、コレカラノ、コウドウ、デス」

案内人の言葉を纏めると、大体こんな風になった。

依頼内容はこの辺りに潜伏している裏世界、三系統が一つ、組織。

ロストlost バベルBabelの壊滅とそれが造っている兵器、ドールDOLL・ズSの破壊。

雇った人間は俺と最近十指になった気狂い、それに破壊殲滅。マッドネスマッドネス。フレイカークラッシュヤマフレイカークラッシュヤマ。狂いは数日後、破壊殲滅はいつ来るか解らないらしい。

行動はロストバベルlost Babelが動くまで。それまでは下手に動くな、と言う事が。

「……イジヨウデス。シツモンハ、アリマスカ」

「……衣食住は保証されるのか」

「イシヨクジュー？」

「……ん、ああ……食べ物とか家は補給されるかって事だ」

「ハイ。タベモノ、イエアリマス。フクハ、ジリキデチヨウタツ、シテクダサイ」

「……OK、解った。じゃあ早速、その家に案内してくれ」

「ハイ。コチラへ」

そう言って歩き出す、案内人。俺はそれに従った。

案内された家は空き家みたいな有り様だった。案内人曰わく、いきなり家が建つたりするとロストlost バベルBabelはともかく、村人が訝しむそうだ。……理に叶っているが体よく費用をケチっているように思えるのも確かだ。

「……」

寝そべり天井の染みを数える。本は持ってきて無いし、テレビやパソコンなどはどう見ても無い。

繰り返し染みを数えていると玄関から人の気配がした。

「……？」

案内人が言っていた食べ物でも持ってきたのか、と思った。今は昼だし理には叶っている。――が、どこか俺は違和感を感じた。

警戒しながら起き上がり、声をかける。

「……誰だ？」

俺の声に気配は慌てた風な気配を見せた。そしてバタバタと立ち去る。

「……なんだったんだ？」

首を傾げる。

ざつ、と靴が土を踏んだ。

「この辺りは……花畑か」

あれから俺はその後來た食^{レットトのカレー}べ物を食べた。そして天井の染みを数えるのにも飽きたので、そこら辺をうろろろする事にした。

「……この先は森になっているのか」

家から少し離れた小さな丘。眼前に広がる荘厳で美しい森。もしかしたらあそこに^{ロスト}lost ^{バベル}Babelとやらが潜んでいるのかもしれない。そう思ったが行く気は無かった。しばらくぼんやりと森を眺める。

「……あの」

不意に後ろから声がした。

ゆっくりと後ろを見る。そこには一人の女が居た。

「えっと、その……」

目をきよきよさせながら女は言う。

「……ここの風景、綺麗ですね」

「……そうだな」

少し考え、俺は答える。

しばしの沈黙後、女は言った。

「あの、お名前、なんですか？」

「……何故そんな事を聞く？」

「え、えっと……。今まであなたを見かけた事なかったから……」

「……そうか」

その答えを聞き、俺は女に背を向けた。

「あ、あの」

「矢神だ」

「……え？」

不思議そうな声を出す女。

「俺の名前だよ。今聞いただろ」

そう言っただけ俺は歩き出す。

「あ、あの！」

その背中に女が強い調子で言葉をかけた。思わず振り返る。

女ははにかむような表情で言った。

「明日も、ここに来ますか？」

「……」

どういふ意味なのか咀嚼して、俺は言った。

「……気が向いたらな」

翌日。

「……あ。こんにちわ、矢神さん」

昨日のように暇だったので、もう一度野原に行くとあの女が居た。

「なんでここに居る」

思わずそう言っただけ女は不思議そうな表情をした。

「え、だって。矢神さん、また来るって言ったじゃないですか」

「今日じゃない。気が向いたらって言ったんだ」

「そうでしたか？ まあ良いです。一緒にご飯、食べませんか？」

その言葉に俺は女の格好を眺める。

空色のワンピース。その下には花柄のシートと黒い包み。

「……作ったのか？」
「はい」

にこやかな笑顔で女は言った。

……もう食べてきた、とはとてもじゃないが言い出せない雰囲気だ。何故か俺はそう思った。

なんとか弁当を食べ終え、風景をしばし眺め、丘を去ろうとする間際。ふと思立ち、俺は女に聞いた。

「そう言えば。お前、名前なんて言うんだ」

「あれ？ 言ってませんでしたっけ？」

「言ってない」

「アイ、ですよ」

「……アイ、か」

くるりと背を向け、歩き出す。丘の端で振り向かずには俺は言った。

「弁当、美味かったよ。よかったらまた作ってくれ」

「……はい！」

朗らかな声。それに昔の自分を重ねた。寢床である空き家に向かう。

「でしてね、今朝は凄い物が見れましたよー」

丘。身振り手振りで今朝見た光景を再現するアイ。それを横目に俺はサンドイッチを頬張った。

「……むー。聞いてるんですか」

「聞いてない」

「聞いてないんですか！？」

何故か驚愕するアイを後目にサンドイッチを食べ終える。

「ごちそうさま。いつもながら美味しいな」

おれがそう言うときアイは無い胸を張って自慢げに言った。

「ふふん。伊達に台所を牛耳ってる訳じゃないですからね」

「そうか。今度作り方教えてくれ」

「誰でも出来ると思うんですが……。んー。そうですね。次、会う時までにはレシピみたいな作っときます」

「ああ」

丘の上で話す一時。それが楽しかったとは言わない。
だが、

夜。人の気配で目が覚めた。見ると窓の外に人影。枕元にあった短刀を握り締め、窓を開ける。そこにいたのは銀髪の男だった。

「こんばんは。あんたが音無しサイレントか？」

前置きなしに男はそう言った。

「……？ 誰だお前は」

「オレは気狂い。マッドネス聞いた事あるだろ？」

「……ああ。今回の任務に参加する十指か」

「おう。音無し。サイレント。テメエの噂は聞いてるぜ。稀代の暗殺者さん」

「稀代……。ね。過大評価も良い所だ」

「謙遜しやがるね。まあ良い。さて、要件だ。lost ロスト Babe バベ
ルが動き出した」

「……動き出したのか」

「ああ。だから依頼主もそろそろ発破かける頃だろうよ」

「そう言つて、男——マッドネス 気狂いはコートに手をつ込んだ。引きずり出した手に握られているのはジュースの紙パック。

「……なんだそれは」

「イチゴミルクだよ。お前も飲むか？」

「いや、いい」

「そうか」

ストローで中身を吸い上げつつ、マッドネス 気狂いは背を向け歩き出した。
「じゃあな」

翌日。俺は黒いコートを羽織り、森に入った。懐にはダガーナイフ、ベレッタ、弾丸3ダース。

耳を覆うイヤホンから声が聞こえる。

「準備は出来ましたか」

無機質な、男の声。

「……ああ」

「では当初の予定通り、^{マッドネス}気狂いさんは山から。^{サイレント}音無しさんは森から。^{ロスト}lost ^{バベル}Babelが拠点としていると思われる屋敷を襲撃してください。^{ブレイカークラッシャー}破壊殲滅さんはまだ来ていません。なお、道中で^{ドー}DOLL・Sの妨害が有り得ます」

「了解」

「ではご健闘をお祈りします」

ブツリと音が切れる。ザザザと雑音を垂れ流すそれを切り、俺は走り始めた。

走り始めて数十秒後。

不意に両側の木の影から二人の少年が現れた。どちらも手には銃。感情の無い眼でこちらを見るそれに俺は一人ごこちる。

「……なるほど。^{ドー}DOLL・Sとはこいつらのようだな」

呟きながら速度を速める。距離がだいぶ狭まった所で俺は跳んだ。狙い通り俺を見失う^{ドー}DOLL・S。その頭部を素早く狙い、撃つ。

まき散らされる脳髓。花のように広がる赤と鉄の匂い。自らが起こしたそれから目を逸らす。もう一人がこっちに気付いた。銃を構えたそれに素早く近付き、その眉間にダガーを突き立てた。腹を蹴り、吹き飛ばす。人形のように地に伏した。

土を浸食する赤。血の臭いが鼻を刺激する。それから逃げるように顔を逸らし、俺は先に進んだ。

銃声が響く。飛び交う銃弾の間を縫って右側にダガーを左側に銃

撃を放つ。ドサリと倒れる音が重なった。

「……」

弾を補給する。残り、1ダース程度。
がさり。右側から音。そちらに視線と銃を向け――。

「……矢神さん」

ここにいてはならない声を聞いた。

「……なん、で」

視線の、先。

「なんで、お前がここにいる……！」

そこには、

「アイ……！」

アイが、居た。

「……それは」

悲しげな表情で、

「私が」

アイは、

「ドールズDOLL・Sだからです」

そう言った。

「……！」

脳裏の中に3つの自分。

嘘だ、と絶叫する自分と、なんでこんなに動揺するんだ？ など
と思っっている冷静な自分。そして、

なぜ俺がそれに気付かなかったかと疑問に思っている自分。数瞬、
脳内が混沌に満ち、やがて俺は聞いた。

「……ドールズDOLL・Sが何故人形と呼ばれているのかと言えばそれは
奴らに感情が無いからだ。実際俺がここに至るまでに会ったドールズDOLL

L・Sは感情の色を現さなかった。銃を突きつけられようが、喉を引き裂かれようが、震えも怯えもしなかった。だが、お前は違う。笑ったり泣いたりしていた。DOLL・Sに感情は無い。……なのになんでお前は笑ったり泣いたり出来る？」

「……うん。確かに私に感情はあるよ。偽りじゃない、本物の、感情が」

「……ならお前は何者だ」

「ドールズDOLL・Sだよ。ただし失敗作の、ね」

「失敗、作……？」

「……私たちはね、生まれた時に検査されるの。欠損してないか、具合が悪くないか、そして感情が無いかどうか。……私は、生まれた時に偶然それを知ったの。だから必死で感情がある事を隠してたの。たとえ、同じ失敗作を殺してでも——生きたかったから」

そう言っただけなのにアイは微笑んだ。「自由が欲しかった。想われて欲しかった。なのに……やっぱり駄目、なんだね。……うん、解ってたよ」

「……アイ」

「ねえ、矢神さん。私を、殺して」

「……」

「人間のように生きたかったけど。もう駄目なんだと思う」

その言葉に俺は銃口を下げ、言った。

「……俺はお前を、殺したくない」

「……優しいんですね」

そう言っただけなのにアイは寂しげな微笑みを浮かべた。

不意にガサリと草むらが揺れた。視線を向けると感情の無い少年が銃を構えていた。

「……ッ」

アイに気を取られすぎた、と瞬時に思う。接近を許してしまった。避けようとするがアイの存在が重しになる。少年はアイが見えない位置に居る。俺が避ければアイが攻撃を受けるだろう。

少年が撃鉄を引いた。真後ろから衝撃。響く銃声。降りかかる血。

「……………あ」

それがアイの血だと言う事に数秒の時間がかかった。

「……………あああああああ！」

絶叫し、再び撃鉄を引こうとした少年に向かってがむしやりに弾丸を放つ。おびたらしい血を吹き出し少年は倒れた。それを視界の外に追いやり、アイを見る。

「……………なんで、」

アイは胸元と口から血を流しながら倒れ伏していた。

「なんで俺を庇った！」

「……………なんで、でしょうか、ね。気付いた庇ってた、んです」

途切れ途切れに答えるアイ。その体から流れる血は止まる事を知らず、地面を紅く濡らしていた。

「……………、近くの村に医者が居た筈だ」

「……………無駄、ですよ。どんな名医だろうと私は助かりません」

「あまり喋らない方が良い」

近くに倒れている比較的血に汚れてないDOLL・Sから布を頂戴し、血に滲んだ胸元に巻き付ける

「……………矢神さんの、えっち」

顔を赤らめて言うアイ。

「……………今はそんな事言ってる場合じゃないだろ。早く医者に——」
ぎゅっ、と服の裾を摘まれる。

「……………矢神、さん。医者に行く前にわたしの右ポケットを探ってください」

「？　なんでだよ」

「いいから、早く」

言われた通りにポケットを探るとそこには小さなメモ帳。

「見せて、ください」

言われた通り見せる。アイは真剣な眼でそれを見た後、破顔した
「……………よかった、どうやら血に濡れてはいないみたいですね」

「じゃあ早く」

「矢神さん」

再び、アイは俺の服の裾を掴んだ。

「一つ、約束してください」

結局アイは死んでしまった。

温もりを失った体を岬に埋める。本当はあの丘に埋めたかったのだがもうあそこには戻れない。否、戻らない。

最後に近くにあった石にアイの名前を刻み、埋めた場所に置いた。メモ帳を握りしめる。そこにアイの温もりが残っているような気がして。

「……」

白み始めた空を眺めながら俺はアイの言葉を思い出す。

「人を殺すのは、わたしで最後にしてください」

アイの最後の言葉。

「……最後の最後に無茶な事を言う」

人を殺さない。それは裏世界を離脱するのと同義だ。

「無茶な事だが——」

森の中から俺に似た背格好のDOLL・Sとその他のDOLL・S^ズを運ぶ。そして顔を銃弾で粉砕し、俺のコートを着せる。ヘッドホンと使用した銃とダガーナイフを近くに落とし、銃を持ったDOLL・S^ズを何人か寝かせ、準備完了。

偽装と言うにはあまりにお粗末だが、まあ、騙される事を祈るしか無いだろう。踵を返し、アイの墓に戻る。手にはアイの形見のメモ帳。

しばらくアイの墓を眺め、それから先の事を思案する。

「——帰ろうか。日本に」

「……矢神さん？」

呼び声にはつとずる。声のした方を見ると心配そうな表情をした巴手。

「大丈夫、ですか？　なにか、とても悲しそうな表情でしたけど」

……そうか、俺はそんな表情をしていたのか、と苦笑し、ぽんぽんと巴手の頭を軽く撫でた。何故か顔を赤くする巴手に一言、呟く。
「なんでもない」

「——ただ、昔を思い出していただけだ」

— p a s t — 音無し（サイレント）（後書き）

人形戦争

^{ドルズ}DOLL・Sを壊滅させるための抗争。世間ではもみ消されている。十指の音無し^{サイレント}、気狂い^{マッドネス}、途中から参加した破壊殲滅の三人。その最中に、音無し^{サイレント}死亡。途中、現れた破壊殲滅によりDOLL・Sの拠点は殲滅。lost^{ロスト} Babel^{バベル}は弱体化した。

矢神統夜のその後。

半年近く日本を渡り歩いて日向市に到達。日向兵蔵と出会う。衣食住の職場を提供すると言う、兵蔵の申し出を受け、朝霧荘の管理者兼教頭に。その最中に奇術師^{ウィザード}に遭遇。口止め料として、朝霧荘に無料で部屋を借りさせる。その為、朝霧荘には一つだけ開かずの間がある。ちなみに矢神統夜が生きている事を知っているのは、奇術^{ウィザード}師と気狂い^{マッドネス}くらい。破壊殲滅あたりは薄々感づいているかもしれない。

幕間（前書き）

唐突な前振り。

幕間

6日前、夜

「そっぴや矢神」

皿洗いをしていると後ろから覇峰が声をかけてきた。

「なんだ」

「もうすぐ春。春と言えば始まりの季節だ」

「なにが言いたいんだ」

「入居者は増えるのか？」

「……ああ、そう言う事か。」

「二人増える」

「へえ、二人もか。まさかどちらも女じゃないだろうな、このハ―
レム野郎」

「安心しろ。一人は男で、その上カップルっぽい」

「あつそ。んで？ いつ来るんだ？」

「んーと、……明日の昼だな」

5日前、昼

がたん、ごとん。がたん、ごとん。

――振動に揺られる中、ふと体を揺さぶられた。眼を開け、横を見る。

「……」

じつとこちらを見る彼女。

「……ああ。そろそろ、か」

こくり、と彼女は頷いた。

それを横目に伸びをし、窓の外を見る。

「……さて、どんな日常が待っているかね」

2日前夜

路地裏に一人の女が居た。暗闇に溶けるようなドレスを着た女。女が足を動かす度にぴちゃりと水音が響く。その音に女は目を細め、淑やかに笑う。

「……ふふ」

かがみ、水音を響かせる地面を指でなぞる。そして指についた液体を口元に運びくわえる。女の顔が笑みに綻ぶ。それはまるで極上のお菓子を食べた子供のような笑顔。

しばらくして女は歩き出した。淑やかな笑い声をその場に置き去りにして。

「ふふ。うふふふふ」

翌日。女が居た場所には原型が解らなくなる程に切り裂かれた遺体が見つかった。

前日、夜

とある山奥。

白い息を吐きながら一人の少年が前方を行く少女に話しかけた。

「そう言えばモア」

「どうしたの森和」

少女は金髪を靡かせ振り向く。赤い目が少年を射抜いた。

「おやつのアイスならまだ我慢よ」

「それを我慢しているのはモアだけです……いえ、ちょっと疑問に思っています」

「なに？ スリーサイズとか好みの男性とかなら言わないわよ」

「全く興味な——痛、なぜ石を投げるんですか」

「……別に」

頬を膨らませながら、モアは言う。

「で、なに」

「いえ、モアの一族にまだ会ってないなあ、って」

「なに？ 娘さんを僕にください！ とかでも言っの？」

「言いませんよ」

「そう。まあ会わない方が良いわ。全員偏屈と傲慢と疑心暗鬼の塊だから」

「……確かにそれは会いたくないですね」

返答する森和にモアは頷き、それから思い出したような表情で言う。

「……あ。一人だけ例外がいたわ。偏屈じゃなくて傲慢じゃなくて疑心暗鬼でも無い奴」

「……誰ですか？」

「ワタシの弟」

「弟？」

首を傾げる森和にモアは返答する。

「そ。まあ偏屈じゃなくて傲慢じゃなくて疑心暗鬼でも無いには無いけど変わった奴よ」

「……モアに言われたくは無いいんじゃ……痛ッ」

「失礼ね。石投げるわよ」

「すでに投げた後に言う台詞じゃないですね、それ……。で、どこら辺が変わってるんですか？」

「ん。ワタシの一族が生まれた理由、覚えてる？」

いきなり出た質問に森和は少し考え、

「えっと、確か死にたくないって理由でしたよね」

「残念。そこは不死になりかったと言って欲しかったわ」

「……まあ、理由は思いました。それで、弟さんとなんの関係が？」

「弟はね、その理由に真っ向から反しているの」

「……つまり？」

モアが頷く。

「そう。つまり弟は――」

街の灯りを睥睨するかのように眺め、彼は呟く。

「ここが姉さんが数ヶ月過ごした街――日向市、か」

冷たい風が吹きすさび、彼が羽織っているコートを靡かせた。

「さあて僕は……死ねるかな？」

そして、始業式。

幕間（後書き）

この前、大層な前振りをしたけれども思いの他しょぼくなりそう。

10A 草薙樟葉

春。それは漫画、小説、ドラマ、アニメなどで物語が始まった時に一番、使われて、現実にも新しい学校生活が行われる季節だ。

そして今日から日向高校の一生徒となる俺もその例外ではない。

ゆさゆさ。

「……………」

ゆさゆさゆさゆさ。

「……………」

ゆさゆさゆさゆさゆさゆさ、こん。

「いてっ」

何回かの揺さぶりの後に鈍い音と痛みが走り俺はようやく上半身を起こしかけた。

「……………」おはよう

と、顔面約数センチメートルくらいからの挨拶。黒い瞳がじっと俺を見る。

「おはよう。……………」で、なんで枕元に座っているんだ、群羽^{クスハ}」

「ライバルを潰しに」

ライバル？

首を傾げるおれに群羽はびしりと床を指差す。そこには今日からお世話になる筈だった目覚まし時計。……………」俺が寝ている間にスクラップに転職したようだ。

「樟葉はわたしが起こす。目覚まし時計なんていらぬ」

「……………」あー。解った解った。で群羽、今何時だ」

「……………」

青い携帯の画面を見せる群羽。そこには目覚まし時計に設定した

時刻よりも5分遅れた時間が表示されていた。

「手短に二つ質問だ、群羽。めざまし時計の音が聞こえなかったのはお前が鳴る前に何かで叩き潰したからか」

「うん」

「じゃあなんでこんな時間なんだよ」

「樟葉の寝顔が可愛かったから」

「……」

「……？」

「……あー。まあ解った。とりあえず支度するから出てってくれ」

「……？ わたしは樟葉の着替えが見たい」

「おれは見られたくない」

「解った」

素直に頷き、群羽は部屋から出て行った。

朝の風景を窓の側で眺め、あたしは部屋に居る男に話しかけた。

「で、あんたいつまであたしを監禁する気」

「換金する気は無いけど？」

「……？ なに言ってるの、あんた」

「虚言だよ」

「……で？ どうする気」

「どうする気？ と言われてもはてさて」

「とばけないで。この馬鹿げた取引よ」

あたしが言ったのはもう数ヶ月も前の話。あれからかなりたったが未だ取引によってあたしは自由になれない。

「あんた、何考えてるの？」

答えを知らながら聞いてみる。男は案の定答えた。

「嘘をかな。僕は詐欺師だし」

「……なんのつもりよ。大体この取引はなんなのよ」

取引。その内容は、

『君の事を知らんぷりするかわりに、僕の部屋から出ない事』

馬鹿馬鹿しいと思う。この男がその約束を守るかはわからないし、大体あたしを部屋にとどめて何の得があるのだ。目の保養？

「フィクションって素敵だよね」

「……は？」

男はいつも通りの、胡散臭い笑顔でそんなことを語り出す。

「アニメや漫画、ドラマや小説。これらはほとんど最後に『この話はフィクションです。実際の団体に関係はありません』ってあるよね」

「……」

「あれって漫画の中の登場人物や物語を踏みにじってるとぼくは思うんだ」

「……？」

「漫画の話で『それでも俺は負けない！』云々言った直後に『この話はフィクションです』だ。漫画の努力云々がいかにフィクションだかを実感するよ」

「……それは人それぞれじゃない。て言うかそれがあたしとの取引とどう繋がるのよ」

「フィクションを実感すると同時にぼくは考えた。もしかしたらほんとにあるんじゃないか、フィクションじゃ無いんじゃないか——ってね。今考えれば赤恥の赤面物だ。救いがあるとすればその時ぼくはまだ小学生で夢を信じてもおかしくない世代だったってところかな」

「……」

何が言いたいのかわからない。

「人は死ぬ。君のようなモノが居る事から死なないモノはいそうだけれど——世界のほとんどは有限だ。ぼく自身もその一人。いつか死ぬ。ならフィクションに死にたいと思ってる」

「……あんたが、なにを言っているか理解出来ない」

「理解しなくてもいいよ。どうせこの言葉も虚言なんだから」
「もういい」

にやにやと笑う奴に背を向けあたしは再び窓の外を見た。

「……今日でボク達は三年生だね、期待に胸が躍るよ！」

「躍る程の大きさもあらへんくせにー」

「な、ななななにを言うんだ！」

「んー？ ほなわかりにくかったかいな。じゃあわかりやすく言うとな、きゅっきゅっぼん」

「……そんなにボクのガラスのハートを打ち砕きたいのかな？」

「ガラス？ 防弾ガラスの間違いじゃあらへんかいな」

「よし、今すぐ決着をつけようか、絵里！」

「や、やめて喧嘩はやめて、二人共」

「……ふむ」

ぐるりと周囲を見渡しして俺は頷いた。昨日、来たには来たがやはりどこか新鮮な感じだ。

一通り辺りを見回し、さて。そろそろ指定された教室に向かうか。……そう思い俺はさっきから左腕に抱きついている群羽に声をかけた。

「そろそろ離れてくれ。歩きづらい上に周囲の視線が少しきつい」
「やだ」

速攻即答。これからの学校生活がもう真っ暗になってきた。
ため息を吐き、俺は歩き出した。

「さてさて今日から正式に僕らは日向高校の生徒だ！ そう思うとこの日は神聖な日と言う事であり晴れて良かったと感慨深く思うよ

！

出会ってそうそう唐崎はそんな言葉を声高らかに吐き出した。
周囲から突き刺さる視線から逃げ出したい気持ちを抑え、俺は溜
め息を吐く。

「……いつも通りだな、お前は」

「いやいや、これでも結構緊張しているんだよ。どんな快樂が待っ
ているのか。考えただけで背筋がゾクゾクする！」

「そうか」

適当に相槌を打った後、俺はふと思い出して聞いてみた。

「そっぴや部活どうするんだ？ お前の事だから入るんだろ？」

「ああ、勿論さ！ 実は一つ心当たりがあるんだ」

「なんだ？」

聞くと唐崎は笑いながら言う。

「それはまたのお楽しみだ」

「……別にいいけどな」

「ヤッホー矢神」

「………なんでまたお前が居るんだよ」

諸事情で朝霧荘を留守にして、帰ってきたらリビングに響歌が居
た。

「……決まっているじゃないか。暇つぶし」

「そんな事している暇があったらさっさと依頼を遂行してこい」

「ワタシは奇術師だからタネの仕込み期間を置かないといけないん
だ」

「嘘吐け」

戯れ言を一刀両断し、俺は持っているバッグを置いた。

「ん？ なんだこれ」

許可なくバッグを覗き込む響歌。

「書類だ」

「……うええ。吸血鬼が十字架を見た気分を味わった」

「……吸血鬼に謝れ。居るかどうかは知ら……いや、多分いるだろうな」

アリスを思い出し、言葉を止めた。響歌もアリスを連想したのか聞いてくる。

「そういや、アリスちゃんやキャロルちゃんは元気？」

「アリスは悪魔をまだ探している。キャロルは……覇峰と一緒に買い物中だ。もうそろそろ春だから新しい服を買ったと」

「なら巴手ちゃんの方が適任……ああ。巴手ちゃん仕事があるんだっけ」

「お前みたいにフリーじゃないからな巴手は」

「その点、覇峰は結構融通効くっぽいし」

「……覇峰が聞いたら殴りかかってただろうな」

俺が呆れながら言うつと響歌は思い出したように言った。

「あ、話は変わるけど。ワタシの部屋に行った時になにか隣の部屋から生活臭が漂ってきたんだけど。入居者増えた？」

「ああ。二人程。学生だ」

「へー。去年は一人も学生の入居者なんていなかったのに」

「運が悪かったんだろ。……ところで響歌。一つ聞きたい」

「んー？ なに」

「なにしにきた」

「今言っただじゃん。暇つぶし」

「……そのわりには」

響歌の隣にあるトランクを見る。古ぼけたトランク。これは響歌が仕事に行く時に必ず持っていく、言わば商売道具だ

「えらく気合いが入ってるな」

「あー。……忠告って言うかね」

そう言っつて懷からマイルドセブンを取り出し、くわえる響歌。さすがそれをつまみ上げる。

「生憎ここは禁煙だ」

「えー」

「えーじゃない。大体お前、煙草好きじゃないっていつてなかったか？」

「男子三日会わねば活目うんたらかんたら……ま、ただ単にハードボイルドに演出したかっただけなんだけど」

「……はあ。お前の無軌道性には呆れるしか無いな。さて、話を進めてくれ」

「ん。端的に言つと、十指がこの付近に居る」

マッドネス
「……気狂いか？」

「いんや。あいつはマレーシアに居るっぽい」

「じゃあ破壊殲滅……は違うな。あいつは無駄な破壊はしない主義だからな……。一体どいつだ」

キルサイド
「殺戮者」

その言葉に俺は眉を顰めた。

キルサイド
「殺戮者……。俺が脱退した後に入った奴か？」

「ああ。ちなみに入ったのは去年の春ぐらいだ」

「ふうん。……で、そいつがどうしたんだ」

「これから夜道に気をつけろって事だよ」

「——？　もしかして俺が死んでいない事がばれたのか」

「いや、ほとんどの奴らはお前が生きてるとは微塵も思ってないさ。だが、多分あいつはお前を見た時点で殺しにくるだろう。……なに

せ奴が十指になったのは——」

キルサイド
そして響歌は殺戮者が十指になった理由と殺す理由を語った。

「……嘘だろう」

そんな理由で人を殺す人間が居る事は知っている。だが——そんな理由で十指になった奴は居ないだろう。

「安心しろ。私とて奴がこの街に居るのは好ましく無い。ここにはあいつが居る。もしあいつの友人が殺されたらあいつは悲しむだろうな。……そんな様は見たくない」

響歌は表情を崩した。

「さて、シリアスも飽きたし、なんか作ってくれ」
「……何か台無しだな」

日向高校を後にする。昼食は街を見ると言う事で値段がリーズナブルなマクドナルズで済ませる事にした。俺はギガマックとオレンジジュースを、群羽はチーズバーガー二つピクルス抜きとコーヒを頼んだ。何故ピクルスを抜くのか聞いたところ、「食感の障害」と言う解答が帰ってきた。……解るような解らないような。

二人掛けの席に座る。ギガマックが入った箱を開け、ナプキンを使って取り出す。

ぎゅっぎゅっとなげやうにするために押しつぶす。群羽はチーズバーガーをくるんでいる紙を開きながらそんな俺をじつと見つめる。

「……なあ、食べにくくないのか、それ」
不意に声かけられた。咀嚼していた物を飲み込み、俺は横を見る。

そこに居た俺と同じ年と思われる少年。というか、俺と同じ学生服だ。

「なにが？」

俺は問う。

「いや、目の前でじつと見つめられて食べにくくないのかと思ってな」

「ああ。いつもの事だからな」

「ふっふ」

「ところであんた、俺と同じ制服だな」

「ん、ああ。昨日からだかな」

「俺もだ」

「じゃあ同じクラスかもしれないな」

「さあ。ま、そんな時はよろしく」

「その時があれば。俺は御手洗、断悟。お前は？」
「草薙樟葉」

「ふーん。これがじゃんくふーどってやつなんだね！ はじめてたべるよ！ おいしーね！」

目の前ではしゃぐ雨合羽を見つつ、我はコーヒーを啜った。

「……ケチャップが多いのが難点だな」

「そお？ むしろやすっぱいおにくとみつくすしてイイかんじだよ」

「……今でもかなり目立っているがな、流石にこれ以上目立ったら少々面倒臭い」

そう言つて我は周囲を見渡す。何人かが珍しそうにこっちを見ていた。この雨合羽と黒コートでその上方や年端もいかぬ子供、方や子供が居そうに無い年頃の若者、と云う状況は倫理観念的に歓迎されにくいだろう。その上、年端もいかぬ子供の目の前には山が出来る程積まれたハンバーガー。目も疑うだろう。

そんな益体も無い事を考えつつ、周囲を警戒する。いつあの忌々しい払魔師エクソシストが現れても逃げれるように。

「……む？」

ふと人ごみに視線が行った。行き交う人々を眺め、一人の女と視線があつた。

瞬間、背筋に氷囊を入れたような感覚が襲った。

女はそのまま人ごみに紛れた。

我は思考する。

（今の女。あの女の目つきはまるで――）

目の前でもふもふとハンバーガーを咀嚼する少女に視線を遣る。

（これと同じように……人を人としてない眼差し）

リビングに入ると見知らぬ女とサンダースさんと覇峰さんと矢神さんがテーブルでポーカーをしていた。

「イエーイ！ ロイヤルストレートフラッシュ！」

「oh！」

「げ、またかよ」

「……」

見知らぬ女は10、ジャック、クイン、キング、エースが揃った手札を見せつけた。サンダースさんは叫び、覇峰さんは苦い表情をし、矢神さんは無表情に黙った。

「これで四千円ワタシの物——」

女がテーブルの真ん中に置かれた札束に手を差し出す。瞬間、その斜め右に居た矢神さんが動いた。

女の腕をつかみ、振る。パサパサと何枚かのトランプがテーブルに落ちる。

「……やっぱりか。響歌、お前イカサマしてたな」

「……あはは——」

響歌と呼ばれた女は誤魔化すように笑った。矢神さんの隣に座っていた覇峰さんがこめかみに青筋を浮かべた。

「響歌、テメエ……」

「いや、軽いお茶目だよ、許して？」

「勿論」

「勿論？」

「許すかこの阿呆！」

「ですよー！」

覇峰さんがテーブルに体を乗り上げ、響歌さんに向かって拳を繰り出す。響歌さんは椅子ごと後ろに倒れる事でそれを回避。

「……ああ、お帰り」

リビングを舞台に始まった大乱闘を呆然と眺めていると矢神さんがこちらに気付いた。

「ん？ そいつが新しく来た入居者か？」

覇峰さんの攻撃を易々と躲し、響歌さんが聞く。

「ああ。草薙樟葉と稻荷群羽だ」

「へえ。ワタシは八崎響歌。短い間だけどよろしく」
「はあ」

俺は返事をした。ちなみに群羽は俺の左腕に抱きついていてる。

「あ、矢神、夜食作っておいてくれ」

「なんでだ」

「ほら、アリスちゃん夜中に歩いているじゃん。下手したらあいつの餌食になるからさ」

「……ああ、解った」

矢神さんが頷いた。

「だああ！ いい加減殴られろ！」

自分の拳を避けながら喋る響歌に堪忍袋の緒が切れたのか、覇峰さんが叫ぶ。

「いやだよ。ワタシは麗しい乙女なんだから」

「麗しい乙女はイカサマなんかしないような気がするんだがな！」

「じゃあ妖艶な悪女って事で」

「日頃ゴロゴロ寝転がって漫画読みふけてるテメエに妖艶さなんかどこにもねえよ！」

それから、帰って来た華葵さんと共に、覇峰さんを止め、矢神さんが作った夕飯を食べた。そして風呂に入り、明日の支度をして、眠る準備を整えた。

寝る前に窓の外を見る。

窓の外はこれからの事を暗示するような漆黒。

背を向け、布団に潜り込んだ。

10A 草薙樟葉（後書き）

登場人物紹介は次にて。

幕間のあとに出そうとしたら最後の所で時間がかかり、5日以上になっちゃったよ。

次の奴は短くなりそうなので早めに出せればいいなあ。

10B シュヴァル・レインレイティア（前書き）

とりあえず土下寝をしよう。

何故にこんなに遅くなったのだろう……。遅筆だからか、行き当たりばったりだから。……両方だ、多分。

10B シュヴァル・レインレイティア

「……」
「……」

夜。住宅街は静寂に包まれていた。その空気を裂くように2つの影が歩む。一人は長身の女、もう一人は何かを背負った少女。

「な」

女——響歌が少女に話しかける。

「……なんですか？」

しばしの沈黙後、少女——アリスは言った。

「ん」とさあ。悪魔、って具体的にどんなんだ？」

響歌の問いにアリスは考え込むような動作を取り、やがて言った。
「実のところ、詳しい事は解らないんです」

「へ？ 解らないのか？」

意外そうに言う響歌。

「はい。解っているのは、基本的に悪魔は下級、中級、上級の種類に分けられる事です。下級の悪魔は知能が無く、力しかない。中級の悪魔は知能があり、本体は動物のような物が多い。上級は……良く解らない」

「ん。どうしてだ」

「目撃例がとてもしないのです。歴史上、上級の出現が確認されたのはたったの二回です。どれも退治出来ず、封印されています」

「ふーん」

「次に悪魔への有効打。基本的に悪魔は聖別された武器に弱いですが、別にナイフや銃でも傷つける事は出来ます。ただしすぐ再生するので有効打にはなりえないのですが」

「つまり「粉々にぶっ飛ばす！」みたいな攻撃食らっても平気って事か」

響歌の例えに首を傾げつつアリスは言った。

「ええ。まあ再生は魔力を使うので有限ではないです。だから頑張れば倒せるかもしれません」

「ほい質問ー」

「なんですか？」

「魔力ってなんだ。」

「悪魔にとつて欠かせない物です。これが無くなると悪魔は滅びます」

「んー。つまり酸素みたいな物か」

「どちらかと言えば水分の方ですが、まあそんな所でしょう」

「ふーん……」

相槌を打った響歌は不意に立ち止まった。

「久方ぶりだな。エクソシスト払魔師——。それと奇術師ウィザード」

前方に、影。響歌は薄く笑う。

「確かあんたはノワール……だったか？」

「如何にも」

麗らかな春に合わない黒いコートを身に纏ったノワールは頷いた。アリスが背負っていた十字架を外し、構える。響歌は両手をわきわきと蠢かせた。

「戦いたい訳ではないのだがな」

「残念ながらワタシの快適な別荘を壊そうとした時点で死刑確定なのじゃー」

「今、あなたの側にルージュがいません。それに時間が経ったとはいえ、完全に回復しきれていない筈。滅する絶好の機会です」

三者三様の返事を聞き、ノワールはため息と共に呟いた。

「……どうやら見逃してくれないようだ。まったく。あいつの食事に付き合い始めた時から懸念していた事だったのだがな」

その言葉が終わると同時にアリスは足に力を込め――

「……！」

瞬間、響歌が叫んだ。

「アリス！」

「へ？ …… きゃう！」

叫ぶと同時に響歌は手袋に仕込んだワイヤーをアリスの足に引っかけ、引っ張った。突然の事にアリスは悲鳴をあげながら体制を崩し――頭の先を、何かが掠めた。

瞬間、横の壁が轟音と共に砕ける。

「――！？」

状況を判断するよりも早く、体が動く。崩れた体制を強引に戻しつつその場から離れ、壁を見る。

「ありゃー。はずれたー」

破壊された壁。その側に一人の少女が居た。

「ねーねーノワールー」

「なんだ」

「このひとたちだれー？」

「エクシスト 払魔師と殺し屋」

「へー」

ぶらりぶらりと破壊した壁の縁にぶら下がりながら少女は相槌を打ち――

「えくそしすとさんところしやさんかー。おいしーのかなー？」

たん、とアリスに向かって跳躍した。

「……っ！」

予想よりも速い速度にアリスは凍りつく。

「いっただき、まーす」

少女は長い袖によって隠された腕を大きく振りかぶり、途中で何かに引っかかったかのようにとまり、びたん、と地面に叩きつけられた。

「むぎゅ」

「下がれ！」

後ろから響歌の声。アリスはその言葉に従い後退する。

「んにゃー」

猫のようなうなり声をあげ、ぶつけた鼻をさすり、少女が起き上

がる。

「ノワールー。いたかったよー」

「それは良かったな」

「よくないー」

ぶんぶん腕を振り回す少女。

「よつと」

響歌が手を動かす。途端、少女の動きがピタリと止まった。

「あれれー？ からだがうごかないよー？ どうしよーノワール」

「力任せに動け」

「わかったー。……んー。りゃー」

ぶちり、とワイヤーの引きちぎれる音。それと共に、少女は高々と跳んだ。

「どんな馬鹿力だよーっ」とアリス！

少女が着地するであろう場所にはアリス。響歌は千切られたワイヤーをアリスに絡ませ、引っ張る。

ずざざ、とアリスは響歌の側まで引っ張られ、アリスが居た場所に少女が落下した。響く落下音。

「……なんか、私。足引っ張ってません？」

「物理的に引っ張ってるのはワタシの方だけだねー。にしても困ったにゃー」

「なんですか。まさか御不浄に行きたいとか言わないでくださいね」

「……今の日本人で御不浄トイレを使う人っているのかねー。まあそんな事は溝に捨てて、今はこの場は逃げようぜー」

「何故ですか？」

「んー。一つ。あのロリッ娘がわりかし強いつて言うか馬鹿力すぎる事。ワイヤーを千切るとはちょっと予想外だにゃー。2つ。今現在武器が無い。手品には仕掛けが必要なだよチミィ。そして3つ。ひよい、と響歌はノワールの上を指差した。そして英語で喋り始める。

「お前がこの付近に居るのは知っていたけど、まっさかこんな時に

現れなくていいだろ？」

ノワールがもたれかかっている電柱のてっぺん。ちかちかと瞬く街灯の恩恵を受けぬその影に響歌は言った。

「――殺戮者^{キルサイド}」

それに対し、影は英語で答えた。

「フ、フフフ。お久しぶりですね、奇術師^{ウィザード}！わたしに殺される準備は出来ました？」

響歌の唇から返答の言葉が紡ぎ出る。

「あいにく、決意が在庫切れだね」

「あらそう。所でそこの方たちは何かしら？　アクマだとかいってましたけど。本当なのかしら」

「ああ？　んー。試してみれば」

「そうしたい所ですけど、まずは再会の記しに愛し合いましょうか？」

「あー。いやいや、丁重に断らせてもらっ」

「あら残念。ところで知っているかしら。愛は押し売りなのよ」

「……つまり拒否つても問題無用と？」

「ええ」

そういつて影は電柱のてっぺんから飛び降りた。たん、と軽やかに着地する。闇に溶け込むような夜色の髪とスカートが花のように広がった。

「……アリス」

右手をスーツのポケットに突っ込みながら響歌は言う。

「今からいかに効率良く逃げるか指示する。その通りにしろ」

「……はい」

突然現れた女に驚きつつも、アリスは頷いた。

「まず全体、後向！」

「はい」

くるりと後ろを向く。響歌は右手をスーツのポケットから引き出す。その手にはピンポン玉ぐらいの大きさの玉。右手を振りかぶり、それをアスファルトに叩きつけた

「走れ！」

叩きつけた瞬間、煙が出る。響歌はそれに背を向け、命令に従ったアリスの背中を追うように走りだした。

「――残念。逃げられましたね」

煙が晴れるなか、殺戮者キルサイドは悠然と呟いた。

「さて」

そして後ろを向く。そこには、

「ごほ、ごほ、けむたいよーノワール」

「そうか」

残された二人の男女。

男の方が殺戮者キルサイドを見た。

「さて、貴様、殺戮者キルサイドと言ったな。奇術師ウィザードの知り合いと言ったのを鑑みると、十指の一人か」

「……十指、と言うのは周囲が勝手に言ってるだけです。私はただ、好きな人を探しているだけなのに。――まあいいですね。ところで一つ、聞きたい事があるんですけど」

「なんだ」

「あなた、アクマ？」

ノワールは少し考え、答えた。

「ああ、そうだ」

この状況ではどう答えた所で闘う羽目になるだろう。ならここでアクマと答えておけば相手は警戒して少しは有利になるかもしれない。そう考えた上での答えなのだが。

「ふふ、うふふ」

殺戮者キルサイドが笑った。

「アクマ。少し好きになりそう。……ああ、そうね！　今ここで殺せばいいんだわ。ああなんて素敵な考えでしょう——！」
失策だったと感ずる。この女に常識は通じない。あるのは狂いに狂った、理性。

不意に殺戮者^{キルサイド}が後ろにすすつと下がった。瞬間、白の弾丸が女が居たアスファルトを砕く。

「だめだよー。ノワールはワタシがあじみするのー！」

ばたばたと腕を上下させながら少女は言った。

「……我は試食品か。まあ助かったが。——さて」

どうするか、とノワールが思案するのと同時に少女は再び弾丸となつて、殺戮者^{キルサイド}に飛びかかった。

「あら。健気ね。そういうの、——大好き」

そう言いながら殺戮者^{キルサイド}は少女の攻撃を躲す。

続く少女の猛攻を殺戮者^{キルサイド}は何度か躲した後、

「んむ。そうね。今宵は良い月だし——名残惜しいけど辞めときましょう」

そう言つてたん、と跳躍して少女から離れた場所に着地した。

「まてーどろぼうねー」

「お前が待て」

少女は追おうとするが、ノワールがそれを止めた。

「ぶーぶー。なんでとめるのさーノワールー」

「あの女は十指だ。一筋縄では歯が立たないだろう。なら退てくれるのはむしろ有り難い事だ」

「よくわからないけどあじみできないってことー？」

「むしろ我らが出汁にされるかもな」

「んー。ノワールがそういうんならしかたないやー」

しぶしぶ納得したように頷く少女。そのやりとりを見て、殺戮者^{キルサイド}は笑つ。

「面白いわね、あなた達。次会うのが楽しみ」

「……出来れば二度と会いたくないが」

「あら。悲しいわ」

キルサイド

そう言って殺戮者はノワールと少女に背を向け、歩き出した。その姿が曲がり角に消えるのを確認してノワールと少女は反対方向に歩き出した。

「ねー。ノワール、おなかすいたー」

「……ふむ。腹が減っては戦は出来ぬと言っし——とりあえずこんな夜中にでも開いている店を探すか」

「さてこれからどうしましょうか」

夜の住宅街を歩きながら、女——殺戮者は呟く。

キルサイド

前方に一人の男が歩いてくる。殺戮者はその横をするりと通り

抜けた。瞬間、男はすれ違った側の首筋から血を吹き出す。

キルサイド

それを後目に、殺戮者は呟く。

「そうね。とりあえず、寝る所を探そうかしら」

「それなら良い場所を知っているよ。案内しようか？」

キルサイド

誰も聞く筈の無い独り言に返答があった事に殺戮者は目を見張った。くるりと後ろを向く。

そこには一人の男。

「

……」

キルサイド

殺戮者はその男に見覚えがあった。何故なら。

「おやどしたのかな。今、殺した筈のぼくが生きてるのが不思議かい？」

その男は今、殺した男なのだから

「……ええ。ところであなた、良い場所を知っているの？」

「ん？ ああとて、も良い場所だ、よ。案内、しよう、か」

「ではお言葉に甘えて」

「あ、あそ、の前に」

「何かしら」

「喉を、切り裂くのは、止めてくれない、かな。ちよつ、としや、べり辛、くな、るん、だ」

「残念」

そう言つて殺戮者^{キルサイド}はナイフを振るう腕を止めた。

「それにしても死なないんですね。素敵だわ」

「いやいや、そんなに素敵な物じゃないよ。退屈なだけさ」

「そう？」

「そう」

相槌を打ち、男は言う。

「ところで一つ、聞きたい事があるんだ」

「なにかしら。スリーサイズは教えませんかですよ」

「いやいや、欠片も興味が無い」

「あらそう」

「で、質問。君は何故、ぼくを殺そうとしたんだい？」

その問いに殺戮者^{キルサイド}は首を傾げた。

「……うん、言葉にするにはちよつと難しいですわね。……好きになりそうだから。これが一番しつくりくるかしら」

「よく解らないな」

「んー。私、惚れっぽい性格なんです。見ただけで好きになっちゃった事も何回ありますし」

「それそれは。難儀な性格だね。で、それが殺すのとどう関与するのかな」

「人を愛せる容量は一つだけってお母さんから教わりました。。だけど私は惚れっぽいから、すぐ好きになってしまいます。だから、殺すの」

男は首を傾げた。

「ん？ 話が見えないんだけど」

「……ううん。上手く説明出来ないかもしれないんですけど。殺す事で独り占めするんですの。その人が最後に見た人間は私で、殺さ^{はじ}めて

れるも私。最後の言葉も私だけが知っていて、降りかかった血潮と最後の温もりを私だけが覚えている。もし幽霊、という物がいたら考えただけでぞくぞくします——。だって私を恨んでいるという事で、ずっと見ててくれるって事なのですから！——ああ……、なんて素敵なんでしょう！」

うつとりとした表情で謳う殺戮者^{キルサイド}。その言葉には一切の虚言もなく、心の底からいつてるのだと伺える。

「迷惑な愛し方だねえ」

呆れたようにいう男。

「でもどうやらぼくとキミ、相性は良いようだ」

「あら？ どうしてかしら」

「ぼくは死にたい。キミは殺したい。噛み合った歯車のように利益は一致する」

「利益が一致するのはありがたい事なのですけれど——何故、貴方は死にたいのでしょうか？」

殺戮者^{キルサイド}は不思議そうな顔で問った。

「死にたいからだよ。ぼくはありふれた死に方をしたい。ご先祖様が考えた死に方をするのはごめんだ。ぼくは普通に死にたい——だから、キミはぼくを殺せ。ぼくは好きなだけ死んであげよう」

殺戮者^{キルサイド}はしばし目を見開き、やがて微笑んだ。

「それはプロポーズと受け取っていいのかしら」

「キミが望むなら」

「——いいでしょう。私の名前は殺戮者^{キルサイド}。あなたのお名前は？」

「シュヴァル。シュヴァル・レインレイティア」

「シュヴァル、レインレイティア」

吟味するかのように名前を告げられた眩き、殺戮者^{キルサイド}は言う。

「……そのプロポーズ、受けましよう。私は貴方^{アイ}を殺し続けます」

殺戮者^{キルサイド}のその言葉にシュヴァルは、

「ならばくはキミに殺され続けよう」

そう返答した。

その返答に殺戮者^{キルサイド}は笑い――。
歪な関係の二人は夜の闇に溶けた。

10B シュヴァル・レインレイティア（後書き）

次は1ヶ月以内に書いてみせる！ と宣言してみるがはてさて。と
りあえず登場人物紹介。

クサナギ クズハ
草薙樟葉

男

日向高校一年生

S県の端っこにある鬼無里村から来た。群羽とは幼なじみ。コンセ
プトは日向市の外からの視点

イナリ グンハ
稲荷群羽

女

日向高校一年生

樟葉と同じく鬼無里村から来た。樟葉にべったりしている。無表情。
コンセプトは素直な無口

キルサイド
殺戮者

女

十指

人を殺す事で愛を表現する狂人。丁寧な口調で話す。どっかの短編
に似たようなキャラが居るが他人の空似。

シュヴァル・レインレイティア

男

無職

死にたがる吸血鬼。死にたがる理由について、「性質」と答える。

次回予告

部活。それは青春の真っ只中にいる俺にとっては少々重要な課題だ。さて、どうするか。

the next title

11A文芸部

「第二回！『八崎響歌の説明不足』、拍手っ！」

「……企画倒れしたんじゃないのか？」

「いつから企画倒れたと思っていた？ 錯覚だ」

「なん……だと……？」

「知ってるのかよ」

「いや、知らん。なんの漫画だ？」

「んー。まあいいや。さて、今回の素晴らしき無駄知識は」

「じゃんじゃかじゃーん。」

「ぶらり裏世界ー」

「意味不明なタイトルだな。察するに裏世界についてか？」

「ん。裏世界の定義みたいな何かね。まず、快楽で人を殺す奴がい
たりする。さて、3つの系統のどれに属するか。やがみんみん、ど
うぞー！」

「なんだそのふざけたあだ名は。……まあいい。さて、快楽殺人鬼
は3つの系統のどれに属するか。……基本的に犯罪だな。一部の武
力に属する奴らも快楽か何かで依頼に無い殺しをするがな。十指の
中では……タイラントシヤーク 霸王鮫が一番近い、か」

「あの人は快樂で殺すんじゃないけど。ていうか最近見ないなあ」

「あの人、結構年だからな。死んだのかもしれない」

「……ブラックな世界になりかかってるんで強引に切り替えてみる。それー」

「……なんだ、この紙は」

「場面を切り替える魔法の紙切れ」

「つまり読めと。えっと、『感想、質問、助言、脱字報告等、待っている』……これで良いか」

「オツケイオツケイ。さてラーメンでも食べにいきますか」

11 A 文芸部

草薙樟葉視点

入学してしばらく月日が過ぎた。

「……ふむ」

放課後。俺は椅子に座って思案していた。

HRが終わって数分。教室には俺と群羽のみ。

部活の事である。

健全な学校生活を目標としている俺としては部活は大事だ。

「……そんなに悩むなら部活に入らなければいいと思う」

俺の左腕といういつも通りのポジションに収まった群羽は言う。

確かに悩むなら入らない方が良さだろう。だが、悩み悩みぬいて選んだ部活での日常で得る物は格別な青春だと思う。だから部活には是非とも入りたい所だ。

さて、実は今日、マクドナルズで知り会った友人、御手洗と共に回るつもりだったのだがその御手洗、クラスメイトの唐崎と郡山と春日に連れられてどこかに行ってしまったのだ。故に今、俺には当ても無い。

「……よし」

椅子から立ち上がり、バックを持つ。

とりあえず見回ってみよう。

この学校は鳥瞰して見るとエの形に似ている。下の横棒が教室や職員室がある一般棟。上の横棒は部室などが並ぶ部室棟。真ん中の縦線はその特別棟と一般棟を繋ぐ渡り廊下。体育館と倉庫は下の横棒の真横にあり、校庭は一般棟に面している。

特別棟を当ても無く進む。ふと話し声が出た。右斜め前にある部室からだ。ネームプレートには文芸部と表記してある。

「ふむ」

少し思案した後、その扉を開けた。

「俺は小倉&マーガリンが一番だと思うのだが」

「炭水化物を二重に取ってどうするのよ。ここはやっぱりたまごサラダでしょう」

「わ、わたしはピーナッツを出張します」

御手洗と郡山、そして控えめに春日が話していた。

「……御手洗」

御手洗が俺に気付き手を上げる。

「草薙と……稲荷か。何しに此処へ？」

「少し部活動の見学を。御手洗は何をしている？」

「ん？ ああ。ちよつとランチパックで一番美味しいのはなにか、議論してた」

「ああ、それは解る。だが何故わざわざこの場所で？ ここは文芸部のようだが。ちなみに俺はグラタンコロッケが好きだ」

「んー。唐崎が当てがあるって言った場所がここなんだよ。入った時は先輩方が何人か居たんだが、説明聞こうとしたら何故か慌ただしくどつかいった。あとその味は認めん」

「で、今現在、暇を持て余している」と

「ああ」

だとしたら困った。先輩が居ないと言う事は説明が聞けないと言う事だ。こちらとしてさっさと終わらせたい。思案していると、背後から声。

「……新生か」

振り向く。そこには少年と白い髪の少女が並んで立っていた。

「文芸部の方ですか？」

「ああ。八崎という。入部希望か？」

「……いえ、まだ決めかねています」

「そうか。なら説明、聞くか？」

「はい。是非とも」

そう答えると八崎先輩は頷き、

「んと、じゃあ説明。この文芸部は何かするところだ」

「……」

「……」

「……それだけですか？」

「それだけだ」

「……それだけでは要領を得ない。俺は質問を重ねた。

「何かすると言いました但具体的なには？」

「文芸部の名の通り、詩やら小説作ったり、プラモデル作ったり、紙飛行機作ったり」

「……要はなんでも良いと」

「ああ」

「……」

顎に手を当て、どうした物かと考える。なんでも良いと言っのはなかなか魅力的だがそこはかとなく厄介な雰囲気を感じる。

悩んでいると

「やあやあ、それは素晴らしい！」

不意に八崎先輩の後ろから声がした。そこに視線をやると、クラスメイトの唐崎が立っていた。

「素晴らしい、実に素晴らしい！ なんでも良い！？ それはなんて天国なんだ、快楽を求めるに相応しい！ 実に相応しい！」

「……」

ハイテンションな唐崎の言葉を聞いていると、横から御手洗が出てきた。

「……どこ行ってた、唐崎」

「ちょっと雉を撃ちに」

「トイレに行ってたでいいだろ。なぜ獵師にしか解らない言い方をする。……まあ良い。で、どうするんだ」

「もちろん、入るに決まっているじゃ無いか！」

「そうか。……えっと、すいませんが、先輩の名前は……」

「ヤッザキ キョウジン
八崎京仁」

「……じゃあ八崎先輩。入部届はこれで？」

「ああ。……んーと、哭搭。おれは白木先輩と黒木先輩と灰谷先輩と、根古御坂と狗神を連れてくるけどお前は？」

「中で本読んでる。場所、解ってる？」

「大丈夫だ。あの先輩達はなんか騒ぎが起こっているところに必ずいるからな」

「そう、じゃ」

「おう」

そう言つて、八崎先輩は来た道を歩き出した。

「中、入る？」

残された哭搭と言われた先輩が首を傾げて聞く。俺は頷いた。

ミタラシ ダンゴ
御手洗断悟視点

机を囲む椅子に腰掛け俺は問う。

「そついや、ひよりと壱木はどうしたんだ？」

「壱木くんは料理部だよ」

「……？ なんだ？ あいつは食べる専門だろう。料理も作れるには作れるが……」

「去年話した日向高校七不思議は覚えているかい？」

不意に唐崎が変な事を言った。

「ん？ ああ、疾駆する後輩と誰か解らない教頭と、良い人と、爆発する料理……だったかな」

頭の隅から記憶を引き出しつつ言う。

「うん、その内の爆発する料理を作る人が料理部にいてね」

「ああ、なるほど。残飯処理か」

「うん、毒見役と言うよりはそっちの方が良いね」

「大丈夫なのか、本当に？」

「この前賞味期限ジャスト1ヶ月切れのパンを食べさせても平気だったようだし、彼なら大丈夫だろう」

「お前は友人に何をしているんだ」

「いやいや、信頼すべき友人だから実験したのさ。他人だったらしないよ」

嘘臭い。

そう思ったがどうせへんな理屈で反論するだろうから口には出さない。

「で、緋村は？」

「吉木くんについて行ったよ。多分、美味しい物が食べられそうだからじゃないかな」

……食い意地の張った奴め。まああいつらしいか。

「と、言う事は、おれとお前と郡山と春日か」

「うん。後は君の新しい友人、草薙くんと稲荷さんだね」

「いや、あの二人はまだ入るかわからないぞ？」

俺達から離れて座り、二人いちゃつきあってる草薙と稲荷を見る。

「んー？ まあ、僕の勘だけど、入るんじゃない？」

「よし、賭けるか？ 入らなかったらお前がジューズ奢る、入ったら俺がジューズを奢る」

「OK・その賭け、乗った」

群羽に構いつつ俺は考える。

……さて、どうした物が。

八崎某はもうしばらく帰ってこない。

部室内を見渡してみる。真ん中に机があり、俺、群羽、御手洗、唐崎、郡山、春日はそれを囲むように座っている。先輩、八崎から哭搭と呼ばれていた女は窓際にある椅子に腰掛けて本を読んでいる。

「……あの」

恐る恐る訊ねる

「……なに？」

しばしの沈黙後、哭搭先輩が返答した。

「この文芸部は何をするんですか」

「さっき八崎が言った通り」

「……」

「……ワタシ達が入る前は普通に文芸部として活動してたんだけど、ワタシの先輩で、この文芸部の現部長の白木先輩が、入った途端、こうなったらしいの」

白い髪をいじりながら、哭搭は言う。

「……ちなみにワタシの友人に根古御坂と狗神が居て、キャラが被ってるわ」

「……ううむ。どう返答するか困る。」

考えこんでいると、廊下から足音。

「御手洗、匿ってくれ！」

がらりと、男が飛び込んできた。

「何しに来た、氷司」

御手洗が言う。どうやら御手洗の友人らしい。

「いいから匿ってくれ」

「誰に追われてるんだよ」

「姉さん」

「諦めて捕まれ。と言うか今度の原因はなんだ」

「解らない。今朝、冷蔵庫に一つだけあったプリンを食べたのが原因かもしれない、いや、昨日姉さんが楽しみにしていたドラマに上書きしたのがばれたのか……？ それとも、先週の……」

ぶつぶつと呟く氷司の後ろに黒いオーラを纏った女が現れた。

「うん、最初に上げたプリンの件で合っているんだけど、勝手に白状してくれたあとの2つも加味してあげる」

ガシッと氷司の襟首が掴まれる。

「さあ、楽しい楽しい尋問の時間よ、氷司。カツ丼奢るから今まであんたがやった事、全て白状しなさい」

「知っているか姉さん、警察の尋問でカツ井は出ないんだ」
ずるずると引きずられながら言う氷司。

「要らない豆知識をありがとう」

「いやいや、後で姉さんは警察の尋問を受けるだろうから、シヨツクを受けないように教えて上げたんだよ」

そんなやりとりを交わしつつ、氷司の姉と思わしき女と氷司は、部屋を出て廊下へと消えた。

氷司と氷司姉が出て言つて数分後、八崎先輩が5人の男女を連れて帰つて来た。

「柊木先輩と華葵を追跡していた華葵ファンクラブを追つた、ハロルド先輩と光村先輩についていこうとしてたから急いで連れ戻した」

「ええい邪魔するでない八崎！。わたしはハロルドと光村の華麗なる活躍を見たいんじゃない！」

「右に同じにやー」

襟首を掴まれている女二人が言った。

「はいはい、わかつたからじつとしてる。下手に入ったらお前も巻き込まれるだろうが」

「黒木先輩の言う通りだ。大人しく寝てろ」

襟首を掴んでいる男二人が言う。

哭塔先輩が首を傾げた。

「ファンクラブ？ 変ね。彼らは去年、人の恋路を邪魔しようとするかどうか、身を持って知つた筈だけど」

「だから身を持って知つた先輩方は動いてない。唆したんだ、華葵後輩に惚れた何も知らない一年に」

八崎先輩の後ろから、中性的な顔立ちの先輩が顔を出し、言う。
制服は男子の物だから男なのだろうが、この学校は少し変わった生徒が多いので、男装しているだけなのかも知れない。

「でー、キミが入部希望者？」

黒木と呼ばれた先輩に襟首を捕まれている女が言う。恐らくこの人が白木先輩なのだろう。

「いえ、俺は体験しに來ただけです。入部希望者はあっちの三人」「そんな事言わずにキミ達も入ろうぜ」

俺の指した方向を見ず言う白木先輩（断定）。入る前に懸念していた厄介だと言う予感的中。だがもう遅い、厄介な予感がした時点で逃げればよかった……。その後悔したが多分もう遅い……。そう判断し、俺は渋々言う。

「……じゃあ、宜しく願います」

「よっしゃー！ 新入生部員5人ゲットー！」

白木先輩が叫ぶ。その頭を黒木先輩は「うるさい」と叩いた。

入部届を黒木先輩に渡し、部室棟を出る。前を歩いている唐崎がくるりとこちらを向いた。

「やあ。君が草薙君か」

「……そんなお前が唐崎か」

「うん、まあ。所でぼくは聞きたい事があるんだ」

「なんだ」

「君の隣……と言つか、もはやくっついてる彼女……稲荷さん、だったかな。彼女はなんで君にくっついてるんだい」

唐崎の問いに答えたのは俺ではなく群羽だった。

「樟葉の事が好きだから」

「……おやおや。稲荷さん、大胆だね。で樟葉くん、感想は」

肩をすくめて言う唐崎に

「無い。幼い頃から言われ続けてるからな」

「ははは、とんだバカップルだね。爆発してくれるとありがたい」

「おい唐崎」

唐崎の言葉に御手洗がツツコミを入れる。その横に居る郡山が聞いてきた。

「ところで、草薙君。あなた何処から来たの？」

「鬼無里村からだよ」

「鬼無里村？ たしかこの県の端っこにある村ね。確か鬼の伝説とかがあるんでしょう？」

「よく知ってるな。そうだよ……痛っ」

「……？ どうしたの」

「や、なんでもない」

首を傾げる郡山の横で唐崎がぴたりと足を止めた。

その動作でいつの間にもやら俺達は校門の前に居る事に気付く。御手洗がくると振り向きこちらを見る。そして言う。

「俺とこいつらは今日、南にある喫茶店、bouquet catに行く予定だけど、一緒に来るか？」

「いや、今日は無理だ。また次の機会にしてくれ」

「なにか用事でもあるのか？」

「ああ。大事な用があるんだ」

俺の言葉に御手洗は「そうか」と言って、

「じゃあまた明日な」

「ああ」

南の道に歩いていく御手洗達を見送った後、俺は群羽に声をかける。

「そろそろ脇腹を解放してくれ」

俺の脇腹をつまむ手を緩めず、言う。

「やだ」

タイムラグ無しの返答に俺は頭を掻いた。

「……鬼無里村じゃ、お前の性格を知っている奴が殆どだったから俺に進んで話かけてくるのは母さんか、駄菓子屋の婆さんぐらいだったけどな。この街ではもしお前の性格が知られたとしても話かける奴が多いだろう。少しくらい我慢してくれ」

数瞬の沈黙の後、群羽は渋々と言った体で答えた。

「樟葉と一緒にパフェ食べてくれるなら、我慢する」

「わかったわかった。約束する」
脇腹が解放される。

「で、どこで食べるか？」

「樟葉が良いならどこでも」

「じゃ、cafe nocturneと言う店にしよう。近いし、
コーヒーが美味しいと評判だからな。あと、新入生キャンペーンと
かでちょっと割引しているらしい」

こくり、と群羽が頷いた。

「じゃあ、そこで」

「よし、じゃ、行くか」

再び頷く群羽を連れ、俺は歩き出した。

11A 文芸部（後書き）

1ヶ月で書けるかなーと思ったら2ヶ月近くかった。もう少し早く書けるように精進せねば。

次回予告

「お前が勝てば俺はなんでも言う事を聞く。オレが勝てばお前はオレの質問に答えろ」

「悪く無い、否、少しこちらの方が良いですね？」

「介護サービスだよ。文句は無いな？」

「ええ」

「んじゃ、ま、さつさと殺^やるぜ」

「そうですねえ、補食を、開始しましょう」

11B 霸王鮫

絶賛遅筆中！

元・仮想倶楽部のティータイム

「いやあ、ただで飲むコーヒーは美味しいねえ」

「あーくそ……ここぞとばかりに一番高い飲み物頼みやがって……」

「いや、ぼくはここに来る時いつもこれを頼んでるよ？」

「あ？」

「このコックの一人は唐崎の兄なのよ」

「ああなるほど……じゃあまけてくれるのか」

「いや、ぼくの兄さんはその方面だけは堅物でね。だからぼくはたまにしかここにはこない」

「ああそう……で、壺木、料理部の方はどうだったんだ」

「んぐむぐ……ん？ ああ、差し出された料理食べたら泣いて喜ばれた」

「その料理はどんな料理だったんだ？」

「なんかぼこぼこ泡立ってて変な色してて、なんか呻き声みたいなのが漏れ出てた」

「よく食う気になったな！？」

「なあ、みたらし団子、ナプキンにこんな事が書かれるんだけどー」

「そのあだ名止めるってんだろ。で、なんだ、感想、批評、質問、助言、等、待ってます……？ ただの落書きじゃないのか」

「さあ、それは書いた人にしか解らないんじゃないかな？ 色が見る人によって違うように」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7771j/>

日常 / 非日常 ~ daily chain fragment ~

2011年11月14日03時31分発行